

【課程内】

博士(人間科学)学位論文

現代青年の生き方に関する人間科学的研究  
—実存的視座に基づいて—

A Human-Scientific Study on the Attitudes toward Life of  
Modern Japanese Youth  
—From the View-point of Existential Perspective—

2005年1月

早稲田大学大学院 人間科学研究科

加藤 陽子

Kato, Akiko

研究指導教員： 嵯峨座 晴夫 教授

# 現代青年の生き方に関する実存的研究

## 目 次

序章	問題の所在	1
	問題の所在	1
	本稿の目的と意義	3
	本稿の構成	5
第1章	現代青年における今日的ジレンマの様相と実存的視座	8
	1-1. 現代青年における今日的ジレンマの様相	8
	1-1-1. 青年という期間と「青年性」	
	1-1-2. 「成熟」社会における現代青年の今日的ジレンマ	
	1-1-3. 現代青年の社会意識	
	1-2. 本稿における実存的諸概念の整理	25
	1-2-1. 実存的諸概念	
	1-2-2. 実存的視座の有用性	
第2章	大学生の現代性に関する実存的考察—戦後若者論を踏まえて—	38
	2-1. 戦後若者論の変遷	38
	2-1-1. 若者論の変遷①～下位文化としての若者	
	2-1-2. 若者論の変遷②～自己のあり方を中心に	
	2-2. 今日の大学生の「現代性」	42

2-2-1. 大学生が持つ「時代性」	
2-2-2. 大学生が持つ今日的苦悩	
2-2-3. 大学生と生き方に関する態度	
2-3. 大学生の現代性の内実—生き方に関する実存的態度と 親密性を中心に—	49
2-3-1. 現代青年における生き方に対する態度と親密な関係性	
2-3-2. 他者という親密な関係性と内面の自分へのコミットメント	

### 第3章 「生き方」を通して見た不登校問題—不登校問題の心理・社会的分析— 60

3-1. 「不登校」問題の整理	60
3-1-1. 不登校という概念	
3-1-2. 不登校の現状と対策	
3-1-3. 現代青年の苦悩と不登校という問題	
3-2. 「生き方」と不登校との関係性—不登校にならなかった理由から—	65
3-2-1. 不登校問題への新たな試み—不登校にならなかった理由—	
3-2-2. 不登校にならなかった諸要素の抽出	
3-2-3. 不登校にならなかったものたちの事例研究—人生の意味の再築過程—	
3-3. 不登校抑止としての生き方に関する実存的態度の可能性	74
3-3-1. 「成熟」社会の帰結としての不登校ジレンマ	
3-3-2. 不登校抑止としての生き方に関する実存的態度の可能性	

### 第4章 同居未婚子と高齢者の関係性—モラトリアムを許容する親たち— 80

4-1. 同居未婚子の現状	80
4-1-1. 同居未婚子が抱えるモラトリアムな現状	
4-1-2. 同居未婚子研究の問題点	
4-2. 同居未婚子と親の関係にみる「結婚」という指標	83
4-2-1. 「世代間の居住形態に関する調査」からみた同居未婚子と親の実態	
4-2-2. 親による未婚同居子への評価	

4-3. モラトリアムを許容する親たち	95
4-3-1. 同居未婚子と親の関係にみる「結婚」という指標	
4-3-2. モラトリアムを許容する親たち	
4-4. 小括～同居未婚子から見た新しいモラトリアムの形	100
<b>終章 現代青年の生き方に関する実存的態度</b>	<b>103</b>
5-1. 若者に関する言説の問題点ー若者のグループインタビューからー	103
5-2. 「成熟」社会における現代青年の生き方ーまとめにかえてー	110
5-3. 現代青年の生き方に関する実存的視座の可能性	118
5-3-1. 若者論の再考	
5-3-2. 今後の課題	
<b>謝辞</b>	<b>126</b>
<b>文献</b>	<b>127</b>
<b>付録</b>	<b>139</b>

## 序章 問題の所在

### 問題の所在

1990年代後半に入って、青年<sup>1</sup>による凶悪犯罪が相次ぎ、“かつてとは様相を異にする青年の増加”が社会的に注目を浴びた。近年においても、いじめや学級崩壊、不登校などの教育的問題に加え、青年の社会的引きこもりや非就労者、薬物依存、家庭内暴力などが社会問題となっており、依然として現代青年のあり方が憂慮され続けているといえるだろう。

こうした現状を受けて、さまざまな立場から青年の実態を把握するための研究が行われている。たとえば身体の発達の側面からは成長の早熟化や心身のアンバランス、学校教育や進路選択の側面からは学校あるいは社会への不適応事例、また若者文化の下位性の消失にともなう連帯感の欠如や価値観の変容、あるいは現在享受主義といった社会意識の変化、さらには情報伝達機器の発達や消費者としての経済的地位の向上にともなう細分化する消費活動の実態などである。

以上のように、青年の多様な姿が各種の詳細な研究で示されており、現代青年のあり様は多元的な構造をもっているといえよう。

しかし、広く一般に現代青年を捉えようとするとき、その多くの見解や言説は、社会の成熟にともなう社会構造の変化による“かつてとは様相を異にする青年の姿”を中心に上げている。つまり、現代青年は、その特徴に自己愛の肥大化、自己拡散的で場当たりの生き方や生き方自体に対する無関心化、あるいは人間関係の希薄化が顕著であるといったように、彼らの生き方に対する消極的な態度がクローズアップされる傾向にある。

確かに、物質的な豊かさが充足された80年代以降、日本は社会の成熟にともない大きく社会構造が変化したと指摘されている。脱産業化にともなう消費社会の出現は、差異化・情報化・個人化を促進させ、絶対的な価値基準を喪失させてしまった。その結果、あらゆる価値が相対化し、その意味内容も多様なものへと変化したといえる。このような社会構造の変化によってもたらされた価値観の多様化という潮流は、生き方に関する価値基準をも多様化させた。

たとえば『夜と霧』の著者であり、精神科医でもある فرانクル (Frankle, V.E., 2002 = 1955) は、戦後、「doing から being へ」と人々の生き方の転換を求めたが<sup>2</sup>、価値観が多様化する現代社会においては、現代人は意図せざる形で「自分らしく being に (= あるがままに)」生きることが可能となり、自己探求や自己実現という人々の欲求の地位が押し上げられたといえるだろう。

しかし、現代社会を「あるがままに生きる」ことは、それほど容易なことではない。というのも、価値観が多様化した現代においては、生きること自体が多様化しており、どのように自分らしくあるがままに生きればいいのかを明確に見出すことは、非常に難しいことだといえるからである。つまり、現代社会は、生き方の自由な選択が個人に委ねられ、どのように生きてもよい状態に置かれてはいるものの、主体的に生き方の選択を行うための選択理由がすでに多様化しているため、何か1つを選ぶということが困難な状況であるといえる。しかも、こうした自己決定による自由な選択は常に自己責任を生じさせるため、選択するという行為自体が生きづらさや悩み、苦しみを生み出すと考えられる。したがって、そのことがいっそう「あるがままに生きる」ことに対して苦悩を与えるといえるだろう。

特に今日の青年たちは、このような現代社会の抱える今日的苦悩とともに、青年だからこそ葛藤状況を抱えている。それはたとえば、青年の消費者としての経済的地位の向上がもたらした市場による永続的な差異化への要請と、発達過程<sup>3</sup>で生じる青年に特有な内省傾向との軋轢との間の軋轢による“よりいっそうの自己探求<sup>4</sup>”という葛藤状況である。現代青年のあり様の消極的な側面が強調される背景には、こうした自己探求という葛藤状況や現代日本社会の社会構造の変化が影響しているといえるだろう。

しかしだからといって、現代の青年の自己の存在や生き方に関する態度が、かつてよりも消極的になってきている、あるいは、消失の傾向にあるといえるのだろうか。むしろ、現代青年の生き方に関する態度は変化しておらず、あるいは葛藤状態にあるからこそ、彼らは自らの存在や生き方に意味を見出したいという態度を持っているのではないだろうか。実際、青年をめぐる一部の議論には、今なお彼らの生き方には変化はないという指摘もあり、今日の現代青年に関する多くの見解や言説が示すような、青年の生き方に関する態度が薄れてきている、あるいは消失しているということは一概にはいいきれない。

では、なぜ広く一般に現代の青年の様相を捉えようとしたとき、彼らは表面的に消極的な生き方に、あるいは流れのままに生きているように見えるのだろうか。

このことを明らかにするためには、まず現在一般に形作られてしまった、消極的な青年像という見解や言説の裏側にある社会的な背景を、今一度整理する必要があるだろう。そして、その上で青年たちの実情を明らかにするために、彼らの「生き方」を中心に上げ、再考する必要があると考える。また、もし仮に、現代青年たちが生き方に関する積極的な態度を持っているとするならば、逆に、それを持っていないといわれる現状理解がなぜ起こるのかということも、明らかにする必要があるといえよう。

以上のような問題を解決し、さらに、現代日本社会における青年たちの存在、ある

いはその様相を今一度明確に示すためには、人間存在を多角的に捉えることが出来る人間科学的研究によって、彼らの生き方を捉え直すことが必要だと考える。

そこで本稿では、以上のことを踏まえて、現代青年に焦点を当て、彼らの抱える今日の苦悩に注目しながら、彼らの存在を多元的かつ包括的に分析し考察することとする。具体的には、大学生・不登校・同居未婚子などの調査を通じて、現代の青年の生き方を実存的な視座から探る。

## 本稿の目的と意義

本稿の目的は、これまで論じられてきた消極的な現代青年の様相を、社会的状況、個人的な状況の双方を加味した上で包括的に考察することにある。

そこでまず、本稿においては、消極的といわれる現代青年へのアプローチに対する一つの新しい試みとして、先にも述べたように、実存的な視座を用いて考察する。

青年に関する研究は、文化人類学的な視点・歴史学的な視点・心理学的な視点・社会学的な視点・法学的な視点など、さまざまな角度からの詳細なアプローチが行われてきた。このように、青年に関して多領域からの専門的な取り組みが可能なのは、青年というものが、社会的な意味付けによって枠付けされる概念であるのと同時に、生物学的変化に関連した心身の発達の変化過程でもあるという特徴を持つためであろう。

ところが、現在行われている青年期研究は、社会的な側面または発達の側面のどちらかに言及するか、一方を説明するためにもう一方を参照するといった研究手法が多数を占めている。その結果、各々の領域における研究は詳細で専門的なものとなる一方で、青年の生き方やあり様について包括的に論じた研究が少ない。

しかし、人間は、数え切れない身体的・心理的・社会的・精神的諸要素を抱えながら、相互に極めて複雑に影響し合い、自らの中でそれらを統合し、そこに同一性を見出す存在である。こうした多様な側面を持つ人間存在を、多種多様な状況あるいは分野ごとに、要素に分断するという青年期研究の方法論では、現代社会における彼らの存在は語りえないだろう。

したがって、今こそ人間存在全体を把握する人間科学という研究による青年の捉え直しが必要なのである。そしてその中でも、多様な現代社会の下で、主体的に自らの人生を選択し、創造して生きていくという、人間の積極的な精神的・健康的側面を支持する実存的視座を切り口とすることこそ、消極的なイメージで捉えられがちな現代青年を、従来の研究とは異なる視点から語る上での1つの有効な手立てとなると考えられる。

刻々と変化する現代社会の今日の苦悩を考慮しつつ、それでも青年たちがその中で

生きていかななくてはならないと考えるとき、彼らに必要なものは何なのか。それを捉えるには、先に述べた分断的研究とは異なる機軸から、青年を見つめ直すことが不可欠であろう。

なお、上記のような実存的な視座のもと、本稿においては論点を以下の2点に絞って、現代社会における青年の様相について考察したい。

まずは、1つめの論点として、議論の前提となる青年をめぐる社会的状況の把握がある。現在一般に形作られている、消極的な青年像を指摘する見解や言説の裏側にある社会的な背景を今一度整理するためには、現在の社会的状況の把握は欠かせないものだといえよう。加えて、もともと青年期、あるいは青年という概念は、近代産業社会の要請によって生まれた概念である、そのため、青年の様相は社会構造に関する言及を抜きにして語ることはできないと考えられる。したがって、まずは青年という期間の概念とその特性を示し、彼らの置かれている立場を明確にする。そして、それが現代社会においてどのように変化してきているのか、またそこにどのような問題があるのかを考察する。

ところで、青年に関する問題は世界各国の研究者によって取り上げられているが、本稿では国内の青年に関する統計データや先行研究を用いる。なぜなら、わが国における青年の様相には、日本独特と呼ばれる現象が極めて多いためである。したがって、本稿で用いる対象は、主に日本国内における10歳代前半～20代後半の青年期の者とする。また、彼らのライフスタイルや生き方に関する志向性の変遷を見ていくことで、日本社会における青年の現代性について、今一度、把握しなおしたい。

次に、2つめの論点として、現代青年の特徴を端的に示していると思われる大学生、不登校児童・生徒、同居未婚子などについて、各々の立場から現代青年の実態を明らかにし、現状と問題点を検討する。先にも述べたように、現代青年の様相に関する研究は、細分化されているものの、その見解はおおむね自己愛の肥大化、生き方に対する無関心化、あるいは人間関係の希薄化、という彼らの消極的な生き方態度を指摘している。そこで本稿においては、従来の研究で指摘されていた消極的な生き方とは異なる生き方を、現代青年が保有しているのではないかといった視点に立ち、当事者である彼ら自身の声を取り上げるべく、質的・量的調査を用いて青年の現状をより多角的に検討し、実存的な視座から現代青年のあり様について考察を行う。

そして最後のまとめとして、これまでの論証を踏まえ、現代青年が置かれている社会的な立場と現代青年の実態を加味した上で、社会への不適合、あるいは消極的な社会への適応方法、さらに将来の目標や生きることに対する無気力や空虚感などが指摘されている消極的な現代青年像の問題点を総括し、これまでの研究が明らかにしてきたことは何だったのか、とりこぼしてきたことは何だったのかを検討する。また、その検討の中で、実存的な視座から青年の様相を取り上げることの有用性について、総



合的な考察を行い、現代青年の様相の再考を試みる。

## 本稿の構成

本稿の構成は以下のとおりである。

まず、最初の論点である、近代産業社会における青年の形成過程と現代の青年をめぐる社会的状況の把握については、国内の10歳代前半～20代後半の者に関するライフスタイルの変化や社会意識にまつわるデータを中心として、第1章で取り扱う。加えて、本稿独自の視点としての実存的視座について詳細を述べ、その概念について整理する。

次に、第2の論点である現代青年の実態の把握であるが、第2章で、戦後の若者論を踏まえ、戦後日本社会において青年がどのような存在であったか、あるいは社会的に何を求められ、いかに語られてきたかを文化的視点から整理する。また、無気力な若者像の中心的存在として取り扱われてきた大学生に焦点を当て、量的・質的調査を用いて、実存在的な視座から彼らの現状・あり様を明らかにする。そのために、現代青年にまつわる議論の中でも、特に90年代に入って注目され始めた、自己の拡散化や親密性の分散化といった議論を中心に、大学生のなかでそうした傾向が見られるのかどうかについて分析していく。

第3章では、学校教育という現代青年の生き方を語る上では重要なファクターであり、かつ無気力な青年像の一つの具現化された形として、今なお大きな社会的問題となっている不登校問題を取り上げる。ここでは、学校という精密に制度化された組織の中で生きる子どもたちと、彼らが抱える問題点について整理し、不登校の要因について分析し、検討していく。そのために、本稿ではあえて不登校にならなかった者の不登校にならなかった理由を取り上げることとする。こうした作業を通じて、無気力など、現代青年に特有の苦悩が不登校問題とどのように関連付けられるのか、さらには不登校にならなかった者に必要とされていたものは何なのか、ということについて考察していきたい。

次に4章では、より視点を広く持ち、青年の生き方を世代間的に捉えるべく、青年期における多様化するライフスタイルの象徴ともいえる同居未婚子を取り上げる。同居未婚子は、モラトリアムに安住する傾向のある現代青年の特徴をライフスタイルとして体現していると考えられる。そのため、彼らを通して、現代青年のモラトリアム的生き方とはどのような実態であるのか、また当事者である彼らにとって未婚のまま親と同居することはどのような意味を持つのかということについて分析し、検討を行う。加えて、特に長期化する青年期を勘案した上で、比較的年齢の高い同居未婚子と

高齢の親という組み合わせを取り上げることによって、現代青年の生き方の今後の変化についても展望しておきたい。

最後に終章では、再度、消極的と見られがちな現代青年像の様相を探るため、属性の異なる青年によるグループインタビューを行い、消極的な現代青年像の問題点を概観し、これまで述べてきた論点を踏まえた総括を行う。また、第1章から第4章までを概観し、実存的な視座が、現代青年の様相を再考する上で、新たな機軸となりうるのかについて総合的な考察を行い、結論としたい。

- 
- 1 本稿では、今日の青年期の延長化および概念の多様化を十分考慮した上で、あえて10代前半の者から20代後半の者を指す言葉として「青年」という用語を用いる。また、本稿では同様に青年を指すもう一つの言葉として「若者」という言葉を用いるが、その際には、下位性や文化的要素を考慮し、そのニュアンスを含む場合にのみ（例えば第2章）、「若者」と記することとし、区別する。
  - 2 この言葉は一般に「努力することからあるがままへ」と訳されることが多い。すなわち、彼は現代人にまず自らの人生を受け入れ、あるがままの自分の生を生きるべきだと説いたのである。
  - 3 ここでいう発達とは、近代における生産性第一主義の原理で推し進められてきた発達というよりはむしろ、生涯発達の観点、すなわち人間的発達を指す。また、内省傾向は青年期にだけ起こりうるものではないことも注記しておく。
  - 4 ここでいう自己探求とは、自分らしさあるいは自分らしく生きるという言葉に含まれるだろう“存在”と“生き方”という両方の意味を含有する。

## 第1章 現代青年における今日的ジレンマの様相と実存的視座

近年、引きこもりや不登校などの教育的問題に加え、薬物依存や家庭内暴力、青年犯罪の凶悪化が社会的問題になるなど、さまざまな側面において現代青年のあり方が憂慮されている。こうした問題には、自らの存在に対する空虚感や自己愛の肥大化による自己中心主義、現実享受主義的生き方などの現代青年特有の心性が関連しているとされ（影山，1999；岸，2000；小此木，2000；千石，1991），彼らがそれ以前の青年に比べて自らの生き方やあり方に消極的な態度をとるようになったことをとりあげる研究が増えている<sup>1</sup>。しかし、果たして現代の日本における青年たちが本当に生き方やあり方に対して消極的な傾向を有するのであろうか。序章で述べたとおり、現代青年の様相を明確するためにも、今一度彼ら自身のあり様を多角的に把握する必要があると考える。

そこで、本章では、議論の前提となる現代青年がおかれている社会状況を把握し、彼らが抱える様々な困難に目を向けることとする。そのためにも、以下でまず青年という時期が持つ特徴を示し、彼らが持つ青年、あるいは青年期の特性について述べるとともに、彼らが社会の中でどのように捉えられてきたかを明らかにする。加えて、今日の社会において、そうした青年の特性が社会状況とどのように絡み合っているのかということ、各種の調査資料を用いながら概観する。その後、本稿独自の視点としての実存的視座について、概念についての詳細を述べ、整理することとする。

### 1-1. 現代青年における今日的ジレンマの様相

青年期の発達過程、現代青年の特徴、彼らの生きる可能性を明らかにするために、西平（1983）は3つの視点から青年期を考察することの重要性を提案している<sup>2</sup>。まずは、特定の発達段階、いわゆる子どもから大人への移行期に入った青年が持つ特有の性質について明らかにする「青年性」。次に、青年をめぐる歴史・社会的状況の様相によって「青年性」がどのように現れるかを明らかにする「世代性」。最後に、青年期における個人的な発達過程と個人のおかれた歴史的・社会的状況とを統一的に把握し、そこにある「個」としての青年を明らかにする「個別性」、という3点である。

本研究では、多角的に現代青年のあり様を明らかにしようという試みのもとに研究を行うという性質上、西平の指摘する3つの視点のうち、特に「青年性」と「世代性」を中心に研究を行う。

Baltesら（1980）は、人間の発達に影響する要因を世代・文化的要因、個人的要因、年齢・成熟的要因の3点からとらえた。中でも青年期において最も強く影響を受ける

因子として、時代や文化、また家庭環境によって影響される世代的・文化的要因をあげ、その重要性を指摘している。

確かに、今の時代を生きる具体的な青年の様相を理解しようとするならば、社会的文脈の中で彼らを捉える「世代性」という視点は絶対に欠かせないといえるだろう。しかし、それだけでは、従来の細分化された研究と同じく一元的な青年像しか見えてこない。そこで、本稿においては、「世代性」に加えて「青年性」に注目し、「青年性」により重点を置いて、考察を行う。

西平は、「世代性」を、歴史・社会的状況によって「青年性」がいかに関現れるかを明らかにする視点であると述べている。このことからわかるように、そもそも世代的あるいは文化的な要素というものは、社会的な文脈と移行期特有の性質との関連の中で捉えるべき問題であり、その時代にその社会の中で「青年性」がいかに関現れるかを扱う視点だといえる。したがって、当該社会における青年のあり様を捉えようとする際に重要なのは、まず彼らの「青年性」を探ることであるといえよう。

そこで、本稿においては、子どもから大人への移行期に特有の性質である「青年性」を中心として、それが「世代性」を含めた諸要素とどのような関係にあるのかについて考察を行うこととする。

具体的には、まず青年という概念の発生を通じて、青年という時期が持つ特徴を示し、彼らのもつ特性<sup>3</sup>である「青年性」について述べるとともに、彼らが社会の中でどのように位置付けられてきたかを整理する。また、各時代の社会の状況と「青年性」の関係を明らかにすることも、彼らを社会的な文脈の中で把握する上で重要な点である。そこで、現代社会において、そうした「青年性」が社会状況とどのように関連しているのかを明らかにする。

### 1-1-1. 青年という期間と「青年性」

時代や共同体にかかわらず、人間には人生のある段階において心身をはじめとする様々な部分に変化が生じる時期がある。特にその変化が著しいのが、いわゆる青年期であろう。青年をあらわす“adolescent”という英語には、「成熟に近づく」という意味があるが、この言葉からもわかる通り、青年という期間には「子どもから成人への移行期間」という発達的变化を示す概念が含まれているといえる<sup>4</sup>。

青年期の発達的变化の具体例としては、生物学的変化である、第2次性徴が挙げられるだろう。『青年心理学事典』によれば、身体的・生理的变化である第2次性徴は大人への移行が始まるもっとも特徴的なサインであるとされる。第2次性徴は男子よりも女子のほうがやや早く現れ、男子では14歳ごろ、女子では12歳ごろがそのピーク

であるといわれている。たとえば、男子は体毛（ひげ・腋毛・性毛）の発生，声変わり，咽頭の隆起，精通現象（射精・夢精）などといった変化が，また女子では，体毛の発生，乳房の隆起，骨盤の拡大，月経（初潮）開始などの変化が見られる（久世，2000）。以上のように，青年期の身体的・生理的变化は，幼児期・児童期の身体的・生理的变化が，身長や体重の増加あるいは運動や感覚などの諸機能の発達を中心とするのに対し，体内の性器官や外部の性器の形態・機能が成人のものへと徐々に変化する点に特徴があるといえる。

また，このような身体的な発達，主に外観の変化が著しくなると，それにもなつて心理的にも大きな変化が生じ始める。ピアジェ（Piaget,J, 1967=1967）によると，人はまず幼児期の後半において，知覚に惑わされず，自分の頭の中で物事を体系立てて考えることが可能となる。そして次に，11-12歳ごろから物事を抽象的に捉えることができるようになる。その結果，14-15歳になると，徐々に社会的・観念的事柄への推論や論理的な適応ができるようになり，対人関係や政治などの広範囲な領域における課題解決能力が発達する。またさらに，1つの事柄を多次元的に捉えることも可能となり，様々な観点から対象を捉え，関係付けることもできるようになるといわれている。こうした認知的側面の変化によって，人は“多次元的で様々な観点からの思考を可能にする自分”について思考を始めることが可能となる。それゆえに，たとえば発達心理学の分野でアイデンティティの形成といわれるような，自己に内省的で，自己に意識的な傾向を持つこととなるのである。

以上のような，自己に意識的な態度や独立性を発揮する能力の獲得という内面の変化は，身体的変化とともに，時代や文化を問わず，子どもから大人への移行期である青年期に見られる大きな特徴の1つであるといえる。青年期を移行期間として捉えるならば，こうした変化は青年期における1つの特徴的な変化，すなわち「青年性」の一部であり，青年を捉える上で欠かせない要素であるといえよう。

ところで，もともと伝統的な社会においては，農耕儀礼や祭りなどの中に様々な「通過儀礼」が設けられ，青年たちをスムーズに社会化するシステムが保持されていた。また，通過儀礼を経た青年たちには，子ども期とは峻別される服装や言葉遣いなど，その共同体固有の早熟な大人としての振舞い方が要求されていた。さらに徒弟制度でも，職業技術や道徳など，社会に参加するためのしつけが行われていたとされる（Aries,Ph., 1980=1973）。このことからわかるように，近代以前の農村共同体においては，移行期特有の身体的・内面的な変化という「青年性」の要素を上手く社会化システムに順応させるような機能が存在していたといえるだろう。しかし，社会が工業化し，都市型産業社会が生まれるとともに伝統的な共同体が崩壊し始めると，それまで青年を大人へと移行させていた通過儀礼という即時的な移行機能は消失し，移行の過程が複雑であいまいなものになってくる。

ギリス (Gillis, J.R., 1985=1974) は、青年という期間は、産業化という社会状況にともなう学校教育の長期化と、個人の富の蓄積という 2 つの要因によって生み出された人間特有の概念であるとし、そもそもそれ以前の共同体においては、大人と子どもとの間に、青年という中間的な概念は存在しなかったと指摘した。また、子どもという存在を歴史的観点から説明しようと試みたアリエス (Aries, Ph., 1980=1973) も、同様に、青年という概念が存在しなかったことを指摘している。アリエスは、近代産業社会の誕生とともに、「小さな大人」から「子ども」へと子どもの概念が変化していく過程で、「大きな子ども」だが「大人」と呼ぶには若すぎる、曖昧な存在としての青年というライフステージが現れたことを明らかにしている。

つまり、青年という概念の形成過程をみると、青年という期間は、産業化という社会構造の変化によって生み出された操作的な移行期間であるといえる。そして、新たに誕生したこのライフステージは、「青年性」を社会システムにうまく順応させていた明確で即時的な移行機能を消失させ、曖昧な移行過程を生み出した。すなわち、近代以降、それぞれの社会の変化に応じた青年という範疇に「青年性」が置き去りにされた結果、移行期特有の身体的・内面的な変化過程がわかりにくくなってしまったといえる。こうして青年という期間は、従来と代わらず、「青年性」という明確な移行期特有の性質を有しつつ、それらはいまいでより複雑な移行過程をたどることとなったのである。

かくして、青年期には移行期特有の身体的・内面的な変化と社会化システムが上手くそぐわない事態が生じはじめ、青年たちの間にそれまでとは異なる心理的葛藤を生むこととなる。

先にも述べたとおり、青年期においては、自己意識や性意識が広がり、自己に内省的で意識的な傾向が生まれ、様々な価値観が再構築されるという、特有の性質が存在する。一方で、近代以降の社会構造の変化は、都市化の拡大・教育の普及・核家族化などと密接な関連を持ち、いわゆる「一人前」になるまでの時期を長期化・常態化するなど、人間の身体的移行過程や精神的変化過程を複雑化しており、「青年性」と社会化システムとの間の不具合をますます広げているといえる。こうした状況によって、青年の心理的葛藤はより拡張されているといえるだろう。そこで、以下では、「青年性」と社会化システムとの不具合が、現代青年に対してどのような影響を生み出すのかということを中心について述べていく。

## 1-1-2. 「成熟」社会における現代青年の今日的ジレンマ

ミルズ (Mills, C.W., 1978=1951) は『ホワイト・カラー：中流階級の生活探究』の中で、新中間層の苦悩を「生活の支えとなるべき基盤もなければ、全幅の信頼をささげて忠誠を尽くすに足るだけの対象もない (p.51)」と述べ、資本主義構造が人々を物質的苦悩から解放した結果、新たに心理的苦悩を生み出したことを指摘した。ミルズの指摘によると、19世紀、またはそれ以前の人々は、生活に必要な物資を得ることの困難、あるいは生活の貧しさからくる物質的な苦悩を抱えていた。しかし、資本主義構造が完成することによって物質的に豊かな社会を得た結果、人々の苦悩は、物質的なものから心理的なものへ、すなわち人間として“よりよく生きること”に対する苦悩へと変化したのである。ミルズのこうした指摘は、経済発展を遂げ物質的な豊かさを手に入れた現代日本人が、今まさに抱えている苦悩であるといえるだろう。

たとえば、現代の日本社会のような社会を社会科学用語では消費資本主義と呼ぶことがあるが、消費資本主義が主流の社会においては、人々は市場の原理によって心理的なフラストレーションや葛藤を抱え込むとされる (吉本, 1994) <sup>5</sup>。

そもそも消費資本主義以前の社会においては、人々は目的志向・効率志向の生産性技術の獲得を目的として生きてきた。しかし、消費資本主義すなわち脱産業化した社会においては、人々は自己と他者を区別する差異化のための象徴記号と化した商品を購入すること、すなわち消費でしか自己を確認することができなくなってしまう (Baudrillard, J., 1979=1970)。こうした社会においては、“大量に生産された商品を大量に消費させること”が重視されるため、マスメディアを使った、人々の消費意欲への刺激が絶え間なく行われる<sup>6</sup>。その結果、絶え間ない消費活動、すなわち永続的な差異化が行われ、人々は過程志向的で自己探求的な人間へと変化していく。そしてそれは、日本人が純粹に自分自身を対象化・目的化する「克己的人間」(山崎, 1984, p.208)へと変化したことを示しているといえよう<sup>7</sup>。こうして、現代の日本社会において自己は目的化され、消費活動を通じた終わりのない自分探し、すなわち“永続的な自己探求”が始まる。

また、消費資本主義と同様に、現代の日本社会のもう1つの側面を表す言葉として「分衆社会」(博報堂生活総合研究所, 1985, p.3)がある。先で指摘したとおり、日本社会は高度経済成長に伴う大量生産・大量消費システムが国民生活の細部にまで浸透したことにより、80年代以降、多品種少量生産の時代に突入した。その結果、社会のこうした構造転換にともなって、近代社会の構成要素であった家族・職場・学校といった中間集団に帰属意識を持つ「大衆」が、その構成員としての意識が希薄で、私的意識が強く、生活目標を多様化させた「分衆」へと変容したといわれている (博報堂生活総合研究所, 1985)。つまり、「分衆」は、「大衆」が性別・年齢・収入・ライフ



ステージなどと比較的明確な指標で捉えられたのに対し、意識・価値観・ライフスタイルの異なる生活者集団として細分化していく、すなわち価値観の細分化・多様化の中で確固とした枠組みを持ちにくくなる傾向を持つといえるだろう。したがって、日本における「分衆化」は、社会の絶対的価値基準の存在を揺さぶり、境界線が不明瞭なシステムへと社会構造を転換させていったといえる<sup>8</sup>。

こうして絶対的価値基準が消滅し、価値基準の境界線が不明瞭になった日本社会においては、それにもかかわらず、あるいはだからこそ、市場は人々に自他の境界線を引くことを求め、永続的な差異化が強要され続ける。そのため、「分衆」と化した現代人は、価値基準の喪失した社会の中でなかなか満足感や充実感の得られる自己を発見できない、というフラストレーションや葛藤を抱えているといえよう。そしてその一方で、絶え間なく繰り広げられる“差異化（＝個性化）キャンペーン”によって、心理的なフラストレーションや葛藤を抱えながらも自分自身を目的化し、探索し続けなければならない、という相矛盾する状態に置かれているといえる。

通常、このような社会においては、人々は満たされることのない自分自身への満足感や充実感をもてあまし、空虚感や無意味感にとらわれると考えられる。しかし、「よりよく生きよう」と多様化し分散化された人々の意識は、次から次へと目的を細分化させていく。その結果、現代社会は、人々に積極的な挫折をさせないまま自己の存在に対する空虚感や無意味感だけを残し、心理的苦悩を抱えながら生きていくしかない、というパラドクスをもたらす。このパラドクスこそが、現代人が抱える今日的苦悩であり、こうして現代の日本社会においては、終幕が見えない自分自身への探究心が渦巻くこととなるのである。

ところで、佐原（1989）は、「成熟社会とは経済・社会における物質的生産と消費が国民の大部分の基礎的欲求水準を満足させ、これにともなって社会の活力、あるいは成長が鈍化するに至った社会。またある側面から見れば、いわゆる先進国病に侵された、または侵されつつある社会である（p.2）」と定義し、1980年代以降の現代日本社会を日本的成熟社会として位置付けている<sup>9</sup>。

そもそも社会が「成熟」する前の物質的な苦悩は、比較的基本的な生活欲求、たとえば衣・食・住などを満たすことで簡単に解消された。しかし、現代日本社会のように物質的に恵まれ、その欠乏から解放された、いわゆる「成熟」社会<sup>10</sup>においては、人々の欲求は細分化し、簡単には充足されなくなってくる。なぜなら、欲求が細分化し、それが複雑になればなるほど、欲求の向く矛先も拡散してしまい、欲求の満たし方も果てしなく複雑化してしまうからである。国民の大部分の基礎的な欲求水準を満足させていながらも高次の欲求が細分化し複雑になった結果、国民の多くが欲求不満にある、という意味においては、佐原が述べた通り、まさに今日の日本の消費社会は成熟した社会状況である「成熟」社会にあるといえるだろう。そして、現代の日本におい

て人々が抱える苦悩は、こうした今日的な社会状況によって生み出された産物だと考えられる。

以上、主に消費や大衆、成熟という観点から現代社会の状況を捉えてきたが、上述のような現代社会が持つ今日的苦悩は、いずれも存在論的な不安を感じさせやすいといえよう。1999年の流行語に「癒し」が選ばれてから5年以上経つが、未だに日本中が空前の“癒しブーム”にある。新しいライフスタイルや対人関係を提案する“生き方論本”といわれる書籍が多く売れているのは、周知の事実である。今日の、自己の存在に対する空虚感や無意味感だけを残して心理的苦悩を抱えながら生きていくしかない、という構造こそが、今まさに社会に「癒し」がもてはやされる主要因といえるのではないだろうか。

こうした社会構造のもとで、現代青年は以下の2点において青年であるがゆえの特有のジレンマを持ちうると考える。

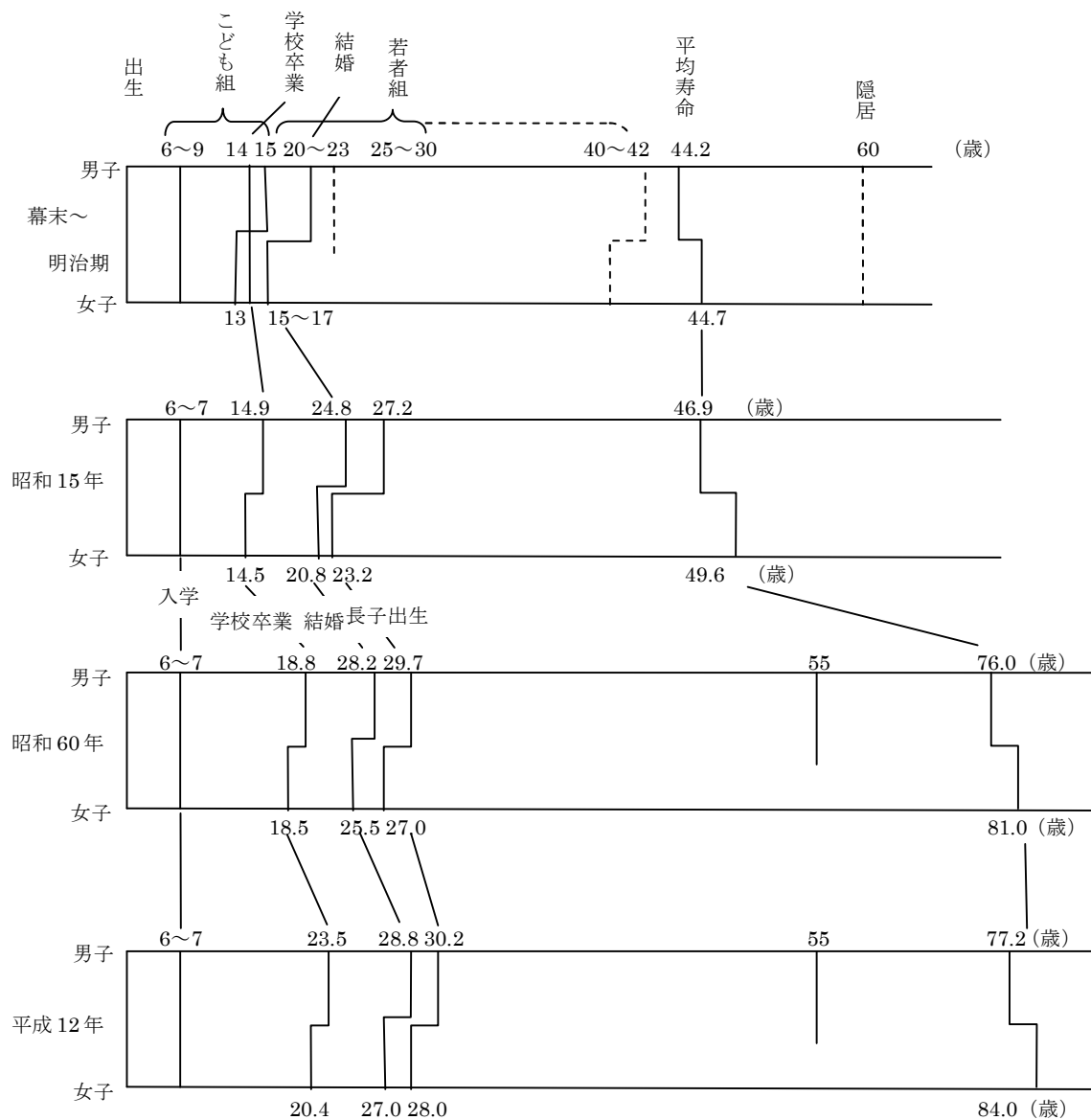
#### 1) ライフサイクルの緩慢化による「世代性の拡散状態」

まずは、ライフサイクルの緩慢化が引き起こした世代性の拡散と、それが現代青年にもたらした今日的な移行期の指標の喪失である。

平成15年の厚生省による『簡易生命表』によれば、1935年の平均寿命は男性46.92歳、女性49.63歳であったが、2003年には男性78.36歳、女性85.33歳であり、この68年間に男性31.44歳、女性35.70歳という驚異的な平均寿命の伸びが見られる。こうした寿命の延長は、必然的に<死>を遠く彼方へ押しやり、われわれの時間的展望の歪曲や否認をもたらし、ライフサイクルの緩慢化をまねいた。

図1-1は、明治期、昭和前期、昭和後期、平成期における青年のライフサイクルの変化である。図を見てわかるように、明治期の男子の場合15歳から20~23歳前後までの5~8年間で、女子の場合13歳から15~17歳くらいまでの2~4年間で、実質的な青年期であったと考えられる。また、昭和前期には、学校を卒業して結婚するまでの青年期の長さは男子が約10年間、女子が約6年間となっている。さらに、昭和後期になると青年期の長さは男子の場合約13年間、女子の場合は約10年間となっている<sup>11</sup>。

この図から読み取れることは、就学率の上昇や高学歴化に伴う在学期間の延長、あるいは初婚年齢の上昇などによって、青年期が徐々に延長される傾向にあるということである。ここ数十年のライフサイクルの変化だけをとっても、その傾向は顕著だといえるだろう。



資料出典：柴野（1995）『現代の青少年』P.52 をもとに作成。平成12年度を加筆した。

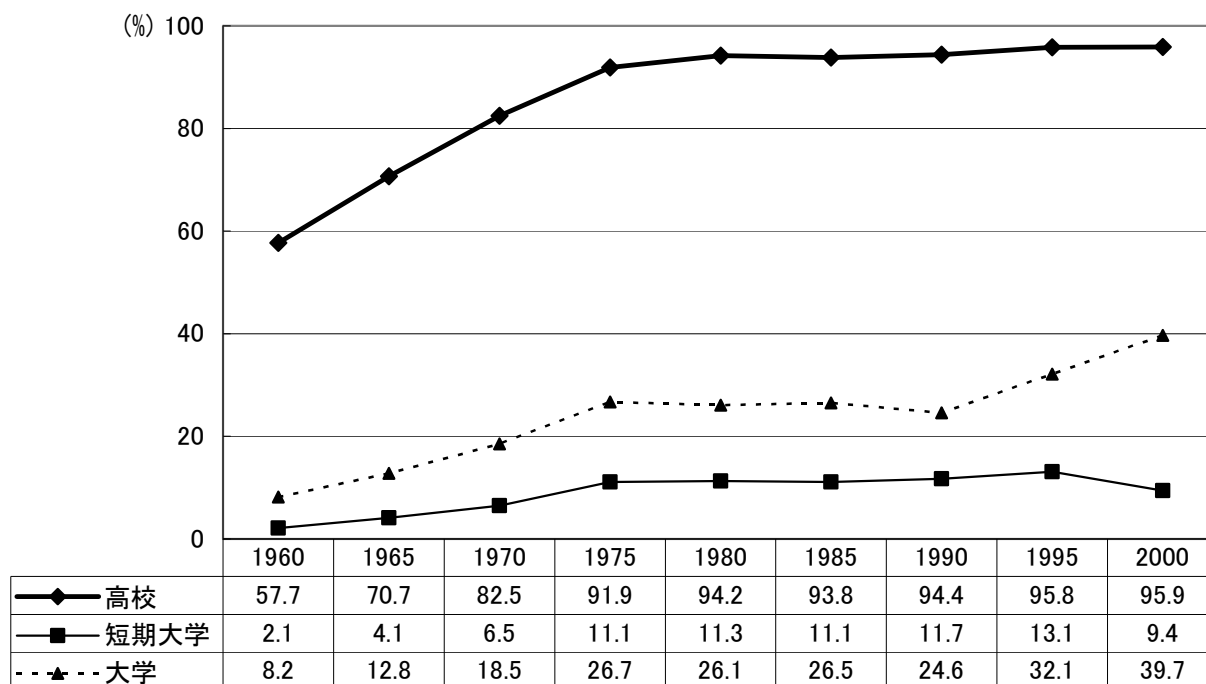
資料出所：厚生労働省『人口動態統計（平成12年度版）』，厚生労働省『簡易生命表（平成12年度版）』，文部省『学校基本調査（平成12年度版）』

図1-1 青年男女のライフサイクルの年代的变化

以上のようなライフサイクルの緩慢化による青年期の延長という今日的状況は、当然のことながら、青年期の意味内容にも大きな変化をもたらした。以下で取り上げる2点を見ても、それは明らかである。

たとえば、1つ目の点として高等教育の大衆化が挙げられるだろう。2003年度の文

部科学省による『学校基本調査』によれば、1960年に80%だった高校進学率は1998年には95%を越えている。加えて大学進学率も、1960年に8.2%であったのが、1980年には36.4%に達し、当時の4倍以上となっている（図1-2）。



資料出所：文部省『学校基本調査』各年度版，文部科学省『学校基本調査』各年度版。

図1-2 高等教育進学率の年次推移

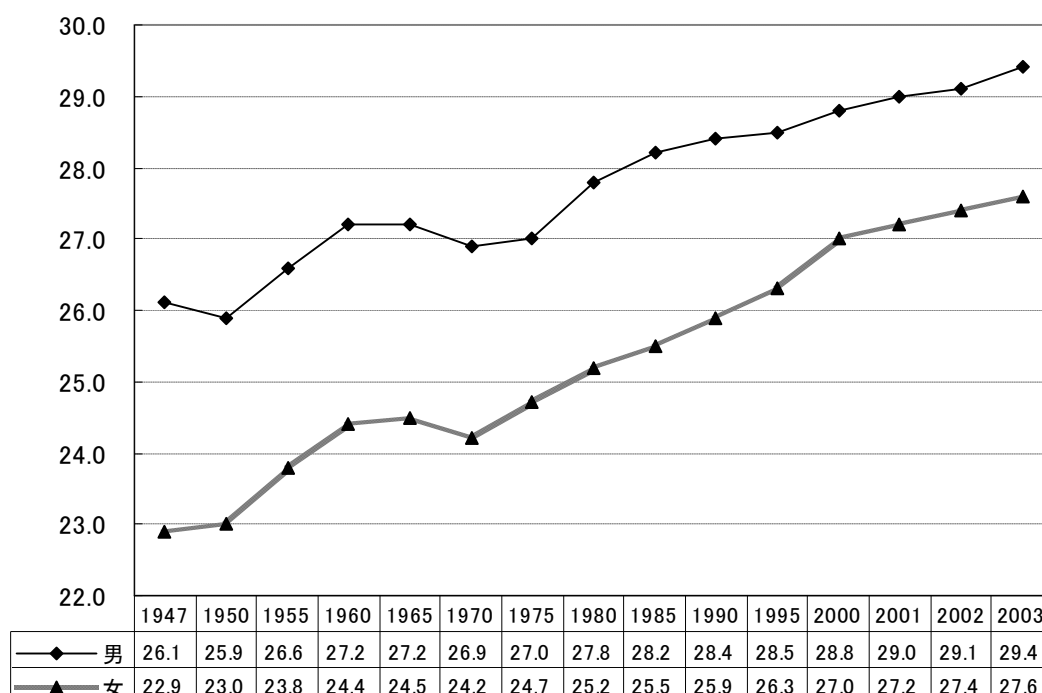
こうした進学率の上昇，すなわち青年の高学歴化による在学期間の延長は，多くの青年たちを，大人になるまでの執行猶予期間としてのモラトリウムに長く曝しておくという状況を生み出した。

加藤潤（2002）は，青年期の制度化と長期化が長期のモラトリウムを消費的に過ごすことを可能とし，自立性が高く社会に対して批判的なスタンスを持つ近代的青年が出現したと指摘したが，現代ではさらに青年期が延長されたことによって，むしろ逆に，モラトリウムへの安住傾向が強まっているとされる（今津，1995）。

また，こうした傾向は，初婚年齢の上昇にも見られる。

図1-3に示すとおり，日本における平均初婚年齢は，戦後から一貫して上昇傾向にある。たとえば，1947年は男性が26.1歳，女性が22.9歳だったのに対して，2003年にはそれぞれ29.4歳，27.6歳となっており，その勢いは鈍化しながらも，いまだ上昇傾向にあるといえるだろう（厚生労働省，2003，『平成15年 人口動態統計』）。

宮本（2002）によれば、今日の晩婚化・未婚化現象は、現代青年の間に、親のために働くことよりも、むしろ消費社会の一員として機能することが重視される心性を生み出したとされる。つまり、晩婚化及び未婚化現象は、消費者としての地位を獲得・維持するために親に依存する状態、すなわちモラトリアムへの安住を好んで選ぶ青年の増産を示しているといえるだろう。宮本は、それは結局のところ若者を社会的弱者におとしめるだろうとして、青年の晩婚化・未婚化の傾向に警鐘を鳴らしている。



資料出所：厚生省『人口動態統計』各年度版，厚生労働省『人口動態統計』各年度版。

図 1-3 初婚年齢の変化

前述した通り、青年という概念は、近代の要請によって生み出された人間特有の社会化のための準備期間であり、産業社会に求められる人間、すなわち生産性に寄与する人間（＝大人）になるための移行段階と位置付けられていたといえる（Gillis,J.R, 1974=1985）。そのため、彼らは法的制度の整備や教育の制度化などによって保護・監督され、一定のモラトリアム期間、いわば大人までの執行猶予期間を過ごすことが制度的に認められ、社会的地位を得ていた。つまり、社会の産業化によって誕生した青年という期間は、生産至上主義という近代的価値を中心として、“生産性に寄与しない

未熟な子どもから生産性に寄与する成熟な大人への移行過程”としての制度化された移行期間という意味を有していたといえる。そして、それこそが近代社会において、青年という期間や存在を意味付けていた指標の1つであったといえるだろう。

しかし、ライフサイクルの緩慢化は、子どもから青年、そして大人へという段階的で明確な移行を喪失させ、いわゆる「世代」というそれぞれの境界線を曖昧にし、拡散させた。その結果、“生産性に寄与する大人になるための移行段階”という青年期、あるいは青年が持ち合わせていた移行期としての指標までもが曖昧になってしまうといった状況が生まれる。つまり「世代性の拡散状態」は、同時に精神的成熟や職業的成熟など、社会的な発達モデルの喪失をもたらし、青年期が持つ移行期という指標の喪失を生じさせたといえるだろう。加えて先にも述べた通り、こうした状況のもとでは、「青年期の延長との相互作用を通じて、逆に成人の側が青年化するという心理現象」（小此木，1973，p.44）が起こる。大人たちは「青年性」に対抗して抱いてきた己の成人性を失い、半人前であったはずの若者を前に確固としていた自信が崩れ、原則や一貫性のない場当たりのなのおどおどとした態度に走ってしまう（今津，1995）。このように、現代青年は、大人がためらいや不安を示すことでかえって成人性<sup>12</sup>の内容をつかみにくくなり、モラトリアムへの安住の度合いをますます強めていくという傾向にある。

以上で述べてきたような、ライフスタイルの緩慢化による「世代性の拡散状態」の中で、現代青年は大人に対して持っていた対抗的な役割を失い、なおかつ移行期が持っていた社会的な発達モデルの追行という、青年である期間や青年という存在を意味付けていた1つの指標をも喪失してしまった状態にあるといえるだろう。そしてだからこそ、その結果、彼らはモラトリアムへの志向を強めざるを得ないのである。

前項で、近代以降、青年の移行期特有の身体的・内面的な変化と社会化システムが上手くそぐわない事態が生まれ、青年たちの間に複雑な心理的葛藤が生じたことを述べたが、今日のライフスタイルの緩慢化による「世代性の拡散状態」とそれにとまなう移行期の指標の喪失という社会状況は、まさに移行期特有の変化と社会化システムの不具合からくる、青年の心理的葛藤の現代の特徴を示しているといえるだろう。そして、これこそが現代青年の今日的苦悩の大きな影響因子の1つだといえる。

## 2) 消費社会のもとで市場に要請される「自己探求」

ところで、80年代以降の日本における社会システムの変化は、青年期における発達の的な変化と絡み合うことで、現代青年にもう1つの苦悩を与えていると考えられる。

経済学で提起された概念としてポスト・フォードイズムという考えがある。これは、アメリカの代表的な自動車メーカーであるフォード型の大量生産方式（＝フォードイズム）に対して、それ以降に生まれた消費者の差異に対応した多品種少量生産方式を

示す言葉であるとされる（松原，2000）。フォーディズムにおいては、徹底した合理化による低価格化と同時に大量生産が行われ、ポスト・フォーディズムにおいては、低価格化よりも個人のライフスタイルに見合った商品が提供される。つまり、ポスト・フォーディズムでは商品には個々人の“自分らしさ”が求められ、商品は他人と差異化するために購入されていくのである。もちろん言うまでもなく、現在の市場はポスト・フォーディズムを中心的な生産方式として回っている。

そして、現代青年はこうしたポスト・フォーディズムの重要な購買層となっている。かつてのように少子化が到来する以前の状態であれば、親はそれぞれの子どもに分散的に愛情を注ぐため、青年たちは市場においてこれほどまでに重要な購買層とはなりえなかつただろう。しかし、少産少子化が進む現在、親あるいは祖父母の愛情は少数の子どもに集中的に注がれることになり、その結果、青年たちが市場システムの主役に躍り出るのである。

既知の通り、個々人の内面が独自で特殊なものになればなるほど、このシステムの成果はあがる。それゆえに、市場はより多くの利益を得るためにも、主たる購買層となった青年たちに向けて差異化キャンペーンを繰り返して行く。つまり、市場は新しい顧客となった青年に様々な商品を次々と提供し、より細かな部分で“自分らしさ”を表現できるよう、絶え間なく彼らに向かって「あなたらしさとは何ですか？」という問いかけを繰り返すことになる。かくして青年は、底なし沼のように終わりのない差異化の循環という現象に巻き込まれていくこととなるのである。

しかも、青年期に入り、自分というものに関心を持ち始めたばかりの青年たちにとって、この「あなたらしさとは何ですか？」という問いかけは、他のどんな言葉よりも有効だといえる。なぜなら、前項でも述べたとおり、この時期の青年たちは、その他の期間に比べて、より自己意識的で内省的になりやすい性質を兼ね備えているためである。青年期に起こる、自己に意識的な態度や独立性を発揮する能力などの情緒的变化、また自分の捉え方としてのアイデンティティの形成は、身体的変化とともに青年期を特徴付ける大きな要因の1つであり、青年期に求められる重要な課題とされてきた（溝上，1999）。人間の発達を8つの段階に分けたエリクソン（Erikson, E., 1959）が、その著書である『ライフサイクル、その完結』の中で、青年にとって自我同一性の獲得による自立感あるいは独立性の達成は、子どもの依存性から成人の自律性へと移行するために必要な要素である、と位置付けたことはあまりにも有名であろう。

したがって、以上のことから、青年という特定の発達段階がもつ「青年性」の中でも、特に「自分という存在について意識的になる」ということは、青年の最たる特徴であるといえるだろう。そして、それゆえに、青年というこの時期には「自分は何のために生きているのだろうか」、「自分がここにいる意味はなんだろうか」といった、実存的な問いかけを持つことが多くなってくるのである（西平，2000）。

しかし、実はこうした青年たちが持つ問いかけや、「青年性」の1要素である自己に意識的な特性こそが、市場が繰り広げる差異化キャンペーンの格好のターゲットにはほかならない。消費社会における市場は、青年の持つこうした自己意識的な特性を利用した差異化キャンペーンを繰り広げることで、彼らの購買意欲をよりいっそう刺激している。そして、主たる購買者となった青年は、“自分らしさ”を求めるあまり、どんどん商品消費し、差異化キャンペーンを助長しているといえる。つまり、「青年性」と差異化キャンペーンとの複雑な軋轢が、現代青年により永続的な「自己探求」を強要しているのである。これが、今日の青年たちに今日的ジレンマを生み出しているもう1つの大きな要因だといえるだろう。

そしてこれは、前項で述べた、青年期において不具合を生じていたはずの移行期特有の変化と社会化システムが、むしろ消費という側面においては、交互に複雑に絡み合うことによって、青年たちの間に複雑な心理的葛藤を生じさせているといえる。そのため、市場と「青年性」との軋轢による「自己探求」は、まさに青年の新たな心理的葛藤を生み出しており、現代青年が抱える今日的苦悩のもう1つの大きな影響因子だといえる。

以上、「成熟」社会における、現代青年の持つ2つの今日的な困難な状況、すなわちライフサイクルの緩慢化による「世代性の拡散」、および市場による差異化の要請と自己に意識的な「青年性」との軋轢をみてきた。

ここで何よりも問題なのは、現代青年を取り囲むこの両要素の関係である。つまり、一方では、ライフサイクルの緩慢化による「世代性の拡散状態」が起こったことともなあって、青年という存在や期間の指標までもが喪失し、現代青年は自身を位置付けるための枠組みの喪失あるいは拡散という状況におかれているといえる。にもかかわらず、他方では、自己意識的であるという「青年性」が消費社会に利用されることによって、現代青年はより一層の自己探求を強いられるという状況におかれているのである。こうした両要素の関係は、彼らにある種のジレンマを生じさせるといえよう。なぜなら、“曖昧になっていく位置付けの中で明確な自分を探すという作業を絶え間なく行わなければならない”という現代青年の状況は、ある種の板ばさみ状況にあると考えられるからである。

また、青年の様相を、世代性を縦軸に自己への関心を横軸にとって考えるならば、拡散する世代性は横方向の拡がり、差異化による自己探求は縦方向の拡がりといえ、現代青年は、上下左右に拡がる座標の中で、おのれの立ち位置を見つけざるを得ないといえる。こうした現代青年の状況は、彼らにますます実存的な問いかけを投げかけることになり、心理的苦悩を生み出すといえるだろう。そしてこの苦悩は、さらに彼らを自己探求に向かわせると考えられる。加えて、青年期の延長は、おのずとこうし



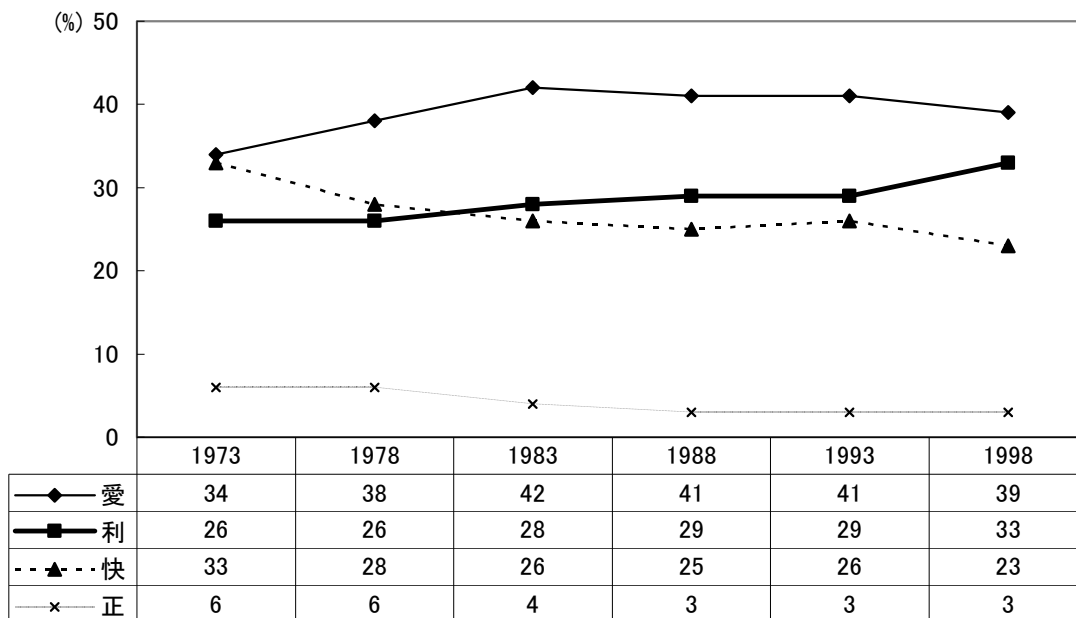
た困難な状態を長期化させる傾向にあるといえ、現代青年は長く心理的苦悩に曝されることとなる。

以上のような、移行期特有の身体的・内面的な変化と社会化システムの複雑な絡み合いによって生じる青年のジレンマは、実に今日的なものといえ、現代青年の存在自体を揺るがす大きな苦悩を生み出しているといえる。

### 1-1-3. 現代青年の社会意識

ところで、このようなライフスタイルの緩慢化による「世代性の拡散状態」がもたらした青年という存在や期間の指標の喪失、および自己意識的な青年の特性とそれをいっそう活発化させる現代の消費社会による「自己探求」の要請の軋轢という2つの状態は、現代青年の心性、特に社会意識や生き方に対する志向性に大きな変化をもたらした。

たとえば、1998年度実施のNHK放送文化研究所による『現代日本人の意識構造』調査を見ると、この20年余りで一番増加している16歳から29歳までの生活目標は、「快＝その日その日を楽しく過ごす」、すなわち「個人的な欲求を短期間でかなえていきたい」という、個人的で現在志向的な価値観だとされる。

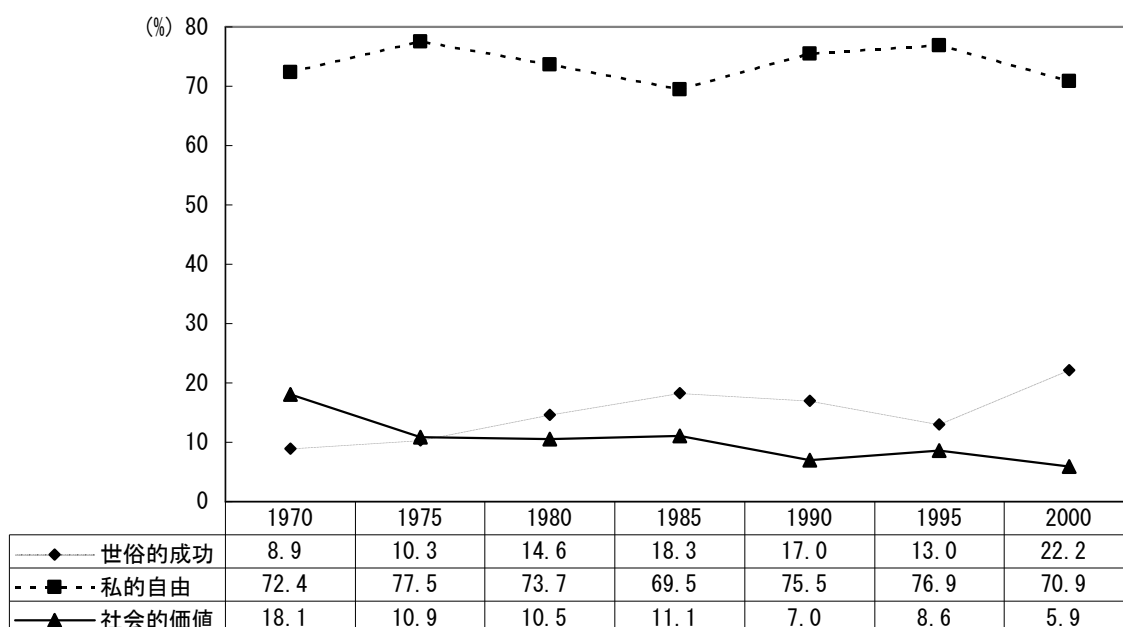


資料出所：「現代日本人の意識構造 第5版」、NHK放送局研究所、p191.

図 1-4 生活目標の変化

同様に、図 1-5<sup>13</sup>で示すように、総務庁青年対策本部の調査結果において、人の暮らし方で自分の考えに一番近いものを選ばせた結果、青年の生き方志向が一貫して「私的価値」を重視する傾向にあることが見てとれる。

次章で詳しく記すが、心理学や社会学などの立場から、上記のような調査結果をもとにした様々な考察がなされている。たとえば、小此木(2001)や影山(1999)、岸(1999)といった心理学者は、現代青年は、常に市場から与えられる「自分らしさ」という言葉に曝された結果、「自分らしさ」にこだわるあまり自己中心性に支配され、徐々に自己を肥大化させてしまう、あるいは正しい自己イメージを持ってない傾向にあると指摘している。



註：ここでは、「その他」や「生きがいを感じることはない」と答えた者を除いて表を作成している。

なお、対象年齢はそれぞれ15-24歳。

資料出所：1970-1990「青少年の連帯感に関する調査」、1995・2000「日本の青少年の生活と意識に関する基本調査」より作成。

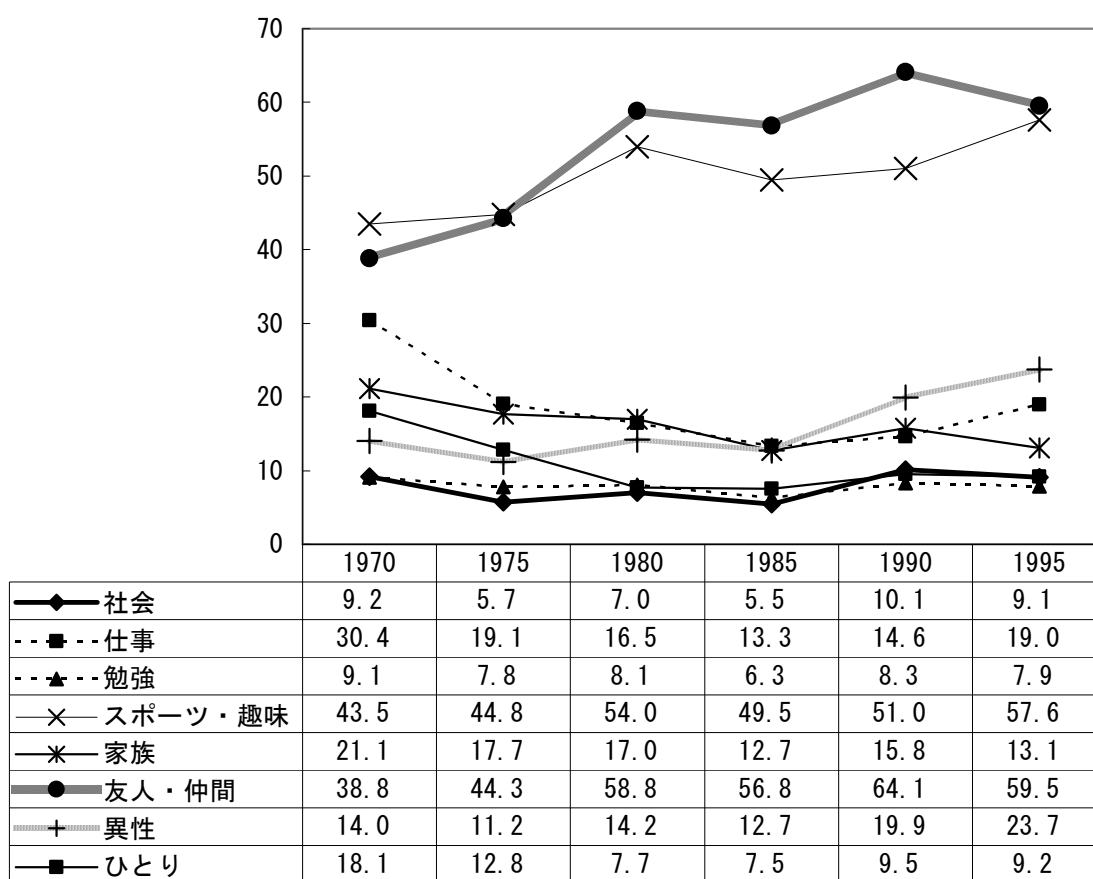
図 1-5 生き方志向の変遷

さらに千石(1991)は、社会が物質的に豊かになるにつれ、若者の中心価値が「真面目」から「マジ」へとといったように、規律や規範の喪失へと移行していると指摘している。こうした自己イメージを持ってない、あるいは規律や規範の喪失といった論調は、現代青年の私的価値を重視する傾向を強く意識した議論の展開であり、そうした傾向からくる彼らの内面的危機を強調しているといえる。

しかし、以下の調査結果を見ていくと、彼らが現在志向の範囲の中で個人的・私的価値を重視しつつも、他者との情緒的で親密な関係性を求めていること、また、そうした親密性を持つ他者と、何かに熱中したり夢中になったりすることができるという回答していることが示されている。

これらの回答を見るかぎり、一概に個人的で私的価値を重視するといった現代青年の姿ばかりを注目すべきではないことが示唆されるだろう。たとえば、先のNHKの調査においても、過去15年間、変わらず青年に支持されていたのは、「愛＝身近な人たちと和やかな日々を過ごす」という価値観であった。つまり、彼らの主な価値観は、他者と和やかな関係を保ちながら日々を過ごすことであり、その価値は、ここ15年間でそれほど大きな減少には至っていないのである。

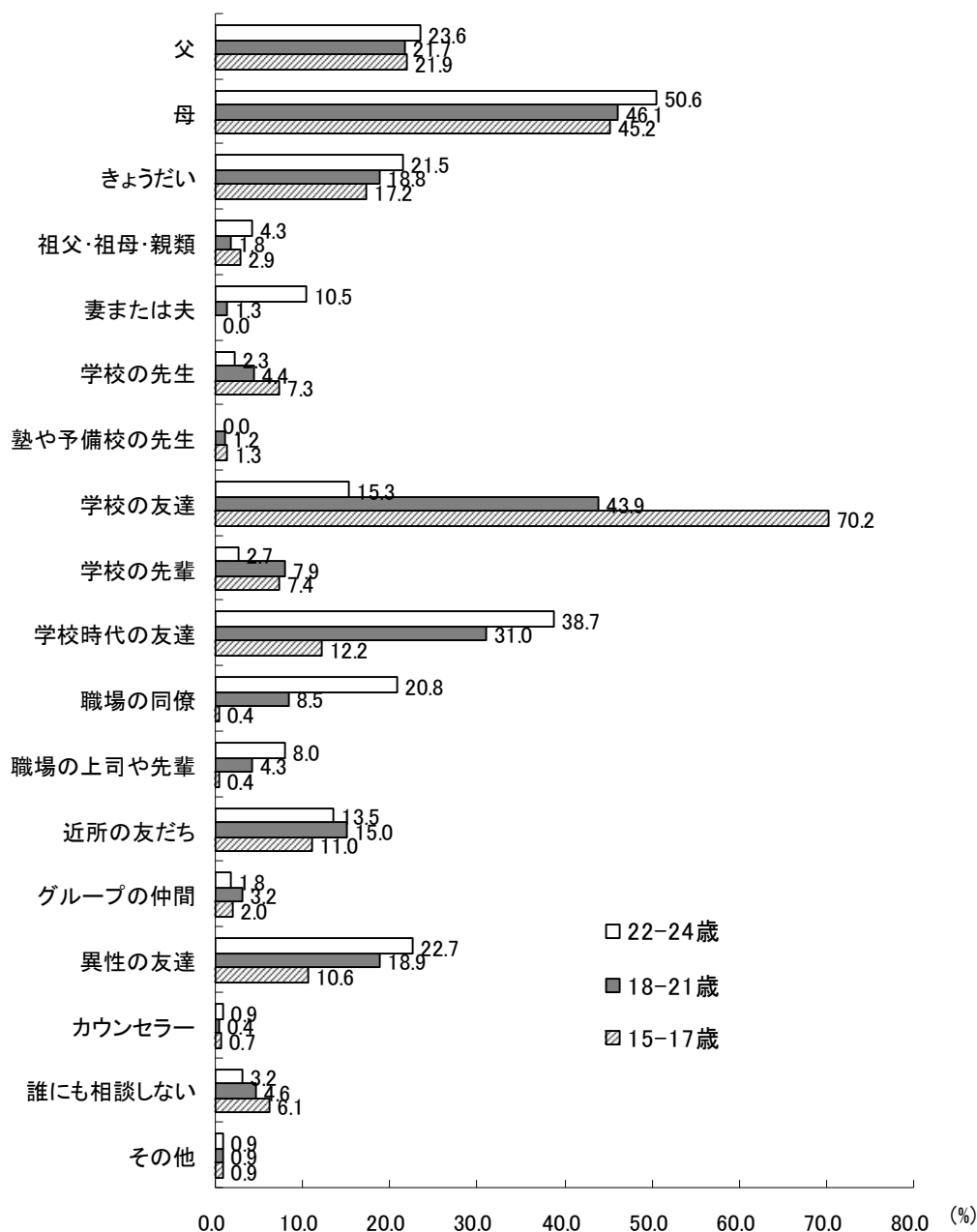
また、図1-6に示したとおり、「(生きがいを感じる時は)友人といるとき」と答えたものは、近年、急激な増加傾向にある(総務庁青少年対策本部、1995)。



註：ここでは、「その他」や「生きがいを感じることはない」と答えた者を除いて表を作成している。  
 なお、2000年度からは調査項目がなくなっているために算出不可。対象年齢はそれぞれ15-24歳。  
 資料出所：1970-1990「青少年の連帯感に関する調査」、1995「青年の生活と意識に関する基本調査」より作成。

図1-6 生きがい観の変遷

さらに、総務庁青少年対策本部による『第2回 日本の青少年の生活と意識に関する基本調査』を見てみると、悩み事があったときの相談相手としては「学校の友人」が15~17歳で70.2%、18歳~21歳で43.9%と、最も多く選ばれている。



資料出所：2000「第2回 青年の生活と意識に関する基本調査」より作成。

図1-7 悩み事や心配事の相談相手

加えて、同調査において、何かに熱中したり夢中になれるときは「友達や仲間といるとき」であると答えているものが、15歳から24歳すべての年齢層において最も高い割合を占めていた。

以上で示した調査資料からは、現代青年が現在志向的であることは変わらないものの、他者との情緒的つながりや親密な関係性を求めているといった姿が示されているといえよう。つまり、彼らは、個人的・私的価値を重視する傾向に傾きつつも、依然として他者との情緒的で親密な対人関係を求めていると考えられる。

次章でも記すが、現代青年の特徴の1つに、彼らの人間関係の希薄化や分散化が指摘されている。たとえば、それは、「小宇宙」(佐藤, 1993)、「島宇宙」(宮台, 1994)、「感性の小共同体ミニマム集団主義」(川崎, 1999)などといった社会学的造語の数々によって示されている。こうした論調に共通した見解は、「自分らしさ」を追い求めることに疲れた現代青年たちが、狭い範囲の内ではしか生きる意味や自己の存在意義を確認し合わなくなっているというものである。つまり、現代青年が、他人に対して親密さや安心感を希求するものの、その親密性は極めて多様であり、親密性の種類によって心理的負担をコントロールする傾向が強くなり、なかなか「他人の生き方に直接触れる部分に介入したがる」(芳賀, 1999, p.26)と指摘されるのである。

確かに、各種調査データによって示された、私的価値を重視しながらも、依然として他者との関係を欲しているというアンビバレントな現代青年像は、こうした心的負担のコントロールの現れであるかに見える。

しかし、大枠にはめ込まれた調査資料だけでは、私的価値の重視および他者との関係性を同時に求めるという彼らの姿が、「心的負担をコントロールする現代青年の姿や生き方」に基因するとのみはいい切れないのではないだろうか。

むしろ、現代青年が置かれている次の2つの状況を勘案するならば、彼らは“曖昧な立場のまま永続的な自己探求を行わなければならない”ために、より強く自分らしさを求めざるを得ないと考えられる。それは、ライフスタイルの緩慢化による「世代性の拡散状態」がもたらした青年という存在や期間の指標の喪失、および、自己に意識的な青年の特性とそれをいっそう活発化させる消費社会による差異化の要請との軋轢という2つの状況である。そして、こうした状況にあるからこそ、自分らしさを求める過程で鏡像的な他者の中に自分という存在を見出し、結果としてそれが親密な他者を積極的に希求する姿になるのではないだろうか。その結果が、相反する調査結果として現れていると捉えることも可能であろう。

既述の通り、現代社会においては、青年期独特の自己探求という文脈を後押しするかのごとく、差異化をあおる市場が“自分らしさ”を投げかけてくる。しかし、ライフスタイルの緩慢化がもたらす世代性の拡散により、モラトリアムへの安住を強くする傾向にある彼らは、“今、ここ”において、親密性の中にこそ自分の生き方を求めざ

るを得ないという状況に陥っているのかもしれない。

そういった意味では、むしろライフスタイルの緩慢化による「世代性の拡散状態」がもたらした青年という存在や期間の指標の喪失、および自己意識的な青年の特性とそれをいっそう活発化させる現代の消費社会による差異化の要請との軋轢、という現代社会の構造こそが、今日の青年がアンビバレントに見える原因であり、それが彼らに特有の今日的苦悩をあたえている影響因子であると考えられる。

そこで次章以降において、より詳しく上記の問題を考察すべく、調査・検討を行うこととする。

## 1-2. 本稿における実存的諸概念の整理

『夜と霧』の著者であり精神科医でもある فرانクルは、その著書『時代精神の病理』の中で「“doing” から “being” へ」と現代人の生き方の転換を求めている。この言葉は一般に“努力すること”から“あるがまま”へと訳されることが多い。すなわち、彼は現代人にまず自らの人生を受け入れ、あるがままの自分の生を生きるべきだと説いたのである (Frankle, V.E., 2002=1995)。

しかし、前述のように現代社会においては、“あるがまま”に生きることは非常に難しいように思われる。というのも、現代には様々な困難がわれわれの目の前に立ちだかっているからである<sup>14</sup>。だが一方では、これらの困難は、豊かさと表裏一体となってわれわれが享受してきたものであることもまた事実であろう。現代社会にとって、今やこうした困難は欠かせないものであり、それらを手放すことすらまた困難となる。ここに、今日的ジレンマともいえる現代の困難の特徴が現れてくる。

このように困難が困難を呼ぶという逆説的なジレンマを持つ現代社会において、フランクルがあえて「“doing” から “being” へ」という生き方を説いたことは非常に興味深い。彼はいくつかの現代的困難を見据え、それを受け入れざるを得ない現代社会のジレンマを考慮しつつも、あるがままに生きることの意味について言及せざるをえなかった。もちろん、背景には彼自身のアウフシュビッツ収容所体験をふまえた「実存」という思想があり、そのことが彼の理論の特殊性を導き出していることも事実である。しかし、人間は、数え切れない身体的・心理的・社会的・精神的諸要素を抱えながら、相互に極めて複雑に影響し合い、自らの中でそれらを統合し、そこに同一性を見出す存在である。こうした多様な側面を持つ人間存在を、多様な今日的ジレンマの状況ごとに要素に分断するという方法論では、現代社会における人間存在は語りえないだろう。

したがって、今こそわれわれは人間存在全体を視野に治めながらアプローチする

“実存”という視座が必要なのである。そして、さらに言うならば、人間は多様なジレンマの状況下でも主体的に自由に自らの人生を選択して生きていく存在であるという実存的視座を持つことこそ、今日的ジレンマを語る上でひとつの有効な手立てとなるのではないだろうか。増え続ける今日的ジレンマを考慮しつつ、それでもその中で生きていかななくてはならないとき、われわれに必要なものはなんなのか。それが、フランクルの「“doing”から“being”へ」という言葉に隠されているように思う。ここでは以上のことを踏まえて、今日的ジレンマの状況とその中で生き方に関する実存的態度という視座を持つことの有用性を整理していきたい。

フランクルの“あるがまま”に自分の人生やその意味や目的を生きるといった理論は、心理学の分野では実存主義的アプローチと呼ばれ、ヒューマニスティック心理学の一分野を築いている。ここでは、具体的手段としてのアプローチというよりはむしろその背景にある実存という理論、あるいはその視座を持つことが今日的ジレンマにどのように有効であるのかを概念の整理とともに述べていきたい。

### 1-2-1. 実存的諸概念

そもそも実存主義は、デカルトやヘーゲル哲学の合理主義的観念論を批判するものとして、あるいは産業革命以降の近代的合理主義の風潮に対抗するものとして生まれた。

「実存」という言葉を哲学上の概念として自覚的な意味で使用し始めたのは、キルケゴールである（Kierkegaard, S., 1963=1849）。彼は、実存とは自己の本来の姿を喪失していることを意識し、その本来性の回復のため内面を変化させ、神の前で真の平等と連帯を達成するものであるとした。また現代実存哲学の中心的存在であるハイデガーは、実存とは自己の本来性の喪失を意識し、その回復に努める存在であるという点でキルケゴールと立場を同じくするが、神ではなく共同体としての世界にその連帯を求めている（Heidegger, M., 1971=1927）。さらにヤスパースは、これらの実存という考えに、本来の存在へ近づくためには実存と対立しながらも愛し合うという“実存的交わり（=愛しながらの戦い）”という視点を盛り込んだ（Jaspers, K., 1992=1932）。つまり実存とは、自己の本来性を意識し、他<sup>15</sup>との連帯により主体的に獲得するものであるといえよう。

ところで、ヤスパースはキルケゴールとニーチェの存在意義が重大性を増していく所に現代思想の特色があると指摘している（Jaspers, K., 1992=1932）。ニーチェの思想は、直接的には18世紀の合理的近代思想に対するアンチテーゼであるが、根底には徹底した人間の実存の背定と長いキリスト教の伝統がみられる（Nietzsche, F., 1993=1833

ー35)。彼は、近代の人間がすでに神を失っているにもかかわらず神を信じようとする、その欺瞞を徹底的に批判した。そして、その著書『ツァラトゥストラ』で主人公に「神は死んだ」と高らかに宣言させ、あるがままの姿に戻ることを説いた。ニーチェが説いたこのような“神の不在とニヒリズム”という主題は、キルケゴールに代表される“超越的存在”を念頭に置く実存哲学とは一線を画し、現代実存主義の先駆となっている。

そして、神の不在とニヒリズムというこの考えを踏襲した代表者は、サルトルである (Sartre, J.P., 1963=1943)。サルトルは、人間の実存は本質あるいは神の存在に先だっているとした。すなわち人間は神につくられたものではなく自らをつくりあげる主体性を持つ存在であるとして、それまでの神や世界という超越的な存在からの脱却を図ろうと試みたのである。

なお既述の通り、精神医学・心理学の領域に実存という概念を取り入れたのはフランクルである (V.E.Frankle, 1961=1946)。彼は、実存哲学者たちの系譜を受け継ぎつつ、人は1人1人独自の個性を持った人間であり、その1つ1つに意味があり、かつそれを獲得すべき存在であると説いた。彼は、それまでの精神医学・心理学的主流であった人間の根本的な生存動機を、フロイトの「快楽への意志」やアドラーの「権力への意志」ではなく「意味への意志」に求めた。つまり、人間が人間として存在しうる基盤となるものは各々の人生の意味を求めようとする意志であるとしたのである。このようなフランクルの理論を底辺に置く実存主義的アプローチという立場<sup>16</sup>は、実存哲学の系譜を引き継ぎつつも、一人一人の人間を独自の個性を持つ統一的存在として捉えようとし、人間の持つ潜在的能力を信じ、“あるがまま”に生きることを多方面から支援しようとする試みである<sup>17</sup>。

いずれにせよ、これらさまざまな主張を総合すると、実存という概念を用いようとすることは「ひとりひとりの人間に、人間存在のあり方としての自由を発見させようとする試み」(松浪, 1962, p185)であるといえるかもしれない<sup>18</sup>。

なお、先ほどから記述している人間の自己の本来性という問題であるが、実存主義的立場では、おおむね人間は各々本来性というものを持っておりその本来性は変わることはないと言われられる。本稿においては、しかしながら、その本来性の有無を追求することが目的ではなく、むしろそこへの意識の変化に注目したい。というのも、実存とは自分自身が実存しているという体験的事実を基盤とするものであり、その都度獲得される意識こそが、各人の生き方や存在様式に重要な意味を持つと考えられるからである。



## 1) 実存不安

そもそも「実存」とはとてつもなく大きい概念であり、目に見える形で提示されるわけでもない。しかし人はあまりにも大きなものを目の前にした時、漠然とした不安にかられる時がある。それは、フラストレーションや空虚感を感じる以前に生じる感情であり、恐怖のようにはっきりとした恐れでもない。フラストレーションや空虚感は、外界に何らかの働きかけた後に生まれるものだが、不安はただそこから生起されるものであろう。

ところで、不安という言葉が与える印象は非常に幅広い。笠原（1981）によると、不安には、対象や理由のない病的な“ノイローゼ性の不安”と“健康範囲内の不安”の2種類があり、その差は表1-1のようなものである。本稿における実存不安は、いわゆるノイローゼ性の不安には当てはまらない、「実存」というものを感じた、あるいは意識した時に起こる漠然とした不安のことを意味する。そしてそれは、表現にはしにくいものの、我慢が出来ない程でもなく、いったん去れば気にならない範囲内のものを指す。したがって、本研究での実存不安は健康範囲内の不安と位置付けることとする。

また、その体感される不安の特性としては、霜山（1977）が挙げた5つのうちの3つめの特性<sup>19</sup>、すなわち抛り所のない浮動性が挙げられるだろう。これは碇泊点がないこと、基盤がないこと、立場の喪失の感じをともなっていることから一般に生じるとされている（霜山，1977）。さらに、生田（1994）によると、不安は人間にとって普遍的な避けることの出来ない心理現象であり、外的な出来事や内的な観念、情動などに反応して起こるとされる。

表 1-1 不安の種類

ノイローゼ性の不安	健康範囲内の不安
理由（対象）がない	理由（対象）がある
表現しにくい	表現できる
わかってもらえない	わかってもらえる
がまんしにくい	がまんできる
長く続く	長く続かない
またこないかという不安が続く	いったん去れば気にならない

資料出所：笠原（1981）『不安の病理』より。

出典：『心理臨床大事典』p.98.

しかし、不安は人間にマイナスだけを与えるものではない。サリバン (Sullivan, H.S., 1953=1976) は、「不安は自己の限界において体験されるので、この不安を前向きに建設的に処理できる時には、むしろ人格構造の内部において、不安の痕跡部分はしばしば貴重な成長部分に転化して、自己世界が拡大してゆく」と述べているが、これは健康範囲内の不安一般を研究する心理学者や社会学者たちにとって、共通の概念のように思われる。

したがって、ここでの「実存不安」とは「実存を意識したことによって起こる心理現象のことであり、決してそれは個人にとってマイナスなものばかりではない「健康範囲内の不安」と位置付けたい。

## 2) 実存的意識

近藤 (1997) によると、意識とは「個体の適応機能、すなわち外界及び自己の認知とそれに基づく反応」を指す。したがって、意識とは外界や自己の認知が変化すれば、時に激しく揺れ動いたり、停滞したり、中断したりするものでもある。そこで本稿では、あくまでもこの実存に対する意識の変化を重視することとする。またさらに、意識の方向が身のまわりのさまざまな出来事に向いているときではなく自分自身の存在の向いている状態を、人が“実存的意識”を持っている状態であると定義する。

なお、加藤陽子 (2002) は、青年期における若者たちの実存的意識の有無とその内実を調査<sup>20</sup>し、以下に示すような図式化を行った<sup>21</sup>。

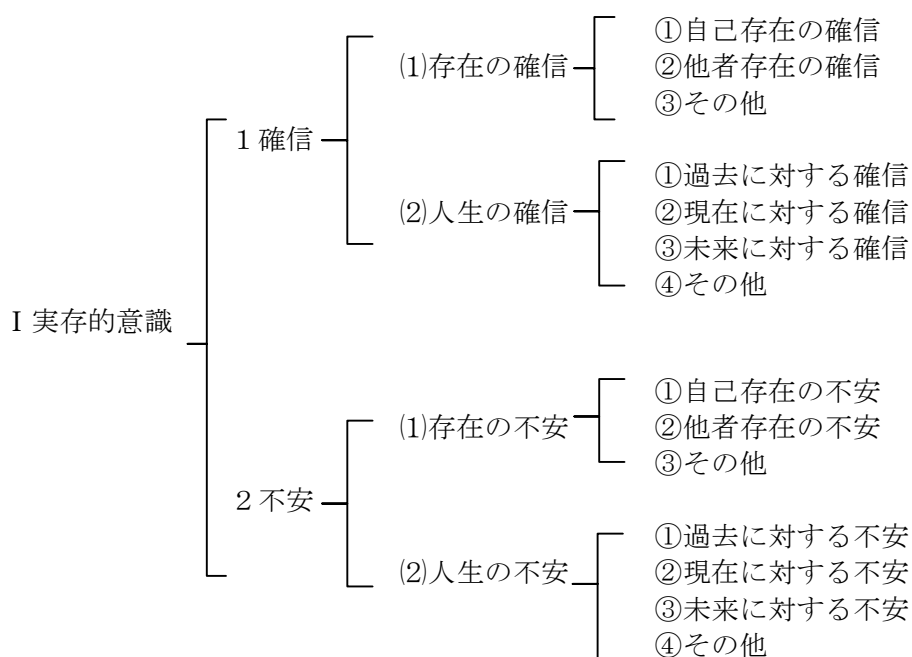


図 1-8 実存的意識カテゴリー

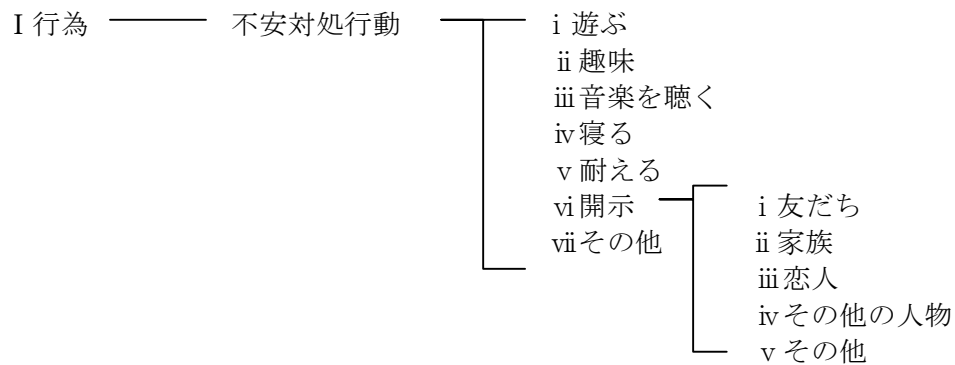


図 1-9 実存不安への対処法カテゴリー

ところで、ボルノウ (Bollnow, O.F., 1973=1943) によれば、実存は常に体験によって獲得されるすべての出発点であるとされる。つまり、実存とは、自分自身の存在に出会い、自分自身が実存しているということを体験するという体験的事実を基盤とした概念であり、人はこうした体験により自分自身の存在に対する意識を持つのである。石川 (1998) は、意識の方向性が自分自身ではなく外部の事柄に没頭している状態を「日常的な意識」(石川, 1998, p.19) とよび、自分自身の実存を体験したときに初めて、人は日常的な意識から離れ、自己の存在に意識的になると述べた。石川によると、自分自身の実存を体験するとは、日常的意識の中で挫折や経験を経て立ち止まり、苦悩や孤独の中で揺れ動くことで体験するものであるという。こうしたことから、この「実存の体験」(石川, 1998, p.19) は自己の存在に対する意識を覚醒させる、すなわち実存的意識を持つ契機となるといえよう<sup>22</sup>。

以上のように本稿で用いる実存的意識とは、私が私を感じる、すなわち私があるという「実存の体験」をするときに得られる自己存在に対する意識が覚醒した意識状態のことを示すものであり、こうした意識は人間の存在様式に対して有効な視座となると考える。

### 3) 生き方に関する実存的態度

上記では“実存的意識”という概念の整理を行ったが、ここではより具体的に生き方に関する実存的態度というものが、多様な人間存在全体を捉える上で重要であることを詳しく述べたいと思う。

実存の体験とは、自己の存在に対する意識を覚醒するという意味において、各人の人間としての在り方を問う際の基盤となるものであろう。多様な人間存在全体を捉えるためには、まず人間の存在様式を捉えることが重要であると考えられる。したがっ

て、実存の体験によって覚醒された意識を考えることもまた、各人の存在様式や人生に重要な影響を及ぼすと考えられる。なぜなら、覚醒された意識を持つことによって、人は自分に与えられた現実や運命に対して自らある態度をとる、すなわち“生き方に関する実存的態度”という自らの在り方を自身で選び取るという態度を取ることができるようになるからである (Frankle,V.E., 1961=1946)。

ところで、人は自己の存在に対する意識が覚醒し、自らのあり方を自身で選び取るという態度を取ろうとするとき、大きな不安に襲われるのではないだろうか。フランクルは、人が自分に与えられた現実や運命に対して自らある態度をとるとき、そこには自由と決定と責任が伴うと述べている (Frankle,V.E., 1986=1955)。われわれは、本来自由な意志で自らのあり方を選び取ることができる存在である。それは無限の可能性を手中にしているように思えるだろう。しかし逆を返せば、その選択は他の誰でもなく自分自身で行わねばならず、その選択決定の結果ももちろん自分自身で引き受けるべきものである。こうした一連の作業は、人間にとってもっとも困難な孤独との対峙を強いることとなる。

アーレント (Arendt,H., 1994=1958) は、アリストテレスの言葉を引きながら人間の本質としての現存在<sup>23</sup>という活動様式は孤立や独居の上に成り立つものではなく孤独の上にのみ成り立つ<sup>24</sup>という指摘しているが、実存的意識や生き方に関する実存的態度も同様に、孤独の上に立ってのみ成り立つことが可能である。また、ヤスパースは実存的態度を取るには孤独の中で対峙することこそが重要であり、そしてその作業は「愛」であると述べている (Jaspers,K., 1992=1932)。アーレントは一方で、生き方に関する実存的態度を手に入れる作業を「WHO」というロジックを用いて語ろうと試みている。アーレントによると、「WHO」とは各人が唯一の存在でありその人が何者かという問いを示すものである。この「WHO」は、その人がなしうることや生産しうるものよりも偉大であり、またこれを重要であると信じることは、アーレントのいう人間的自負にとって欠くべからざる要素である。

ウィニコット (Winnicott,D.W., 1977=1965) は、「WHO」の重要性を「survive=生き残る」<sup>25</sup>という感覚として次のように述べている。「survive」とは、いくら攻撃しても周りを取り巻く環境がそう簡単には壊れないという実感のことを指す。例えば、子どもは時としてその活動性ゆえに環境を攻撃してしまうことがあるが、その時子どもは想像を絶する不安に陥りながらもそれと同時に環境はそう簡単には壊れないことを学ぶ。こうして、子どもはその“場”を「survive」する経験をしていく。つまり、この「survive」という感覚は子供たちに連続性を与え、自分自身でいさせてくれる基盤となるのである (加藤陽子, 2002)。ウィニコットのいう「survive」とは、このように困難な状況や自分自身を大丈夫だと信じられる基盤、「生きていくために必要な楽観主義」 (井原, 1996, p.101) を意味する言葉である。

このように生き方に関する実存的態度を獲得するという事は、すなわち人間という存在として生きていくために必要な基盤、あるいは土台を作る過程であるといえるだろう。多様化するジレンマを抱え、日々刻々と変化する現代社会において、われわれはその都度、境遇に応じた対処法なりあり方を常に新たに獲得していくことを求められており、それは生きていくための必須事項となっているようにも思える。だからこそ、その多様性を認めつつ、それらを包括した基盤すなわち生きていくために必要な基盤である生き方に関する実存的態度について取り上げることは、非常に有効であろう。

### 1-2-2. 実存的視座の有用性

ここに『チーズはどこに消えた?』というタイトルの1冊の本がある。その趣旨は「本当に大切なものはどこにあるのか。どうすれば人生の目的をつかめるのか」といったものである。この本は2000年度に全米でベストセラーとなった本で、日本でも2001年度上半期だけで300万部近くを売り上げたというベストセラーだ<sup>26</sup>。興味深いことに、近年こういった“生き方論”本がとても良く売れているという。例えば2000年度では、ノンフィクション・文芸部門とも、過酷な境遇や壮絶な体験にめげずに生きる自伝的告白本に人気集中した<sup>27</sup>。この他にも、男女の性差を脳の違いで読み解く『話を聞かない男、地図が読めない女<sup>28</sup>』やモノの呪縛から逃れ、捨てることを肯定しようと説く『「捨てる！」技術<sup>29</sup>』など、新しいライフスタイルや対人関係を模索する本が好まれる結果となっている。各書評<sup>30</sup>などでは『「だからあなたも生き抜いて』や『ハリー・ポッター<sup>31</sup>』も含め、厳しい経済情勢下で、“生き方論”として本が読まれている」とこれらの本が売れている現状を捉えている。こうした書評が、実際の社会状況を反映しているかどうかは定かなところではない。この他にも、様々な“生き方本”が今なお多く出版されており、新しいライフスタイルや対人関係を模索・提案する本が好まれる結果となっている。この現象は、何も出版業界に限ったことではない。1999年の流行語に「癒し」が選ばれてからも、未だに日本中が空前の“癒しブーム”にある。人々はなぜこんなにも「癒し」を求めるのだろうか。“今、この時代”は、そんなにも生きにくい時代なのだろうか。

宮台（1998）はその著書で、現在のような価値観が激動していく時代には、自己の価値が否定されたとき、誰もこの世界が生きるに足る場所なのか、あるいは社会の秩序を守って世界との関係性を維持すべきなのかという疑問に駆られると指摘する。

もし日本が今、こういった疑問の只中にあるのならば、まさに我々は実存的問題を突きつけられていると言えるのではないだろうか。いずれにしても、日本の社会が混

迷の時代にあることにはだれしも疑問の余地はないであろう。そしてこういった時代に、人々が自分らしい「生き方」を求めている、あるいは自分自身の存在に目を向け始めているというこの事実は注目に値する。実存主義心理学者のであるメイ (R. May, 1982=1950) は、「正常な不安は、人間各自の実存に応じて対象化される脅威や危険性に比例している」と述べている。現在の日本や世界の状況などを視野に入れたとき、生き方に関する実存的視座を持つことの意義は高いだろう。

加えて、既述の通り、現代社会においては、青年期独特のこうした「自己探求」という文脈を後押しするかのごとく、差異化を求める市場が自分らしさを投げかけてくる。こうした状況に対して、多くの研究成果は、現代の若者は親密性の深浅や状況で自分らしさを表出を分散・コントロールし、結局のところ一貫した自分らしさを手に入れることがないという状況に陥っているとの見解を示している。さらに、たとえば芳賀 (1999) は、現代青年の今日的状況を「内面の自分」(芳賀, 1999, p.26) という観念が徐々に消滅に向かい、自分らしさを確認する情緒的な関係が、急進的な友情・愛情関係からより「分散的な人間関係へとシフトする移行期」(芳賀, 1999, p.26) にあるのではないかと推測している。

しかし、果たして現代青年は本当にそうした過渡的な状況にいるのだろうか。もし今日がそのような過渡期であるならば、あるいは過渡期だからこそ、この時期に前節で述べた“survive=生き残る”という経験をするには、青年にとって非常に重要な要素となるのではないだろうか。心理療法家であるロジャーズ (Rogers, C, 1951) はあるがままの自分を受け入れることは、よりよく生きることに繋がると述べている。自分の生きる意味や存在価値について考えることは、すなわち自分がいかに自分自身でいるか、あるいはあるがままの自分とは何か、「自分らしさ」とは何かということを考えることでもある。そして、こうした生き方に関する実存的態度を持つことは、今日的ジレンマを“survive”する心の土台を固めることになり、よりよく生きることに繋がるだろう。つまり、青年期のジレンマによる実存不安を“survive”できたという経験は、青年に生きることの連続性を与えるだろうし、また自分自身でいさせてくれる基盤の確保、すなわち一貫した「自分らしさ」を手に入れることに繋がり、さらには、それは人生において“自分の人生は大丈夫だ”と信じられる基盤となるだろうからである。

以上のように、青年期の青年の生き方に関する実存的態度という視座を現代青年研究に持つことは、現代の青年の中にウィニコットのいう“survive”という力を探り、ひいてはロジャーズのいうように「よりよく生きる」力を見出すことにも通じる。そして、フランクルがあえて現代社会に向けて「doing から being へ」と説いた意味もそこに見出せるのではないだろうか。

- 
- <sup>1</sup> 第2章で詳細を記すが、以前に比べて自らの生き方やあり方に消極的な態度をとるようになった青年を取り上げている研究は、90年代に入って見られるようになった。
- <sup>2</sup> 「青年性」は、子どもから大人への移行という発達の観点に立ち、青年期に現れる移行期としての特性に注目する研究方法である。次に、「世代性」は、現代日本において社会階層や特定集団に属する青年という特殊性の中で彼らを捉えることで明らかになるとされる。最後に「個別性」であるが、同じ時代に同じ社会の中で似たような特性を持ち合わせていたとしても、その青年たちは必ずしもみな同じ性格や行動様式をとるわけではない。そのため、「個」に注目して青年期を研究することで、より詳細な青年像を提示することができるといえる。西平（1999）は、青年性・世代性・個別性をそれぞれ、人類・人種・個人と置き換え、そのすべての研究方法の重要性を述べている。しかし、本文中にも述べたとおり、世代性と個別性は、それぞれ「青年性」を歴史・社会的状況の中で、あるいは歴史・社会的状況との関連で説明する概念である。このことから、「青年性」という視点は、青年を研究する際の基盤となるものであり、最も重要な要素だといえよう。
- <sup>3</sup> いわゆる「特性論」に関しては、社会心理学を初め、さまざまな分野で議論が行われている。そもそも人に特性があるのか、それは社会との相互作用によって形作られるのではないかという議論である。しかし、本稿においては、そうした議論ではなく、現代青年のあり様を明らかにすることを主な目的としているため、詳細な議論は行わないこととする。ただし、身体的な変化に伴う心理的变化など、ある一定の時期に起こる変化をその時期に起こる特性と位置付けることは可能であると考え、ここではあえて「特性」という言葉を用いることとした。なお、特性に関してはよりいっそうの議論が必要であり、それは今後の課題としたい。
- <sup>4</sup> 青年期を発達の移行期と捉えるとき、そこには少なからず「未熟から成熟へ」という近代的概念がつきまとうだろう。しかし、序章でも述べたが、本稿で述べる「青年期」は、純粹に移行期としての変化のみを捉えることとし、未熟から成熟へという近代的な価値や一方向的な発達過程を意味しない。なお、青年期を移行期として捉えた言葉にレヴィン（Lewin, K., 1979=1951）の「周辺人」あるいは「中間人」、またルソー（1962=1762）の“第2の誕生”という言葉がある。レヴィンは、このような青年期の状態を「周辺人」あるいは「中間人」という言葉で表した。これは「子供」から「大人」へと移行する、言い換えれば、児童期と成人期にはさまれた「もう子供ではなく、まだ大人でもない」というあいまいな立場に置かれている青年たちのこの時期特有の状態を端的に指摘した言葉である。
- <sup>5</sup> 吉本（1994）は日本が本格的に消費資本主義に入った時期は1980年代であるとし、その指標として、平均的な国民の家計において必需支出に対する選択支出の割合が50%を越え、選択的な支出においても商品支出とサービス支出が分岐していくなど、国民の消費支出が増加しながら多様化の傾向を示すようになったことなどを挙げている。
- <sup>6</sup> こうした現状は、現代の日本がいわゆる情報化社会にあることを示しているだろう。
- <sup>7</sup> 山崎（1984）は、しかし、こうした人間の登場を能動的に自分の満足を操作しながらその満身に陶醉するという「演技する人間」と位置付け、ポジティブに日本人の心象の変化を捉えている。
- <sup>8</sup> こうした傾向は、もちろん大衆とエリート知識人というハーバーマス（Habermas, J., 2002=1990）が指摘したような境界をもなくしていく。
- <sup>9</sup> 佐原（1989）が、日本における成熟社会を、あえて日本的と名付けた理由は、世界最強の技術経済大国としての側面を有する一方で、人間性の空洞化・地縁血縁関係の消滅・家庭の空洞化が進んでいるというアンビバレントな側面であった。
- <sup>10</sup> 成熟社会の定義は、数多く存在する。そして、ここには常に何を持って成熟とするのかという疑問が付きまとうであろう。しかし、本稿は「成熟」がなんであるのかといったことを論じることを目的としているのではなく、あくまでも議論の前提として様々な面において豊かになった社会が現代の日本人にもたらす苦悩を述べることを目的としている。そこで、ここでは成熟社会をあえて、「成熟」社会と記し、括弧つきで捉える。
- <sup>11</sup> ただし、柴山氏は、幕末などに比較的盛んだった子ども組、若者組などの年齢集団は、明治

---

以降の近代化に伴う学校文化が根付くにつれて、それに取って代わられるかたちとなったことを指摘し、そのため、昭和後期においては在学年数に含まれる青年期、すなわちかつて成年式が行われた15歳から数えて、それ以降の年数を数えることとしている（柴野，1995）。本稿でもそれに習って、図表を作成した。

- <sup>12</sup> 青年が持つ特性が青年性であるならば、成人が持つ特性は成人性といえるだろう。
- <sup>13</sup> 井上（1973）を参考に作成。総務庁青少年対策本部による『青少年の連帯などに関する意識調査』をもとに、私的価値は、「趣味に合ったくらし方をする」「のんきに暮らす」、社会的価値は「清く正しく暮らす」、「社会のためにすべてをささげたくらす」、世俗的価値は「金持ちになる」、「まじめに勉強して名をあげる」という選択肢を選んだ場合を指すこととした。なお、1997年のデータからは総務庁青少年対策本部の『青少年の生活と意識』調査をもとに作成。項目は、私的価値は、「自分の趣味を大切にしていきたい」、「その日、その日を楽しみたい」、「身近な人との愛情を大事にしていきたい」、社会的価値は「社会や他の人々のために尽くしたい」、世俗的価値は「経済的に豊かになりたい」、「良い業績を上げて、地位や高い評価を得たい」という選択肢を選んだ場合を指すこととした。
- <sup>14</sup> 例えばこの“困難”は、社会学的に表すと「情報化」や「差異化」であったり、また心理学的に表すと「関係の多様性」であったりという言葉に置き換えが可能であろう。
- <sup>15</sup> この場合の他とは、神や共同世界を指す。
- <sup>16</sup> なお、その他実存主義的アプローチを基盤とする精神医学・心理学者としては、現存在分析のビンスワイガーやボス、米国の心理学者R.メイなどがいる。彼らはそれぞれ異なった治療アプローチを持つが、適応や症状の消失といったものを第一義に置くのではなく、各人に固有の実存的な存在様式へ至ることを目的とするという点において一致している（石川，1998）。
- <sup>17</sup> 加藤陽子（2002）を参照のこと（p.9-11）。
- <sup>18</sup> 遠藤（2004）は、法学の立場から、日本国憲法において前提とされる人間像は「自己統合希求的個人像」であり、それは「かけがえのない人生において、生き方のその人なりのまとまり・自己統合を希求し模索する個人像」（p.163）であるとした。遠藤によれば、自己統合希求的個人像において注目すべきは、人間が一面的に割り切れる存在ではなく、人間として様々な側面を持っていることを前提としている点であるとされる。人間存在全体を捉える人間科学的研究の中で、実存的視座に基づいて青年の生き方を捉えようとする本稿の試みは、多面的な側面を持つ人間存在あるいはその生き方を包括的に考察しようとするものであり、まさに遠藤が指摘する自己統合希求的個人像を求めることに通じるといえるだろう。
- <sup>19</sup> 霜山（1983）によれば、体感としての不安には□狭窄感、□心迫性、□浮動性、□存在への不信心、□生理学的変化に伴う気分変調の5つがある。
- <sup>20</sup> 加藤陽子（2002）を参照（p.84, p.89）。大学生と高校生に対するインタビュー調査をもとに、コーディングを行い、図式化したものである。
- <sup>21</sup> まず、実存的意識の有無とその内実についてのカテゴリーとして、「(1) 実存的意識カテゴリー」(図1-8)、また実存不安に対する行動として「(2) 実存不安への対処法カテゴリー」(図1-9)の2つの分類を設けて説明を行っている。
- <sup>22</sup> 石川（1998）は、この意識を「自己存在意識」（p.19）と規定している。しかし、本稿で重視するのは自己存在意識が覚醒した状態であるから、その状態が人生の基盤を作ると考えるとき、それは「自己存在意識」というよりはむしろ「実存的意識」と呼ぶほうが適切であると考え、この覚醒した意識状態を「実存的意識」とし、石川の「自己存在意識」と区別して用いたい。
- <sup>23</sup> アーレント（Arendt,H., 1994=1958）によると、アリストテレスは人間の本質を現存在とよび、これは“よく生きること”であると指摘している。
- <sup>24</sup> アーレントは、“孤独”と“孤立”は異なると述べている（Arendt,H., 1994=1958）。
- <sup>25</sup> ウィニコット（Winnicott,D.W., 1977=1965）の述べた“survive=生き残る”という感覚は、何も他人を蹴落としてその状況を生き延びたり乗り越えたりすることではない。どのような環



---

境であろうとも、それを受けとめ、信頼することを指す。またここで言う“場”とは、場所という意味ではなく個々人が“存在する場=topos”を指す。

<sup>26</sup> 日販調べ (2000.12.1～2001.5.31)。

<sup>27</sup> 部門1位は、大平光代の非行から立ち直った経験を語る『だから、あなたも生きぬいて』(講談社, 191万部)がメガヒットを飛ばし、また文芸部門1位では柳美里『命』(小学館, 45万部)がヒットした。

<sup>28</sup> アラン・ビーズ, バーバラ・ビーズ著, 2000, 主婦の友社

<sup>29</sup> 辰巳渚著, 2000, 宝島社新書

<sup>30</sup> 読売新聞 2000/12/09 東京版 夕刊。

<sup>31</sup> J.K.ローリング著。現在, 邦訳は第5巻まで発行済みの人気シリーズである。主人公で魔法使いのハリー・ポッターが, 仲間達とともに様々な苦難を乗り越えて成長していくという内容の物語。全世界的なベストセラーとなり, 世界中にハリー・ポッターブームを巻き起こしている。

## 第2章 大学生の現代性に関する実存的考察—戦後若者論を踏まえて—

第1章で取り上げたとおり、現代青年<sup>1</sup>の特徴の1つとして、彼らが豊かな社会の中で経済力をつけ、脱工業化社会の主役になったということが挙げられるだろう。この結果、青年期の社会的地位・価値は相対的に向上し、モラトリアムの質的变化をもたらした。すなわち、これまでアイデンティティ形成のための手段であり過渡期であるとされていた青年期のモラトリアムは、それ自体が目的化し、合理化されていく。こうした傾向は、青年たちをモラトリアムへと囲い込むことにつながり、そこに安住する青年たちが増えることとなる。

このような特徴を持った現代青年であるが、中でも今日の大学生は、進学率の上昇や高学歴化によって生み出された現代の青年期延長やモラトリアムの大衆化の代表的存在だといえる。そのため、社会状況に大きな影響を受ける彼らを中心に現代青年の様相を問い直すことは、大きな意味を持っているだろう。またさらに、今日の大学生は、現代青年に指摘されている無気力やモラトリアムへの安住、自分らしさの表出を分散・コントロールする傾向が指摘されているが、同時に自らの生き方やあり方を主体的に確保する方法を模索している姿もみられる。

そこで本章では、現代青年に関する言説を戦後の若者論の系譜をたどることによって捉え、若者論の一部として議論されてきた大学生像を改めて捉え直し、彼らの現代的心性に注目する。さらに、実存的視座からそれらを分析することによって、ゆらぐ現代青年の様相を代表する大学生の現代性を探っていきたい。

### 2-1. 戦後若者論の変遷

第2次世界大戦後、日本は新しい国の形を作るべく、新たなる組織を編成し、人々は復興にむけて懸命に働いた。その結果、日本は高度経済成長を遂げ、世界第2位の経済大国にまで押し上がる。この時代、青年たちは社会と直接関わる存在として大きな役割を担っていた。いわゆる勤労青年の比率が高いことからそれは顕著であるが、一方で、全国的に広がっていた学生運動にもその傾向はあらわれているであろう。諸説はあるが、日本における学生運動は、おおよそ日米安全保障条約への反対運動を機に本格化した。そして1969年の東大安田講堂陥落、70年の日米安全保障条約の自動延長を機に運動が収束に向かうまでの約10年間、社会的な一つのムーブメントとして様々な形で後世に大きな影響を残した。彼らは、自分たちの主張を声高に叫び何かを変えていこうと、そして変えられるという意志をもって運動を行っていたように感じ

られる。そういった意味で、彼らのこの運動は実存的意識をもって行われていたといえるものだったのではないだろうか<sup>2</sup>。少なくともこの時期、フランクルの著書は、日本でそして全世界的にベストセラーとなっている。

しかし、この学生運動は 1972 年の浅間山荘事件にも見られるように、大きな挫折として世に知らしめられることとなる。それ以後の青年たちは、周知の通り、長い「モラトリアム」や「しらけ」の時代へと突入する。小此木（1973）によると、「モラトリアム人間とは、どんな社会的局面でも当事者意識がなかったり、当事者になることを嫌い、それぞれの場所で、できるだけお客様でいることを望む心理的傾向を持つ」（小此木，1973，p.12）人々をいい、単に若者だけを指すのではなく、現代人一般の心象を指すという。さらに、こうした傾向は平和愛好的ムードの日本でのみ生まれ、日本の繁栄はそのムードのもとでしか生まれ得なかったと指摘する。一方、栗原（1981）は、現代の青年たちを高度産業社会自体が逆説的に生み出したものであると位置付けた。栗原によれば、高度経済成長による産業社会の恩恵を受けながら、同時に受験競争という競争原理に曝されてきたこの世代の若者たちは、そこに根付く達成原理や競争原理を回避して、他者との共同性を重視し、存在するもの全てに等価値を見出そうとする自己防衛本能としての「やさしさ」へと向かうと指摘した。この他、井上（1977）による競争社会への防衛機能としての「遊戯性」を持つ若者論、中野ら（1975）による主体的には連帯しないが客体的には連帯している青年像を提示したカプセル人間論などという 70 年以降の若者論は、全体的に「無気力」で「無意志的」な青年の心象を提示している。

しかし、これらは本当に現在の青年像を捉えているのだろうか。現在、巷に溢れる「存在価値」や「ここにいる意味」を求める流行歌や雑誌<sup>3</sup>の記事などからは、そのような形跡は見当たらないように思う。そこで本章ではまず、戦後の青年の地位を示す若者論の系譜をたどることによって、現代青年に関する言説を捉える。

### 2-1-1. 若者論の変遷①～下位文化としての若者

まず戦後若者論において注目すべきは、1950 年代後半から 60 代にかけての若者たちであろう。戦後の経済成長は若者たちに豊かさをもたらし、長期にわたるモラトリアムを消費的に過ごすことを可能にした。その結果、彼らは豊かさの中で自立性を高め、社会に対して批判的な立場を取りはじめる。こうしてこの時期の若者は、産業社会の生み出した禁欲主義や合理主義、勤労や向上を志向する価値観などに矛盾を感じ、対抗性というラディカルな色合いを強めることによって独自の地位を獲得していった（Keniston, K., 1973=1968）。さらに 60 年代後半に入り、情報社会という関係性の中に

において、若者たちの自己表現手段は、学生運動という既存の体制への対抗・変革から理想的な自己追求のための「商品による自己表現」（岩間，1995，p.34-35）へと変化する。すなわち、既存の社会への対抗勢力であった若者たちが、その社会システムを逆手にとって自己実現を始めたのである。

こうした若者の心性の変化を、小谷は「マジにむきあえばどうしようもなく傷ついてしまう状況から「オリ」てしまい、「ズッコケ」てしまうことによって、状況を耐えられるものにして、傷つきやすい自我を守ろう」（小谷，1993，p.65）としていると分析する。そして小谷によれば、そのことをいち早く指摘したのが栗原（1981）のいう「やさしさ」や井上（1971）の「遊戯性」という言葉であった。加えて興味深いことに、小此木（1973）も、しばしば消極的な意味で用いられるモラトリアムの態度を、若者の社会適応への戦略であるとみなしている。彼は、戦略的に社会に適応しようとする若者を「プロテウスの人間」と名付け、その心性を「モラトリアムに居直り、むしろそれ自身を自分のアイデンティティにする」（小此木，1973，p.59）と指摘している<sup>4</sup>。こうして1960年代後半から70年代にかけて出現した「アイデンティティを確立していながら、社会役割や体制に自らをコミットさせず、独自のライフスタイルをとろう」（加藤潤，2002，p.29）とする新しいタイプの若者たちの下位性<sup>5</sup>は、80年代を機に花開くこととなる。

1980年代から90年代前半にかけての若者たちに特徴的なのは、“オタク・ディスコ・アイドルブーム”などに見られるような、情報に対する感度の良さ、記号的な差異化志向の強さ、ブランド志向の強さといった志向性とされる（岩間，1995）。脱工業化社会の中で、戦略的な社会適応と記号的な差異化志向があいまった結果、若者たちは際限のない自己への探求へと陥っていく。60年代後半から始まった若者たちの一連の心性は、このように「自分探し」や「自分らしさ」といった現代青年を語るキーワードへと繋がっていく。

ところが1990年代に入ると、自己表現手段としての記号的な消費活動が、若者たちだけでなく社会全体に蔓延し、常態化する（岩間，1995）。その結果、一部の若者たちは、他者の視線を気にしながら記号的な差異化競争を強迫的に繰り広げることに疲れ、ある種の脱力感をもって身近な関係へと閉じこもり始める（宮台・石原・大塚，1993；宮台，1994）。宮台（1993）によると、90年代以降の若者たちは、「快—不快の実感を軸とした体感原則（p.276）」にのっとなって行動しているうちに、自然と自らの様相の忝意性を自覚し、価値観や思想信条、趣味やファッションでさえも、世代のコードという役割を果たさなくなっていくという。こうして無限の塵のように広がる若者たちは、ごく小さな浅薄な関係性そのものの中に引きこもり、それでもその小さく浅薄な関係の中で自らのアイデンティティを確かめ合うこととなる。1980年代までの若者たちは、記号的消費の営みがあくまでも彼らを主導とする形でなされていたために無

数の点のように分解するまでにいたらなかった（小谷，1993）。

しかし1990年代以降，記号的差異化競争を放棄した若者たちの下位性という世代としての役割は，静かな終焉を迎える（小谷，1993）。このように，今日の若者論においては，もはや一つの下位文化を持つ存在として若者を取り上げることは難しい状態となった。そこで次項では，近年の若者について自己のあり方からアプローチすることで，現代青年の心性について述べていく。

## 2-1-2. 若者論の変遷②～自己のあり方を中心に

90年代以降の現代青年に関する言説の多くは，彼らが“自分らしさ”という言葉に曝された結果，「自分は特別だ」という自己中心性に支配され，逸脱行動に走りやすくとされる（加藤陽子，2002）。たとえば，自己中心性に支配された若者たちが徐々に自己を肥大化させ，あるいは正しい自己イメージを持たずに，社会的諸問題を引き起こすという言説（小此木，2001；影山，1999；岸，1999）や，またそこまでいかずとも，市場システムにとらわれた若者の姿を危惧する記述は多く見られる。宮島（1995）によれば，今日の若者は一般に道徳律に縛られるのを嫌い，禁欲にもはや価値をおかない「現在を楽しめ」式の快樂主義的傾向を持っているとされる。また千石（1991）は，今日の社会は物質的に豊かになるにつれ，中心価値が「インスツルメンタル」から「コンサマトリー」へと移行してきていると指摘し，若者たちにおける中心価値も，仕事優先から余暇優先へ，「真面目」から「マジ」へとといったように，規律や規範の喪失へと移行していると分析している。

確かに近年，上述の研究が指摘するような，若者の快樂主義的傾向による自己の肥大化がさまざまな社会現象として立ち現れているように感じる<sup>6</sup>。しかし，こうした現象は本当に若者たちの心性の変化を表しているのだろうか。轟（1998）は，上述のような若者の変容に対して批判的な立場をとっている。轟によれば，若者の価値観の変化は即座に行動の変化を意味するわけではない。彼は様々な調査結果を検討しながら，若者の行動には以前に比べて規範逸脱的なものも見られるが，意識の上では必ずしもそうでないことを示している（轟，1998）。すなわち，今日指摘される若者の行動の変化は，むしろ価値観の多様化した時代に対しての判断保留であり，若者側の当然の適応的心理変化といえるのである。また，日本労働研究機構が実施した調査（小杉，1990）においては，近年の若者に特徴的な行動の変化は，多様化する社会への適応形式であり，価値観や態度の変化までは断言できないとして，轟の主張を裏付ける結果を呈示している。

ところで，上記のような現代青年における「自己」と「社会」との関係については，

近年様々な角度から議論が展開されている。ここでは、その中の親密な他者との関係性という側面を取り上げてみる。

たとえば、「小宇宙」(佐藤, 1993, p.313)や「島宇宙」(宮台, 1994, p.87), 「感性の小共同体」(小谷, 1998, p.234)「ミニマム集団主義」(川崎, 1999, p.97)などといった社会学的造語の数々からも見て取れるように、多くの言説は、現代青年の他者関係における特徴的な傾向を、彼らが比較的狭い範囲でしか自らの生きる意味や存在意義を確認し合わないという点であると指摘する。すなわち、現代青年は親密さや安心感を希求するものの、親密性にともなう心理的負担を忌避する傾向が強いとされているのである。そのため、彼らは親密性の浅い関係の中ではなかなか「他人のプライバシー(生き方に直接触れる部分)に介入したがる」(芳賀, 1999, p.26)。つまり、現代青年は親密性の深浅や状況に応じ、自分の生き方やあり方の表出を分散し、コントロールしていると指摘されているといえるだろう。さらに芳賀(1999)は、こうした現代青年の今日の状況は、「内面の自分」という観念が徐々に消滅に向かい、自分らしさを確認する情緒的な関係が求心的な友情・愛情関係からより「分散的な人間関係」へとシフトする移行期(p.26)」にあるのではないかと述べている。すなわち、芳賀の指摘は、将来的には自分らしさや生き方に関する親密性の役割は消失するだろうとして、自分らしさや生き方に関する親密性の疎外を指摘しているといえるだろう。

以上のように現在の若者論においては、現代青年は差異化を求める市場に抱きこまれながら記号的消費を繰り返し、永続的な自己探求を行っているといえらるというといえよう。そしてまた、多くの若者論によれば、現代青年は記号的な差異化の中において、結局のところははっきりとした“自分らしさ”を得がたいという葛藤を抱え続けることに疲れ、心理的負担のコントロールのために戦略的なモラトリアムの態度という社会適応手段を身に付け、親密な他者との関係性そのものに引きこもり、親密性の深浅や状況によって“自分らしさ”の表出を分散コントロールしていると考えられているといえる。

## 2-2. 今日の大学生の「現代性」

### 2-2-1. 大学生が持つ「時代性」

青年期という時期は、社会学的に説明すると、近代産業社会の要請による学校教育期間の長期化とそれを可能にした個人の富の増大という2要因によって生み出されたとされる。すなわち、産業革命以後、より長期の学校教育によって養成される人材が必要とされるようになったことと、産業化の結果として個人が豊かになり学校教育を

利用することが可能になったことが、子ども期と大人期の間に労働の準備期間、あるいは労働を免れた消費期間としての青年期を生み出した（加藤潤，2002）。

戦後、日本社会においても、2つの青年期の発生要因はさらに拡張されてきた。長期的な学校教育は、政府による高等教育改革によってさらに発展し、脱工業化した現在においても、いまだ延長される傾向にある。加えて、高度経済成長という後押しを受けることによって、高等教育を受ける機会は全国的に整備・拡張され、高等教育が大衆化していった。特に大学の大衆化は戦後めざましく、『学校基本調査』によれば、1945年から1955年には8%前後だった大学等への進学率は、2002年の大学進学者は59万人となり、その進学率は44.8%に達したという<sup>7</sup>。こうして日本における青年期は、学校教育の延長や高等教育の大衆化とともにそれ自体も長期化し、大衆化しており、その傾向から、今や日本においては、子どもでも大人でもない青年期というライフステージは青年たちの中に常態化しているといえるだろう。中でも、青年期の発生2要因を考えるならば、大学生は現代日本社会の青年期延長、あるいは青年期の常態化の代表的存在と位置付けられる。

そもそも大学生は、その他の青年期の者に比べて、社会的な文脈と密接に絡み合いながら語られることが多かった。たとえば、60年代に見られる既存の社会への異議申し立てというムーブメントの中核をなしていたのは、学生運動であり、その当事者であるのは大学生であった<sup>8</sup>。また、モラトリアム的態度の社会的な蔓延との関連が強く示唆される「スチューデント・アパシー<sup>9</sup>」や「五月病<sup>10</sup>」、あるいは80年代の平均的で個性的意欲の乏しい大学生像としての「共通一次世代」や多様化するライフスタイルの象徴としての「ダブルスクール族<sup>11</sup>」など、各時期の大学生を象徴する用語の数々は、どれも当時の社会状況を反映した言葉だといえるだろう。

こうした言葉に示されている通り、大学生の心性はその時代、時代を切り取るキャッチフレーズで表現されていることから、彼らはその時代を反映した要素を多く持ち合わせているといえるだろう。それでは、今日の大学生は、どのように時代を反映した要素を持ち合わせているのだろうか。以下で、その詳細を見ていく。

## 2-2-2. 大学生が持つ今日的苦悩

もともと、エリクソンによって示されたモラトリアム期の中にいる青年たちは、大人の義務や責任の履行が猶予される半面、社会から半人前扱いをうけ成人としての権利が与えられないため、早くそこから抜け出そうと、様々な役割実験を通してアイデンティティを形成するものとされてきた。しかし、前章で述べたとおり、社会が脱産業化した現代日本社会においては、青年たちは、市場の要請によって消費社会の主

役に躍り出て、大人顔負けの消費人として扱われることとなる。そのため、今日の青年期研究は、それまでモラトリアム期が持っていた半人前扱いされるという側面が消失し、義務や責任からの猶予という側面だけが強調されることによって、現代青年のモラトリアムへの安住が助長される傾向にあると指摘している。つまり、こうした議論を大学生という文脈に置き換えると、それまで大学生の心性として一貫して注目されてきた消極的な側面、たとえば「モラトリアム」や「無気力」な側面が、大学生たちの社会適応のための一つの戦略であるとみなされるようになったといえる。

たとえば串崎（2002）は、大学生に見られる無気力状態の多くは、単に無気力に見えているだけで、その内実はライフスタイルの多様化による社会適応の現れであるとされる。「スチューデント・アパシー」という名称を日本で始めて用いた笠原（1984）によれば、70年代以降の大学生にみられる無気力傾向は、勉学の意欲を喪失し、授業や試験を受けない意欲減退状態にもかかわらず、クラブや趣味、バイトなどの日常生活は普通に営まれるところに特徴があるとする。串崎は、専門的な治療を必要とする場合を除き、大学生におけるこうした無気力状態は、むしろ彼らなりの多様化する社会への適応であると指摘した。確かに、大学生は中高生などに比べて人間関係の選択の幅が広がり、その関係性も複雑になる時期である。その上、今日の大学生はかつての学生に比べてライフスタイルも多様化している。彼らの多くは、大学生活のほかにもアルバイトや英会話などのダブルスクール、ショッピング、恋人とのデートなど、複数の場所に身をおきながら生活しているとされ（白井、2003）、こうした複数の場を移動しながら生きる彼らが、戦略としてある一部の生活に無気力化していくことは理解に難くない。さらに串崎（2002）は、こうして複数の場を軽やかに生活する今日の大学生は、生きる場所が多様化した結果、その場その場で複数の人格を使い分けて生活していると指摘し、それらを現代大学生特有の心性として付け加えている。串崎のこうした指摘は、芳賀らによる「自分らしさ」の表出の分散・コントロールという若者論を大学生の立場からも支持するものである。

しかし、ここで重要なことは、前章で述べた「青年性」の問題である。「自分らしさ」の表出の分散・コントロールという現代青年に対する社会適応論では、自分らしさを強く求めるという青年の持つ特質が切り捨てられている。現代青年を包括的に捉えることを試みるならば、彼らのモラトリアム的態度や自己表出の分散・コントロールという自己拡散的な社会適応とともに、「自分らしさを強く求める」という「青年性」の議論を再度加味する必要があるだろう。

実際、大学生の心性に関する記述には、彼らが複数の場所に身をおき軽やかに生活を続けていると同時に、自らのあり方を模索し続けているということに重点がおかれると指摘するものもある。たとえば溝上（2002）は、今日の大学生の苦悩の特徴は、大学を好きなことややりたいことが何でもできる楽園のように思っているが、実は自



らの望むものの中身を知らないために手ごたえを感じるができず、自分がわからなくなる点にあると指摘した。また同様に、白井（2003）は、今日の大学生の最大の関心事は対象の価値ではなく「私らしさ」を越えた主体性の確保である」（p.90）と指摘した。溝上（2002）は、こうした今日の大学生の苦悩を後押ししているのが、若者論で述べられている自分らしさの追及としての「自分探し」、あるいは本稿でいうところの“市場による差異化の要請と自己に意識的な「青年性」との軋轢”にあると分析している。そして、大学生の苦悩として、前述の「スチューデント・アパシー」や「五月病」という言葉が多く用いられるが、溝上の言葉を借りれば、これらもまた大学生たちが「自分らしさ」を求めるがゆえに起こる現象であるという。

このように今日の大学生は、価値観の多様化する現代日本社会という社会的背景と大学生であるがゆえに多様な場所をもち、拡散的な自分らしさを戦略的に用いながらも、一方で自らの生き方やあり方を主体的に確保する方法を模索しているといえる。したがって、大学生の様相を全体的に捉えようとするとき、こうしたモラトリアムの態度や自己拡散的な社会適応手段という側面と同時に、今一度「青年性」を加味した考察が必要であるといえる。

### 2-2-3. 大学生と生き方に関する態度

#### 1) 調査の目的と意義

ところで、上述の社会学的青年論による、現代青年が親密性の深淺や状況に応じ、自分の生き方やあり方の表出を分散し、コントロールしているという指摘からは、そもそも現代青年が自らの生き方やあり方に関して積極的な態度を持っているのかという問題を提示することもできるだろう。

既述の通り、現代青年の生き方やあり方への関心の希薄化については、浅野（1999）のみならずしばしば議論が行われているところでもある（千石，1991；小此木，2000；影山，1999；岸，2000）。そこで、ここではまず大学生を対象とした人生の意味・目的に対する態度を調べることにした<sup>12</sup>。なお、本調査において質問紙法を用いたのは、臨床場面での青年期の諸問題の根底に実存的諸問題を感じるとする質的研究が多い（長野，1991；葛西，2000）のに反して、高校生や大学生に関する具体的な量的研究が非常に少ないためである。それらの原因としては、実存という概念が抽象度の高い問題であること、そのため自己意識の未熟な青年期に“実存的意味”を問うことは難しいという心理学的な見解が背景にあることが考えられる。

また、現在「生きる意味」や「生きがい」という言葉は、中年期や高齢者の心理を語る上で欠かせないものとなっている。というのも、従来の論調では高校生や大学生

には実存的な意識や態度を持つことが少ない、あるいは持っている、それらを理解し言語化できないと考えられているためであろう。しかし、だからといって高校生や大学生が“生きる意味”や“自己の存在価値”といった実存的な意識や態度を持っていないと結論付けることは早急ではないだろうか。筆者のささやかな臨床経験からも、また各ケース研究や他分野における質的研究の成果などを見ても、青年期の実存的な意識や態度は測れないという解釈は、全面的に肯定できるものではないという印象を受ける。そこで、今回はPIL心理検査（Purpose-in-Life test：PIL）を使って、量的な調査を進めることとした。

調査対象者は、首都圏の4年制大学に在学中の大学生男女で、有効回答総数は男子111名、女子131名の計242名（平均年齢20.9歳）であった（有効回答率84.6%）。調査は2001年8月から11月に渡って行なわれた。質問紙は知人や先生方に依頼し時間をとっていただき、配付・回収させていただいた。調査尺度は、PIL心理検査（Purpose-in-Life test：PIL）のPart A 態度スケールで、岡堂（1993）による改訂版を用いた。Part - A 態度スケールは、20項目、7件法尺度、得点化は1点から7点までである。「人生にはわくわくするようなことが一杯ある」「生きていく上で非常にはっきりした目標や計画がある」「世の中は非常にしっくりくる」のように、主に個人がどの程度人生に生きる意味や目的を見出しているかといった体験を問うものとされる（佐藤，1993）。PILの採点は20項目すべての総得点で行う。したがって、得点は20点から140点の分布の中で算出される。

表 2-1 調査概要

時期	2001年8～11月
対象	首都圏近郊の4年制大学の学生
属性範囲	18歳～24歳
サンプル数	286
有効回答数（率）	242（84.6%）

## 2) 調査結果

本調査では、大学生の平均得点は91.17点（SD=14.3）と、中程度の意味・目的を持つ態度が示された。なお、PIL日本語版の作成者の岡堂や佐藤らによると、PIL態度スケールの大学生の平均値は90.2点（SD=17.35）が目安となっている。さらに、PIL尺度Part-Aの判断基準（15歳から34歳）から、PIL得点は20～79点が低群、80～109点が中群、110～140点が高群に分けられる（佐藤，1993）。

したがって、本調査における大学生は、人生の意味・目的を中程度体験していると感じていることが示された。このことから、大学生がいまなお自らの生き方やあり方に関して意味や目的を見出しているといえ、彼らの「青年性」は損なわれていないことが示唆されるだろう。

表 2-2 全統計による PIL 得点

PIL	男子	女子	全体	t 値
	平均 (SD)	平均 (SD)	平均 (SD)	
大学生	89.92 (13.93)	91.0 (14.65)	91.17 (SD=14.3)	-0.60

(男子 n=111, 女子 n=131)

また、男女差について調べたところ、全体の統計結果、平均点は 91.17 点 (SD=14.30, n=242) であった。内訳は男子の平均点が 89.92 点 (SD=13.93, n=111), 女子の平均点は 91.0 点 (SD=14.65, n=131) であった。全学年を合わせた男女差の t 検定を行ったところ、有意な差は得られなかった。結果は表 2-2 に示す通りである。さらに、学年段階別に変化をみたところ、主効果がみられた。詳細を見ると、大学 2 年生から大学 3 年生にかけて、1%の有意水準で PIL 得点が下降していることが分かった (図 2-1)。

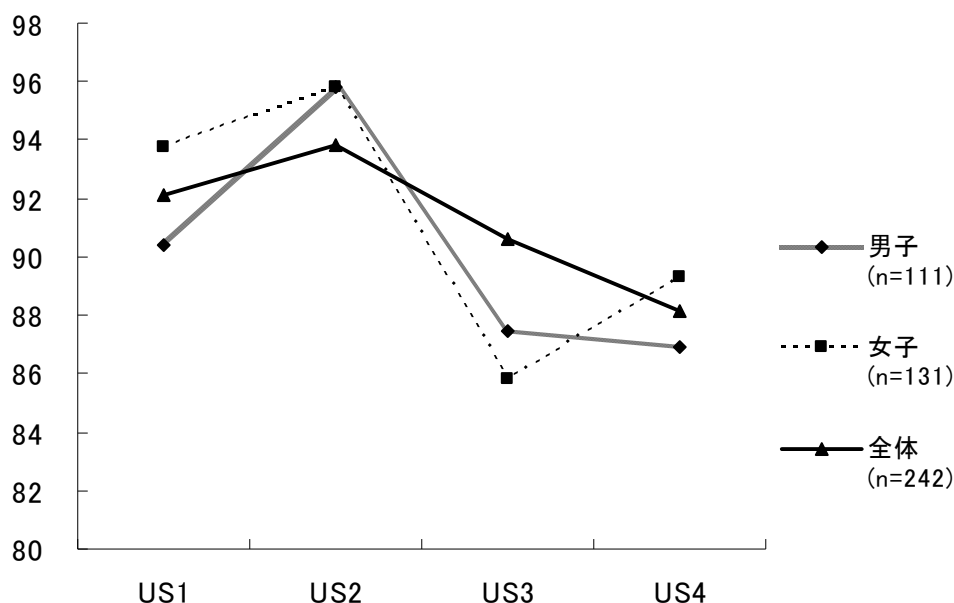


図 2-1 PIL 得点の学年段階差

この結果からは、大学生が中程度の生き方に関する実存的態度を保持しており、他世代と比較しても決して低くない数値が示されたといえる。なかでも特に、興味深かったのは PIL の人生の意味・目的の体験感の学年段階別の変化である。PIL 得点は、大学2年で少し上昇した後、大学3年生になって1%の有意水準で下降し、大学4年生でもスコアが下がるといった特徴があった。つまり、大学生は、学年によって人生の意味・目的を体験していると感じる度合いが異なっている。では、なぜ大学1、2年生と大学3、4年生とでは人生の意味・目的の体験感が異なるのであろうか。

大学3、4年生といえば、就職活動が始まる時期である。しかし、昨今の社会状況から就職活動は極めて厳しいものとなっている。また、やりたい仕事と採用される企業が100%イコールで結べないところにも、就職の難しさがある。現在の自分と将来のなりたい自分が連続性を持たないことによる苦悩は、青年期後期に起こる問題の一つである (Lewin, K., 1979=1951)。今回の調査結果は、この苦悩がスコアの差として現れたと考えられないだろうか。つまり、この調査結果からは、人生の意味・目的の体験感は社会的な文脈<sup>13</sup>によっても変化するといった示唆が得られる。

就職活動をしていた友人が、当時、次のように話してくれたことがある。「就職活動は恋愛のようなものだ。100回ダメでも101回目に運命の人(企業)にめぐり会えるかもしれない。でも、101回目でもダメかもしれない。1回目で運命の人にめぐり会える人もいる」。また別の友人は「自己アピールなんて嘘をついた者勝ちだ」と話していた。就職活動は、自分の今後の人生を左右する一大イベントである。しかし、現代日本社会のような“努力が報われない”感が強い不況下では、どんなに人生の意味・目的を探しても、体験していると実感することは難しいのかもしれない。

尾崎(1999a, 1999b)は青年期の生き方に関する研究において、PIL尺度は人生に対する意味・目的を体験しているか否かの獲得を測定する側面を持つと述べている。そして、人生に対する意味・目的の獲得という体験は、それを探求しているものにとって初めて意味を持つと指摘した。このことから、大学生のPILスコアの変動は、決して人生の意味・目的を感じている・いないということだけで変化したのではなく、大学生が持つ特有の文脈の中で起こった<探求>と<獲得>という「関係の変化」と推測される。そのため、彼らの生き方に関する態度を捉えるならば、むしろその文脈に基づく変化の過程を重視した検討が必要だといえよう。

以上のように今回の調査結果に基づく論証からは、現代青年における自らの生き方やあり方に対する態度が決して消極的なものばかりではないことがうかがえ、現代青年の生き方に対する態度に関しては、より多角的な検討を試みる必要があるといえるだろう。

### 2-3. 大学生の現代性の内実—生き方に関する実存的態度と親密性を中心に—

前章で示したとおり、青年期の様相のみならず、今日の日本は大量生産・消費システムが国民生活の細部にまで浸透したことによって脱工業化し、消費化社会へと社会構造そのものが変化した（関沢，2002；山崎，1984）。こうした変化は、人々の関係性にさまざまな変化をもたらしたが、中でも近年特に注目されているのが“親密性の変容”である。そもそも親密性は、社会の脱近代化という流れの中で、その意味内容が大きく変わったとされ、かつてのように伝統的な社会・文化規範に拘束された関係ではなく、関係を結ぶこと自体が目的であり、その関係がお互いに満足感を与え合う限りにおいて維持されるような関係に重点を置く、より対等な関係へと変化しつつあるとされる（A.Giddens, 1995=1992）<sup>14</sup>。

従来、発達的な見地からは、青年期の生き方・あり方に対する態度と他者との親密な関係は、それぞれ大きな役割を果たすことが説明されてきた。

周知の通り、青年期は身体的な成熟にともなって、自らへの関心が高まるとともに他者への関心も高まり、心理的・社会的にも大きく変化していく時期とされる。特に自らの生き方やあり方を問う積極的態度は青年期に重要な役割を果たす。たとえば青年期において、自らの人生を切り開く意志が強いものは自己受容度<sup>15</sup>が高く、精神的にも健康であることが明らかにされている（高井，2000）。また、実存的不安と自己受容との関連において、自らの生き方やあり方への関心の高さが自己承認のためのさまざまな気づきをもたらすことが指摘されている（服部・吉田・小熊，1990）ほか、青年期の問題理解には、自らの生き方やあり方に対する肯定感や充実感、使命感をもたらすことが重要であるという指摘なども見られる（葛西，2000；長野，1991）。

同様に、青年期においては人間関係を再構築することも重要な課題とされており、特にこの時期の仲間との関わり合いは子どもの依存性から成人の自律性へと移行するために重要な要素であるとされる（Erikson, E.H., 1968）。つまり、お互いの差異の受容、相手との信頼感や相手への自己開示、忠誠を中心とした情緒的で急進的な友情・愛情関係は、青年にとって有意義なものであるといえるだろう。そのため、この時期の親密な他者は、自分を支えてくれ、自尊心を高揚させたり孤独感を癒してくれたりする精神的安定をもたらす存在であり（落合ら，1993）、自分の盲点に気づかせ、自分という存在や自らの生き方への理解を深めてくれる鏡像的存在であるといえる（遠藤，1997）。さらに、高井（2003）は、他世代と比べ、青年期においては自らの人生に対する目的や希望を求める割合が多く、中でも自らの理想とする生き方や他者との情緒的関係を希求する回答が多いと指摘している。こうした研究からは、青年期における他者との親密な関係性が、精神的な安定や自己存在を積極的に肯定する要素となりうることを示しており、生き方やあり方に対する積極的な姿勢と親密性とは密接な関連があると

示唆されている。

このように、現代青年における生き方やあり方を問う上で他者との親密な関係性は重要な要素であるにもかかわらず、前項で示した今日の大学生や若者に関する議論においては、彼らの内面にある自分らしさが消失し、さらにそれにもなって親密性も希薄化・分散化する傾向が強調されている。つまり、上記の議論においては、自らの生き方やあり方との関連において有意義であるべき親密な関係性が“疎外”されているといえるだろう。そのため、本章では青年期における親密な関係性を取り上げ、大学生の語りから、親密な関係性が自らの生き方・あり方に対する姿勢を捉える上でどのような関連性を持って語られるのかということに注目し、親密な関係性を取り上げることが、現代青年の生き方やあり方に対する態度を考察する上でより多角的に問題を捉えることにつながるだろうという考えのもと、大学生の語りを中心に生き方に対する態度を考察していく。

そこで以下では、大学生を対象とした半構造化インタビュー調査<sup>16</sup>を行うこととした。彼らの語りにおいて、自らの生き方やあり方がどのような態度で語られ、親密性とどのように結びつけられているのかを探ることは、すなわち現代大学生の様相のディテールがより明らかになるといえるだろう。

## 2-3-1. 現代青年における生き方に対する態度と親密な関係性

### 1) 調査概要

調査概要は以下の通りである。まず、対象者は埼玉県の私立4年制大学に在学中の男性4名、女性3名の合計7名であった。調査協力が得られた7名は、PIL尺度得点を基準に選出され、人生に生きる意味や目的を見出しているかといった態度を平均的に持ち合わせているものたちである。これは、先述した青年期の生き方やあり方に対する態度への指摘の揺らぎを考えたとき、できる限り中立な立場で調査を行おうとしたためである。7名というケース数は決して十分な数とはいえないが、親密性との関連を通して大学生の生き方・あり方に対する態度のディテールを探るといって本章の目的を達成するうえでは、不足のないデータであると考えている。

また調査は2001年9月から10月に行われ、インタビュー時間は1人平均30分～1時間程度、首都圏近郊にある大学施設内で行なった。インタビューは予備調査<sup>17</sup>をもとにあらかじめ作成されたインタビューガイドをもとに行ったが、話の流れで被調査者が自由に語ることのできる半構造化面接法を用いた。インタビュー中の会話は、テープレコーダーによって録音され、それをトランスクリプトしたものをデータとして分析を行なっている。インタビューによって得られたデータは、匿名で処理され、個人

が特定できないように注意を払うことを約束し、これにともなってデータの使用の了承を受けた。

なお、インタビューガイドは以下の通りである。①普段「私は何のために（誰のために）生きているのだろう」、「生きている価値はあるのかな」あるいは「自分の居場所<sup>18</sup>はどこだろう」と考えたことはありますか？それは具体的にはどういうことですか？②①のようなことを考えたときにどう対処しますか？話したいと思いますか？話すとしたら誰ですか？話すことによって何か変化はあると思いますか？③自分の生き方や今の自分の状況は満足できるものだと思いますか？それはなぜですか？④もしも「何のため（誰のために）生きているのだろう」とか「自分の居場所はどこだろう？」あるいは「将来に希望を持ってないなあ」などと思ったりして、毎日がつまらないと感じられたとき、どのように対処すると思いますか？⑤あなたの心の支えは何ですか？

なお、本章の目的は、青年期の渦中にある者が自らの生き方やあり方をどのような態度で語り、またそこに親密な関係性がどのように結びつき、位置付けられているのかということに注目して分析を行うことである。そのため、インタビューアと回答者による合意・否定がどのように形成されるかといった相互作用効果による語りの構築過程ではなく、語りの意味内容により注目した分析を行った<sup>19</sup>。

## 2) 大学生の語りから見る親密性

既述の通り、近年の社会学的青年論においては、親密な関係性は包括的で情緒的な関係から匿名的で状況的な関係へと移行しており、そのため生き方に対する態度の意味希求が希薄化・消極化しているという議論がなされている（芳賀, 1999; 浅野, 1999）。本稿は、社会学的青年論を完全に否定するものではないが、量的な調査による親密な他者の分散化という分析を前提とした議論によって生き方やあり方に対する態度が希薄化しているという指摘からは、現代青年の生き方に関する態度の詳細は語りえないと考える。そこで、まず生き方・あり方に対する態度において親密な他者がどのように関連付けられているか、ということを探ることとした。

そこで、インタビューガイドに沿って、自らの生き方・あり方に関して疑問や不安を感じたことがあるか、またそのような思いを抱えたときにはどのように対処するか、対処する場合に相手が必要ならばその相手は誰か、という内容について理由を含めて語ってもらったところ、多くのものたちはそのような思いを抱えたときに、友人や家族などといった〈身近で親しい他者の存在〉に開示するという行動をとるという回答が得られた<sup>20</sup>。

A: 話しますね。結構、何か前には母親に特に言っていたんですけど。…(中略)…あと本を読んでみたりとか親に聞いてみたりとか、あとは日記つけてみたりとか、

とりあえず何でそんなふうに思うのかなというのを探るためにいろんな手を使うんじゃないかな。

B: 何がつまらないと感じるかというのはわからないんですけど、もしそういう気持ちになったら、多分、ほかにおもしろいことを探すんじゃないですかね。…(中略) …例えば、そういうことを考えたときに、話すならやっぱり、つき合っている人がいるんですけど、その人とか、あと大学で一番仲いい人、親友だと思うんですけど、その人に話したりとか。話すと落ちつくんですよね。…(中略) …そういうのはあるかもしれない。彼らには特にアドバイスを求めているわけではなく、こういうふうな気持ちもあるんだよみたいな(笑)。

C: 自分の生き方とか、将来の話であるとかちょっと不安だなと思ったりしたときに、人と話すと、ちょっと前向きに考えられるようにはなる。考えるばかりで、あんまり具体的に何をしようと、1人だと多分あんまり出てこなくて、人に話して、何かその話になったりしたら、アドバイスというか、こういうのとかもあるよねというのを聞いて、じゃまずはこれをしようかなという、何か具体的に考えられるようにはなる気はしますね。

近年の青年に関する議論においては、自己存在にかかわる人間関係は包括的なものから匿名的・分散的なものへと関係自体が変化しているとされる。しかし、生き方やあり方に関する悩みの他者への開示を表明した大学生の語りにおいては、両親や親友、恋人などのごく身近で特定の親密な関係、すなわち情緒的で求心的な友情・愛情関係を保っているであろう他者が開示対象として想起されている。そのため、こうした回答からは、青年の生き方やあり方に関する問題においては、一概に親密性が希薄化・分散化しているとは言い切れないことが示されたといえるだろう。

加えて、こうしたきわめて親密な他者に悩みを開示するという行為は、当事者である大学生によって、不安を軽減するための手段として積極性を持って語られていた。たとえば、大学生Bによる「話すと落ちつくんですよね。彼らには特にアドバイスを求めているわけではなく、こういうふうな気持ちもあるんだよみたいな」という回答や大学生Cの「人と話すと、ちょっと前向きに考えられるようにはなる」といった回答からは、返答の有無はさておき、親密で情緒的かつ求心的な友情・愛情関係にある他者に「話すという働きかけ」を起こすこと自体が、自らの生き方・あり方への承認を受けたという心理的安定につながると位置付けられているといえ、親密な関係にある他者の存在そのものが、生き方・あり方に関する態度への積極性の付与に貢献している語りが成立しているといえる。



以上のことから、近年の若者論において、自らの生き方やあり方から疎外されている、情緒的で求心的な友情・愛情関係という親密な関係性は、むしろ当事者においては積極的に自らの承認につながっており、そうした関係性が“ある”という状況こそが心理的安定につながると語り、大学生が持ち合わせているということがうかがえる<sup>21</sup>。つまり、生き方・あり方に対する問いやそれらと親密な関係性への結びつきは失われていないといえるだろう。

そもそも、他者にありのままの自分を受け入れてもらえるという感覚は、自分の存在の意味や自分の人生への信頼につながるとされている (Rogers, C.R., 1951)。また、第1章でも述べたとおり、ヤスパースは、実存とは自己の本来性を意識し、他<sup>22</sup>との連帯により主体的に獲得するものであると述べている。こうしたことを勘案すると、今回のインタビュー調査において得られた、大学生の自らの生き方やあり方に対する積極的態度を他者との親密な関係性にゆだねている姿は、まさに生き方に関する実存的態度の獲得過程における親密性の重要さが示されていたといえるだろう。

今日の情報化社会が人間関係や価値観の変容をもたらしたのは周知の事実である。しかし、そうした変容にもかかわらず、今回のインタビューからは現代青年の生き方やあり方における親密性の有効性が失われていないという示唆が得られた。

一方、大学生の中には、しばしば自らの生き方やあり方について親密な関係にある他者に開示するなどの行動を起こさないという語りもみられた。しかし、ここでの興味深い点は、彼らが親密な他者の存在を想定した語りをしていることである。

D: そういうことを思っすぎてすごく悩んだりしたときは、両親と一緒に住んでなかったんですね。だれにも言わなかったし、話したいとも思わなかったんですね。… (中略) …心の支えは家族なんです。自分で全然寂しいとか感じてなかったんですよ。そのときは全然、そういうふうに自覚してなかったんですけど、それが結構、どんどんきつい状態になっていっちゃって。親を見ているだけで、随分自分は変わるんですよ。親と一緒に住んでいると、自分というのは、こういう環境にいるんだ、こういう人間なんだと。離れると、随分それがあいまいになってくる。親の影響は大きいですね。

E: 僕の場合、自分は何のために生きているんだろうとか居心地が悪いとか、中3のときにいろいろ思っ。でもどうして乗り越えたんだろうという、やっぱりただ何もしなかったな。時間が解決したと言うと何かあれなんですけど、結構そういうのもすべて過程だと思ってるんです。… (中略) …話す頻度はもしかしたら多いかもしれないんですけど。友達とか。僕の場合、なんか相談じゃないんですね。ため込んだものを誰かに言った時に、絶対相手に重たいわけじゃないです

か。そうすると悪循環にはまるんで、ネタになったりとかして盛り上がっちゃったりして、大体脱線して。生活の知恵みたいな感じ（笑）。

F：ふだん自分が何かのためにとか、だれかのために生きているのかなとか、自分の居場所はどこだろうみたいなことは考えたことはありますね。でも、とりあえず自分の生き方とか、今の状態には満足してます。ある程度、自分のことは認めてやらないとおもしろくないじゃないですか。おもしろくないというか、何というか。…（中略）…だからって、だれかにそのことを話したりしたことはないですね。でも、将来のこととかだったら話はすると思います。家族とか、かなり親しい友達とか。やっぱり話せば楽になる部分があると思うし、共感してくれたりすれば、楽になる。

G：ふだん、何のために生きてるんだろうとか、自分の居場所はどこだろうみたいなことを考えたことは、高校時代は頻繁に考えてたんです。でも、いつも行き着く場所が一緒だったんで、とりあえず何周もしたらもうやめるようにしています。…（中略）…人に相談しても価値観が違うから。もちろん、友達とかにそういう話を話したいという欲求にも駆られますよ。自分の考えとかを話したいんですけど…。

以上のように、親密な他者に悩みを開示しないとした彼らの語りにも、両親や親友、恋人などのごく身近で特定の親密な関係、すなわち情緒的で求心的な友情・愛情関係を保っているであろう他者が、依然として想定されていた。特に、大学生EやGは友人などの、親密な関係にあるだろう他者を想定しながらも「あえてそれを話さない」と述べていた。その理由としては、「重くなるから」あるいは「価値観がちがうから」といったロジックが用いられている。現代青年を語る上での1つの基軸として、「やさしさ」という要素がある。「やさしさ」は、自らの承認者となりうる他者を喪失する危険性に対する自己防衛機能とされるが（栗原，1981），EやGの語りにはこうした「やさしさ」基軸にのっとった、相手の気持ちを押し量った結果としての「やさしい」回避ロジックが見られたといえるだろう。親密な関係性を希求しながらも「あえて話さない」こうした語りからは、現代青年の特徴とされる心理的距離を保った人間関係すなわち＜状況的な分散的な人間関係＞の存在がうかがえる。しかしながら、一方で、彼らの語りからは親密な関係性への強い希求を読み取ることができ、そうした関係性を重要視するがゆえのアンビバレントな「やさしさ」という語りは、他者との親密な関係性が自らの生き方やあり方への態度、すなわち生き方に関する実存的態度に密接に関連していることを逆説的に説明しているといえよう。

## 2-3-2. 他者という親密な関係性と内面の自分へのコミットメント

ところで、芳賀（1999）は、現代青年の中にこうした逆説的でアンビバレントな親密性が存在する理由を、今日が「内面の自分」（芳賀，1999，p.26）という観念が徐々に消滅に向かい、自分らしさを確認する情緒的な関係が急進的な友情・愛情関係からより分散的な人間関係へとシフトする「移行期」にあるためであると述べている。また、浅野（1999；2002）は、こうした人間関係への移行は、参入・離脱の自由が保障された選択的なコミットメントへの移行であるとし、移行にともない自らの生き方やあり方に対する積極的な意味希求はほとんど喪失し、選択の享受それ自体が目的となると説明している。こうした指摘を勘案すると、生き方やあり方に対する問いの開示を「やさしさ」というロジックで回避する青年たちは、状況的で分散的な人間関係に生き、生き方やあり方への意味希求というよりは、むしろ親密な関係性の選択自体を目的としていると解釈できる。

しかし既述の通り、加藤陽子（2002）や轟（1998）は、現代青年の生き方やあり方が消極的態度へと移行しているとまでは言及できていないとしている。そのため、果たして先の質問で「やさしさ」ゆえに開示行動を取らないと述べた者が自らの生き方やあり方に関してどのように感じているのかを探る必要がある。それは、当事者の語りにおいて現在の生き方やあり方がどのように語られるのか、またそう感じられる理由を探ることで明らかとなるだろう。そこで、「やさしさ」ロジックを用いたものに、今の自分の生き方やあり方に満足しているか、またしているならその理由は何かということをたずねた結果を以下で詳しく見ていくこととする。

E：高校は、野球やってたんですけど、高2のときにけがをして、もうプレーできなくなって。才能も努力も自分より下の人に勝ってるのに、何で結果が出ないんだろうと。そうすると、頑張ることがあほらしくなったりとかするんですけど。でも結局、すごい悩む時期があっても、たまたま運よく評価された。…（中略）…今の自分には満足してますね。…（中略）…今の心の支えは自分自身じゃないかと思えますね。特に、自分の過去とか自分自身、これまでやってきたことですね。自負があるから大丈夫だろうということですが。

G：昔のような、自分の感情は抑えない考え方でいられたほうがよかったのかなとも思うけど、自分の生き方とか今の状態は満足できる。こういう考え方になれてよかったことも悪かったこともあるんですけど、いろんなことを本当に自分自身で見つめられるようになってきたかなというところがあるんですよ。…いろいろ環境には納得しちゃいますね。あっちじゃなくてこっちの環境にいたからできたこ

とっていうのもまた自分にとって大きいから。そういった意味でも、心の支えは自分かな。自分自身に陶醉しちゃうんじゃないかと、自分自身をいつも客観的に見ていることとか、物事をいつでも客観視しようとしている自分かもしれない。

以上のように、先の質問で「やさしさ」による回避というロジックを用いた者たちは、「これまで」の時間軸に基づく自らへの自負に安心感や自己承認を求めるといった語りを用いていた<sup>23</sup>。つまり、開示行動を起こさないとした大学生の語りにおいては、内面の自分の消滅や意味希求の喪失傾向は見られず、むしろ「内面の自分」へのコミットメントという語りを用いられていたといえるだろう。

たとえば、大学生 E は、かつて実存的不安をもったことがあるが今の自身の生き方やあり方には満足していると述べ、心の支えを「特に自分の過去とか自分自身、これまでやってきたことですね」と位置付けることで心理的安定を求め、現在の自らのあり方を肯定しようとする試みがみられる。この語りからは、これまでの様々な経験を自己再帰的に評価し、「内面の自分」の問題として還元している姿が見て取れ、それを結果的に心の支えと位置付けることに成功した結果、現在の自分の生き方やあり方を積極的に受容している姿が見受けられる。さらに、大学生 G の語りにおいては、今の生き方や状況を満足できるかということに関して、これまでの様々な状況の中から自分が今の環境を選び取ったという「結果」を積極的に意味付ける語りを行っている。すなわち、選ばれなかった環境の中にいる自分の可能性と今の自分を対比することによって、今の自分自身の可能性を相対的に高く評価した結果、自らの生き方やあり方を受容しているといえる。こうした両者の語りは、一見受動的に見受けられるが、環境の選択の享受というよりは、むしろより積極的に自らの可能性に意味を付与することで、生き方・あり方への受容に成功しているといえるだろう。こうした E や G に見られる生き方・あり方に対する積極的な意味付与の過程は、いわば自分自身を糧に実存的な不安を乗り越えた過程であるといえ、先に述べたウィニコットの“survive”という経験をまさに体現しているものであると考えられる。

以上のことから、自分の生き方やあり方に関する問いを誰にも話さないとした者の語りからは、意味付与の際に必要な要素として、これまでの自分の経験や環境の選択といったことへの自己再帰的な評価に基づく、いわば「内面の自分へのコミットメント」が語られていたということが出来るだろう。芳賀や浅野の指摘は、インスツルメンタルな親密性の消滅にともなう自らの生き方やあり方に対する積極的な意味希求の喪失への移行を示していたが、本稿においてはむしろ他者との親密な関係にゆだねていた自らの生き方やあり方への承認を、同時に「自らの内側」に求めることで補強し、積極的な意味付与を行うという、生き方に関する実存的な態度が見て取れたといえよう。

本章の目的は、現代青年が自らの生き方やあり方に対してどのような態度で語るのか、またそこに親密性との関連はどのように位置付けられているのかを探ることで、より詳細で多角的な生き方・あり方に対する態度の分析を行うことであった。その結果、大学生の語りから<他者との親密な関係性>と<自らの内面へのコミットメント>という複合的な親密性に裏打ちされ、生き方やあり方に対する態度が積極的に構築されうるという示唆が得られた。このように当事者である大学生が、生き方やあり方に対する積極的な意味付与に情緒的で求心的な友情・愛情的な人間関係という語りを持ち合わせていたことは、興味深い。青年期の渦中にいる者たちが、自らの生き方やあり方への意味付与という文脈に親密な関係性を想定した語りを用いたことは、現代青年における生き方・あり方に対する態度に新たな示唆を投げかけたといえるだろう。

- 
- <sup>1</sup> 「青年」と「若者」という言葉の使い方の違いについては、序章で示した。
- <sup>2</sup> 学生運動のこうした動きについては、加藤陽子（2002）が詳しい（p.22-24 参照）。
- <sup>3</sup> たとえば、「存在意義」や「生きる意味」を求める流行歌の歌詞には、10～20代の女性に圧倒的な人気を誇る浜崎あゆみの「…居場所がなかった 見つからなかった 未来には期待できるかわからずに」（『A Song for xx』）や「たとえば今急にここから姿を消したら 一人くらい探そうとしてくれたりしますか 見つかるまで 人は優しいものと 信じながら待っていていいのですか」（『HANA』）などにみられる。また、男性に人気があるロックバンドのDragon Ashの楽曲『Viva la revolution』には以下のような歌詞がある。「ここに立ってる意義がほしかった だから僕達必死で戦った 勝ちとった 小さなプライドポケットにつめ込んで」（この他にも彼らの歌には「存在意義」「自分が自分であるための自覚」などといった言葉や内容が多く見られる。）さらに、雑誌などでは次のような特集が組まれている。『Non-no』2000年12月5日号「自分の居場所がない」（p.197-203）／『MORE』2001年6月号「私の「居場所」はどこにある？」（p.113-120）／『WITH』2001年6月号「このままでいいのかしら…？恋も仕事も「低体温人間」から脱出しよう」（p.323-330）／『MORE』2002年5月号「「ワタシ」を好きになる21の方法」（p.125-132）。
- <sup>4</sup> 小此木などが指摘している“戦略的に社会に適応しようとする若者”の姿は、一見すると、彼らの態度を肯定し直しているようにも見える。しかし、そこにあるのはネガティヴィズムを基調とした議論であり、消極的といわれる若者の態度をもとにした再解釈だといえる。栗原（1981）が、こうした傾向を「モラトリアムの内面化（p.134）」と呼んだことからわかるように、そこには青年の積極的態度を見出すという視点が欠けているといえるだろう。本稿では、こうした議論のすべてを否定するわけではないが、消極的な態度以外の生き方を青年たちが行っており、むしろそうした生き方を照射することで、青年を積極的に捉えなおすことが可能であろうという視点に立って議論を行う。
- <sup>5</sup> 青年文化を下位文化と呼ぶが、下位性とは、青年文化の持つ特性のことを指す。なお、下位文化とは、「ある社会の一部を構成する人々によって担われた特有の行動や価値基準によって特徴付けられた文化で、その社会の支配的な文化の一部に位置付けられながら、それ自体比較的顕著な文化」（松沢，1993，p.147）をいう。
- <sup>6</sup> 第1章の1-1-3参照。
- <sup>7</sup> 第1章図1-2参照。
- <sup>8</sup> こうした大学生と学生運動との関連については、加藤陽子（2002）で詳細に書かれている。
- <sup>9</sup> 1964年の大阪大学における留年の大量発生をきっかけに注目されるようになった「留年現象」は、1973年笠原によって「スチューデント・アパシー」と名付けられ、その無気力状態が社会的にも大きく注目を集めた。
- <sup>10</sup> 五月病とは、厳しい受験戦争を経て大学に入学した新入生が、5月、6月あたりから意欲を失うといった脱力現象のことをいう（溝上，2002，p.13）。
- <sup>11</sup> 80年代には学校の外に学習機会を求める大学生たちを指して「ダブルスクール族」とよんだ（溝上，2002，p.28-30）。
- <sup>12</sup> この調査は高校生にも試行している。なお、高校生のPIL尺度Part-A態度スケールの全体の平均得点は、81.67点（SD=7.64，n=178）。内訳は、男子の平均点が81.57点（SD=7.99，n=101）、女子の平均点が81.69点（SD=7.29，n=77）であった。また、高校生は大学生に比べて1%水準の有意差で得点が低いことが明らかにされた（加藤陽子，2002）。
- <sup>13</sup> ここであえて社会的文脈と書いたのは、大事な人間との死別や病気などといった個人にとってストレスになると思われる個々の生活上の出来事（いわゆるライフイベント）ではなく、就職活動は文化や環境などの社会的状況に左右される出来事であるといった意味で、ライフイベントと区別したかったためである。
- <sup>14</sup> ギデンズ（A.Giddens，1995=1992）の議論は、近代における恋愛感情の変容を歴史の変遷と現代における特質を分析しており、セクシュアリティの成立と親密性の変容を主に取り上げている。しかし、本稿においては、親密性におけるセクシャリティ的要素を切り離すことは

---

可能と考え（平川，1993），むしろその「再帰的自己自覚資源」（Giddens, 1995=1992）としての性質に重きを置き，対等な人間同士による人格的きずなの交流としての親密な関係性を取り上げる。

<sup>15</sup> 従来，自己受容は人生を生きていくうえで個人の自己実現のために必要な一要因として述べられてきた（高井，2000）。

<sup>16</sup> この大学生は全て都内の私立4年制大学の1~4年生である。このため，学歴によるバイアスがかかると予想される。ほかの学歴に関する調査・研究は今後の課題としたい。

<sup>17</sup> 予備調査は，2001年4月から5月にかけて大学生2年から3年生20人（男性9人女性11人）に対して「自分の存在意義や生き方について考えたことはありますか。具体的にどういったときに感じるのか。その考えを言葉であらわすとどのよう表現できるか。具体的な事例や単語で書いて下さい」といった問いに自由に回答する自由記述形式で行なわれた。この調査は本調査の質問項目を搾り出すための探索的な調査である。

<sup>18</sup> ここでいう居場所とは，「自分らしくいれると感じている，あるいは安心して自分を出せる，本当の自分でいられる時間・空間」のことである。

<sup>19</sup> 語りの内容分析については，永田（2003）に詳しく述べられている。引用中における括弧内・下線部分は筆者の補足である。

<sup>20</sup> 自分のあり方・生き方に関して疑問や不安を感じたことがあるとする者は7名中6名であった。なお，今回のインタビュー法は半構造化面接法を用いたため，「自らのあり方・生き方に関して疑問や不安を感じたことがあるか」「そのような思いを抱えたときには誰かに話すか」「その他の対処法は何か」などのインタビューガイドはあるものの，質問自体は完全には固定されていない。

<sup>21</sup> こうした傾向は，高校生のインタビュー（都内私立・公立高校在籍の女子8名）からも明確になっている。加藤陽子（2002）によると高校生においても以下のような語りが得られている。（以下抜粋）

高校生B：*グループの仲いい子しゃべったりする。その子とはもうお互い何でも知ってるって感じの友達とかに話す。結局最後まで見方でいてくれるのは家族だし，お姉ちゃんとかにも話す。*

高校生C：*私は，語り出す。あんまり真面目な話しないよね。そういう話って友達しかしない。だから，そういうときってたいてい照れてる。*

高校生E：*不安になったら身近な友達とか，親とかに話す。友達とかが多いけど，たくさんはいない。1人とか。*

高校生H：*絶対だれかしらにしゃべる。やっぱりだれかしらにしゃべると楽になるよね。しゃべって，その人は何かしらアドバイスとかくれるじゃないですか。*

以上のことから，高校生においても，情緒的で求心的な友情・愛情関係という親密な関係性は，むしろ当事者においては積極的に自らの承認につながっていることが示唆される。

<sup>22</sup> この場合の他とは，神や共同世界を指す。

<sup>23</sup> もちろん親密な他者に生き方への問いを開示し，そこに安心感や承認感を得るとした者たちの中にも，過去の経験に安心感や承認感を求めているものがいた。なお，ここで再度，自らの生き方・あり方に関して他者に開示しないと述べた者たちが親密性を疎外してはいないことを注記しておく。

## 第3章 「生き方」を通して見た不登校問題—不登校問題の心理・社会的分析—

世界的に見ても進学率の高い現代日本において<sup>1</sup>、学校というシステムを抜きに現代青年の様相を問い直すことは不可能であろう。そこで、本章では青年期前期<sup>2</sup>の様相に注目し、現代青年を語る上で今なお最も大きな懸案事項となっている「不登校問題」を取り上げる。

そこで本研究では、不登校という概念や不登校への取り組みを概観しながら、不登校が抱える心理的・社会的側面を探る。そのために、まずは、現代青年の抱えている永続的な自己探求という今日的苦悩と不登校問題との関連性について取り上げ、あえて「不登校にならなかった者」たちへの調査を用いることによって、不登校の持つ問題を明らかにする。また、不登校児童・生徒の急増の影響因子として、学校という仕組みと現代社会の不一致という問題を取り上げる。以上のような作業を通じて、不登校問題に関する対処法の1つとして、生き方に関する実存的態度の有用性について考察し、現代教育の最大の問題点といわれる不登校問題を新たな側面から照射したい。

### 3-1. 「不登校」問題の整理

#### 3-1-1. 不登校という概念

そもそも、不登校の児童・生徒の存在は、学校教育が開始されて以下の怠学研究の中で、従来の怠学児とは異なる神経症的症状を持つものがあるという指摘に端を発している。1932年のイギリスのブロードウィン (Broadwin, I.T., 1932) が、さらに1939年にアメリカのパートリッジ (Partridge, J.M., 1939) が、親に隠れて学校を休む児童・生徒の存在を指摘し、これを受けて1941年に初めてアメリカの医師であるジョンソンらによって情緒障害として「学校恐怖症 (school phobia)」という名称が用いられた (Johnson, A.M., *et al*, 1941)。これが、一般的に不登校に関する最初の研究であるといわれている。ジョンソンらは、心理的理由から登校できない子どもたちの根底には、親子 (特に母子間) の双方に強い「分離不安<sup>3</sup>」があると考えた。この命名が臨床的に重要であったことは、子どもが学校に行けない原因を親子間の分離不安によるものとしたことであり、「怠け=ずる休み」と一線を隠したことが最大の意義であるといえる。

しかしその後、クライン (Klein, E., 1945) やウォーレンら (Warren, W., 1948) によって精神分析的立場から恐怖症という神経症状を用いることに異議が唱えられるようになる。また、分離不安による説では中学校や高校など、比較的年齢が高い学校へ行



けない子どもたちを説明することができないという指摘も強くなってきた。その結果、「学校恐怖症」という言葉は次第に用いられなくなり、代わって「学校ぎらい (reluctance to go to school)」「登校拒否 (refusal to go to school / school refusal)」という名称が用いられるようになる。

ところが、欧米から始まった不登校研究はその後それらの国々においてあまり発展を遂げなかった。清水 (1992) は、学校不適応対策全国協議会の答申を引用しながら、日本の不登校は外国では例を見ないものであり、外国には怠学の事例はあるが神経症的な小・中学校段階の不登校はないことを指摘し、「不登校」という現象が日本特有の問題であるとしている。確かに、日本における不登校問題は、児童・生徒のその他の問題に比べて発生の規模が著しく大きく、また諸外国に比して大きな社会問題となっているように感じられる。

そもそも、日本で初めて学校に行けない (行かない) 子どもたちの報告がなされたのは、1959年の佐藤による「神経症的登校拒否行動の研究」という報告であった。その後、1960年に鷺見らが「学校恐怖症」の報告を行なっているが、諸外国と同様に、学校へ行かない子どもたちを親子間の分離不安でのみ説明することは不十分である、という批判が高まり、児童・生徒が登校しない現象は単に学校に対する不安や恐怖という面からだけではなく、多面的に理解されなければならないとする考えが多数を占めるようになる。

そこで、登校しない児童生徒に対して、精神医学上の「恐怖症」の一種とみなすことは適切ではないという考えから、登校しない状態を総称して「登校拒否」という用語が用いられるようになる。つまり、「登校拒否」という名称には、学校に行かないという現象を、親子の関係性のみだけではなく、一つの社会病理という形で考えようとする意図が含まれているといえるだろう。その後「登校拒否」という名称は、1984年、当時の文部省によって「何らかの心理的、情緒的な原因により、客観的に妥当な理由が見出されないまま、児童生徒が登校しない、あるいはしたくてもできない状態」と定義されたことによって、広く一般に流布されるようになった。図書館などで「不登校」の書物を調べても、どちらかといえば「不登校」よりも「登校拒否」という言葉が多いのは、そのためである。しかし、今ではあまり「登校拒否」という言葉を耳にしなくなり、むしろ「不登校」という言葉のほうが一般的になってきている。では、「登校拒否」と「不登校」の違いはどこにあるのだろうか。どうして「不登校」という言葉がより用いられるようになったのだろうか。

「登校拒否」という言葉が使われ始めてしばらくした頃、「登校拒否」という名称に対して当事者や様々な関係者から批判がなされはじめた (鑓, 1989)。というのは、1980年前後から長期欠席する児童・生徒数が急増した結果、学校に行かない子どもたちの問題を個人や家族の病理として「登校拒否」というマイクロな影響因子のみで説明する

ことが困難となったためである。そのため、1990年前後から「登校拒否」を社会的状況との関連で考えるようになり、「不登校」という名称が用いられるようになる。保坂（1999）は、こうした名称や用語の違いの背景には、彼らをどう捉えるかという考え方の違いが存在していると指摘する。それは、不登校児童・生徒を「ごく少数名特別な存在＝病気である」と捉えるか、「どの子にも起こりうること＝病気ではない」と考えるかという立場に還元しようという（保坂，1999，p.15）。つまり、学校へ行かないことを「登校拒否」という一つの疾病単位として表すのではなく、単に学校へ行かないという状態をさす言葉として「不登校」という名称が使用されたといえるだろう。そして、1992年に文部省（当時）の学校不適応対策調査研究協力者会議の報告書（中間まとめ）によって「登校拒否はどの子にも起こりうる」という見解が示され、「登校拒否（不登校）」という表記が使用されるようになる。近年では、学校に行っていないという状況を全体として捉えていこうとする風潮が強まり「学校に行けない」あるいは「学校に行かない」という両方の状態を総称して「不登校」という用語を用いることが多くなっている。

以上のように、わが国における「不登校」という問題は、その概念の変遷から見てもわかる通り、特定の子どもの個人的な病理的問題のみに起因するものではなく、社会的状況との関連においてどの子にも起こりうる問題であると捉えられている。

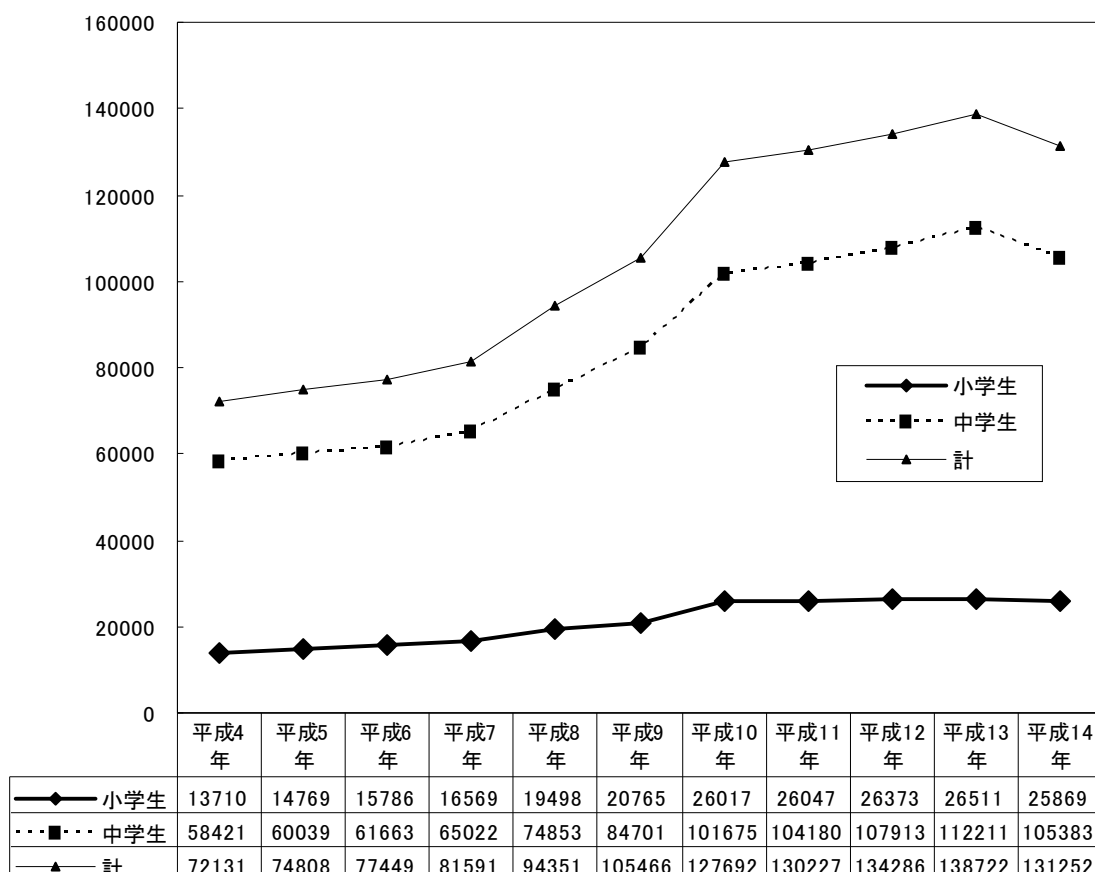
### 3-1-2. 不登校の現状と対策

平成15年度の『学校基本調査』において、不登校児童・生徒の数は、小学生が25,869人、中学生が105,383人と調査が始まった以来初の減少傾向に転じた<sup>4</sup>。日本においてこうした「不登校児童・生徒数」の調査が行われ始めたのは、不登校が増加傾向を示し始めた1960年代中頃である。それ以降、『学校基本調査』の長期欠席児童・生徒の全国統計の欄には「学校ぎり（現在は不登校）」という項目が設けられ、毎年計測され続けている。図3-1に示す通り、1966年度の調査開始以来、不登校児童・生徒数は年々大幅な増加を続けている。周知の通りその数は毎年更新されおり、1974年以降の出生率の低下による児童・生徒数の減少にもかかわらず、不登校児童・生徒数は減少するどころか上昇を続け、平成13年度には過去最高を記録した。ここ数年、減少傾向にあるとされる不登校児童生徒数であるが、中学生の不登校生徒の割合<sup>5</sup>はいまだおよそ37人に1人とクラスに1人という割合にある。こうした数値からも、現在の日本には学校へ「行かない」あるいは「行けない」者たちが依然として多く存在するといっても過言ではないだろう。

こうした不登校児童・生徒増加問題への対応策としては、さまざまな立場からの意

見や提案がなされ、検討されている。

特に注目すべき教育施策は、政府の諮問機関である学校不適応対策調査研究者会議によって1992年に発表された『登校拒否（不登校）問題について—児童生徒の『心の居場所』作りを目指して—』という答申だろう。この答申において政府は、適応指導教室などの公的機関や学校復帰を前提とした民間施設で受けた相談・指導日数を出席扱いできるという新たな提案を行った。この教育制度の大幅な転換は、政府が不登校問題に限っては民間施設使用を許可したという点において、日本の義務教育制度の大きな転換点であると位置付けられている（田中，1999）。というのも、それまで自明のこととされていた「教育は公的機関（＝いわゆる学校）において国が行う」という概念を政府自身が手放したといえ、これ以後様々な形の不登校支援機関が成立することとなるためである。



資料出所；文部省『学校基本調査』各年度版．文部科学省『学校基本調査』各年度版．

図3-1 不登校児童・生徒数の年次推移

ところが、このような多様で継続的な取り組みが行われてきたにもかかわらず、不登校児童・生徒の数は減少するどころか伸び続け、平成 13 年度には不登校児童・生徒が前年比 3.3%増という調査結果が報告された。依然下げ止まらない不登校児童・生徒数増加の現状を受けて、政府は平成 14 年に「不登校問題に関する調査研究協力者会議」を設置し、平成 15 年 3 月に報告書を取りまとめている。この報告書においては「不登校にならないための学校づくり」として 6 つの提案がなされた。そして、子どもたちにとって学校をより居心地のいい場所にすることによって「不登校にならない」ための環境作りを目指すとして、1992 年の報告書よりも一步踏み込んだ表現を使用している。つまり、学校以外の機関も子どもの居場所と捉えてきた政府が、今一度「学校」という場所を子どもたちの心の居場所の中心に据え、子どもたちを学校へ戻そうと意図したと考えられる。現在、この報告書に関しては、様々な立場から意見が提示されている。しかし今ここで注目すべき点は、不登校にならないための対策として、学校を子どもの居場所として重視するという考えを、改めて政府が打ち出したことにある。有識者や現場の教師、カウンセラーたちが参加するこの会議において、不登校予防の視点が出てきたということは、不登校を“未然に防ぐ”といった予防的視点と学校の再生が、今後の不登校問題への新たな方策として必要不可欠であることを意味しているだろう。

しかし、一概に不登校予防あるいは学校の再生といっても、1992 年に当時の文部省が示した見解が指摘するように、不登校は特有の問題がある特定の子どもによって起こるのではなく、「どの子どもにも起こりうる」ものであり、対応策は無数に存在する。そのため不登校問題を考える際には、近年の子どもたちを社会との関連の中で位置付けた上で、彼らの心性を把握し、総合的かつ効果的に対処法を探ることが急務の課題であるといえよう。

### 3-1-3. 現代青年の苦悩と不登校という問題

不登校問題の対策を探る上では、問題の今日的な状況の把握が必要だといえよう。現代の不登校は「明るい不登校」と揶揄されるように、かつて学校恐怖症と呼ばれた頃に比べるとその原因が不明瞭な場合が多い。その原因としては、学校へ行く意味の喪失や社会の学校化といった社会的な問題が指摘されている（磯辺，2004）。しかし、それと同時に、彼らの内的側面の変化も見逃すことはできない。

既述の通り現代の青年期は延長傾向にあり、およそ 10 代の前半から 20 代後半までといわれている。不登校児童・生徒として取り上げられる子どもたちは青年期の前期にあたり、青年期の変容の影響を少なからず受けていると考えられる。一般的に、青

年期の者たちは交友関係もそれまでとは異なって広がりを増し、周囲の環境も大きく変化するため、自分という存在に向き合うことが増えてくるとされる（溝上，1991）。青年期とは、いわば「自分という存在について再認識させられる時代である」といえるかもしれない。それゆえにこの時期には、「自分は何のために生きているのだろうか?」、 「自分がここにいる意味はなんだろうか?」といった実存的な問いを持つことが多くなってくる（西平，2000）。青年期前期とは、まさにこうした問いが生まれ始める時期であり、苦悩が立ち現れる時期であるといえる。

加えて既述の通り、今日の日本社会においては、青年期独特のこうした「自分とは何か?」という実存的な問いを後押しするかのごとく差異化を求める市場が「自分らしさ」を投げかけてくる。既に示した通り、社会適応しながらも自分らしさに意識的となり、終わることのない自分への問答、すなわち自己探求という葛藤状態に陥るといふ青年独特の文脈によって、現代青年の苦悩や不安は、社会的問題として様々な形で露見している。もちろん不登校児童・生徒の増加についても、こうした今日的な現代青年の苦悩を抜きに考えることはできないだろう。むしろ、苦悩の中の一側面として、不登校増加という現象が起きているといえるかもしれない。

そこで以下では、不登校にならなかった者の不登校にならなかった理由を調査、検討することで、不登校が内包する不登校要因を明らかにし、現代青年の今日的な苦悩とそれらがどのように関わっているのかを探る。そしてその上で、生き方としての不登校を再解釈する。

### 3-2. 「生き方」と不登校との関係性－不登校にならなかった理由から－

#### 3-2-1. 不登校問題への新たな試み－不登校にならなかった理由－

平成13年度の文部科学省の『学校基本調査』によると、中学生における不登校の子どもの割合は37人に1人とされる。しかし、この数は裏を返せば37人中36人は不登校にならなかったということを表している。従来の研究においては、37分の1である不登校経験者に焦点を絞った調査が多く、残りの36人は照射されないままであった。しかし、あえて「不登校にならなかった者」を取り上げることは、これまで見過ごされていただろう新たな不登校問題の側面を見出すことに通じるはずである。そこで、本稿においては従来の不登校研究の方法について発想の転換を行い、不登校に至らなかった大学生の回想による「私が不登校にならなかった理由」というタイトルのレポートを用いて、不登校にならなかった学生にその理由を問う。そして、そのことによって、あるいは彼らの語りの中からそれを抽出・分析することによって、「不登校抑止」

(菅野, 2002, p.143) の要因なるものを明らかにし, 不登校の児童・生徒が語りえなかった, 隠れた新しい不登校要因を抽出することを目的とする。

そこで, 本章では, 早稲田大学人間科学部の菅野純教授の協力のもと, 同学部での授業の後に課した「私の不登校にならなかった理由・私の不登校から立ち直った理由」というタイトルのレポートを調査することとした。

調査の概要は以下の通りである。まず, 本調査は不登校にならずに学校生活を送ってきた大学生の回答をもとに「不登校にならなかった理由」を探ることで, 「不登校抑止要因」の抽出を行う。具体的には, 先に挙げたタイトルの回想法を用いたレポートの内, 2000~2002年までの3年間に行ったものを調査することとした。全体の分析対象者数は, 同学部生 405 名 (男子 184 名, 女子 221 名) である<sup>6</sup>。なお, 本稿では不登校にならなかった理由に重点を置くため, 「不登校から立ち直った理由」について述べているレポートに関しては, 分析対象外とした。また分析方法は, それぞれの文章から不登校にならなかった理由として挙げられている諸要素を取り出し, まとまりのある要素ごとに分類するという方法を用いた。なお, カテゴリー化に関しては菅野(2003)を参考に分類を試みた。カテゴリーを分けるにあたっては, 前後の文脈は考慮せず, 直接要因として提示されている単語のみをそのカテゴリーに含める語として抽出することに努め, 複数の理由が述べられている場合は, 多重回答として取り扱った。

### 3-2-2. 不登校にならなかった諸要素の抽出

今回の調査では, 不登校にならなかった理由として, 親との関係や友人の支えや嫌なことをしのぐ楽しさを持ちえたこと, また不登校になって学校から脱落する恐怖感や敗北感を嫌う思いのほうが強かったことなどが挙げられていた。特に多くあげられていた理由は, 「友人」や「両親」, 「内的規範」などであった。

中でも「友人」と答えたものの数は 273 名で, 全体の 67.4%を占めており, 群を抜いていた (表 3-1)。このような結果からは, 学校という場所や登校行動というものにおける友人の存在の重要性をうかがわせる。

そもそも青年期における人間関係の特徴は, お互いの差異を受容しつつ, 相手との信頼感や相手への自己開示, 忠誠を中心とした親密で有意義な人間関係が形成される点にある (Atwater, 1992)。さらに, 児童期から青年期への移行期において, 親密な他者存在は, 自分を支えてくれ, 自尊心を高揚させたり孤独感を癒してくれたりする精神的安定をもたらす存在であり (落合・伊藤・斉藤, 1993), 自分の盲点に気づかせ自己理解を深めてくれる鏡像的存在である (遠藤, 1997) とされる。

表 3-1 不登校抑止の諸要因（不登校にならなかった理由）

（複数回答）

理由	人数	回答例
両親	179名	支えてくれた／両親が健在だった／両親が悲しむと思った／愚痴を聞いてくれた／両親が休むことを許さなかった／両親に知られたくなかった／家に居たくなかった／生活リズムが同じだった
兄弟	16名	よい影響を受けた／反面教師だった／長男だった
祖父母	6名	理解してくれた／支えてくれた
友人	273名	支えてくれた／一緒に遊べた・笑えた・過ごせた／励ましてくれた／わかってくれた／何でも話せた／気晴らしになった／（休むことで）共通の話題についていけないのが嫌だった
恋人	21名	会うのが楽しみだった／支えてくれた
教師（担任・部活問わず学校の教師）	91名	先生が好きだった／（教師が嫌いで）負けるものかと思った／相談に乗ってくれた／適切なタイミングで介入してくれた／教師との関係がよかった
その他の他者	25名	誰かが認めてくれた・ほめてくれた／委員・係・部長など（責任ある仕事）をしていて認められることが多かった・期待されていた
集団帰属（居場所）	95名	塾に通っていた／部活が楽しかった／習い事（ピアノ・絵など）をしていた／バンドを組んでいた／ストレスを発散させる場所があった／（クラス他に居場所がなかったから）居ざるをえなかった
パーソナリティー	90名	プライドが許さなかった／（良い意味で）楽観主義だった／深く考えなかった／完璧主義だった／明るかった／社交的だった／よくしゃべった／人見知りをしなかった
社会的能力（ソーシャルスキル）	52名	一人でいる方法を覚えた／人は人と思えるようになった／自分のより良いイメージが想像できた／我慢できた／こんなもんだと思えた／人付き合いがうまかった／手を抜く方法を覚えた／昔を忘れなかった
勉強（成績）	89名	ある程度勉強が出来た／好きな教科があった／勉強が遅れるのが嫌だった／勉強でつまづかなかった／成績が良かった／授業が面白かった
目標	59名	自分の望まない進路だったのでがんばって望む方向に行こうと思った／進学したかった／将来の目標・夢があった
健康	45名	発達・情緒・身体等の障害がなかった／丈夫だった（＝休みがちにならなかった）
内的規範	109名	学校を休むという選択肢を思いつかなかった／学校に行くのは当たり前だった／一度休むと二度といけないと思った／学校は行くべきところだと思っていた
プラスの学校イメージや学校体験	61名	学校自体に悪いイメージがなかった／行事などが楽しかった／学校に行けば楽しいことがあった
学校環境	14名	通学時間が短かった／ミッションスクールだった（礼拝が救いだった・教義のおかげでいじめがなかった）／規模が小さかった／厳格だった／定時・通信・単位制だった
経済的問題	6名	アルバイトなどをしていた／ある程度お金があった／家の経済状況が安定していた
タイミング	8名	クラス替えがあった／受験した／進級した／様々なチャンスに恵まれた／運良く人が助けてくれた
外的（社会的）規範	16名	世間体が悪いと思った／「不登校＝不良」だった
その他	7名	プレッシャーがなかった／給食が楽しみだった／長時間嫌なことが続かなかった／本を読んだ／ペットに癒された

したがって、自分を理解し支えてくれるだろう親密な他者である友人との関係性が不登校の抑止に与える影響は非常に大きいといえるだろう<sup>7</sup>。

また次に多かったのが、「両親」と「内的規範」要因であった。

興味深かったのは、両親をあげたものの中にアンビバレントな回答が多かったことである。たとえば、「両親が支えてくれた」、「愚痴を聞いてくれた」などと両親の支えを挙げたものと、「両親が（学校を休むことを）許さなかった」、あるいは「両親に知られたくなかった」と両親への畏怖を答えているものがいた。前者は友人の場合と同様に親密な他者である両親の存在を支えに不登校にいたらなかったといえるが、後者は両親の存在自体が登校への後押しとして、いわば一つの内的規範として機能していたことがうかがえる。

また、近年、子どもたちの間に、学校に行かなければならないといった義務感や学校へ行かないことに対する心理的負担感が薄れていることが指摘されている（文部科学省、2003）。たとえば、文部科学省による「不登校経験者の実態調査」では、「学校へ行きたかったが、行けなかった」という心理的葛藤を抱えるものが29.3%存在し、不登校児童・生徒自身が悩み苦しんでいることが分かる一方で、「学校へ行かないことに何ら心理的負担はなかった」者が27.6%、「自分自身は不登校を悪いこととは思わないが、他人の見方が気になった」者が39.3%と相当の割合を占めるという結果が示された。こうしたことから、両親を含め、子ども中に存在する登校への内的規範が不登校を抑止する大きな要因となっていることが示されたといえる。

ところで、菅野（2003）は登校行動の条件として①「学校は休んではならない」という内的規範が身につけている、②プラスの学校体験を得られる、③外に向かうエネルギーがある、④学校生活に十分な社会的能力が身に付いているという4点を挙げている。本調査で得られた結果からも「内的規範」や「プラスの学校体験」、「社会的能力」を不登校にならなかった理由としてあげている回答が見られた。さらに、最も回答の多かった「両親」や「友人」などとの良好な人間関係は、子どもたちを外へ向かわす大きなエネルギーと考えられる。以上の結果から、今回得た「両親が支えてくれた」「友達と一緒に笑えた・遊べた」「学校を休むという選択肢を思いつかなかった」「先生が好きだった」といった「不登校にならなかった理由」は登校行動の条件にも通じる「不登校抑止要因」であることが示されたといえよう。

しかし、これらの要素は決して単独で存在するものではなく、相互に関連しながら登校行動に刺激を与えていると考えられる。というのも、学校環境や家庭環境は個々人で異なるため、諸要素は「ある程度バランスよく子どもの中に備わっていて初めて登校行動が可能となる」（菅野、2002、p.143）だろうからである。本調査においても、「不登校にならなかった理由」というテーマに対して、ほとんどのものが複数のカテゴリーにわたる回答、たとえば「友人」と「プラスの学校イメージや学校体験」、ある



いは「内的規範」と「社会的能力」や「両親」などを寄せていた。このことから、今回に挙げられた不登校抑止要因は、様々に絡みあって個々人の不登校を抑止しているといえる。

### 3-2-3. 不登校にならなかった者たちの事例研究—人生の意味の再構築過程—

ここでは不登校を抑止する要因に加えて、「不登校にならなかった理由」の中でも「不登校になる要素はあったが何らかの拠り所をもつことで不登校にならなかった理由」を語っている事例のうち、典型例と考えられる事例を5例取り上げる。それらを内容分析することで、彼らが何を拠りどころに今日に至っているのかを探り、子どもたち一人一人の「内面」に「自らを拠り所として歩いていく力」としての生き方に関する実存的態度と不登校予防との関連を捉えることを試みた。

#### 1) 不登校が抑止された経緯

ところで、今回の分析対象の中には、ごく少数ではあるが、これまで一度も「学校に行きたくない」という登校回避や忌避感情を持ったことのない学生も見られた。彼らの多くは、不登校の子どもが周囲にいなかったなど環境に恵まれた点があったり、学校へは行くべきであるという内的規範が徹底していたり、充実した学校生活を送れる学力と人間関係に恵まれていたという特徴があった。しかし、大多数の学生は程度の差はあれ、一度は登校回避・忌避といった感情を持った、すなわち「不登校気分」（森田，1991，p.7）に陥ったと述べていた。

そこで、調査資料の中から「不登校になる要素はあったが何らかの理由により不登校にならなかった者」について書かれてあるものをピックアップし、中でも典型的な記述が見られると思われる事例5例を取り上げ、内容分析を行った。これを取り上げたのは、不登校気分に関わりながらも不登校にならなかった彼らが、そのとき何を拠り所にして不登校気分を抑止できたのか、という文脈を分析することで、不登校が抑止されている原因をより具体的に捉えることができると考えたためである。

その結果、以下の5例からは、不登校気分に関わりながらも不登校にならなかった彼らが、そのとき何を拠り所にして不登校気分を抑止できたのか、という文脈を分析することで、不登校が抑止されている原因をより具体的に捉えることができると考えたためである。

その結果、以下の5例からは、不登校気分に関わりながらも不登校にならなかった彼らが、そのとき何を拠り所にして不登校気分を抑止できたのか、という文脈を分析することで、不登校が抑止されている原因をより具体的に捉えることができると考えたためである。

詳細を見ていくと、例えば事例A（大学2年生，女子）の場合、不登校気分に関わりながらも不登校にならなかった彼らが、そのとき何を拠り所にして不登校気分を抑止できたのか、という文脈を分析することで、不登校が抑止されている原因をより具体的に捉えることができると考えたためである。

た際に、教師からの次のような一言によって自分が承認されたと感じ、自らの存在意義を見出した様子が回想されている。なお、以下の傍点や括弧内は筆者による補足である<sup>8</sup>。

…中学のときに学校が嫌でたまらなかったときがある… (中略) …当時私が所属していた部活は無駄に厳しい規則があり、… (中略) …それに反発しようとしていた時があった。…その時、担任の先生から言われた一言が今でも胸に残っている。「… (中略) …反発する気持ちはわからないわけでもない。… (中略) …でも、やるべきことをやってから直すべきだと思うところは提案してみなさい。お前ならできるよ。」それを言われた時、『この先生は、私のことを認めてくれているんだ』と感じた。自分を認めてくれている人がいると思ったら、少し気分がよくなって、学校への不満も消えていった。… (中略) …ほかにもいくつか理由があるが、この先生の言葉が私をいろんな意味で支えてくれて、中学生生活をおくれた。

また、事例 B (大学 2 年生, 女子) の場合は、中学時代に集団無視にあい学校に行くのが怖かったことから登校回避の感情が芽生えたとしている。そして、彼女はある日緊張の糸が切れて、母親に自分の胸のうちを語る。しかし、そこで彼女は母の励ましを得るにいたる。

…私は中学 2 年生の時、初めて母に「学校に行きたくないの」と泣きついた。… (中略) …いわゆる集団無視にあったことがあった。… (中略) …ある日その緊張がブツリと切れ、母に今までの学校のことを話したのだ。「学校に行っても誰も話してくれないの。学校に行くのが怖い」… (中略) …母は「じゃあ、行かなくていいよ。休みなさい」と一言言った。そして「でも休んだら、その子に負けることになるよ。お母さんがついてるから大丈夫だよ」などと励ましてくれた。私は背中をぼんと押されたような気持ちになったことをよく覚えている。…母は不登校を選ぼうとしてくれた私のことを容認してくれた。… (中略) …しかし、それだけではなく学校というものは勉強の場だけでなく、人間関係への調節能力・社会への適応能力を得る場でもあるのだということも教えられたのだ。… (中略) …つらかったが自分には家族がいる、居場所があるということが心の支えになって、学校に通えた。

その後、彼女はこうした母の励ましから不登校気分を持つありのままの自分を受け入れてもらったとの感覚を得たと述べている。ありのままの自分を受け入れてもらえるという感覚は、自らの存在の意味や自分の人生への信頼につながるとされるが (Rogers, C.R., 1951), 母親による受容によって、彼女は自らの人生への意味だけでな

く学校へ行く意味をも獲得した結果、不登校にならずに学校に通えたと述べていた。

次に、事例 C（大学 2 年生，男子）の場合，家庭の事情から中学時代に学校にほとんどいかななくなるという状況に陥った当時を以下のように述べている。

…私は中学のある時期あまり学校に行かなかった時期がありました。家族がみな家にいない状況もあり，…（中略）…ふらふらと公園で時間をつぶしたりしていました。中学 2 年の二学期は遅刻の回数が三桁近くにまでなるといふ最悪な時期でした。

しかし，彼はさまざまな環境の中で夢を持つこととなる。そこで彼は自分の夢を実現させるために必要なこととして，「自分自身のために」も学校に行くべきであると考えられるようになる。そして以下の通り，彼は夢を持つことによって人生のビジョンを得る。この自らの望む人生のビジョンといったものを持つことは，人生における「今」の自分のポジションを明確にし，今の自分の立つ位置を確認することによってはじめて，自らのあり方や生き方を選択することができるといわれている（白井，1997）。事例 C はこうした人生における今の自分のポジションを獲得したことによって登校を再開し，進学するにいたったと回想していた。

…しかし，そのような中いろいろな環境からこれになりたいという夢を持ちました。そして調べてみると，大学に行くという事が必要であると知って，勉強に勤まなければこの先夢をかなえるのは難しいと自覚しました。…（中略）…そこで私は自分自身のためにも学校へ行き勉強しようと思いました。…（中略）…そして自分の惰性を自覚し意識することできちんと学校にいけるようにもなりました。…（中略）…私の場合は，自分のために学校へ行くこと目的を見出せたことが不登校にならなかった理由です。

さらに，事例 D（大学 1 年生，女子）の場合であるが，彼女は受験のストレスから生活が乱れ，不登校気分になったとしている。しかし，そこで彼女は友人からの一言を得る。その一言によって，事例 D は他者から自分の存在を承認されたと感じ，それを「戻ってもよいのだ」と思ったと表現している。

…一番忘れられないのは，学級日誌の担任の先生との連絡欄に級友が「もうずいぶん D さんが休んでいます。どうしたのでしょうか。早く戻ってきてほしいです」と書いてくれていたことだ。それを見た時，私はここに居場所があると思った。戻ってよいのだと思った。…（中略）…正直今でも授業に出るのはつらいときもある。

それでもがんばってられるのは、何よりも友達の暖かい励ましがあるからだ。…  
(中略) …学校は勉強だけするところではない。先生や友達がいるし、部活や生徒会活動もある。私にはそれらの価値のほうが勉強よりも大きかった。

この「戻ってもよいのだ」という言葉からは、自らの居場所を保障されることによって、他者や環境といった世界との信頼を取り戻し、自らの力とした彼女の内面が語られているといえよう。

最後に事例 E (大学 3 年生, 女子) であるが、彼女は進路決定を前に「本当に自分はそれでいいのか」と思い不登校気分になったとしている。しかし、彼女は不登校気分を抱きつつも登校し続けた。それは、一度学校に行かなくなると二度と行かなくなるかもしれないという恐怖心や、自分がいないところで日常が過ぎていくという漠然とした不安感からくるものであった。しかし、事例 E は自らの内側にある不安を確認し、それに現状を照らし合わせるという作業、すなわち自らの内面との対話を行うことによって登校活動を継続することができたと述べている。

…学校へ行きたくないと思った時期があった。高校 2 年生の頃だった。… (中略)  
…学校に行けば進路を決めなければならないという重い雰囲気にも飲まれてしまった。本当に自分はそれでいいのかという考えにいつも悩まされていた。…しかし、私は学校に行き続けた。… (中略) …学校には行くものだと思っていたし、行かないという自分を認めるのが嫌だった。… (中略) …友人と、一度学校にこれなくなったらもうずっとこれなくなってしまうよね、と話した記憶がある。… (中略) …今まで自分がいたはずの場所が、自分なしでも何事も無かったように動いていく日が来て、それを目の当たりにすることはとても辛いことだと感じていた。結局私はその辛さと大切さを無意識のうちに比べて、自分にとって学校へ行くことがよいことだと判断したので行き続けることができたのだろうと思う。

このように、上の 5 例においては、彼らが不登校気分になったが不登校にならなかった根底に、それぞれ他者からの受容や承認、あるいは目標や夢を持ったり自らの内面を再確認したりすることによる「人生の方向性の選択」や「人生の意味や存在意義の獲得」という文脈、すなわち自らの「生き方」に対する新たな意味付けの過程が述べられていたといえよう。そして、その意味獲得や方向性の選択に理由付けを与えてくれるものとして挙げられていたのが、「友人」「目標」「両親」「内的規範」などの先に挙げられた不登校抑止要因であった。

つまり、「生き方」に関する意味付与は不登校抑止要因と相互に関連することによって、個々人の中で登校行動への意味付けを新たに形成し、より効果的に不登校を抑止

していることが示唆されたといえる。そしてその過程は、彼らがまさに、不登校抑止要因を糧にして生き方に関する実存的態度を得て、不登校気分から“survive”している姿を示していたといえる。

## 2) 不登校抑止としての「自らをよりどころにして歩いていく力」

このように今回の調査結果から、「人生の方向性の選択」や「人生の意味や存在意義の獲得」といった自らの生き方に対する積極的な意味付けが不登校の抑止に大きな役割を果たすといった示唆が得られたことは非常に興味深い。

というのも、不登校は決して一過性の現象ではなく、小・中学校・高校・大学あるいは会社という様に“行くべき場所”がある限り続く人生の中での一つの現象である。また個々人が抱えている環境要因は、その時々で多種多様なものでもある。そのため、登校行動の持続を支える基盤を自らの内面に持つことで、多様な環境の変化に対応しつつ登校行動を持続するための力を内的に身につけるといふことの意義は大きいと考えられる。

さらに付け加えるならば、こうした長期間にわたる登校行動を続けていく中で登校回避や忌避といった「不登校気分」に一度も陥らないものは実際のところほとんどいないだろう。森田（1991）は、大阪市立大学の調査をもとに「不登校気分」を持つものと遅刻・早退群をあわせたグレーゾーンの存在を指摘し、公式統計結果に比べて、不登校という現象はより裾野の広がりを持つ現象であると述べている。このような「不登校気分」に陥ったときに、自らの内面に登校活動維持への基盤、すなわち生き方に関する実存的態度があれば、彼らは登校を持続することが可能となるはずである。

ところで、増井（2002）は自らの臨床経験から、不登校児は総じて自分が自分として存在することが許されないために、自らに対する内的適応ができていないと指摘した。そして、その解決には「私が私である」ことを受け入れてもらえる、あるいは受け入れられるという感覚を持ち、自己の存在への安心感を基盤に人生を歩んでいくことが重要だと述べている（増井, 2002）。こうした自らの存在に関する実存的な不安は、不登校の子どもに限らず青年期の若者たちに特有の心性でもある（加藤陽子, 2002）。

しかし、実存不安は、決して彼らにとってマイナスばかりを意味するものではなく、むしろ、こうした不安は自らの存在感を感じたり、「私が私である」ということを自分と他者間で相互に承認したり、人生や世界の中での自らのポジションを見通すためのひとつの契機となるものである。さらには、こうした実存的な不安に対処したという経験やそこからくる自負<sup>9</sup>は、彼らの人生において「自分の人生は大丈夫だ」と信じられる基盤を作りうるものであろう。

このように自己の存在を感じ、自分と他者との相互承認という関係の中で、人生や世界におけるポジションを見通せるという実存的な体験は、青年の内面に主体的に自

らのあり方や生き方における方向性の選択を行わせる力、すなわち「自らをよりどころにして歩いていく力」をつけることとなる。東・高塚（2000）は、不登校の子どもに必要な要素として、学校側の変化などといった環境の変化よりも、むしろこうした「一人一人自らをよりどころにして歩いていく力を身につける力（p.51）」という、不登校の子どもたちの中から湧き上がる力に期待を寄せている。

今回の調査からは、不登校気分が陥った時に、他者からの承認や励ましから「存在意義の獲得」や「意味の獲得」が得られたことによって、あるいは目標や夢を持ったり自らの内面を再確認したりすることによって「人生の方向性の選択」や「主体的な選択」が行えたことが、登校に対する原動力となったという示唆が得られた。

すなわち、自らの「生き方」に新たに意味付けを行うこと、いわば生き方に関する実存的な態度を持つことこそが不登校抑止の基盤となり、それらが再帰的に登校行動を自らに明確に意味付け、不登校を抑止するといえよう。このように、先の5人が述べた他者の存在や自分自身を糧に実存的な不安を乗り越えるという過程は、先述のウィニコットの“survive”という経験をまさに体現しているものであると考えられる。

以上で見てきた通り、不登校抑止要因と自らの内面にある「生き方」に対する意味付けとを関連させて「登校する意味」を付与するという過程は、まさに東・高塚（2000）が不登校の子どもたちに必要であると指摘した、「一人一人の内面に自らを抛りどころとして歩いていく力」の獲得の過程といえるだろう。

### 3-3. 不登校抑止としての生き方に関する実存的態度の可能性

#### 3-3-1. 「成熟」社会の帰結としての不登校ジレンマ

以上のように、不登校を「生き方」として捉えて子どもたちの内的な基盤に信頼を置くということは、今日的な社会状況をみたときにも、非常に有効な不登校への対処法となりうるといえるだろう。というのも、自らの「生き方」に新たに意味付けを行うことが不登校抑止の基盤となり、それらが再帰的に登校行動を自らに明確に意味付け、不登校を抑止するという構図は、つまり、不登校抑止に「生き方」に対する意味付けが有効であると考えられるためである。

近年、不登校問題や教育問題を語る上で、学校の存在意義の低下や学校へ行く意味の喪失が大きな問題となっている（磯部，2004）。そもそもこうした問題は、学校という仕組みが現代社会においてほころび始めたことと関連があるだろう<sup>10</sup>。

もともと「学校」とは近代の産業化の要請によって生まれた制度である。「子ども」という概念の誕生を歴史的に実証したアリエスによれば、中世社会においては未分化だった

「大人」と「子ども」は、近代化にともなう学校教育が始まったことがきっかけとなって区分されるようになる。それまで徒弟修業によって直接大人の世界とかかわり一定の役割を得ていた「小さな大人」たちは、「学校」への囲い込まれることによって「未成熟な」存在と位置付けられ、近代産業社会にふさわしい人間、すなわち産業の発展に必要な人的資源になるために育成される<sup>11</sup>。さらに、学校の持つ人材育成という要素は産業の発展を目指す国家にとっても必要不可欠なものであったため、学校は国家規模で組織されるようになり、「学校」に学習や教育が独占されるようになる。国家によって制度化された「学校」のもとでは、勤勉や禁欲が美德とされ、効率をよくするために合理主義的となり、生産性を高める技術を獲得することが優先されるなど、目的志向的で一元的な価値観によって教育が推し進められる。

しかしここで問題なのは、今日の日本社会が近代産業社会に代わって消費社会へと変化してきたことにある。つまり、社会のシステムが生産優位から消費優位へと変化してきた結果、価値観の転倒が起こったにもかかわらず、依然として学校においては近代的で一元的な人間観に基づいた教育が行われているという点に問題が生じたのである。

たとえば産業社会においては、いかに効率的に多くの有益な人材に育成するかということが優先されるため、「学校」においては集団行動と規律が重んじられ、校則にのっとった行動、学校にふさわしい制服や髪型、カリキュラム化された授業などが行われた。一方、消費社会においては、自己と他者を区別する「差異化」のための象徴記号と化した「商品」を購入することで自己を表現し確認することが重視される。つまり、脱産業化した消費社会においては、生み出すという行為よりも消費するという行為が重視された結果、どのような商品をどのような過程で消費するか、すなわち自己と他者をどのように差異化するかという目的化された自己探求が最優先されるようになる。

現在、中高生が身に着けているバーバリーのマフラーやMDウォークマン、最新型の携帯電話、あるいはかつては制度化された集団の象徴でもあった制服ですら、いまや彼らにとっては自分を表現するための一つの「商品(=記号)」でしかありえない。こうした現状は、まさにボードリヤールが指摘したような消費社会の生み出す多様な象徴と記号の世界を、現代青年が生きていることを示すよい例であろう(J.Baudrillard, 1979=1970)。しかし、それにもかかわらず、依然として「学校」の中で子どもに与えられる人間観は、それ以前のシステムを保持したままの一元的な人間観である。

かくして、社会と学校との間にはギャップが生まれ、子どもたちに求められる当該社会に必要な人物像が拡散する、という事態が起こることとなる。そしてその結果、「学校」という組織と青年たちの生き方、あるいはライフスタイルとの間に大きな溝が生まれる。

加えて、社会システムの変容による価値観の転倒は、学校へ行く意味をも変化させた。日本が本格的に消費社会に入ったのは1980年代以降とされるが、それ以前は、学校に行つて教育を受けることが、社会的により有利で経済的に豊かで安定した地位につくことを保

証していたように感じる。少なくとも、それなりにレールの上ののってさえいけば、ある程度の安定した生活が送れると思うことができたのではないだろうか。

“学校に行けば豊かで安定した地位につくことができる”という比較的画一された価値観の下では、たとえ「なんとなく…」であったとしても、学校は“行くべきもの”であっただろうし、“行かなければならないもの”であったはずである。そしてこうした価値観は、無意識の内に、その時代に生きる大半の人々に共通した意識として見えない規範となり、学校へ行くことに意味を形成した。つまり、そうした価値観は、良くも悪しくも、子どもたちを学校に向かわせる社会的な圧力として働いていたと考えられる。しかし、消費社会が蔓延し、価値観が多様化した今日の日本社会においては、学校に行つて教育を受けることが、社会的により有利で、経済的に豊かな安定した地位につくことに直接的に結びつきにくくなってきた。そのため、子どもたちを学校に向かわせる力が、土台から揺さぶられてきているといえるだろう<sup>12</sup>。

以上のように、学校と現代青年の間に生まれた溝と学校へ行くことのメリットの喪失は、学校という存在意義を急速に脆弱化させる結果となる。そのため、今日では学校へ行くことをめぐって様々な価値観が生まれ、「必ずしも学校に行かなくてもいい」として、学校に行かない生き方も世に広く是認される傾向にあるといえるだろう。

ただし、これは世間一般の考え方がようになってきたのであって、本人や家族が「学校へ行かない」ことをよしとしているかどうかは、また別の話である。学校へ行くことをめぐる価値観が多様化した現代では、「登校するか、しないか」は個人の選択に委ねられている。しかし実際に、登校するか、しないかという選択権が与えられたとしても、子どもたちがそれを決定することは非常に困難なことだろう。なぜなら、自由な選択を行なうためには、登校することに意味を感じなくてはならないし、その意味の喪失は先にも述べた通りであるからである。脆弱化した“学校へ行く意味”を意識化できる子どもは、今日の日本の社会状況においては稀であるといわざるを得ないだろう。

そもそも、こうした選択の自由には、責任という側面が付きまとう。本人が自由な意志で選択したからには、そのことに責任を負わなければいけないという理論は、自明の論理であるように思われるが、人眼に尽くす<sup>13</sup>あまりに私が私であるという感覚が欠如している上に、自らに対する内的適応ができていないとされる不登校児に登校するかどうかという自己責任を生じさせることは、それ自体が生きづらさや、悩み、苦しみを生み出すと考えられないだろうか。

以上のように、「成熟」社会においては、一元的な価値観を維持し続ける学校と消費社会の主役となった現代青年の間に生まれた溝、および学校へ行くことの利点の喪失が、学校という存在意義を急速に脆弱化させ、また価値観の多様化による自己選択の責任性が不登校問題をさらに深刻化させていると考えられる<sup>14</sup>。そのため、先の調査で得られた、不登校抑止要因が、自らの内面にある生き方に関する実存的態度と相互に関連することによ



ってより明確に「登校する意味」を付与する、という過程が示していることは、学校へ行くことに対する新たなる意味付けに貢献すると考えられる。

すなわち、学校へ行く意味の欠如、あるいは意味選択の難しさという、社会的な不登校増加の要因に対しても、自らの「生き方」に対する意味付けの過程、すなわち生き方に関する実存的態度の獲得過程は、非常に有効な対策となるといえるだろう。さらに、「不登校」という問題を通して現代青年の様相を捉えるならば、彼らの内面には、積極的な生き方に対する意味付けの過程が見受けられたといえ、これまで指摘されてきた消極的な適応状態とは異なる側面が存在することが明らかになったといえる。

### 3-3-2. 不登校抑止としての生き方に関する実存的態度の可能性

本章で得られた調査結果からは、不登校抑止において以下の3点が主な特徴として挙げられた。(1) 不登校にならなかった理由から、不登校抑止要因としては「友人」「両親」「内的規範」など、親密で特定の身近な他者存在の重要性や個人の持つ内的な側面、周囲の状況などが挙げられていた。(2) 不登校抑止要因と生きる意味や存在意義の獲得などが相互に関連しながら不登校にならない理由として登校行動への活力となっていることがわかった。(3) また、実際に不登校になりかけたがなかった者の文脈を丁寧に分析すると、不登校抑止要因が自らの内面で生き方に関する態度と相互に関連することによって、より明確に彼らに「登校する意味」を付与していることが示唆された。

つまり、不登校抑止の諸要因と生き方に関する実存的態度を自らの内面で関連させ新たな文脈に置き換える、あるいは再解釈を試みることによって、登校行動はより明確に本人に意味付けられ、不登校気分からの脱却のきっかけとなるという傾向が見られたといえる。

こうした不登校抑止における意味付与の過程は、東・高塚(2000)が不登校の子どもたちに必要であると指摘した「一人一人の内面に自らを抛りどころとして歩いていく力」の獲得の過程だといえるだろう。そしてまた、この過程はわれわれの人生において「自分の人生は大丈夫だ」と信じられる基盤を作り、人生への連続性を与えるといえよう。

今日、青年たちを取り巻く環境は複雑多岐にわたっている。メディアの発達によって若者たちの人間関係は急速に変化を遂げ、自らのあり方や生き方に関する実存的な苦悩や不安は大きく揺らいでいることだろう。しかし、こうした青年という独特の時期だからこそ、自らの人生の方向性を選択、あるいは決定しようとする態度を持ち、実存的な苦悩への葛藤を自らの手で“survive=生き残る”という経験をすることは

(Winnicott,D.W., 1977=1965) その後の彼らの人生において重要な意味を持つはずである。

本調査から得られた、不登校抑止要因が生き方に関する姿勢と関係することでより明確に子どもたちに「登校する意味」を付与しているという過程、すなわち生き方に関する積極的な意味付与を行うという経験は、大きく見れば不登校抑止につながり、ひいては人生への連続性を与えることが示唆される。そして、生き方に関する実存の態度を持つことは、なによりも青年の今日的苦悩を“survive”するための心の土台を固め、人生を前向きに生きることにつながるといえよう。したがって、今日的な若者の状況をふまえ、かつ不登校抑止の視点に立つならば、より重点的に青年の「生き方」に関する研究が行われる必要があるといえる。

なお本調査では、調査の目的上「不登校になりそうだったがならなかった者」について取り上げ、考察を行った。しかし、厳密には、不登校になったものとそうでないものを明確に線引きすることは難しく、その困難にこそ、不登校問題の根幹が隠されているといえよう。この点については、今後の課題である。また、資源や対象者の抽出も含めた調査方法の再検討も、今後の課題であると考えている。

さらに、不登校問題は、学校教育だけではなく子育てや児童福祉のあり方といった地域住民問題に大きく影響を及ぼしており、学校教育の変化にともなう子どものあり方の変化という問題は、子どもを抱える家族のみならず今日の社会に暮らすすべての人に関わる問題である。中でも、減少しているといってもなおクラスに1人という数で存在する不登校の将来はいかなるものになってゆくのか、次世代を担う彼らの育成の問題も含めて、今後もその実態を把握することをも含め、探求し続けられなければならないテーマであるといえよう。

- 
- <sup>1</sup> 第1章図1-2参照。
- <sup>2</sup> 青年期のはじめの頃の人物と終わりの頃の人物を比較してみると、果たして本当にこれが同じ青年期の人物なのかと思うほど、この時期の変化は著しい。そこで、一般的にはある程度のカテゴリズを設けてこの時期を整理し、理解しようとするのが通常だ。よく使われるものには、青年期を“前期・後期”の2つに、あるいは“前期・中期・後期”の3つに区切って捉える方法がある。もちろん本章では“前期・後期”と分類する方法を用いる。しかし、「子ども」から「大人」への移行は連続的なものであるから、はっきりとそれらを区分することは不可能である。また、その区分は文化的背景や社会構造によってもかなり異なってくるであろう。
- <sup>3</sup> 分離不安とは、子どもと親の相互の間に親密な身体的近接差を保ちたいという強い欲求を相手に向けることによって、その行動が特徴付けられるような一種の病的な感情状態を指す。
- <sup>4</sup> 文部科学省の2004年に発表された『学校基本調査』速報によると、平成16年の不登校児童・生徒数は126,212人と、平成15年に引き続き2年連続で減少傾向にある。
- <sup>5</sup> ここで用いる不登校児童生徒数の割合は、「全生徒数/不登校生徒数×100 (%)」で表したものである。
- <sup>6</sup> 分析対象は大学1年生から4年生までで、割合は大学1年生が71人、2年生が174人、3年生が128人、4年生が32人である。
- <sup>7</sup> 第2章においても、こうした自らの生き方やあり方に関連する重要な要素としての親密性について、述べている。不登校の文脈においても、やはり身近で親密な他者存在は、重要な要素となっており、後述の分析の通り、それは生き方やあり方と密接に関連していた。不登校においても、大学生においても、同様の結果が見られたということは、いかに親密性が生き方やあり方に関連する重要な要素であるかを物語っているといえよう。
- <sup>8</sup> 引用した5例の文章中には、誤字脱字がいくつか見られる。しかし、本章では回答者の記述を尊重するという立場で、誤字脱字はあえて直さないこととした。
- <sup>9</sup> 第1章p.31を参照。
- <sup>10</sup> 中でも顕著なのは、若者や現代文化に対する学校の仕組みのほころびであろう。
- <sup>11</sup> ただし、社会に望まれる理想的な人間像は、所属する社会や時代、文化によって異なるものである。
- <sup>12</sup> 本稿では、だからといって学校の価値がなくなったと主張しているわけではない。学校はいまだ子ども達にとって、いわゆる“読み・書き・そろばん”という、生きていくための基礎学力を身に付けさせるという重要な役割をもっている。また、学校は学力を身につけるだけでなく、他者関係、社会的技術などを学べる大事な場所でもある。したがって、そういった意味での学習の場としての学校の意味は、いまだ薄れていないと考えられる。
- <sup>13</sup> ここでいう「人眼につくす」とは、単に人目が気になるというばかりでなく、「他人が自分をどう思っているだろう」、「どう評価しているだろうか」、「好かれるにはどうしたら良いか」など、他者の評価が気になり、それに応えようとする、という意味を含む。
- <sup>14</sup> こうした状況は、青年の社会意識と学校という制度との間にズレが生じていることを示しており、すなわち社会意識と制度との間に“構造的遅滞”とよべる事態が生じているといえる。

## 第4章 同居未婚子と高齢者の関係性—モラトリアムを許容する親たち—

第2章で取り上げた通り、現代青年の心性に関する一つの特徴として、彼らが居心地のよいモラトリアムへの安住を強く志向するようになったことがあげられる。加えて、世代性の拡散がもたらしたライフスタイルの多様性が、社会的に多様な生き方を許容する風潮を生み出し、現代青年のモラトリアムへの安住を相対的に後押ししているといえるだろう。従来、青年は教育の終了と同時に、あるいは結婚を機に親元を離れ、いわゆる「自立」を果たしていた。しかし現代社会においては、自立のきっかけとなる成人へのはっきりとしたイニシエーションが存在せず、現代社会においてはむしろその「成人性」ですら揺らいでいる状況にある。

このような特徴を持った現代青年の中でも、特に今日注目を集めているのが同居未婚子、いわゆるパラサイト・シングルが存在する。法的には成人している年齢である彼らが未婚のまま親と同居しているという現状は、結婚あるいは経済的な自立を先送りにしているという点において、モラトリアムに安住している現代青年の一側面を端的に表してと考えられるだろう。しかし、他方ではこうした未婚子の親との同居という問題は、親が「結婚」しない未婚子の経済・家事の側面での親への依存を許す限りにおいて維持できるものでもある。そこで、本章においては現代の日本における同居未婚子の現状を把握した上で、親世代から見た同居未婚子への評価や意識について明らかにすることにより、よりいっそう同居未婚子の状況が抱える問題が明らかになると考える。

### 4-1. 同居未婚子の現状

#### 4-1-1. 同居未婚子が抱えるモラトリアムな現状

ライフスタイルの変容にともなって、結婚しない青年が増加傾向にあるといわれる。しかし、国立社会保障・人口問題研究所の『第12回出生動向基本調査—結婚と出産に関する全国調査 独身調査』によれば、「一生結婚するつもりはない」と考えている25-29歳の独身男性は7.7%、同年齢の独身女性は6.7%となっている。つまり、未婚化が進むとされる今日においても、一生未婚であることを決意している男女は全体の1割にも満たず、多くの者は、遅かれ早かれ「いつかは結婚しよう」と思っているといえる。

ところが、ここで問題なのが、同調査において「(今の自分にとって)独身生活は利

点があると思う」としている者が「(今の自分にとって) 結婚することは利点があると思う」と答えた者よりも、男性で 17.5 ポイント、女性が 17.2 ポイント上回っていたことである。この結果は、すなわち結婚することよりも独身生活を送ることにメリットがあると考えている者の方が多いことを示しており、“結婚するつもりはあるのだが、今の自分のメリットを考えたとき、独身という選択を行う”ものがより多い可能性を示唆している。特に興味深いのは、独身生活の利点として「行動や生き方が自由」が多くあげられていた点である。

こうした結果からは、自由に自分らしく行動したり生きたりするためには、未婚でいる方がより有利な条件を手に入れられるという、現代青年特有の心性が示唆されるだろう。既述の通り、現代青年においては、しばしば自分らしさへの探求や自分探しが優先される傾向にある。未婚の増加の背景には、こうした現代青年特有の心性が、少なからず影響しているといえよう。

加えて、近年話題となっているのが親と同居している未婚の子、すなわち同居未婚子の存在である。2000 年度の国勢調査によると、日本における 20-34 歳の若年の人口は 2,699 万人、そのうち未婚者は 1,672 万人で全体の 61.9%となっており、結婚していない人が全体の約 6 割を占めることが明らかとなっている。また、未婚者のうち親と同居する子の数は 1,124 万人で、未婚者全体の 67.2% (男性 63.0%, 女性 72.5%) に上っている。すでに教育期間を終えて、法的・経済的にも自立しているとみなされるだろう 20 歳以上の未婚の子と親の同居率が高いという点において、同居未婚子という存在は、現代の日本社会に特有な現象であるとされる (山田, 1999a)。

さらに、先に示した調査結果に見られたような、「行動や生き方の自由」をより実現しやすいことを志向するという現代の独身者の心性を勘案すると、彼らが親元に残る、すなわち未婚のまま親と同居するという選択を行っていることは、決して理解に難くないといえる。なぜなら、親と同居をしていれば、それまでの行動や生き方と大きく変わらない生活が送れると予想できるからである。実際に、同居未婚子に関する多く調査は、彼らが経済および身の回りの世話など、生活の基礎的条件での援助を親から受けている点などを挙げている。そして、そうしたメリットから、1 人暮らしの未婚者に比べて、親と同居している未婚者は「自己実現的にゆとりがある」と感じる傾向にあると指摘している (厚生労働省, 『国民生活基礎調査 (平成 14 年版)』)。職業的・法律的に成人している年齢である彼らが、未婚のまま親と同居しているというこうした現状は、結婚あるいは経済的な自立を先送りにしているという点において、モラトリアムに安住している現代青年の一側面を端的に表しているといえるだろう。

こうした同居未婚子に関しては、主に家族社会学の分野においてさまざまな研究がなされている。中でも、同居未婚子の増加傾向を明らかにし、広く世に知らしめたのが山田 (1999b) である。山田は、主に 20-34 歳の親と同居する未婚の子どもを取り

上げ、彼らが「経済的に豊か」でかつ「精神的にもゆとりがある」という特徴を持っており、生活条件を親に保障されているあるいは依存しているという点において、同世代の同居既婚子や別居子と比べて「自己実現が豊か」であると分析している。また、親同居未婚者を表す「パラサイト・シングル」（山田，1999b，p.11）という通称は、同居未婚子の持つこうした「親依存」という特徴が親に「寄生」しているように見えることから山田によって名付けられたものである。

さらに山田と同様に、宮本（1997）は、親と同居する未婚の子を青年期と成人期の間の段階にある「ポスト青年期」と位置付け、彼らが職業と結婚という指標において親からの完全な「自立」ができていないと指摘した。宮本は、こうした同居未婚子の特徴を、自立することよりもむしろ消費社会の一員として機能すること、すなわち消費による自己表出が重視されるという心性に求めている。既に何度も記述してきた通り、現代の日本においては、脱産業社会の成立により青年期の地位と役割に変動が起こり、青年が消費社会の主役という地位に躍り出た。今日の同居未婚子の増加という構造は、彼らが手に入れた消費者としての地位を獲得・維持するために、結婚せずに親に依存する状態を選んだ結果といえ、現代青年の持つ永続的な自己探求という苦悩を象徴しているといえるかもしれない。

#### 4-1-2. 同居未婚子研究の問題点

ところで、わが国における同居未婚子と親との関係に関する従来の先行研究においては、主に生活の諸条件を親に依存しているだろう同居未婚子、特に 20-34 歳の未婚者に焦点を当てた研究が多く、年齢の高い未婚者を含む研究は少ない。しかし、青年期の延長や同居未婚子の抱えるモラトリアムへの安住という側面を勘案したとき、年齢の高い未婚者<sup>1</sup>の存在は軽視できるものではないだろう。また、最新の統計調査によれば、65 歳以上の高齢者と子の同居率は 47.1%で、配偶関係別にみると既婚子の同居が 26.1%、未婚の子の同居が 20.9%となっている。さらに 60-64 歳の高齢者においては、未婚子の同居率は既婚子との同居率を上回っており、65 歳以上の高齢者においても未婚子の同居率は 20%弱という数値を保っている。このように、近年、高齢者と未婚子の同居形態は増加傾向にあり、なおかつ、同居未婚子は経済的側面から将来的に親を扶養する資源となりにくいだろうことが予想されていることから、年齢の高い子どもを視野に入れた調査は重要であるといえる。

加えて、宮本（2000）が指摘するように、同居未婚子の増加は「結婚していない子ども」と暮らす「親」という「世代間」の問題でもある。というのも、未婚子の親との同居という問題は、親が「結婚」しない未婚子の経済・家事の側面に関する親への

依存を許す限りにおいて維持できるものであると考えられるからである。そのため、彼らの現在の状況を分析するならば、子ども世代の意識や生活の変化だけではなく、同時に親世代の心性の変化についても検討されるべきであろう。

そこで本稿においては、所沢市に住む 60 歳以上の高齢者を対象とした 2004 年 1-2 月実施の「世代間居住形態に関する調査」（平成 15-16 年度文部科学省科学研究費・基盤研究 B：課題番号 15402039，海外学術調査，東・東南アジア地域における高齢化とリビング・アレンジメントに関する比較研究，代表者：嵯峨座晴夫）のデータを用いて、同居未婚子を抱える高齢者世帯の実態と、高齢者から見た同居未婚子への評価や意識について明らかにする。

## 4-2. 同居未婚子と親の関係にみる「結婚」という指標

### 4-2-1. 「世代間の居住形態に関する調査<sup>2</sup>」からみた同居未婚子と親の実態

#### 1) 調査の概要

対象者は所沢市の所沢駅及び小手指駅周辺の地域に住む 60 歳以上の高齢者で、単純無作為抽出法によって選ばれた 590 名のうち調査協力の得られた 261 名（男性 143 名，女性 118 名）である（有効回答率 44.2%）。調査対象者の平均年齢は 70.0 歳（SD=7.37，男性 69.8 歳・女性 70.3 歳），年齢分布は 60 - 74 歳が 194 名，75 歳以上が 67 名であった。調査は 2004 年 1 月から 2 月にわたって実施された。

表 4-1 調査概要

時期	平成 16 年 1~2 月
対象地域	埼玉県所沢市
属性範囲	60 歳以上の男女
サンプル数	590
有効回答数（率）	261（44.2%）
対象の抽出方法	単純無作為抽出法
調査方法	面接調査

なお，調査項目の分量が多いため高齢者の負担とならないように考慮した上で，質問に際しては調査員を派遣し，調査員が口頭で調査票を読み上げながら聞き取った答

えを記入するという面接調査形式を用いた。本調査の概要については、表 4-1 に示す通りである。

## 2) 「所沢調査」における同居未婚子と高齢の親の実態

本調査の概要は上述の通りであるが、ここでは同居未婚子のいる高齢者世帯の実態をみるために、高齢者と同居未婚子の双方について取り上げていきたい。

### ① 高齢の親の実態

まず、本調査における未婚子と同居している高齢者は 76 名で、全回答の 29.1% を占める高い比率であった (表 4-2)。

表 4-2 所沢調査における家族形態別の構成割合 (%)

	単独世帯	夫婦のみの世帯	子と同居			その他の同居	全体
			子ども夫婦と同居	配偶者のいない子と同居			
所沢調査	11.9	37.5	46.8	17.6 (3.4*)	29.1	3.8	100.0 (n=261)
全国 (65歳以上の者)	14.2	35.1	47.1	26.1	20.9	3.7	100.0 (n=23,913)

注：\*は配偶者と離死別した子がいる割合。

資料：全国のデータは 2002 年度の『国民生活基礎調査』より算出。

なお、この数値は、単純に同居未婚子と高齢者の同居数を示すものである。本稿においては、同居未婚子と高齢者の関係を取り上げることから「結婚経験のない子ども」に焦点を当てて抽出を試みることにする。そのため、家族形態においては、単純に同一家屋にいる子の婚姻状態に注目し、たとえば高齢者の兄弟や親などその他の親族が同居していても、それらは未婚の子との同居という分類を行う。ただし、同居子の中には、既婚子と未婚子いずれとも同居していると回答した者が 1 名いた。これは、既婚子と同居していることを優先的に取り扱うこととする。さらに、結婚経験があるものの、現在単身者として高齢者と暮らしているものが 3.4% ほど存在したが、本稿ではそれらの子どもも同居未婚子に含まないことにする。加えて、高齢者と同一家屋で暮らしつつ世帯を分離している未婚子も、実際の家計は同一化しており、世帯分離をしていないものと大きな差異が見られなかったことから、本稿においては未婚子と高齢者の世帯分離は問わない。このように、本調査においては未婚の子との同居という居住形態において複合的な家族が含まれている場合があることを改めてここに注記して



おく。

ところで、未婚子と同居している高齢者の属性の特徴としては、以下の3点があげられるだろう。

まず、未婚子と同居する高齢者は健康状態のよい前期高齢者が多い点があげられる。

未婚子と同居する高齢者の平均年齢は66.8歳（SD=5.35、男性67.0歳・女性66.4歳）で既婚子と同居する高齢者が（平均77.2歳）に比べて10ポイント以上年齢が低い結果となっている。加えて、自らの健康状態について「大変よい」「よい」をあわせて47.4%のものが肯定的に認識しており、「悪い」「大変悪い」と答えているものがその他の居住形態の高齢者に比べて低いという特徴があった（図4-1）。

以上の結果から、本調査においては未婚子と同居している高齢者の多くが身体的に「元気な高齢者」であるといえるだろう。

次に、同居未婚子と暮らす高齢者は最終学歴が比較的高い点があげられる。

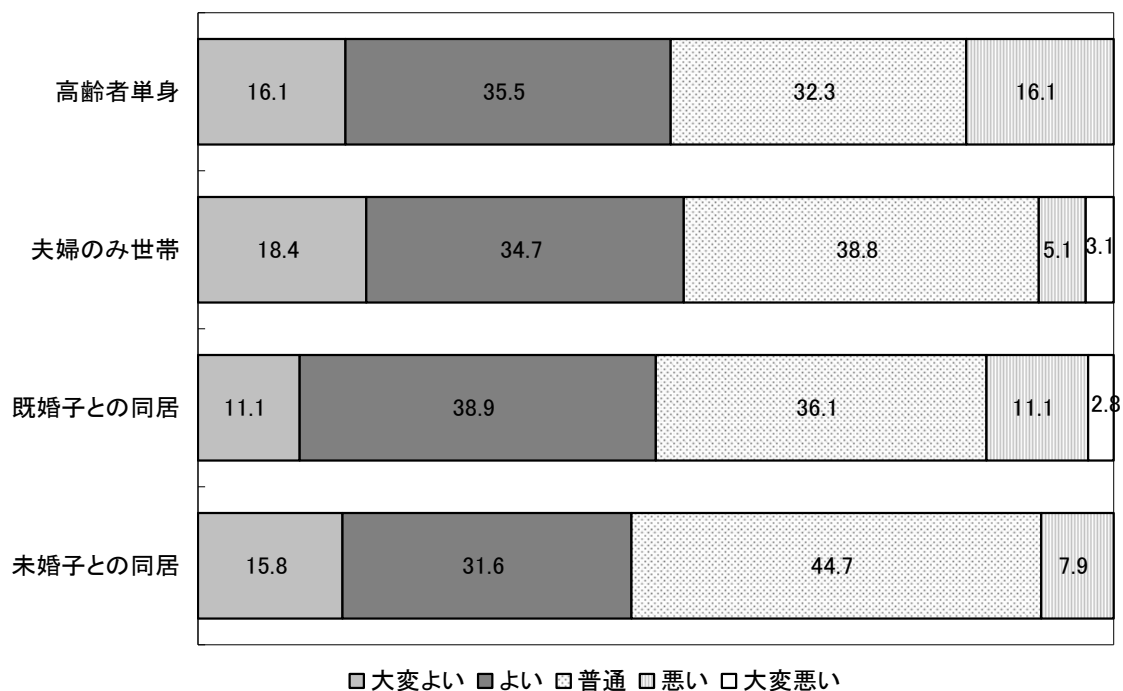


図4-1 家族形態別健康感 (%)

本調査における高齢者の最終学歴は全国平均と比べて全体的に高い傾向にあるが、既婚子と同居する高齢者と未婚子と同居する高齢者の最終学歴には大きな差があった（図4-2）。

ただし、本調査における男女の比率は、高齢者全体で男 54.8%、女 45.2%、同居既婚子を持つ高齢者が男 44.4%、女 55.6%、同居未婚子を持つ高齢者が男 61.8%、女 38.2%となっていた。そのため、家族類型別の学歴差は高齢者の男女比が影響していると考えられ、男女の学歴の違いによる影響を大きく受けているとも考えられる。

しかしながら、1991年に行われた「高齢者の生活と意識 第3回国際比較調査」結果によると、学歴が高くなるほど「非同居」、「経済的援助も受けたくない」とするものが多くなっていることから、学歴と同居形態の関連が示唆されているといえる。

戦後、政府による高等教育改革と高度経済成長という二つの後押しを受けたことによって、高等教育は飛躍的に大衆化した。特に大学の大衆化はめざましく、『学校基本調査』によれば、1945年から1955年の四年制大学・短期大学への進学率は10%弱にとどまっていたが、1960年には10%代を越え、70年には24%へと急上昇を遂げている<sup>3</sup>。本調査における高齢者は、ちょうどこうした進学率上昇の時期に高等教育を受けた世代であり、なおかつ調査範囲が所沢市の中心部で行われたことから、今回の得られた数値は妥当なものであると考えられるだろう。

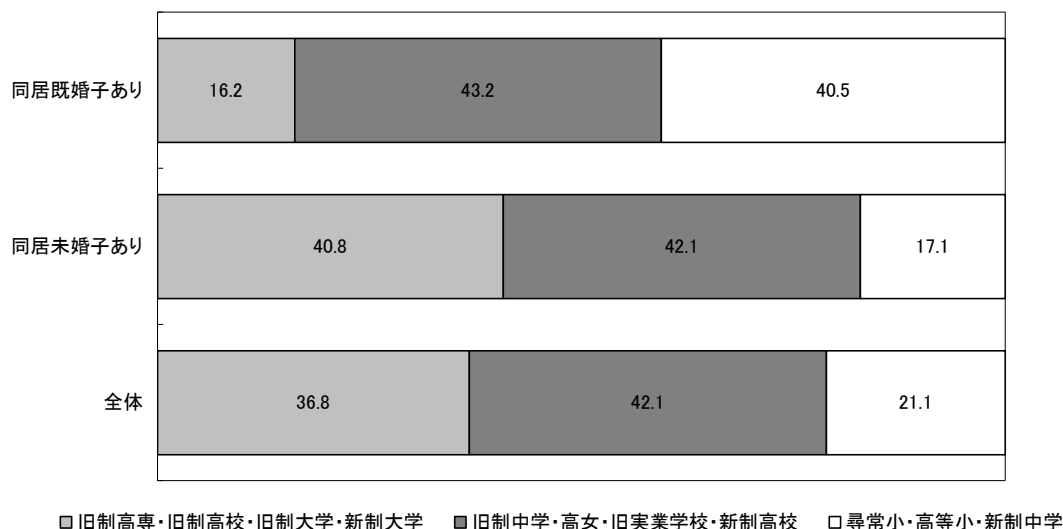


図 4-2 同居子の配偶関係別にみた高齢者の最終学歴 (%)

また最も特徴的なであった点として、同居未婚子と暮らす高齢者の自立した経済状態を挙げることができる。

まず、未婚子と同居する高齢者の主な収入源は、年金収入が 55.3%と最も多く、次

いで給与収入が 38.2%となっていた。さらに、主な収入源が給与の場合、家計の収入の主な担い手は、本人と配偶者、すなわち高齢者夫婦が 79.3%と非常に多いことが明らかとなった。したがって、以上のことから、本調査においては、既婚子との同居世帯に比べて未婚子との同居世帯における高齢者は、自身が家計を支える中心的存在であるということがうかがわれる（表 4-3、表 4-4）。

表 4-3 同居子の配偶関係別にみた主な収入源の占める割合（%）

主な収入源	給与	年金収入	不動産収入	その他	全体
同居未婚子あり	38.2	55.3	3.9	2.6	100.0 (n=76)
同居既婚子あり	37.0	47.8	6.5	8.7	100.0 (n=46)
全体	27.6	62.5	4.2	5.4	100.0 (n=261)

表 4-4 子の配偶関係と家計の担い手の占める割合（%）

		主な家計の担い手			
		高齢者	子や子の配偶者	その他	合計
給与	同居既婚子あり	5.9	94.1	—	100.0 (n=46)
	同居未婚子あり	79.3	17.2	3.4	100.0 (n=76)
	全体	66.6	30.6	2.8	100.0 (n=261)
年金収入	同居既婚子あり	100.0	—	—	100.0 (n=46)
	同居未婚子あり	100.0	—	—	100.0 (n=76)
	全体	94.5	—	5.5	100.0 (n=261)

さらに、同居している子と高齢者の世帯が同一である割合は、同居既婚子あり世帯が 59.5%であるのに対して、同居未婚子あり世帯が 96.1%となっており、高齢者と同居している未婚子のほとんどが、親と世帯を一にしているといえる。このため、従来の研究と同様に、本調査においても、同居未婚子は経済生活の多くを親に“頼っている”ことが推測されるだろう。

以上の結果からは、同居未婚子が同居を理由にその豊かさを強調されるのに対して、親世代の高齢者は自らが家計の中心的な担い手であり、子どもを「扶養」していることが示唆された。そのため、未婚子との同居は、必ずしも高齢者にとって経済的に有利ではないといえるだろう。今日の高齢者は階層化してきているといわれるが(武石, 1994), 上記の3つの特徴を踏まえると、未婚子を抱える高齢者の多くは、健康・経済的にも比較的恵まれた社会的地位の高い階層にいると思われる。

## ②同居未婚子の実態

一方、本調査における同居未婚子の実態であるが、子どもの総数は508人(男性272名, 女性236名)で、そのうち未婚の子で親と同居しているものは135名(男性90名, 女性45名)であった。配偶関係別に見ると、既婚子の10.7%, 未婚子の69.6%(平均年齢34.2歳)が親と同居していた(表4-5)。

表4-5 子どもの配偶関係別にみた同居傾向

		既婚子			未婚子			全体 (人)
		(人)	親と同居 (人)	同居率 (%)	(人)	親と同居 (人)	同居率 (%)	
所沢調査	男	181	33	18.2	90	59	65.6	271
	女	192	15	7.8	45	35	77.8	237
	合計	373	48	12.9	135	94	69.6	508
全国(20-34歳の者: 単位 万人)		976	164	16.8	1,672	1,124	67.2	2,699

注: 同居子の数は結婚経験のある単身者を除いたものとなっている。  
資料出所: 全国の資料は、2000年度国勢調査より作成。

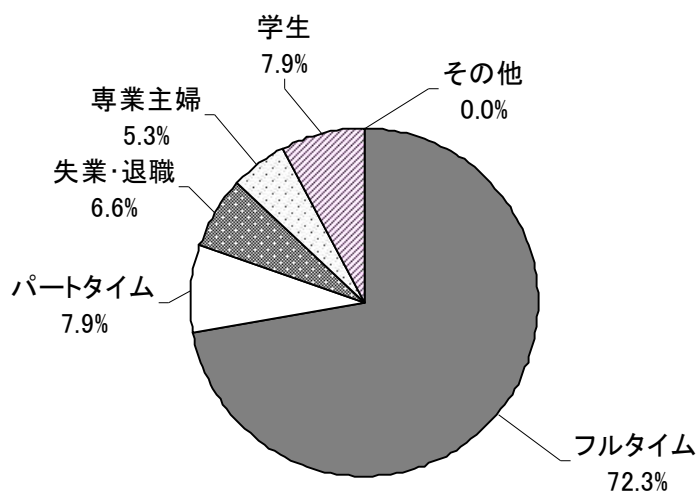
すべての子どものうち、未婚でなおかつ親と同居しているものは135名(男性90名, 女性45名)と全体の約4分の1を占めていた。こうした高齢者世帯における同居未婚子の属性であるが、子どもの年齢は平均34.2歳で、世帯内に未婚子が1人だけの世帯は81%, 世帯内に2人以上の世帯が19%となった。同居未婚子の男女の内訳は、男性が62.8%(平均年齢35.7歳), 女性が37.2%(平均年齢31.5歳)となっており、その続柄は長男が41.5%と最も多く、ついで、長女18.5%, 次男18.5%, 次女12.6%となった。

以上のことから、本調査においては、既婚の子どもよりも未婚の子どもの方が親と同居している割合が高く、未婚女性の約8割が親と同居しているという結果が示された。

一方、未婚子全体における男女別に親との同居率をみると、男性が 65.6%（平均年齢 35.7 歳）、女性が 77.8%（平均年齢 31.5 歳）となっており、女性の未婚子の方が親と同居する傾向にあることがわかる。

そのため、本調査においては、未婚子における親との同居率をみると女性の割合の高さが目立つものの、男性未婚子の同居も決して低いとはいえ、全体としては男女ともに年齢の高い未婚子の多くが高齢者と同居しているといえるだろう。また、同居している未婚子の男女比は男性が 62.8%（平均年齢 35.7 歳）、女性が 37.2%（平均年齢 31.5 歳）と、比較的年齢の高い男性が多い結果となった。未婚子の同居率をみると、女性の同居率の高さが目立つが、男性未婚子の同居も決して低いとはいえ、調査全体を通して見れば、男女ともに年齢の高い未婚子の多くが高齢者と同居しているといえるだろう。

こうした未婚の子の増加は、近年の若者のライフサイクルや結婚観の変化による若者の晩婚化・未婚化が影響していると考えられている（酒井，2000）。近年、女性の社会進出により、その晩婚化・未婚化が注目されているが、その一方で男性の晩婚化・未婚化が徐々に増加していることが指摘されており（宮本，2002）、本調査においてもその傾向が明らかになったといえるだろう。



n=76

図 4-3 就業状況（同居未婚子長子）（%）

ところで、高齢者世帯における同居未婚子の就業状態であるが、図4-3に示すようにフルタイムで働いているものが一番多く72.3%、ついでパートタイムが7.9%であった。フルタイムの割合は特に男性で多く、親と同居する未婚男性のうち、80.9%がフルタイムで就業していた。また、同居未婚子の96.1%は親と世帯を同一にしており、就業状態にかかわらず世帯を一にしている傾向が見られた。

#### 4-2-2. 親による未婚同居子への評価

##### 1) 同居未婚子と高齢の親との共同生活の実態

ところで、同居している未婚の子どもと親である高齢者との関係はいかなるものなのであろうか。親と同居する未婚子のうち、年長の者<sup>4</sup>との関係についてたずねた。その結果、同居する年長の未婚子の84.2%は高齢者と完全に家計を一にしており、親の就業状態や収入源にかかわらず、家計への繰り入れはほとんど行われていない、あるいはおこなわれていても繰り入れ額が少ないという結果が得られた。またこれは、子どもの年齢や就業状態にかかわらず見られる傾向であった（図4-4）。

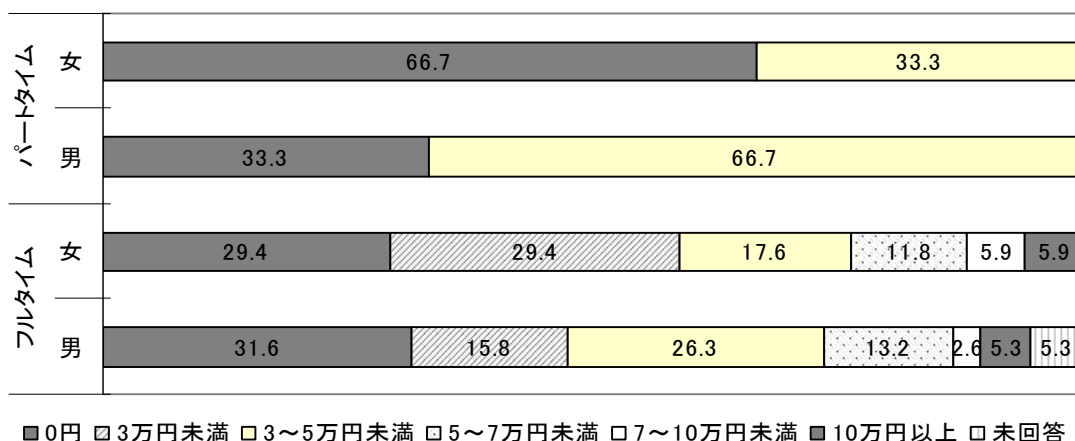
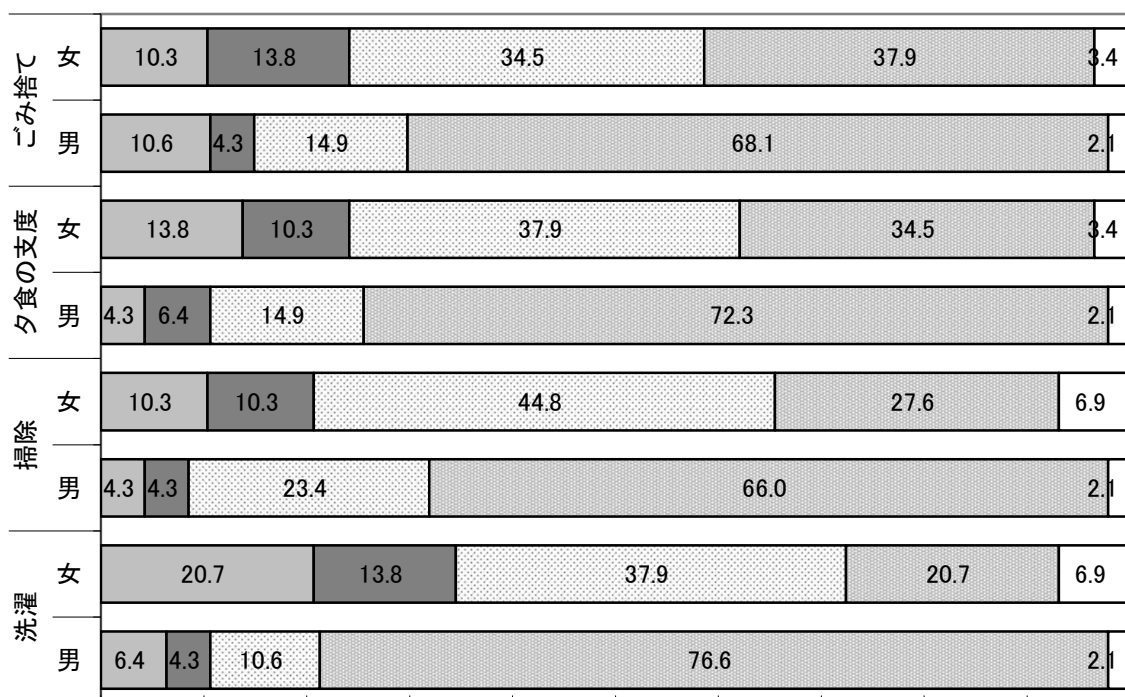


図4-4 就業別に見た家計への繰り入れ状況（同居未婚子長子）（%）

国立社会保障・人口問題研究所の『世帯内単身者に関する実態調査』によると、家計へ全く繰り入れを行っていないフルタイム就業の世帯内単身者の割合は、23.9%と

なっている。本調査においても、図4-4の示した通り、フルタイム就業の同居未婚子のうち約3割のものが全く繰り入れを行っておらず、繰り入れが5万円以下の割合は、およそ80%に達した。また、その他の就業状態においても繰り入れ金額はきわめて低い結果となった。同じ同居でも既婚子の場合、親と家計を一にしている者の割合は48.6%で、繰り入れも5万円以上が54.1%と高い繰り入れ率であることから、本調査から確認された高齢者と同居未婚子の経済実態としては、親子双方の就業状態にかかわらず、多くの子どもは経済的側面のほとんどを親に依存しているという点があげられるだろう。



□すべてする ■かなりする □たまにする □まったくしない □未回答

図4-5 男女別家事分担参加割合（同居未婚子長子）（%）

ところで、同居未婚子の場合、経済的側面だけではなく、日常の生活の大半も親に依存していることが指摘されている（宮本・岩上・山田，1997）。そこで、同居未婚子の家事参加の実態について調べた。

その結果、図4-5に示す通り、いずれの家事も「全くしない」の割合が非常に多く、子どもは家事にほとんど参加していないことが示された。男女別に家事への参加比率

をみると、女性に比べ男性のほうが家事への参加率が低かったことから、経済分担が子どもの性別にかかわらず親に依存する傾向があるのに比べて、家事分担には性差があるといえるだろう。

ただし、宮本ら（1997）の行なった調査によると、親と同居未婚子の共有形態の特徴として、未婚男性（主に就業形態がフルタイム）は、結婚しない代わりに家事の一切を高齢者にゆだねて、代償として家計に繰り入れを行い、未婚女性は経済基盤を親に頼ることによって利益を得、家事などを手伝い情緒的な役割を果たすとされる。本調査では、家事分担には性差が見られたものの経済分担における性別役割を垣間見ることはできなかった<sup>5</sup>。

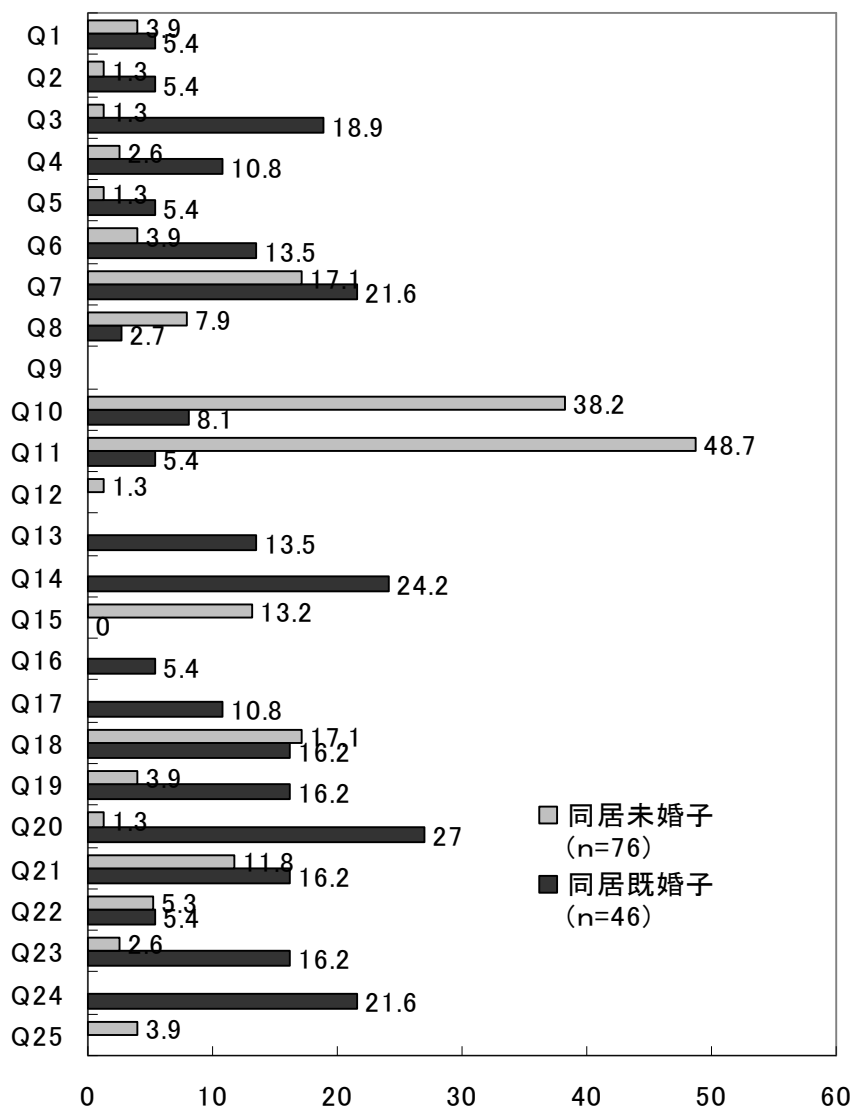
以上の結果からは、同居未婚子の多くは生活基盤の条件のほとんどを親に依存しているといえ、特に男性は経済のみだけでなく、身の回りの世話のおおよそを親に頼っている状況にあるといえるだろう。そのため、同居未婚子と高齢者の生活実態においては、同居は旧来の「子どもの親の扶養」という側面と同時に、親世代から子ども世代への「生活支援」という側面があることが指摘できるだろう。

## 2) 高齢の親による未婚同居子への評価

以上の考察から、若年層を対象とした従来のパラサイト・シングル研究において見られる「子どもから親へ」という一方向的な依存関係が、高齢者と年齢の高い同居未婚子との関係においても見られることが示されたといえる。

しかし、「子どもから親へ」という親子の関係性は、子どもからの一方的な要求によって成立するものなのであろうか。総務庁による『高齢者の生活と意識 第5回国際比較調査結果報告書』を見てみると、欧米の家族関係においては、成人した子どもと親との関係はある一定の距離があるべきだという考えが強いとされている。こうした欧米型の親子関係から見ると、日本における同居未婚子の親への依存という現状は、親側の援助があつてこそ成り立つ関係だと考えられる。そこで、親である高齢者が、こうした依存状況にあるとも取れる同居未婚子に対してどのような評価を行っているかということをつたねた。具体的には、未婚子と同居をする理由と未婚子と同居の上で困難な点について、複数回答で回答してもらった。その結果、図 4-6 のように、高齢者が未婚子と同居する理由として最も多くあげられていたのが、「子どもがまだ未独立だから」と「自然だから」という2つの理由であった。本調査においては、同様の質問を同居既婚子についてもたずねているが、この2つの回答に関しては同居未婚子を持つ高齢者のように、突出した結果は得られなかった。





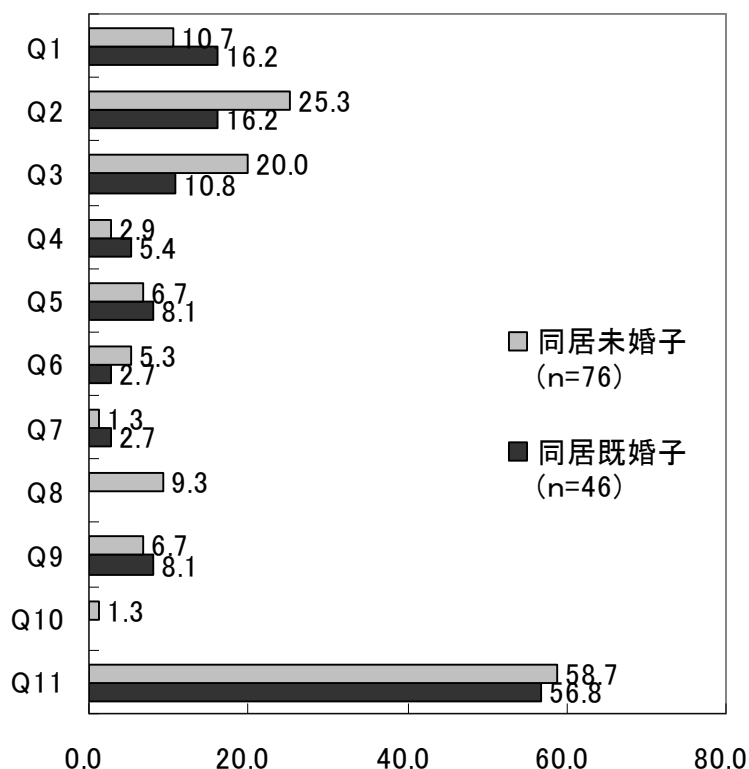
Q1 精神的な充足感があるため、  
 Q2 自分が病気になったため、  
 Q3 配偶者が病気になったため、  
 Q4 配偶者と離別・死別したため、  
 Q5 万一の病気の時に助けをもらうため、  
 Q6 身の回りの世話をしてもらうため、  
 Q7 経済的に有利になるため、  
 Q8 家や家業を守るため、

Q9 知恵や文化を継承するため、  
 Q10 子がまだ独立していないため、  
 Q11 自然だから、  
 Q12 住宅を建て替えたため、  
 Q13 子が就学したため、  
 Q14 子が結婚したため、  
 Q15 子の仕事の都合で、  
 Q16 子の配偶者の両親が病気になったため、

Q17 子の配偶者の両親が離死別したため、  
 Q18 子の希望、  
 Q19 住宅の都合で、  
 Q20 健康だから、  
 Q21 気楽だから、  
 Q22 今いる場所をはなれたくないから、  
 Q23 介護の必要があるため、  
 Q24 孫の世話をするため、  
 Q25 その他

図 4 - 6 同居子長子の配偶関係別にみた子との同居理由 (%)

なお、別居未婚子に関して「何をきっかけに別居したか」という別居理由を尋ねたところ、「子の就職を機に」が55.3%ともっとも多かった。しかし、親と同居する未婚子と別居未婚子の就業状態にほとんど差がないこと、また未婚子の同居率の高さを勘案すると、“就職”が居住形態を分ける大きな理由になるとはいいがたいと考えられる。むしろ注目すべきは、別居既婚子の別居理由としての「子の結婚を機に」という回答が示した79.6%という数値ではないだろうか。別居既婚子の別居理由として、「子の結婚を機に」という回答が圧倒的に多かったことから、同居未婚子への高齢者の評価として“結婚”と“独立”が重要なキーワードとなっていることが示唆される。



Q1 世代によって価値観が違う,  
 Q2 生活のリズムが違う,  
 Q3 親子間の甘えやわがママがある,  
 Q4 親子関係と夫婦関係は違う,  
 Q5 相互の思い違いや遠慮の積み重なりがある,  
 Q6 プライバシーの食い違いがある,

Q7 経済的負担と家計分担の難しさがある,  
 Q8 生活費がかかる,  
 Q9 家が狭い,  
 Q10 その他,  
 Q11 特になし

図4-7 同居子長子の配偶関係別にみた子との同居の困難な理由 (%)

ところで、本調査における同居未婚子のうち 79.2%のものは「離家経験がない」と答えていた。つまり、未婚子の約 8 割は生まれてからずっと親と同一の家屋で、親の扶養のもとに暮らしているのである。一般的に、離家は進学・就職・結婚を機に行われるとされるが、今回調査を行なった所沢市のように首都圏近郊の都市部においては、親元からの通学・通勤が無理のない範囲で行えることが多いことが予想される。

つまり結婚していない子どもは、離家のきっかけがないために、年齢が高くとも親と同居し、依存を続ける傾向にあるといえる。そのため、同居未婚子が離家するきっかけは結婚くらいしかなく、結婚しない未独立な状態にいるならば、家にいることの方がむしろ「自然である」と高齢者が考えても不思議はないのかもしれない。未婚子と同居する上で困難な点に対して「(困難な点を) 特に感じない」という回答の選択が最も多かったことから、高齢者が結婚していない年齢の高い子どもと同居することにあまり違和感を覚えていないといえる。

以上のように、親である高齢者にとって、自らの家庭を持っていない以上、未独立な存在の同居未婚子に対するある程度の支援は「自然なこと」で「(困難な点を) 特に感じない」ものであると考えられる。すなわち、本調査において見られた、依存する同居未婚子に対する高齢者の評価は、未婚の子どもは、結婚していないために離家するきっかけを失った未独立な状態であり、それゆえに子どもへの経済的援助を行う、あるいは子どもが家事分担を行わないことは「自然である」というものであった。同居において「(困難な点を) 特に感じない」としている回答数の多さは、高齢者の未婚の子どもとの同居を自然であるとする考えを後押ししているといえるだろう。

#### 4-3. モラトリアムを許容する親たち

##### 4-3-1. 同居未婚子と親の関係にみる「結婚」という指標

先述の通り、高齢者と同居未婚子との関係という双方の生活実態の特徴としては、子どもや親の収入源や就業状態にかかわらず、家事分担や経済の面で大半の子どもが経済力を持ち健康度の高い親に一方向的に依存していた。しかし、同時に多くの高齢者は、“結婚”という指標を用いることによって未婚子との同居を「自然だから」、「子がまだ未独立だから」と評価し、親が子どもの家事や経済といった生活条件の大半を支えているという一方向的な「依存—援助という関係性」に違和感を覚えていないと説明していることが示された。

また、本調査における同居未婚子と暮らす高齢者の居住志向は、別居が 55.7%となっており、高齢者の家族観への質問には、後の表 4-7 に示す通り、同居未婚子と暮ら

す高齢者の約 6 割が「子どもが自分の家庭をもったら一緒に住むべきではない」と答える結果になった。加えて、このことから、高齢者と年齢の高い未婚子との関係においては、年齢や経済的側面よりもむしろ「結婚していない」状態が未婚子との同居を説明する指標となっており、それが、未独立という評価につながっていることが推測されるだろう。

そもそも、青年期は個人の富の拡大と教育期間の延長によって生み出された大人への移行段階であるとされる<sup>6</sup>。しかし現代の日本においては、青年が豊かな社会の中で経済力をつけ、脱工業化社会の主役になった結果、モラトリアムが質的に変化を起こし、これまでアイデンティティ形成のための手段であり過渡期であるとされていた青年期は、それ自体が目的化し、合理化されることとなった。そのため、青年たちは居心地のよいモラトリアムへの安住を強く志向するようになり、長くモラトリアム状態に置かれることとなる。さらに、今日の日本社会は自立するという規範や概念が社会的に残されているにもかかわらず、自立への規制や圧力が強くない社会であるとされる（宮本，2002）。

こうしたモラトリアムへの安住志向と自立の揺らぎという状況下では、現代の青年たちの中に、半自立状態のまま、大人への移行を果たさずに生活を続ける者が出現する。先にも述べたが、宮本（2002）は、こうした青年の存在を指し、彼らの状態を青年期と成人期の間にできた段階として「脱青年期」（p.5）と名付けた。脱青年期とは、青年から成人への移行期に出現した新たなライフステージを指し、学卒後も、経済的自立・離家・結婚などといった、成人への移行期に想定される様々な出来事を引き伸ばされた状況をいう。本調査における同居未婚子と高齢者の関係をみると、親と同居する同居未婚子はまさにこの脱青年期にあてはまり、結婚せずに親と同居することで大人への移行が引き伸ばされている状況にあるといえるだろう。

また、山田（1999b）は、結婚していない子どもは、家事や経済面などの基礎的な生活条件を親に依存することによって、豊かな経済状態のもとで自己実現を求めることができる」と指摘した。そのため、同居未婚子には、あえて大人になることはないというモラトリアムな心性があり、彼らが自ら脱青年期を選択し、そこにとどまっているのではないかと述べている。つまり、結婚という自立のきっかけを失っている未婚の子どもは、親と同居を選択することによって「結婚していない＝未独立な存在」という高齢者側の評価を手に入れることができ、未独立だからこそ親元に残って親から生活の援助を享受することができるといえるだろう。

大橋（1993）は、現代青年の晩婚化傾向を「結婚モラトリアム現象」（p.15）と呼んだが、上の指摘からは同居未婚子は未婚のまま親と同居することによって、結婚だけでなく経済・生活といった側面においてもモラトリアム状態にあるといえる。つまり、同居未婚子と高齢者の関係においては、結婚という指標は、未婚子が親からの支援を

享受できるための要素となっており、その結果、彼らを結婚も含めた諸側面において、モラトリアム状態に囲い込んでいるといえるだろう。

#### 4-3-2. モラトリアムを許容する親たち

しかし、このような未婚子のモラトリアム状態は、親が「許容している」からこそ成り立つ関係でもあるといえる。というのも、結婚しない未婚子の経済・家事の側面での親への依存は、親がその状況を許す限りにおいて維持できるものだろうからである。

ここで重要なのは、高齢者が未婚の子との同居の理由の一つとして、「子がまだ未独立だから」という回答をあげている点にある。既に記した通り、同居未婚子の多くはフルタイムで就業しているものが多く、年齢的、職業的、経済的には、一般に独立しているとみなされる範囲に属している。またさらに、親である高齢者の5割強は収入源が年金であり、子どもを扶養することが決して高齢者のメリットにならない状況にあるといえるだろう。

にもかかわらず、高齢者はあえて未婚子との同居に対して、未独立であるという説明を用い、子どもの生活支援を引き受けているのである。子どもを未独立であるとする高齢者の回答からは、彼らが同居未婚子をまだ未独立な存在、いわば自立していない存在として捉えており、生活を支援する対象と捉えていることがうかがえる。つまり、親である高齢者は、同居未婚子に対して「結婚していない＝未独立」、「未独立＝支援の対象＝依存状況に困難はない」というロジックを使って、未婚子との同居における一方向的な「依存－支援関係」を説明しているといえるだろう。

通常、高齢者はいわゆる定年を迎える年齢に達すると、ひとまず仕事から引退し、子どもの成長および独立などにより、家庭での指導的地位としての親役割が大幅に縮小、あるいは祖父母役割に変化する。すなわち高齢期は、これまで社会の第一線で果たしてきた役割や子どもを産み育て、社会に送り出すという親役割を終了する時期にあたるのである。しかし同居未婚子を抱える高齢者は、一般的な高齢者と異なり、社会的な役割を喪失した後も「子どもを扶養する」という親役割を保持することになる。市川・中山（1994）は、高齢者にとって「自分が家族に役立っている存在であるか否かは、高齢者自身の生きがいや、幸福感にも関わる重要な問題である」（p.82）と指摘している。本調査においては、既婚子と同居する高齢者よりは値が低いものの、未婚子と同居する高齢者の88.3%が生活に満足感を得ていると答えていた。

子どもにとって、結婚せずに高齢者と同居することは、経済的な安定を確保し、豊かな生活を確保できるというメリットを持っているといえる。結婚という自立のきつ

かけを失っている子どもは、結婚しないことによって、親元に残り親に依存することを許容されているのである。

しかし、この状況は同時に親にとっても、結婚という指標を用いることにより、「未独立な子どもを支援する」という親役割の確保に繋がり、自らの親役割を保持して、親という地位を保つことができるという側面を持っている。このように、同居未婚子と高齢者という居住形態には、未婚子の自立していない、いわゆる「モラトリアム状態」を促進する側面がある一方で、親である高齢者側がそれを許容し、親役割を確保するという、結婚という指標をもとにした両者の互惠関係によって成立しているといえるだろう。

戦後、日本の家族は、いわゆる「適齢期」に当然のように結婚し、複数の子どもを生み育て、老親の扶養や子育てにおいて、兄弟などの身内に相談や助力を得るといった典型的なパターンと家族構成の中で生きてきた（落合、1994）。しかし、高度経済成長後の脱工業化の進展した社会においては、こうした典型的な家族や親子関係は変化していく。親子関係の変化を含め、人々の生活に起こったこうした様々な変化は、ごく最近のことである。急激に変化する社会状況の中で、未婚の子どもと暮らす高齢者たちが、結婚というライフイベントを、子どもが自立する1つのメルクマールとしていることは、非常に興味深い。上述の通り、同居未婚子を抱えることは、親である高齢者にとっても未独立な子どもを支援するという、親役割の維持につながる。高齢者が、未婚子の依存を許容する形で同居を説明する背景には、こうした高齢期に特有の役割喪失の保留が、少なからず関係しているといえるだろう。

以上のように、高齢者と年齢の高い未婚の子どもの同居形態は、結婚しない子どもが親と同居をすることで親からの自立を妨げられ、モラトリアム状態が延長されるという側面がある一方で、親である高齢者に「親役割」を維持させるという機能を果たしているといえる。価値観の多様化する今日の日本社会においては、家制度という社会的な規範は形骸化し、個々人の考える家族像が一点に集中することがほとんどなくなってしまった。特に、戦後育ちの人たちが高齢者になるにしたがって、以前のような「あるべき」親子像といった規範は曖昧になることが予想され、今後の高齢者とその子どもとの関係性もますます多様化していくと考えられる。こうした状況下において、子どものモラトリアム状態を、親役割確保という形で許容している高齢者と同居未婚子の関係は、非常に戦略的で今日的な親子関係といえるのではないだろうか。

では、「結婚」を自立への指標とすることで、相互にモラトリアムを利用する高齢者と未婚子の同居関係は、今後どのような形になっていくのだろうか。

日本における高齢者の生活において、同居子の存在は社会保障上の問題と絡めて非常に重要な要素であるとされてきた（宮島、1992）。1978年の『厚生白書』は、高齢者と子ども世代との同居を、福祉における含み資産であるとしている。既述の通り、

同居子がいる高齢者の同居・近居希望は42%で、夫婦どちらかの身体が弱くなったとき、あるいはどちらかが一人になったときに同居を望む傾向が強い。しかし、本調査においては、同居未婚子と暮らす高齢者の家族観は自立志向が強いものであった（表4-7）。

たとえば、「高齢者は経済的に自立すべきである」と考えた人は85.7%とかなりの割合を占めていた。また、先に述べた通り「子どもが家庭を持ったら同一家屋に住むべきでない」との問いに、約6割の者が賛同していた。表を見てもわかる通り、未婚子と同居する親は既婚子と同居する高齢者に比べて、自立意識が高いことがわかる。以上のことから、同居未婚子を抱える親は、子どもの未婚という選択から親役割を得つつ、どちらかといえば高齢者は経済的に自立するべきだと考えていることが推測される。

表4-7 同居する子の配偶関係別にみた高齢者の家族観

		そう思う	どちらでもない	そう思わない	未回答
子は親の生活費を出すべきである	同居未婚子あり	16.6%	20.0%	62.7%	1.3%
	同居既婚子あり	29.7%	21.6%	48.6%	—
子どもが家庭を持ったら同一家屋に住むべきではない	同居未婚子あり	59.2%	23.7%	19.7%	2.6%
	同居既婚子あり	18.9%	24.3%	56.7%	—
高齢者は経済的に自立すべきである	同居未婚子あり	85.5%	6.6%	6.6%	1.3%
	同居既婚子あり	81.1%	16.2%	2.7%	—

現在の日本の介護体制においては、高齢者の「自立支援」が重視される傾向にある。これは、国が“支援はするが自立した生活を送るための努力は本人に委ねる”というスタンスを目指していると考えられる。すなわち、自分で自分を守らなくてはいけない時代がやってきているといえるだろう。こうした現代日本の状況を勘案すると、同居未婚子と高齢者との「結婚」を指標としたモラトリアムの互惠関係という戦略的な親子関係は、現代青年の生き方選択に関する自己責任という側面を希薄にするばかりではなく、親世代の自己責任の希薄さをも内包しており、今後の高齢者と同居未婚子の関係性が懸念されるところでもある。

#### 4-4. 小括～同居未婚子から見た新しいモラトリアムの形

以上のように、本調査から確認された高齢者と同居未婚子の関係における特徴としては、以下の3点が挙げられるだろう。(1) 家事・経済の面で子どもの親への依存がある。それは、子どもや親が就業しているかどうかにかかわらず見られる傾向であった。(2) 既婚別居子の別居のきっかけを見ると「結婚」が大きな理由となるから、結婚していない子どもは、離家のきっかけがないために年齢が高くとも親と同居し、依存を続けている。(3) 親は子どもを未独立な存在と認識し、同居に対して違和感を覚えていない。

これらの結果から、高齢者と同居未婚子との関係という双方の生活実態の特徴として、子どもや親の収入源や就業状態にかかわらず、家事分担や経済面で大半の子どもが経済力を持ち、健康度の高い高齢者に「一方向的に依存している」といえる。しかし同時に多くの高齢者は、結婚という指標を用いることによって未婚の子どもとの同居を「自然だから」、「子がまだ未独立だから」と位置付け、親役割を確保することに成功していた。

ところで、結婚を自立への指標とすることで、相互にモラトリアムを利用する高齢者と未婚子の同居関係は、新しい青年のあり方を示しているといえる。というのも、結婚という指標は親との同居という面において、未婚子の新しい形を切り開いていると考えられるからである。

現在、日本の少子高齢化は他国に比類ないスピードで進行しており、青年の晩婚化・未婚化の進行が、こうした背景となっていると指摘される。そのため、若年層の動向が社会的に大きな注目を集めていることは先に述べた通りである。冒頭でも述べたが、こうした青年の晩婚化・未婚化に対して、国立社会保障・人口問題研究所が行った「第12回出生動向基本調査」の結果からは興味深い結果が見えてくる。たとえば、「一生結婚するつもりはない」と考えている25～29歳の未婚男性は7.7%、同年齢の女性も6.7%と全体の1割にも満たず、この年代の青年たちの多くが結婚への意志を失っていないといえるだろう。ところが、同調査において「(いまの自分にとって)独身生活は利点があると思う」としている男性は79.8%、女性は86.6%となっており、どちらかといえばより独身生活を選択する傾向にあることがうかがえる。独身でいることに利点を感じている理由としては、「行動や生き方が自由」という回答がもっとも多い結果となった。

この結果は、独身者たちの志向として、結婚で得られる情緒的・経済的な安定<sup>7</sup>などよりも、独身でいることで得られる「自由な行動や生き方ができる」という自分の生き方や行動を優先する傾向があることを示しているといえる。すなわち、彼らは自己の望む生き方や行動を優先するために、積極的に「独身という戦略をとっている」と



いえるのではないだろうか。加えて、独身であり、なおかつ親と同居しているというスタイルを維持している同居未婚子は、『平成 13 年版 国民生活白書』に見られるように、別居未婚子よりも経済的なゆとりがあることから、より自由な行動や生き方ができるといえ、さらに自分の望む生き方や行動を優先しやすいと考えられる。ただし、精神的なゆとりの面では、同居既婚子がより安定していることが示されており<sup>8</sup>、「自由な行動や生き方ができる」と「精神的なゆとり」はイコールではないようである。そのため、結婚をしない選択を行うことは、精神的なゆとりの面においていえば、リスクがあるといえるかもしれない。しかし、この結果は、決して同居未婚子が精神的な不安定にあることを示してはいない。むしろ第 1 章でも示した通り、主体的な生き方の選択は健康な不安をとまなうものである。

以上のような観点から、本調査で得られた結果を勘案すると、同居未婚子の同居および未婚という状態は、彼らを、結婚を含めたさまざまな点において「モラトリアム状態」に囲い込むという側面とは別に、彼らの積極的な生き方の選択と捉えることもできよう。つまり、同居未婚子と高齢者との結婚を指標としたモラトリアムの互惠関係という戦略的な親子関係は、一方では生き方に関する自己責任の希薄さを内包しているが、他方では現代青年に「自分らしくあるがままに生きる」という生き方に関する積極的な自己選択を可能にさせている、実存的な側面を持ち合わせているといえよう。したがって、山田（1999b）が同居未婚子の特徴に「自己実現の豊かさ」を挙げたように、親と同居する未婚子は、いわば「豊かな生き方の選択」としてモラトリアム状態を自ら進んで選んでいるといえるだろう。もちろん、今回の調査のみにてこのことを結論付けることはできないが、近年の青年期延長や晩婚化から同居未婚子は今後増加することが予想され、こうした未婚の子どもの「生き方の選択としての親との同居」という形態は、ますます顕著になると考えられる。今後は、青年のモラトリアム状態の積極的な選択という「生き方」を含めた視点からの同居未婚子への検討が必要だろう。

- 
- <sup>1</sup> ここでいう年齢の高い未婚子とは、おおむね 30 歳以上の年齢層を指す。多くの同居未婚子研究においては、20 歳前後から 30 歳、あるいは 34 歳くらいまでの子どもを同居未婚子として調査しているが、現在の初婚年齢の上昇などを勘案すると、婚姻する年齢であるにもかかわらず未婚のまま親と同居している 30 歳以上の子どもに注目することは重要だといえるのではないだろうか。
  - <sup>2</sup> 以下では、省略して所沢調査と記す。
  - <sup>3</sup> 第 1 章図 1-2 参照。
  - <sup>4</sup> ここで言う年長者とは、同居する未婚子の中で一番年上のものを指す。たとえば未婚の次男と未婚の三男と同居している高齢者の場合、より年長である次男を選択して回答してもらったということである。そのため、長男・長女のみならず、次男・次女・三男などが含まれている。
  - <sup>5</sup> ただし、宮本らの調査においては、男女の賃金差についての考察が行われていない。本稿においては、主に高齢者に対して調査を行ったため、この点について明らかにすることはできなかったが、同居未婚子の年齢を勘案すると、男女の賃金差は繰り入れと無関係とは考えられず、この点については今後の課題である。
  - <sup>6</sup> 第 2 章 p.39 参照。
  - <sup>7</sup> 同調査において「(いまの自分にとって) 結婚することは利点があると思う」と答えた独身男性は 62.3%、女性は 69.4%である。結婚することによって得られる利点としては「精神的安定を得ることができる」が男女共に高い支持を得ている。また、女性の場合「経済的安定を得ることができる」を挙げている人も多く見られる。
  - <sup>8</sup> 親同居未婚者の生活全般の満足度（「満足している」+「どちらかといえば満足している」）をみると、同年代（25～39 歳）の既婚者よりは低く、未婚単独世帯よりは高い数値が示されていた（『平成 13 年版 国民生活白書』 p.22-23）。

## 終章 現代青年の生き方に関する実存的態度

これまでは、近代産業社会における青年の発生過程と現代の彼らをめぐる社会的状況を概観した上で、現代青年特有の生き方と苦悩を大学生、不登校、あるいは同居未婚子などを通して明らかにしてきた。

まず第1章において、青年期のライフスタイルの変化や社会意識にまつわるデータを中心として、現代の「成熟」社会に生きる青年たちをめぐるとの今日的状況の分析を行った。そして、その後は、まず戦後若者論研究を踏まえた上で、無気力な若者像の中心的存在として扱われてきた大学生に焦点を当て、量的・質的調査を用いて、実存的な視座から彼らの現状・あり様を明らかにした。さらに、学校教育という青年期を語る上では重要であるファクターの1つである不登校を、不登校にならなかった者の調査をもとに分析し検討することを通して、学校的日常を生きる子どもたちが抱える問題点について整理した。最後に、青年期における多様化するライフスタイルの象徴ともいえる同居未婚子について取り上げ、彼らの志向性を明らかにし、現代青年の今を探った。

以上のように、第4章までは、これまでの青年研究、特に日本の青年研究において明らかにされてきたことは何だったのか、とりこぼされてきたことは何だったのかを検討してきた。以下では、前章までの論証をふまえ、実存的な視座から青年のあり様について再度総合的な考察を行うことで、現代青年のあり様を定義したい。

### 5-1. 若者に関する言説の問題点ー若者のグループインタビューからー

大学生や不登校、あるいは同居未婚子など、青年への実存的な視座のもと行なってきたこれまでの調査結果からは、彼らが生き方に関して積極的に自らの手で意味付けを行っている、あるいは選択をしているという側面が明らかとなった。それは、たとえば大学生の場合、親密な他者に対して「やさしさ」というロジックを使いながら、また自らの生き方やあり方の表出を回避しながらも、“自身のこれまでの体験を抛り所として自らの生きる意味や存在意義を獲得している姿”であった。また、不登校に関する調査では、不登校にならなかった生徒たちの自由記述から、登校行動の維持につながった条件が“生き方の主体的な選択”であったことが明らかとなった。さらに、同居未婚子に関しては、同居と未婚という側面が未独立という地位を青年に与えていることが示され、なおかつそうした地位は若者が「自分らしく生きる」ために積極的に獲得した結果なのではないかという示唆を得た。

ではなぜ、若者への指摘は、場当たりの消極的なものとされることが多いのだろう

うか。そこで、まとめにあたって、再度青年のあり様を探るべく、19～25歳までの9名に行なったグループインタビューを行い、若者への言説に対して、若者自身がどう感じているのかに関する様々な意見を聞いた。

このグループインタビューは、今述べたように、青年を対象とした調査である。そのため、調査対象者は会社員、フリーター、学生という属性の異なる青年9名<sup>1</sup>で、彼らを1つのグループとしてインタビューを試みた。調査は、2003年6月下旬に、都内大学施設において、簡単な食事を取りながら2時間程度行った。インタビューでは1名の司会進行役を立て、回答の内容はICレコーダーによって録音・記録した。インタビューの進行は、まず共同研究者である近(2003)が、このインタビュー調査と同時に行なった大人という概念と職業との関連についての4つの質問<sup>2</sup>を行った後、「若者が主体的に自分の人生を選んでない、あるいは場当たりので流されているという意見についてどう思うか」「自分らしさは必要か」に関する自由討議とした<sup>3</sup>。

表5-1 調査概要

実施日	2003年6月某日			
実施場所	都内私立大学施設			
FGI実施責任者	大学院修士課程2年女子・大学院博士課程2年女子			
記録担当	大学院修士課程2年女子			
インタビュアー	筆者			
インタビューイ	番号	年齢	性別	職業
	A	23	男性	サラリーマン(建設業, 電気通信技術者, 勤続2ヶ月), 4大卒
	B	25	女性	フリーター 4大卒
	C	25	男性	会社員(メーカー, 採用担当, 勤続2年3ヶ月, 転職経験有), 4大卒
	D	23	女性	浪人生(フリーター), 4大卒
	E	25	女性	事務職(内装仕上げ業, 事務全般経理・総務, 勤続1年3ヶ月) 4大卒
	F	19	女性	学生, 私立4大2年生
	G	22	男性	学生(科目等履修生) 4大卒
	H	22	女性	大学生 私立4大4年生
	I	21	女性	学生 私立4大4年生

なお、グループインタビューは、3つの基本的アプローチがあるところに特徴があるとされる(Sヴォーンら, 1999)。それぞれ、対象についての予備知識が十分でない

領域について調べ、「前提となる事柄」を知ることが目的とした「探索的アプローチ」、臨床心理学の方法をヒントにした「臨床心理学的アプローチ」、ある特定のグループの日常的知識やものの考え方から得た事柄やトピックを理解する「現象学的アプローチ」である。この調査は、得られたデータから青年が若者への言説をどのように考えているかを理解することにあるので、「現象学的アプローチ」として利用可能であるといえるだろう。

まず、「若者が主体的にあるいは意志的に自分の人生を選んでない、あるいは場当たりの流されているという意見についてどう思うか」については、以下のような議論が行なわれた。まず、E の意見をきっかけにディスカッションが始まる。議論においてキーワードとなったのは、「選択肢が多い」という点と人生を選択する際に「計画性があるのか」という点であった。

例えばEは、「若者が・・・」という意見に対して、就職活動を例に挙げ「選択肢がありすぎてそれを見極められないのではないか」という意見を示し、自分自身はあとからそれを理由付けたと述べた。

E：えっと、わたしの父親とか母親とか祖父母の時代っていうのは、戦後っていうのもありますし、これからなんかどうしていこうっていうので、それで方向が決まったみたいなどころがあるような気がするんですけど。今っていうと、いっぱいありすぎるし、それで選択肢を見きわめきれない、それで、なんか、贅沢な感じとか受けとってるんですけども。

司：自分自身はどうですか？

E：私自身は就職活動の時に、何していいかわからなかったんですよ。何になりたいっていうのもなかったんで。それで、ぎりぎりになって、ああもう無理やり決めた感じで、説得力ないんですけども、何か1つ決めようと思って、切羽詰ったんで、インテリアでいこうかなみたいな。それだったら、もともと海外に行きたいっていう夢はあるんですけども、それだったら、インテリアちょうどいいみたいな。なんか理由付けをして組み立てていく将来をっていう感じかもしれないですね。

それを受けてCは、世渡り上手かどうか、主体的かどうかを印象付けているのではないかと述べ、計画性、すなわちEの述べた理由付けは、先にするのがいいのではなく「結局大事なものは、自分がどういう目標をもってどうなりたかっているものを持っていること」であり、そのためには「自分を良く知ること」が重要であると述べている。

C：なんか渡り上手な人と下手くそな人が人それぞれいて。で、いろいろ話を聞くとわたり上手な人は、たとえば就職活動をちゃんとやって、ちゃんと学生生活を楽しんで、サラリーマン生活を楽しくやってっていうかうまく会社になじんでそれなりにうまくやって、やってる人もいるんだけど。逆に結構へたくそな人もいて…（中略）…。

なんていうんだろう、結局、なんでしたっけ？その自分の人生の方向性っていうのは、上手い下手っていうのも結構あると思う。だけど結局大事なのは、自分がどういう目標をもってどうなりたかかっていうものをもっていることであって、で大人の人がそれに対して、それを計画してやってるかやってないかっていうのはあまり関係ないんじゃないかな。好奇心で大事だと思うんですよ。目の前にあることを一生懸命やるっていうことはすごく大事で、だんだん年いってくるとそんなことできなくなるはずだし、やっぱりそれは若いからできるっていうものあると思うから、やっぱりそういうのは大事にしくちゃいけないと思う。それはいつでも年をとって、人生を楽しく生きるっていうことを考えるのであれば、すごく大事なことで、ただ上手く渡っていくっていうのだったら、計画的にいろいろ考えて、なんていうんだろう、自分で計画をたててその通りにやっていくっていうことも大事なかもしれない。

司：あれですかね、今の自分が自分らしくあればっていう？

C：そうですね。だから自分をよく知ることかもしれないですね。自分が上手いか下手なのかちゃんと分かかっていて、それにあった形で、自分にあったほうを選べばいいと、選ぶっていうか、それは一概に言えない。先のことを考えてるか考えてないかっていうのは。

またDは、選択肢の多さよりも「選択をしなければならない」という状況自体が大変であることと述べ、それに対してCは、その選択すら先が読めないから「計画通りに行くかどうかわからない」と述べた。このCの発言は、先ほど自らが述べた計画性よりも、今自分がどうなりたかかを大事にするという発言への補強であると考えられる。

D：えっと、昔と比べて、今が選択しなくなったっていうか、そういう話ですよ？あんまり多分変わらないと思うんですよ、私は。多分どんな時代でもその先どうしてこうかっていう、なんだろう、なんか心理的に言うとアイデンティティ確立の問題との衝突みたいなのは、多分お父さんの時代でもあったと思うし、おじいちゃんの時代でもあったと思うんだけど、昔の方が方向性が決まっていたから、選択が楽だったんじゃないかなって思うんですよ。おばあちゃんの時代とかは、

結婚は契約みたいな感じでだいたいお見合いだったし、お母さんの時代とかでも、専業主婦になるのもあんましおかしくない時代だったけど、今は職業をもつ、女性が職業を持つことを求められてる時代だし、選択しなきゃいけないから困ってるって感じもある。

司：選択しなきゃいけないから、選択肢もいっぱいあるし、選択しなきゃいけない現在の状況っていうのもあるし？

D：うん（うなずき）。

C：けど、その結構今、経済面で言うと、すごく保証とされている今までは絶対だと思われている会社がつぶれちゃったりとか、そういう社会的に背景があるから、必ずしも計画的にいい企業に入ったからと言って、計画通りいくかどうかわからない。

さらに、Iは、今自分がしたいことを後回しにしてでも「就職したい」と考えていると述べており、それが逆に自分の意志で行っている選択であると述べている。

I：そうですね。先ほどCさんに言われたこととか、今皆さんがおっしゃってたこととかいろいろ考えたんですけど、さっき思ったのは、たとえば私は今やりたいことを二の次にしても就職したいと思ってるんですね。それは、どうしてそこまで思うのかって言ったら、マスコミとかがつくるイメージだったりそういう強迫観念なのかもしれないけど、今やりたいことができないからといって、就職しなかったら、ほんとに流されると思うんで、そうならないためにもやりたくないことでもとりあえず就職したいという気持ちがあるので。今の自分を持っていないといわれたらそうなのかもしれないけど、まあどっか就職して、自分に生活的にも余裕がでて、そのときに自分のやりたいことを見つけていければいいんじゃないかなって思うんです。

司：そういう意味では自分をもってると逆に言えるのかもしれないですね。

I：ううん。今すごいあいまいなところ。

その後、Gが「今の教育制度では無理なんじゃないですか。根本的に考えたら。」というように、自分の意志で行う選択という行為を行うことは、突出した人間を好まない横並び主義の日本の教育状況を勘案すると、無理であるとの見解を示したが、他方でHの「私、さっきGさんが出る杭は打たれるって言ったんですけど、私打たれた覚えがあまりないですよ。」あるいはAの「そうですね。出る杭のことで言えば、むしろ出る杭、出る、自分が出て行く」というような回答も見られ、議論が拡散してしまう。

以上、彼らの見解を見てみると、若者への言説、いわゆる消極的な場当たり適応論に対しては、積極的な否定は行われず“しょうがないんだ”というニュアンスのもとに議論が行われている印象を受ける。というのも、CとIやGとH、Aの間には意見の食い違いがありながらも、全体としては肯定も否定もしないまま「それもそうだよね」といった雰囲気の話が表面的に流れてしまっていたためである。このインタビューは、1時間から2時間程度であったため、もっと議論を深めれば、ある程度の結論に至ったのかもしれない。しかし、ここではひとまず、議論が1つの合致点を見ることはなかった。またさらに、若者が主体的な選択ができてないという見解がなされる理由として、選択肢の多さ、あるいは選択をしなければならないという不可避的・今日的な社会状況が挙げられていたことから、“しょうがないんだ”というニュアンスが読み取れるだろう。

ここで重要なことは、彼らが肯定も否定もしない状況が「流されている」若者を象徴しているように見えることだ。つまり、既存の言説に対して一定の見解を得られない彼らは、一見、若者は主体的ではないという言説を体現しているように見えるといえる。しかし、話がまとまらないという状況は、逆に考えれば、彼らが既存の言説に関して合点していない、すなわち自分の中で「何かちがう」と感じているとも考えられるのではないだろうか。

表層的には、若者に対する消極的な意見を否定せず、むしろそうした姿がそれらの意見を体現しており、言説が再生産しているかのように見える彼らであるが、たとえばCの「自分をよく知ることかもしれない」やIの「自分に生活的にも余裕がでて、そのときに自分のやりたいことを見つけていければいい」といった語りをみると、そこには、彼らが求めているもの、あるいは彼らのコアな部分の存在が見えてくるだろう。

それは、「自分らしさは必要か」ということについてたずねた場合も同様であった。たとえばこの問いに関しては、多くのものが、自分らしさがわからないし場当たりのでも良いのではないかと述べつつも、それでもやはり何か自分らしさのようなものは必要であるとの見解が述べられている。

たとえば、それは、Eの本当の自分がわからずもやもやしなながらも、それを良しとせず苦悩してしまう姿や、Bのどれも本当の自分であるが、真の自分は一番下にあり普段は気づかないものであるという語りに現れているといえるだろう。

E：最近すごく、自分の中でもやもやがあって、どれが本当の自分がわからない。  
接する人によって、接し方も違うから、何キャラ？今のは。みたいなのがあって、  
その自分らしさとかっていう言葉自体もすごいなぞで、あとすごいなぞなのが常識  
っていう言葉なんですけど、育った環境とか、家族同士でもぜんぜん考え方も



違うのに、これ常識的に考えたら言えないとか言われたりすると。自分らしさは、あ、わかんなくなってきた、すみません。常識的に考えてっていう、その常識がぐちゃぐちゃで、自分らしさっていうのもぐちゃぐちゃで・・・。

- I : そうですね、難しい。自分らしくあろうとする。たぶん、私の考えですけど、自分らしく生きてる人は自分らしく生きようなんて思ってないと思うんですよ。自分のやりたいことをやってそれが結果として自分らしかっただけで、自分らしく生きようと思ってる時点で自分らしくないと思っている。
- B : あんまり、自分らしく自分らしくってあんまり言い聞かせたくない。もっと、そういんじゃないくて、もうちょっと第六感的なものなのかもしれないし、あまり肩に力を入れることはしたくない。自分らしさっていうか、本来、本当の自分とあって、さっきEさんが言ったように接する人によって自分っていうのは変わって来るもの。それがいけないとかじゃあどれが本当の自分なのっていうんじゃないくて、どれも本当の自分であって、でも真の自分っていうのは一番下にあって、普段は気づかない。それがもしかしたら自分自身で気づくかもしれないし、他のだれかに「あなたってこういう人よね」っていわれて気づく部分かもしれない。ほんとに、無理に自分らしくあろうとはしなくていいんじゃないかと思うし、こういう職業についてるから自分らしいとか、こういう夢をみてるから自分らしいとか、違うんじゃないかな。もっと根底の部分で、私が自分らしくあろうとか、たとえば私が自分らしくあろうとか、たとえば何か嫌なことがあっても笑ってよう、バイト中は絶対そういうの出さないようにしようとか、そういうのが自分らしいなって思ってるから、それ以外のことに関して、今自分らしいとか自分らしくなかったとかあんま思わない。今の状況も自分らしくないとか自分らしいとか、定職につかないことが自分らしいとかそういうふうにはぜんぜん思ってないし、定職についてる、つかないといけないっていうのも、親からは言われるんで、あ、つかなきゃなって思うんですけど、別に自分としてはいいかなって、自分で生計を立てなくまきゃいけないとは思いますが、普通に正社員として働いてるから自分らしいとかってないで、別にいいじゃんって思いますが。
- C : 自分らしいってなんか違うんじゃないかな。そういう感覚ってみんな持ってなくて、自分らしいって死んでもわかんない。さっき話を聞いてたら、自分らしさっていうのは、今自分の中で考えたらハッピーかハッピーでないか。楽しいなって思って、何も考えず楽しいって思えることがやっていることが、もしかしたらなんか別に気を遣うこともなく、楽しいなとかこんなことあるなとか、そういう。

つまり、「自分らしさが必要かどうか」という投げかけに対しても、先の質問同様、意見の合致が見られず、自分らしさはなく、それは場当たりのなものであるといった語りの方が多く用いられていた。

しかし、そうした議論の流れの中でも、彼らは自分らしさについて悩んだり、接する人間によって自己表出が代わるのは当然だけどその根底には自分があるのだ、という意見が交わされていた。あるいは、個々人の意見をみても、Cの「今自分の中で考えたらハッピーかハッピーでないか」や、Bの「もっと根底の部分で」という語りによって表されているように、場当たりのなものではなく、基軸を自分の中に求めている姿も見えて取れる。

今回のインタビューは、ほとんど初対面同士のもので構成されたグループの間で行われた。そのため、そのことが原因で、グループの議論が言説を肯定も否定もせずに表面的な話の流れになってしまったという可能性もある。しかし、先にも述べたように、このグループインタビューにおいては、既存の若者に関する言説への見解に対して合致点が見出せなかったこと自体に意味がある。というのも、言説に対して、あるいは議論の展開に対して、肯定も否定もできなかったという状態こそが、個々人の中に彼らが積極的に求めているもの、あるいは彼らのコアな部分の存在が見えて取れるからである。

以上からも明らかな通り、実際、個々の意見の中には、主体的にあろう、あるいは自分らしい生き方を必要と感じている彼らの姿、まさに生き方に関するに実存的態度が見え隠れしていた。この逆説的な状況は、自我を説明する際に用いる「氷山の一角」という指摘と共通する部分がある<sup>4</sup>。つまり、氷山の海面から出ている部分、すなわち表層部分において彼らは無意志的にみえるのだが、海面下に隠れている部分には、彼らの積極的な主体的選択が隠されているといえよう。今日までの研究の多くに見られる、現代青年は場当たりので消極的であるとの指摘は、こうした氷山の一角を捉えたものであり、彼らの様相の全体を指摘していないといえる。本論では、当節および本章までに述べてきたように、一貫して海面の下にある青年たちの姿を抽出することを試みてきた。

## 5-2. 「成熟」社会における現代青年の生き方—まとめにかえて—

現代青年たちは、主体的な生き方の選択の自由を与えられている。しかし、それがかえって自己責任を生じさせるために、選択という行為自体が生きづらさや、悩み、苦しみを生み出すという、現代社会の抱える苦悩の影響を大きく受けている。さらには、市場の差異化の要請と自己に意識的な「青年性」との関連によって生み出された

軌轢のために、よりいっそう自己探求を繰り返すという状況にあるといえる。こうした流れの中で行われてきた、心理学や社会学をはじめとする今日の青年に関する研究においては、それぞれの研究領域で、おおよそ共通した見解を得るに至っている。その見解とは、現代青年は、状況に応じてその場その場で自分らしさや生き方に対する態度を変えていくという方法で、現代社会の抱える多様性や価値観の変容に適応しているのではないかというものである。

しかし、現代青年の様相を多角的に捉え、なおかつ彼らの今後への提言を考えていくためには、これまでの議論とは異なる視点で、新しいパースペクティブと理論的・方法論的な展開について考えていかななくてはならないのではないだろうか。

そもそも、人間は数え切れない身体的・心理的・社会的・精神的諸要素を抱えながら相互に極めて複雑に影響し合い、それらを統合し、そこに一貫性を見出す存在である。それゆえに、多様な今日的ジレンマの状況ごとに分断するという従来の青年期研究の方法論では、現代社会における彼らの存在は語りえないといえるだろう。

そこで本稿では、人間を全体として捉えることができる人間科学的研究のもと、人間の精神的・健康的側面への信頼を基礎とする実存的視座を1つの切り口とすることによってこうした困難を解決することができると考え、以下の2つの論点を提示し、考察を行った。

## 1) 現代青年をめぐる今日の社会的状況の把握

第1の論点は、現代青年をめぐる今日の社会的状況の把握のために、青年期全般のライフスタイルや生き方に関する志向の変遷を、調査資料を用いて考察を行うということであった。

第1章で示したように、社会の脱産業化が進行するにつれて、青年たちを取り巻く環境は大きく変化した。中でも顕著なのがライフスタイルの緩慢化で、2003年度の文部科学省による『学校基本調査』によれば、高校進学率は1998年には95%を越え、大学進学率も1960年当時の4倍以上となっているほか、平均初婚年齢は2003年には男性が29.4歳、女性が27.6歳となっている。こうしたライフスタイルの変化は、子どもから青年、そして大人へという明確で段階的な移行を喪失させ、いわゆる「世代」というそれぞれの境界線を曖昧にした。その結果、青年たちは成人性の内容をつかみにくくなり、自らの立場の曖昧さからモラトリアムへの安住の度合いを強め、時間的な展望の拡散状態にあるといえる。

しかし他方で、脱産業化した消費社会では、市場が繰り広げる差異化キャンペーンによって、青年たちは安住の地から引きずり出され、常に“自分らしさとは何か”といった自己探求を繰り返すこととなる。加えて青年期には、その特定の発達段階だからこそたらされるであろう「青年性」の1つとして、客観的・抽象的認知処理能

力や独立性を發揮する能力などの情緒的変化、アイデンティティの形成など、自己に意識的な諸側面が顕在化してくると考えられる。これらは、身体的変化とともに青年期を特徴付ける大きな要因となっており、青年の社会との関係性とともに、こうした内面的な変化としての「青年性」を取り上げた考察を行うことが必要である。にもかかわらず、これまでの社会学的な青年期研究においては、十分にそのことが検討されてこなかった。そこで本稿では、本稿独自の視点として、この点を重視し、論を進めた。

先に述べた、青年期の延長による「世代性の拡散状態」の結果としてのモラトリウムへの安住という状況と、消費社会による自己探求の要請という現代青年が持つ今日的ジレンマは、彼らの心性、特に社会意識や生き方に対する志向性に大きな変化をもたらした。たとえば、1998年度実施のNHK放送文化研究所による調査を見ると、この20年余りで一番増加している16歳から29歳までの生活目標は「快＝その日その日を楽しく過ごす」、すなわち個人的な欲求を短期間でかなえていきたいという、個人的で現在志向的な価値観である。また、その他の統計資料からは、現代青年が現在志向の範囲の中で個人的な私的価値を重視しつつも、他者との親密な関係性を求めているといったアンビバレントな姿が示唆された。

近年の青年研究においては、私的価値を重視しながらも他者との関係を欲しているというアンビバレントな現代青年の姿は、彼らの心的負担のコントロールの表れであるとされる。

しかし今日の日本社会において、現代青年は、一方では、ライフサイクルの緩慢化にともなう「世代性の拡散状態」によって青年という存在や期間の指標の喪失、すなわち自身を位置付けるための枠組みの喪失・拡散という状況に置かれており、他方では、自己意識的であるという「青年性」が消費社会に利用されることによって、より一層の自己探求を強いられる、という状況におかれている。こうした両要素の関係は、彼らにある種のジレンマをもたらすだろう。なぜなら、世代性の拡散を横方向の拡がりと捉えるならば、差異化による自己探求は縦方向の拡がりと考えられ、現代青年は双方の拡がりに対応せざるを得ないという板ばさみの状況にあるからである。

それはつまり、現代青年が“拡散していく曖昧な立場の中で永続的な自己探求を行わなければならない”という状況にあることを示しており、彼らにさらなる「あなたらしさは何ですか？」という実存的な問いかけを投げかけ、心理的葛藤を生み出させる状況であるといえるだろう。そしてこの葛藤は、彼らによりいっそうの自己探求を強要している。以上のような、青年の移行期特有の身体的・内面的な変化と社会化システムの複雑な絡み合いによって生じるジレンマは、実に今日的なものといえ、現代青年の存在自体を揺るがす大きな苦悩を生み出しているといえる。

現代青年が置かれている、このような2つの困難な状況を勘案するならば、彼らは

“曖昧な立場のまま永続的な自己探求を行わなければならない”ために、より強く自分らしさを求めざるを得ないと考えられる。そしてだからこそ、自分らしさを求める過程で、鏡像的な存在である親密な他者の中に自らの存在を見出そうとし、結果としてそれが親密性を積極的に希求する姿になるといえる。

すなわち、統計資料にみられた、現代青年が現在志向の範囲の中で個人的な私的価値を重視しつつも、他者との親密な関係性を求めているといったアンビバレントな姿は、現代青年の心的負担のコントロールに基因するとのみはいい切れず、より強く自分らしさを求めるがゆえの姿だと考えられる。

したがって、ライフスタイルの緩慢化による「世代性の拡散状態」がもたらした青年という存在や期間の指標の喪失、および自己意識的な青年の特性とそれをいっそう活発化させる現代の消費社会による差異化の要請との軋轢という現代社会の構造こそが、今日の青年がアンビバレントに見える原因であり、それが彼らに特有の今日的苦悩をあたえている影響因子であると考えられる、との考察を行った。そして、そうした構造を踏まえた上で、現代青年の様相を明らかにするためには、実存的視座が有用であると位置付けた。

## 2) 現代青年への言説と彼らの現状の分析

第2の論点は、現代青年の特徴を端的に示していると思われる大学生、不登校児童・生徒、同居未婚子などについて各々の立場からの現代青年の実態を明らかにし、現状と問題点を分析・検討した。さらに、従来の研究とは異なった実存的な視座によって、質的・量的調査を用いて、社会に捉えられてきた青年像と彼らの実情とをより多角的に検討し、現代青年のあり様について考察を行った。

まずは第2章では、現代青年に関する言説を戦後の若者論研究の系譜をたどることによって捉え、若者論の一部として議論されてきた大学生像を改めて捉え直し、彼らの現代的な心性に注目した。さらに、消費社会の中で、既存の体制への対抗・変革から理想的な自己追求のための「商品による自己表現」(岩間, 1995, p.34-35)へと、自己の表現方法を変えていく若者たちの心性の変化を追い、自分探しや自分らしさといった現代青年を語るキーワードが出現する過程を捉えた上で、90年代に入って記号的差異化競争を放棄した若者たちが、下位性という世代としての役割を果たさなくなるまでを追った。そして、その後の若者論として現代青年に対する消極的な見解の主流となっている、彼らのあり様に関する見解に触れた。

そこでは、現代青年が差異化を求める市場に抱きこまれながら、記号的消費を繰り返す、結局のところはっきりとした自分らしさを得難いという葛藤を抱え続けること、そしてそれに疲れた結果、戦略的にモラトリアムの態度という社会適応手段を身に付け、親密な他者との関係性そのものに引きこもり、親密性の深淺や状況によって心理

的負担となる生き方や自分らしさを分散させている、あるいはコントロールしているという、社会学的青年論を中心に挙げた。社会学的青年論に見られるこうした消極的な適応という見解は、大学生に関する先行研究にも同様に見られた。しかし、自分らしさの表出の分散・コントロールという現代青年に対する社会適応論においては、自己に意識的で自分らしさを強く求めるという「青年性」が切り捨てられており、それらを再度加味した考察の必要がある。そのため、大学生において、親密性の深浅や状況によって分散・コントロールしているとされる生き方に関する態度について、インタビューを用いて検討した。

従来の社会学的青年論においては、現代の青年が、インスツルメンタルな親密性の消滅にともない、自らの生き方に対する積極的な意味希求を喪失しつつあると指摘されていた。しかし、第2章の大学生のインタビュー結果からは、むしろ彼らが他者との親密な関係を求めており、なおかつ、その関係性に委ねていた自らの生き方やあり方への承認を、自らの内側に求めることで、積極的に生き方やあり方に対する意味付与を行う姿が見て取れた。それはたとえば、大学生たちがインタビューで、実存的な不安の開示対象に両親や友人、恋人などの身近で親密な他者が選んでおり、そうした他者に実存不安を開示することで物事を前向きに考えられるようになったと述べていること、また、心の支えを自分自身の過去や内面であると位置付けることで心理的安定をはかり、現在の自らのあり方を肯定しようという試みが行われていたことなどからも明らかであるといえよう。

つまり、現代青年においては、これまで親密性の深浅や状況によって分散・コントロールしていると指摘されてきた生き方に関する態度は、失われていないと同時に、そうした態度を積極的に活用しながら自らの人生への糧としていく「内面へのコミットメント」という新たな示唆が得られたといえる。

第3章では、世界的に見ても就学率の高い現代日本において、学校というシステムを抜きに現代青年の様相を問い直すことは不可能であると考え、彼らを語る上で今なお最も大きな懸案事項となっている不登校問題を取り上げた。

ここではまず、不登校問題に現れているだろう現代青年の苦悩との関連性について取り上げ、不登校の側からではなく、むしろ「不登校にならなかった」者たちの視点で見ていくことで、より不登校の諸要因が明らかになるという立場に立って、調査し検討を行った。

その結果、不登校抑止において以下の3点が主な特徴として挙げられた。まず、(1) 不登校抑止要因を取り上げた結果、友人・両親・内的規範など、親密で特定の身近な他者存在の重要性や個人の持つ内的規範や社会的スキル、通学時間などの物理的状況の影響などが挙げられていた。(2) 生きる意味や存在意義の獲得などが相互に関連しながら登校行動への活力となっていることが明らかとなった。また、(3) 実際に不登

校になりかけたがならなかったものの文脈を分析したところ、不登校抑止要因が自らの内面で生き方に関する態度と相互に関連することによって、より明確に彼らに「登校する意味」を付与していることが示唆された。

たとえば、それは第3章のインタビューで、受験のストレスから不登校気分陥った事例Dが、友人の一言から「私はここに居場所があると思った。戻ってよいのだと思った。」というように、他者や環境など世界との信頼を取り戻し、自らの力とした彼女の内面が語られていたことからも見取れる。

こうした事例からは、自らの「生き方」に新たに意味付けを行うこと、いわば生き方に関する実存的態度を持つことこそが不登校抑止の基盤となり、それらが再帰的に登校行動を自らに明確に意味付け、不登校を抑止する過程となったことが明らかにされたといえるだろう。このように、事例で示した他者の存在や自分自身を糧に実存的な不安を乗り越えた過程は、先に述べたウィニコットの“survive”という経験をまさに体现しているものであると考えられる。

以上のように、不登校にならなかった者たちの調査からは、不登校抑止の諸要因と生き方に関する実存的態度を自らの内面で関連させて新たな文脈に置き換える、あるいは再解釈を試みることによって、登校行動はより明確に本人に意味付けられ、不登校気分からの脱却のきっかけとなるという傾向が見られたといえる。

「成熟」社会においては、一元的な価値観を維持し続ける学校と消費社会の主役となった現代青年の間に生まれた溝、および学校へ行くことの利点の喪失が、学校という存在意義を急速に脆弱化させ、また価値観の多様化による自己選択の責任性が不登校問題をさらに深刻化させていると考えられる。そのため、第3章の調査分析と考察によって得られた、自らの内面にある生き方に対する意味付けと関連させて「登校する意味」を付与するという過程が、学校へ行くことの新たなる意味付けに貢献すると考えられるだろう。

また、不登校という問題を通して見たとき、現代青年の内面には積極的な生き方に対する意味付けの過程が見受けられた。このように、不登校抑止要因を自らの内面にある「生き方」に対する意味付けと関連させて「登校する意味」を付与する過程は、まさに東・高塚（2000）が不登校の子どもたちに必要であると指摘した「一人一人の内面に自らを抛りどころとして歩いていく力」の獲得の過程といえるだろう。この過程からは、現代青年の内面に、これまで指摘されてきた消極的な適応状態とは異なる側面、すなわち積極的に自らの生き方を見出そうとする、生き方に関する実存的態度が存在することが明らかとなったといえる。

さらに、第4章においては、法律的には成人している年齢である青年たちが、未婚のまま親と同居しているという現状は、結婚あるいは経済的な自立を先送りしているという点において、モラトリアムに安住している現代青年の一側面を端的に現して

いると考えられた。このことから、近年注目を集めている同居未婚子に焦点をあてて考察を行った。

特に、こうした未婚子の親との同居という問題は、親が結婚しない未婚子の経済・家事の側面での親への依存を許す限りにおいて維持できるものでもあると考え、親世代、特に高齢者から見た同居未婚子への評価や意識について主に取り上げ、検討を行った。その結果、本調査から確認された高齢者と同居未婚子の関係における特徴としては、以下の3点が挙げられた。(1) 家事・経済の面で子どもの親への依存がある。それは、子どもや親が就業しているかどうかにかかわらず見られる傾向であった。(2) 既婚別居子の別居のきっかけを見ると結婚が大きな理由となることから、結婚していない子どもは、離家のきっかけがないために、年齢が高くとも親と同居して依存を続けている。(3) 親は子どもを未独立な存在と認識し、同居に対して違和感を覚えている。

以上の結果から、高齢者と同居未婚子との関係という双方の生活実態の特徴として、子や親の収入源や就業状態にかかわらず、家事分担や経済面で大半の子どもが、経済力を持ち健康度の高い高齢者に一方向的に依存しているといえる。しかし同時に、多くの高齢者は、結婚という指標を用いることによって未婚の子どもとの同居を「自然だから」、「子がまだ未独立だから」と位置付け、親役割を確保することに成功していた。つまり、結婚を自立の指標とした子どもの未独立なモラトリアム状態を、親役割確保という形で許容している高齢者と同居未婚子の関係は、非常に戦略的で今日的な親子関係であるとの考察を行った。

しかし、自立した生活を送るための努力が本人に委ねられている現代日本の状況を勘案すると、同居未婚子と高齢者との結婚を指標としたモラトリアムの互惠関係という戦略的な親子関係は、一方で現代青年に“自分らしくあるがままに生きる”という積極的な自己選択を可能にさせているという実存的な側面が存在する。実際、各種調査からは、多くの未婚者が自己の望む生き方や行動を優先するために積極的に「独身という戦略をとっている」といえ、同居未婚子の同居および未婚という状態は、彼らを、結婚を含めたさまざまな点において「モラトリアム状態」に囲い込むという側面とは別に、彼らの積極的な生き方の選択と見ることもできるだろう。ただし、親への生活の基礎条件での依存ということを勘案すると、同居未婚子問題には生き方に関する自己責任の希薄をも内包しており、今後の高齢者と同居未婚子の関係が懸念されることをも示した。

以上2つの論点から、下記のような考察を行った。

近年見られるような現在志向の範囲の中で個人的な私的価値を重視しつつも、他者との親密な関係性を求めているといったアンビバレントな現代青年の心性に大きな変



化をもたらした影響因子は、2つの困難な状況であると考えられる。それは、①ライフスタイルの緩慢化による「世代性の拡散状態」がもたらした青年という存在や期間の指標の喪失、および、②自己意識的な青年の特性とそれをいっそう活発化させる現代の消費社会による差異化の要請との軋轢、というものであった。

また、細分化された研究分野から、こうした現代青年の心性や様相の変化は、彼らが心的負担のコントロールという消極的な適応方法を身につけたことを表している、と指摘されることが多かった。しかし、現代青年は高学歴化する社会の中で、大学生活を送ることや一時的に不登校という形をとること、あるいは親と同居することによってモラトリアムに安住する傾向にあるものの、実存的な視座から現代青年を捉えなおした場合には、彼らの生き方やあり方に対する関心は失われていなかった。そしてむしろ、そこには生き方やあり方に対する積極的な意味付けである生き方に関する実存的な態度が見受けられたといえる。

たとえばそれは、大学生の調査において、「やさしさ」による回避というロジックを用いた者たちが、自分の生き方やあり方への承認を、自らの内側に求めることで補強し、積極的な意味付けを行うという語りがなされていたことから明らかにされた。またさらに、不登校にならなかったものに関する調査においても、その内面には、不登校気分を乗り越える際に用いられた、積極的な生き方に対する意味付けを行う過程が見受けられた。

すなわち、従来の研究で指摘されてきた、その場その場で自己拡散的な適応方法を取っているという、青年の消極的な適応状態とは異なる側面が、彼らの中に存在するということが明らかになったといえる。

それは、本章の冒頭部分で行ったグループインタビューでも明らかにされている。グループインタビューにおいては、既存の青年に関する言説に対して、あるいは議論の展開に対して、一定の見解の合致を見ることがなかった。こうした、青年に対する消極的な意見に賛成も否定もしない彼らは、一見、「若者は主体的ではない…」という言説を体現し、再生産しているように見える。しかし、話がまとまらないという状況は、逆に考えれば、彼らが既存の言説に関して合致していない、すなわち自分の中で「何かちがう」と感じているものがあるといえ、そこには彼らが求めているものあるいは彼らのコアな部分の存在が見えてくるといえるだろう。

すなわち、表層的に捉えると場当たりの消極的に見える現代青年という指摘は、彼ら全体の様相を捉えきれていないと考えられる。したがって、依然として現代青年の内面には、自らの生き方を模索しようとする生き方に関する実存的な態度が失われておらず、むしろ自らの存在に関して内側で積極的な意味付けを行っているといえるだろう。

### 5-3. 現代青年の生き方に関する実存的視座の可能性

#### 5-3-1. 若者論の再考

以上のように、実存的な視座から現代青年の様相を捉えるならば、社会的に不適応状態に思える現代青年には、親密性や自己中心性にもかかわらず、あるいはむしろそうした要素を持ちながらも、内面において積極的な意味付けへと構築し直す過程が存在することが明らかとなった。では、現代青年が表面的に消極的な対応を取っているに見えるのはなぜか。

そこには、「成熟」社会ならではの多様な構造が関連していると考えられる。つまり、社会の青年に対する見解および青年の持つ側面が多様化することによって、青年の様相が表層的には流されているように見えるため、現実の彼らのあり方と青年に対する諸論の間に「ズレ」が生じているといえるだろう。ここではこの「ズレ」に注目して、今一度、現代青年に関する言説の整理を行う。

これまで再三にわたって述べてきた通り、世代性の拡散による青年期の明確な指標の喪失および消費社会と現代青年との間に生まれた永続的な差異化、という軋轢は、青年たちに、自らの存在意義を急速に脆弱化させる結果となった。現代青年に見られるいくつかの逸脱傾向や、巷に溢れる生き方本の隆盛という状況は、それらを端的に示しているといえる。

加えて、「成熟」社会においては、生き方をめぐる多様な価値観が広く是認される傾向にある。生きることをめぐる価値観が多様化している社会においては、どう生きるかという選択は個人に委ねられている。つまり、人々が生き方の選択を主体的に行える状況にあるといえるだろう。ところが、生き方の主体的な選択を行なうためには、少なからず選択を行う“理由付け”が必要となってくる上に、主体的な選択の自由には必ず自己責任が生じる。消費社会に曝され続けた結果、モラトリアム安住と差異化という2つの困難な状況に置かれている現代青年に、さらにどう生きるかという自己責任を生じさせるという状況は、それ自体が、彼らによりいっそうの生きづらさや、悩み、苦しみを生み出させるといえるだろう。

確かに、現代青年に関する自己表出の分散、あるいはモラトリアム的態度による適応という議論は、こうした混迷する現状に対する彼らの消極的な適応という議論の展開になり易いと考えられる。実際、本章の最初に示したグループインタビューを見ると、青年の消極的な適応という既存の言説に肯定も否定もしない彼らの状況は、表層的には“若者は主体的ではない”という言説を体現しており、言説が再生産されているかのように見えた。実際には、彼らは既存の言説を肯定も否定もしないことによって、自らの生き方のコアとなる考えや自分らしさのようなものは必要だとの考えを持

っていることを示しているのだが、既に述べてきたような「成熟」社会ならではの多様な構造は、多様であるがゆえにそうした彼らの姿を見えにくくさせ、現代青年を表層的に、消極的な適応方法を会得して生きているように見せてしまうのである。

こうした状況は、表面的には、現代青年が自らの存在や生き方をめぐって、意味や意義を捉えにくい状態に陥っているように感じられるかもしれない。しかし、ここには渦中にある青年本人が、自らの存在や様相をめぐって、明確な意義がないことをよしとしているかどうかという問題が残されている。というのも、現代青年は、いまだ自己に意識的であるという「青年性」の側面を失っていないと考えられるためである。つまり、現代青年に対する消極的な言説を体現しているように見える彼らの状況は、あくまでも表面的なもので、むしろ、これまでのインタビューで示してきた個々人の語りからは、そうした言説とは異なる、内面に実存的な生き方態度を持つことによって生きづらさや悩み、苦しみに積極的に対処しているという語りが見られたのである。

先にも述べた通り、現代青年を取り巻く環境が、絶対的価値基準の喪失状態にあることは事実である。しかし、他方で、社会構造の変化によってもたらされた価値観の多様化という現代社会の潮流は、自己探求や自己実現という人々の欲求の地位を押し上げ、常に「生きることをめぐる主体的な選択」を迫っているといえる。このような、現代社会が求める「生きることをめぐる主体的な選択」を行うためには、少なくとも、生きることや自己の存在意義の選択を意味付ける「何か」、すなわち、選択を動機づける「何か」を強く感じなくてはならないだろう。ところが現代の研究の多くが、生き方、すなわち生きることを意味付ける「何か」を中心とした現代青年の捉え直しという視点を喪失している。

つまり、生き方を中心とした現代青年の捉え直しという視点の喪失が、現代青年の様相を捉える際に、表面的な消極的適応という見解へと導いてしまうといえるのではないだろうか。

第2章で大学生のインタビューから見られた、自らの内面にコミットメントする語りや、第3章における不登校にならなかった者の語りから見られた、内面にある生き方に対する意味付けと関連させて「登校する意味」を付与するという過程が示していることこそが、彼らの生きる意味の新たなる選択方法であり、積極的な社会適応の側面の表れであるといえる。すなわち、生きる意味の欠如、あるいは意味選択の難しさという消極的な青年論に対して、内面にコミットメントする語りや自らの「生き方」に対する意味付けの過程は、逆に積極的な適応を示しており、現代青年にはいまだそうした生き方に関する実存的態度が失われていないといえる。

以上のことから、現代青年が受けやすい「生きることに無気力」、「人間関係の希薄化」、「刹那主義」という現代若者論に共通している消極的な評価は、細分化された個々の理論で現代青年を捉えようとすることから生まれる「成熟」社会が抱える苦悩の表

象であり、社会システムの変化や彼らの現状を勘案するならば、広く包括的に現代青年の様相を示しているものではないといえる。

確かに、こうした「成熟」社会による自らの存在意義の急速な脆弱化や価値観の多様化による自己選択の責任性という今日的苦悩は、青年の様相をますます見えにくくしているといえよう。しかし、本稿でこれまで論証してきたように、実存的な視座から見ると若者は、社会システムのいかにかわらず、実存的な態度を持って、生き方を主体的に選択しているといえる。

ところで、絶対的価値基準が消滅し、価値基準の境界線が不明瞭になりながらも、絶え間なく繰り広げられる差異化キャンペーンによって、自分自身を目的化し探索し続けなくてはならないという、今日の日本社会が置かれている状況は、たやすく満足感や充実感の得られる自己を発見できないという、心理的フラストレーションや葛藤状態を抱えさせる。このような社会においては、人々は満たされることのない自分自身への満足感や充実感をもてあまし、空虚感や無意味感にとらわれると考えられるだろう。そしてまた、青年の持つ自らへの関心と内省は、彼らに積極的な挫折をさせないまま、自己の存在に対する空虚感や無意味感だけを残して、心理的苦悩を抱えながら生きていくしかない今日的苦悩をもたらす。つまり、現代の日本社会は、青年にとって、実に多くの困難な状況を抱えているといえるだろう。では、このような現状で若者はどうやって生きていけばいいのだろうか。

今日的苦悩を抱える現代社会において、生きることをめぐる主体的な選択を行うためには、少なくとも生きることや自己の存在意義の選択を意味付ける「何か」を感じ、会得しなくてはならないだろう。その理由は先に述べた通りである。

そもそも日本が「成熟」社会になる以前は、そうした「何か」を提供する機能を果たしてきたのは所属集団であったのではないだろうか。そして、その所属集団に与えられる役割の追行こそが、従来、人々が選択を行うための1つの価値基準となっていたと考えられる。たとえば「私は母親である」という第1次的な集団から、「私は大学生である」「私は〇×会社の部長である」など社会的所属まで、選択の価値基準を提供する所属集団はさまざまであろう。つまり、「私は母親である」という所属集団に準拠<sup>5</sup>しているものは母親役割を追行することで、社会的な地位を表す集団に準拠しているものはその集団に見合ったファッションあるいは行動を選び取ることで、生きることや自己の存在意義の選択の指標としていたといえる。

しかし、当然のことながら、1人の人間が所属する集団は1つではない。特に、今日のようにライフスタイルが多様化した社会においては、1人が属する所属集団は無数にあると考えられる。たとえば、現代の高校生を例に挙げると、彼らの所属集団は「××の娘・息子」あるいは「〇〇高校の×年生」、「バイトの仲間」、「趣味の△△関係の友達」、「消費社会の主役」など多次元でかつ多様なものとなり、もはやその所属

形態は蛸足状態といえるだろう。ところが「成熟」社会においては、価値観が多様化し、なおかつその価値は流動的である場合が多い。そのため、いくらたくさん触手を伸ばしてみても、蛸の本体は安定を保つことができず、むしろさらなる安定を図ろうと、常に触手を伸ばすあてを探している状況にあるといえる。このように、自己の存在意義の選択を意味付ける「何か」を感じるための集団が不安定であるという状況は、すなわち選択を意味付ける「何か」が不安定であることを示しており、現代青年が意味付けを得難い状況を示している。そのため、従来の所属集団とは違った形で準拠できる明確な「何か」が必要となるのである。

本稿ではそれが、生き方に関する実存的な態度であると考え、論じてきた。

つまり、社会のシステムの中に準拠対象を求めるのではなく、自らの内面にその準拠を見つけるのである。たとえば、大学生において、内面へのコミットメントによって自分の生き方やあり方を再構築していた過程、また不登校にならなかったものからは、登校行動の維持につながった条件が生き方の主体的な選択であったこと、あるいは未婚同居子のモラトリアムへの安住は、積極的な自己選択によるものであること、などを明らかにした。こうした現代青年を代表するだろうものたちに見られた、積極的な生き方への意味付けの過程、すなわち生き方に関する実存的態度の積極的な活用は、自己の存在意義に選択を意味付ける新たな準拠たりえるものであると考えられる。

序章でも述べたが、精神分析医で小児科医でもあったウィニコット (Winnicott, D.W., 1977=1965) の用語に“survive”という言葉がある。“survive”とは、いくら攻撃しても周りを取り巻く環境がそう簡単には壊れないという実感のことを指す。子どもは、時としてその活動性ゆえに環境を攻撃してしまうことがあり、その時、子どもは“想像を絶する不安”に陥る。しかし、環境はそう簡単には壊れることはない。こうして、子どもはその場を“survive=生き残る”経験をしていくのである<sup>6</sup>。この“survive”という感覚は、子どもたちに連続性を与え、自分自身でいさせてくれる基盤となる (Winnicott, D.W., 1977=1965)。それは、心理療法家であるロジャーズ (Rogers, C, 1951) が、あるがままの自分を受け入れることは、よりよく生きることにつながると述べていることに通じるだろう。“survive”とはこのように、困難な状況を大丈夫だと信じられる基盤、「生きていくために必要な楽観主義」(井原, 1996, p.101) を意味する言葉でもある。そして、青年の時期に得た“survive”という経験は、自分らしさ、あるいは自分らしくあるがままに生きるための核を作り上げていく重要な資源になるといえる。

今日、青年たちを取り巻く環境は複雑多岐にわたっている。メディアの発達によって青年たちの人間関係は急速に変化を遂げ、自らの生き方やあり方に関する実存的な苦悩や不安は大きく揺らいでいることだろう。しかし、こうした「青年」という独特

の時期だからこそ、自らの人生の方向性を選択・決定しようとする実存的な態度を持ち、それに準拠してこの時期を“survive”するという経験をするには、彼らにとって非常に重要な要素となるのではないだろうか。というのも、本章で論証してきた通り、青年期の実存的な不安を“survive”できたという経験は、彼らに連続性を与え、今後の人生において自分の人生は大丈夫だと信じられる基盤となるだろうからである。

自分の生きる意味や存在価値について考えることは、すなわち自分がいかに自分自身でいるか（＝あるがままの自分とは何か）を考えることでもある。このように、青年が生き方に関する実存的態度をもつということは、すなわち“survive”という力を探ることであり、ひいては「あるがままの自分である」ためにも必要な要素であろう。複雑な現代社会の中で自分らしさ求め、あるがままに生きていくためには、自らの内側に自分の拠り所となる場所をもつことが必要である。本稿の調査において、現代青年を代表するだろう者たちに見られた、積極的な生き方に対する意味付けの過程こそが、実存的な態度を持つことで積極的に“survive”している現代青年の姿であるといえるだろう。

### 5-3-2. 今後の課題

本稿においては、ライフスタイルの緩慢化による「世代性の拡散状態」がもたらした青年という存在や期間の指標の喪失、および自己意識的な青年の特性とそれをいっそう活発化させる現代の消費社会による差異化の要請との軋轢、という現代青年が置かれている2つの困難な状況が、現代青年の心性、特に社会意識や生き方に対する志向性に大きな変化をもたらしたと考えた。そして、統計資料によって、現代青年の現在志向かつ個人志向を重視しつつも、一方で他者との親密な関係性を求めている、といった彼らのアンビバレントな姿を捉えた。そして、種々の委細な研究分野からは、こうした現代青年が示す様相は心理的な負担のコントロール、すなわち消極的な適応方法という形で解消されていると指摘されてきたことを示した。

しかし、本稿においては、現代青年は、高学歴化する社会の中で親密な他者や自分自身に基軸をおきながら大学生活を送ったり、画一化した人間像を求める学校の中で他者や内面を支えに不登校気分を打破したり、親と同居することによってモラトリアムに安住しながらも、積極的かつ主体的に自らの生き方を選択したりする傾向があることを示した。これを、実存的な視座から捉え直すならば、青年期が持つ、生き方やあり方における意味希求の姿勢は失われておらず、さらに、彼らの内面には積極的で主体的な生き方に対する意味付けの過程が見受けられ、これまで指摘されてきた、その場その場で自己拡散的な適応方法を取っているという、消極的な社会適応の方法と

は異なる側面が存在するといえる。

そしてこのことから、表面的に拡散しているように見える現代青年は、確かに種々の葛藤状態にはあるものの、あくまでも彼らの内面の自己に意識的で、なおかつ自らの生き方を模索しようとする生き方に関する実存的な態度は失われておらず、むしろ内側で積極的で健康的な意味付けを行っているという指摘を行った。つまり、場当たりの見える現代青年の生き方は、生き方に対する心的負担のコントロールを意味するのではなく、彼らの内面にはむしろもっと積極的な意味付与としての生き方に関する態度、すなわち自分が自分らしくあろうとするような実存的な態度というものが根底に存在するとの指摘である。

近年、注目を集めている、いじめや学級崩壊、不登校、社会的引きこもりや非就労者、薬物依存、家庭内暴力などの社会問題は、今日の複雑な社会状況においては解決が難しいとされるものばかりである。しかし、依然として現代青年の中に、今回見出されたような自らの人生の方向性を選択・決定しようとする実存的な態度があるという視点に立てば、その態度に準拠することは今日的苦悩を生きる青年たちにとって「ライナスの毛布」となり得るといえるだろう。今後はこうした多様な若者たちの現状を考慮し、彼らを定点的に捉えるのではなく、一人一人の拠りどころとなる「方向性のある自分」に焦点を当てた研究が必要であり、本稿で得られた結果からは実存的視座の積極的な可能性が見出せたといえる。

ところで本稿の目的は、これまで論じられてきた消極的な現代青年の様相を、実存的な視座から多角的、包括的に考察することであった。それゆえに、本稿においては、間口を広くすることによって研究の掘り下げが薄くなることを承知の上で、研究分野を1つに絞らずに、多角的に様々な青年期の局面を検討することを重視した。そのため、個々の研究分野における先行研究やこれまでの論理展開への言及に少なからず不十分な点があると考えられる。今後は、それぞれの局面をより掘下げた研究を行っていくことが課題だといえよう。

さらに、本稿で用いた調査では、現代青年の特徴を端的に示していると思われる大学生、不登校児童生徒、同居未婚子などといった問題を取り上げ、各々の立場からの現代青年の実態を明らかにし、現状と問題点を分析し、検討した。

本調査においては、現代青年の姿を明確に表示することを目的としたために、その中でも現在の自分の状況や内面をより語りやすい人間として、一定の知識や言語能力を有すると考えられる者を調査対象者として選んでいる。しかし、いうまでもなく、こうした調査対象者が全ての青年のあり方を表しているわけではない。青年という存在は多種多様なものであり、現代社会を生きる青年は、こうした対象者だけではないといえよう。

ただ、本稿においては、消極的な枠組みの中での現代青年へのアプローチという従

来の視点を脱し、実存的な視座から現代青年の様相を多角的・包括的に考察した結果、彼らの生き方を積極的な側面から捉えなおすことが可能となったといえる。こうしたことから、現代青年の様相を捉える上での1つの新しい機軸を見出せたと考えている。むしろ今後の課題としては、こうした機軸をもとに、今回とりあげられなかった、いわゆるフリーターやNEET（Not in Employment, Education and Training）<sup>8</sup>、各種専門学校生や若年就労者たちを含めた、よりいっそう広範の青年の様相を視野に入れた研究を行いたいと考えている。もちろん今回取り上げた大学生、不登校児童・生徒、同居未婚子なども、現代青年の特徴を多く含んでいるといえる。しかし、その他にも主体的な選択という観点から捉えるならば、職業選択を先延ばしにしているとされるいわゆるフリーターや、あるいは近年その増加が顕著であるとされる学業・職業の双方の未決定者としてのNEETなどは、職業の主体的な選択を行えていないという点において、生き方への選択が行えていないとの解釈も可能であるため、今後の研究対象に含んで行くべき存在だと考えている。また、各種専門学校の生徒などにも、その学業の専門性の高さから、早くから生き方を選択している存在として注目すべきだろうし、数の減少を指摘されてはいるものの、中学や高校を経て正社員として職に就いている若年就労者などの存在も軽視してはならないだろう。こうしたものの中にも、大学生や不登校児童・生徒、同居未婚子にみられたような、“自分が自分らしくある”ということ志向する生き方に関する実存的態度を持った者が多く存在すると考えられる。そうした者たちと今回調査した者たちとの生き方の違いを明確にすることも、今後の研究の課題である。



- 
- 1 なお、このグループインタビューは現代青年について当事者である彼らがどのような語りを用いるかということを中心にしている。そのため、属性は異なるものの「現代青年」という同質性を持ったグループ構成を心がけた。また、グループインタビューによって得られた録音データは調査責任者によってトランスクリプトされ、それらを分析の対象とした。
  - 2 このインタビューは共同研究者である近のインタビュー調査と同時に行なっているため、先の4つは近の調査のためになされた質問である。4つの質問は以下の通りである。なお、これらは9人それぞれに回答を求めるFGI（フォーカスグループインタビュー）の手法をとっている。①自分を「大人」だと思いませんか。その理由は何ですか？②身近で「大人」だと思う人はいますか。その理由は何ですか？③「大人」の指標は何だと思いませんか？④職業的に自立していなければ大人ではないという社会的な見解についてどう思いますか(近, 2003)。
  - 3 これまでの流れをここでまとめておく。近の最後の質問を受けて、職業選択場面で大会社に努めるのか、それとも自らの目的を重視して選択をするのかという議論が展開される。そこから、自分がどのような人間になりたいかといった発言がなされていく。
  - 4 人の自我には氷山の海面から出ている部分と海面下に隠れている部分があり、海面に出ている部分は意識されている部分であるが、そうでない部分は無意識な部分であるとする、例え話である。
  - 5 ここで用いた準拠という概念は、マートン (Merton, R.K., 1961=1949) の示した準拠集団の「準拠」と同概念である。マートンの述べた準拠集団は、個人が世界を評価したときに意識的に準拠する集団的価値がある場合に、その集団のことを言う。そのため、準拠集団が、自分が所属する集団と一致しないケースもある。
  - 6 ウィニコット (Winnicott, D.W., 1977=1965) の述べたこの考えは、幼少期を対象に語られたものであるが、青年期という文脈の上においても、非常に大事な考えであると思われる。また、“survive=生き残る”ということは、何も他人を蹴落としてその状況を生き延びたり乗り越えたりすることではない。どのような環境であろうとも、それを受けとめ、信頼することを指す。
  - 7 ウィニコット (Winnicott, D.W., 1977=1965) は、幼児がいつも肌身離さず持っていて、それがなくなると不安でしょうがなくなるものを移行対象 (traditional object) と呼んだ。ライナスの毛布とは、この移行対象を語る際によく用いられる比喻である。なお、ライナスとは、スヌーピーで有名なピーナッツ・シリーズに出てくるピアノの上手な男の子である。彼はいつも指をしゃぶりながら毛布の端を握っており、いくら姉のルーシーに「現実を直視しなさい！」といわれても、不安になってしまうのでそれを手放せない。彼にとって、この毛布は、現実を生き残るための大切なツールなのである。
  - 8 フリーターやNEETは、正式な学術名ではない。内閣府によるフリーターの定義によると、15-34歳の年齢層のうち(学生と主婦を除く)、パート・アルバイト(派遣を含む)および働く意志のある者のことを言う(『国民生活白書(平成15年版)』p.48)。また、NEETとは、いわゆる若年無業者のことで、職に就いておらず、学校機関に所属もしておらず、就労に向けた具体的な動きをしていない人々を指す名称で、イギリスでまず問題とされた者のことを言う(玄田・曲沼, 2004)。

## 謝辞

本論文を執筆するにあたり、多くの方々にご支援とご指導を賜りました。この場をお借りして、御礼を申し上げたいと思います。

まず、インタビュー調査およびアンケート調査にご協力くださいました皆様および関係者各位に、心より感謝申し上げます。お一人お一人のお名前をここにあげることができませんが、皆様のおかげで本論文を完成することができました。ありがとうございました。

また、論文の作成に当たっては、多くの先輩方や同窓生、後輩の方々にサポートしていただきました。何度となく論文作成を投げ出しそうになった私を、時にはなだめ、時には叱咤激励してくださった皆様に、心より感謝申し上げます。皆様のおかげで、なんとか今日の日を迎えることができました。

調査フィールドへのご紹介、ならびに学部時代から長きにわたって数々のご支援とご指導をくださいました、早稲田大学人間科学部 菅野純教授に厚く御礼申し上げます。先生には、一人の人間としての心の持ち様を教えてくださいました。ありがとうございました。

また、本論文の副査でもあり、修士課程から数々のご支援とご指導をいただきました創造学園大学 濱口晴彦教授に心より感謝致します。先生には、私の研究の土台となっている幅広い視座から物事を捉える術を教えてくださいました。ありがとうございました。

同じく、本論文の副査である早稲田大学人間科学部 蔵持不三也教授に心より感謝申し上げます。お忙しい中快く副査をお引き受けくださりまして、ありがとうございました。

なお、副査の両先生方には、多くの貴重なご指摘をいただきました。先生方のご指摘をいかしていくことが、今後の私の研究者としての務めだと考えております。

最後に、本論文をご指導くださいました早稲田大学人間科学部 嗟峨座晴夫教授に深謝致します。博士課程入学から本論文の執筆に至るまで、迷走する私の考えに根気よく耳を傾け、あたたかいご支援と的確なご指導をいただきました。先生のご支援とご指導がなければ、今日のこの日はありませんでした。本当にありがとうございました。

加藤 陽子

## 文献

### 邦文文献

- アリエス,Ph., 1980, 杉山光信・杉山恵美子訳『<子供>の誕生 : アンシアン・レジーム期の子供と家族生活』みすず書房 (=Aries,Ph., 1973, *L'enfant et la vie familiale sous l'Ancien Regime.*, Paris : Editions du Seuil.).
- アーレント,H., 1973, 志水速雄訳『人間の条件』筑摩書房 (=Arendt.H., 1958, *The human condition.*, Garden City,N.Y. : Couvleday.).
- 東清和・高塚雄介編, 2000, 『学校社会とカウンセリング 教育臨床論』学文社.
- 浅野智彦, 1999, 「親密性の新しい形へ」富田英典・藤村正之編『みんなぼっちの世界』星社厚生閣.
- 浅野智彦, 2002, 「都市青年の意識と行動」『日本社会第 76 回学会発表論文集』日本社会学会論文集, 41.
- 生田憲三, 1994, 「不安」見田宗介・栗原彬・田中義久編『社会学事典』弘文堂.
- 生月誠・原田広太郎, 1998, 「強迫観念の治療に於ける行動療法とロゴセラピーとの併用に関する研究」『カウンセリング研究』, 20, 138-145.
- 磯部潮, 2004, 『不登校を乗り越える』PHP 研究所.
- 伊奈正人, 1995, 『若者文化のフィールドワーク』勁草書房.
- 井上俊, 1973, 『死にがいの喪失』筑摩書房.
- 井上俊, 1977, 『遊びの社会学』世界思想社.
- 井原成男, 1996, 『ぬいぐるみの心理学—子どもの発達と臨床心理学への招待』日本小児医事出版社.
- 今津孝次郎, 1995, 「社会科とライフコース」宮島喬編『現代社会学』有斐閣.
- 磯部潮, 2004, 『不登校を乗り越える』PHP 研究所.
- 市川隆一郎・中山茂, 1994, 「老年期の適応と心理・社会的要因」市川隆一郎・藤野信行編『増補版 老年心理学』診断と治療社.
- 伊田広行, 2003, 『シングル化する日本』洋泉社.
- 石川勇一, 1998, 『自己実現と心理療法 実存的苦悩へのアプローチ』実務教育出版.
- 伊藤美奈子, 1990, 「現代青年における同一性と親密性との関連について」『心理学評論』, 42(1), 35-41.
- 岩間夏樹, 1995, 『戦後若者文化の光芒』日本経済新聞.
- 氏原寛・小川捷之・東山紘久他, 1992, 『心理臨床大事典』培風館.
- ウィニコット,D.W., 1989, 北山修監訳『抱えることの解釈』岩崎学術出版社 (=Winnicott,D.W., 1972, *Holding and Interpretation.*, Mark Paterson Associaters,London.).
- ウィニコット,D.W., 1977, 牛島定信訳『情緒発達の精神分析理論』岩崎学術出版社 (=

- Winnicott.D.W., 1965, *The Maturation Processes and the Facilitating Environment*, Hogars Press,London).
- 江原由美子・山田昌弘著, 1999, 『ジェンダーの社会学：女と男の視点からみる現代日本社会』日本放送出版協会.
- 遠藤公久, 1997, 「交友関係」加藤隆勝・高木秀明編『青年心理学概論』誠信書房.
- 遠藤美奈, 2004, 「健康的で文化的な最低限度の生活」の複眼的理解—自律と関係性の観点から— 齋藤純一編著『福祉国家／社会的連帯の理由』ミネルヴァ書房.
- 遠藤由美, 1992, 「自己認知と自己評価の関係～重み付けをした理想自己と現実自己の際スコアからの検討」『教育心理学研究』, **40**, 157-163.
- NHK 文化放送局編, 2000, 『現代日本人の意識構造 第5版』日本放送協会.
- 大井正己, 1995, 「青年期危機」岡本夏木・清水御代明・村井潤一監修『発達心理学辞典』ミネルヴァ書房.
- 岡堂哲雄, 1993, 「PIL Part-A」PIL 研究会編『生きがい』河出書房新社.
- 小此木啓吾, 1978, 『モラトリアム人間の時代』中央公論社.
- 小此木啓吾, 2000, 「現代における自己のあり方—二つの自己概念—」『PSIKO』, **8**, 冬樹社, 31-33.
- 尾崎仁美・上野淳子, 2001, 「過去の成功・失敗経験が現在や未来に及ぼす影響 —成功・失敗経験の多様な意味—」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』, **27**, 63-87.
- 尾崎仁美, 1999a, 「青年の将来展望に関する一考察 —将来次元の重要性を考慮する意義—」『大阪大学教育学年報』, **4**, 87-99.
- 尾崎仁美, 1999b, 「青年の将来展望に関する研究 —個人における将来展望の重要性を考慮して—」『人間科学研究』, **1**, 187-198.
- 落合良行・伊藤裕子・斎藤誠一, 1993, 『青年の心理学』有斐閣.
- 落合恵美子, 1994, 『21世紀の家族—家族の戦後体制の見かた超えかた』有斐閣.
- 大野道邦, 2000, 「近代と社会学」『社会学の理論』有斐閣ブックス.
- 大倉得史, 2002, 『拡散 diffusion—アイデンティティをめぐる僕たちは今—』ミネルヴァ書房.
- 大橋照枝, 1993, 『未婚化の社会学』NHKブックス.
- 影山任佐, 1999, 『「空虚な自己」の時代』日本放送出版協会.
- 葛西康子, 2000, 「「生きる意味」を求めて自傷行為を繰り返したケースの事例研究」『心理臨床学研究』, **18**, 25-37.
- 笠原嘉, 1981, 『不安の病理』岩波書店.
- 笠原嘉, 1986, 『アパシー・シンドローム 高学歴社会の青年心理』岩波書店.
- 柏木恵子, 1998 「事例研究法と調査法」東洋・大山正他編『心理用語の基礎知識』有斐閣ブックス.
- 梶田叡一, 1988, 『自己意識の心理学 (第2版)』東京大学出版会.
- 梶田叡一, 1991, 『内面の心理学』大日本図書.

- 加藤潤, 2002, 「近代言説としての青年」『名古屋女子大学紀要』, **48**, 23-26.
- 加藤陽子, 2003, 「大学生の現代性に関する実存的考察—戦後若者論の系譜を踏まえて—」『人間・エイジング・社会』, **6**, 28-35.
- 加藤陽子, 2002, 「青年期における実存不安に関する一研究」, 早稲田大学大学院人間科学研究科修士論文 (未公刊).
- 加藤隆雄, 2001, 「過剰な自己中心性をつくりあげるシステム」『児童心理』, **55**, 1618-1623.
- 神谷美恵子, 1980, 『生きがいについて』, みすず書房.
- 神谷美恵子, 1981, 『存在の重み; 神谷美恵子著作集 6』 みすず書房.
- 神谷美恵子, 1981, 『こころの旅; 神谷美恵子著作集 3』 みすず書房.
- 川崎賢一・芳賀学・小川博司編, 1995, 『都市青年の意志と行動』 恒星社厚生閣.
- 川崎賢一, 1999, 「地球社会の文脈から見た日本の青年」 富田英典・藤村正之編『みんなぼっちの世界』 恒星社厚生閣.
- 菅野純, 2002, 『教師のためのカウンセリングワークブック』 金子書房.
- 菅野純, 2003, 「教師のためのカウンセラートレーニング(9)不登校に取り組む(4)私が不登校にならなかった理由」『児童心理』, **56**(17), 金子書房, 1775-1768.
- 岸良範, 1999, 「コンビニ, ポケベル, テレクラ, 援助交際にみる心のゆらぎ」『児童心理』, **2**, 710.
- ギデンス,A., 1995, 松尾精文・松川昭子訳, 『親密性の変容—近代社会におけるセクシャリティ、愛情、エロティシズム—』 而立書房 (=Giddens, A., 1992, *The transformation of intimacy : sexuality, love, and eroticism in modern societies*, Stanford, Calif.: Stanford University Press.).
- ギリス,J.R., 1985, 北本正章訳『<若者>の社会史ヨーロッパにおける: 家族と年齢集団の変貌』新曜社(=Gillis,J.R.,1974, *Youth and history: tradition and change in European age relations, 1770-present.*, New York : Academic Press, 1974.).
- キルケゴール,S., 1963, 榊田啓三郎訳『死にいたる病—教化と覚醒のためのキリスト教的, 心理学的論述(キルケゴール全集 24)』筑摩書房(=Kierkegaard,S., 1849, *Sygdommen til Døden.En christerig psykologisk Udvikling til Opbygges og Opvækkeles.*, Af Anti-Climacs., Udgivet af S.Kierkegaard., Kjevenhaven.).
- 串崎真志, 2002, 「学生生活と無気力論」 溝上慎一編『大学生論—戦後大学生の系譜を踏まえて—』ナカニシヤ出版.
- 久世敏雄編, 1994, 『現代青年の心理と病理』 福村出版.
- 久世敏雄, 2000 「青年期とは」『青年心理学事典』 福村出版.
- 工藤敬吉, 2000, 「高い勤労意欲, 強い老いへの不安—「少子・高齢社会と生活」調査から—」『放送研究と調査』, **6**, 30-45.
- 久保真人, 2000, 「バーンアウト」 久世敏雄・齋藤耕二監修『青年心理学事典』.
- 栗原彬, 1981, 『やさしさのゆくえ=現代青年論』 筑摩書房.

- ケニンストン,K., 1973, 庄司興吉・庄司洋子訳『ヤング・ラディカルズ—青年の歴史』みすず書房(=Kiniston, K., 1968, *Young Radicals.*, Harcourt, Brace&World.).
- 見田宗介, 1980, 「現代青年の意識の変貌」NHK 放送世論調査所編『第2版 日本人の意識』至誠堂.
- 玄田有史・曲沼美恵, 2004, 『ニート：フリーターでもなく失業者でもなく』幻冬社.
- 小坂守孝・吉田悟, 1992, 「ハーディネス, ストレッサーと心理的健康と関係性：管理職者を対象とした調査研究」『慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要』, **34**, 43-50.
- 小杉礼子, 1990, 「職業キャリアと労働をめぐる若者の価値観」日本労働研究機構調査報告書『高卒者の進路選択と職業志向 初期職業経歴に関する追跡調査より』日本労働研究機構.
- 小谷敏, 1993, 『若者論を読む』世界思想社.
- 小谷敏, 1998, 『若者たちの変貌』世界思想社.
- 近藤敏行, 1999, 「意識」小林利宣編『教育臨床心理学中辞典』, 北大路書房.
- 近紀子, 2003, 『大人になることとは何か—フリーターの語りから—』早稲田大学修士論文.
- 酒井順子, 2000, 『少子』, 講談社.
- 嵯峨座晴夫編, 2001, 『少子高齢社会と子どもたち：児童・生徒の高齢化問題に関する意識調査を中心に』中央法規出版.
- 坂田健, 1982, 「現代青年の幸福感」依田新編『現代青年心理学講座7 現代青年の生きがい』金子書房.
- 桜井厚, 2002, 『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方』せりか書房.
- 桜井茂男, 1997, 『現代に生きる若者たちの心理』風間書房.
- 作田啓一, 1981, 『個人主義の運命—近代小説と社会学』岩波新書.
- 佐藤修策, 1959, 『登校拒否ノート：いま, むかし, そしてこれから』北大路書房.
- 佐藤俊樹, 1993, 『近代・組織・資本主義—日本と西欧における近代の地平』ミネルヴァ書房.
- 佐藤文子, 1986, 「実存心理検査—PIL—の検討□—態度スケールを中心に—」『*Artes Liberales*』, **39**, 125-140.
- 佐藤文子, 1993, 「PIL (Purpose-in-Life Test) 実存心理検査」上里一郎監修『心理アセスメントハンドブック』西村書店.
- 佐藤文子・山口浩・田中弘子・斎藤俊一・岡堂哲雄・千葉征慶, 1990, 「PIL (実存心理検査) 日本版に関する基礎的研究 2— 1: Part・A の項目分析—」『日本心理学会第54回大会発表論文集』, 125.
- 佐原洋, 1989, 『日本的成熟社会論—20世紀末の日本と日本人の生活—』東海大学出版会.
- サルトル,J.P., 1956, 松浪信三郎訳『存在と無』人文書院(=Sartre,J.P., 1943, *L'Être et le néan.*, Editions Gallimard.).
- サルトル,J.P., 1962, 平井啓之訳『方法の問題』人文書院(=Sartre,J.P., 1960, *Questions de methode.*, Edition Gallimard.).
- 清水弘司, 2002, 『何が子どもの転機になるか 自分なりの人生を生きる子どもたち』新曜社.

- 清水賢二, 1997, 『漂流する少年たち』 恒星社厚生閣.
- 清水勇, 1992, 『なぜ学校へ行けないのか?—登校拒否時の理解とその援助—』 ブレーン出版.
- 柴野昌山, 1995, 『現代の青少年: 自立とネットワークの技法』 学文社.
- 白井利明, 1997, 『時間的展望の生涯発達心理学』 勁草書房.
- 白井利明, 2003, 『大人へのなり方 青年心理学の視点から』 新日本出版社.
- 霜山徳爾, 1983, 「不安」 依田新監修『新・教育心理学事典』 金子書房.
- 関沢英彦, 2002, 「ケータイ時代の消費者増と新しいマーケティングの姿」 関沢英彦・鷺田祐一・ミカエル・ビョルン『シチュエーションマーケティング』 かんき出版.
- サリバン,H.S., 1976, 中井久夫・山口隆共訳『現代精神医学の概念』みすず書房(=Sullivan,H.S., 1953, *Conceptions of modern psychiatry.*, W.W.Norton&Company Inc.).
- 千石保, 1991, 『「まじめ」の崩壊 平成日本の若者たち』 サイマル出版.
- 千石保, 2001, 『新エゴイズムの若者たち : 自己決定主義という価値観』 PHP 研究所.
- S.ヴォーン・J.S.シューム・J.シナグブ 井下理 (監訳), 1999, 『グループ・インタビューの技法』 慶応義塾大学出版会.
- スペンサー・ジョンソン, 2000, 『チーズはどこに消えた?』 扶桑社.
- 高井範子, 1994, 「実存分析的視点による現代人の生き方意識の検討」『人間性心理学研究』, **1**, 62-73.
- 高井範子, 1999a, 「実存分析的視点による生き方態度の発達の研究—実存的生き方態度インベントリー (EAL) による検討—」『大阪大学教育学年報』, **4**, 101-114.
- 高井範子, 1999b, 「実存分析的視点による生き方態度の発達の研究□—PIL と自己受容による検討—」『大阪大学教育学年報』, **5**, 59-70.
- 高井範子, 2000, 「自己受容と生き方態度に関する検討」『自己心理学研究』, **1**, 57-71.
- 高井範子, 2001, 「他者からの受容と生き方態度に関する研究—存在受容間尺度による検討—」『大阪大学教育学年報』, **6**, 245-254.
- 高井範子, 2002, 「「生かされている自己」意識に関する研究 2 青年期・成人期を中心にして」『教育心理学第 44 回総会発表論文集』, 101.
- 高橋祥友, 1998, 「青少年の自殺」『思春期青年期精神医学』, **8** (1), 21-31
- 高橋啓介, 2000, 『「成熟」へのレッスン 「成熟社会」への心理社会学的分析』 ナカニシヤ出版.
- 高橋勝, 2002, 「文化変容のなかの子ども: 経験・他者・関係性」 東信堂.
- 田中治彦編著, 1999, 『子ども・若者の居場所の構想: 「教育」から「関わりの場」へ』 学陽書房.
- 武石久美子, 1994, 「ポスト「孝行社会」の親と子」 ニッセイ基礎研究所編著『日本の家族はどう変わったか』 日本放送出版協会.
- 辻大介, 1999, 「若者のコミュニケーションの変貌と新しいメディア」 橋本良明・船津衛編『子ども・青少年とコミュニケーション』 北樹出版.

- 都築学, 1984, 「青年期の時間的展望の研究」『大垣女子短期大学研究紀要』, **19**, 57-65.
- 都築学, 1993, 「大学生における自我同一性と時間的展望」『教育心理学研究』, **41**, 40-48.
- デュルケーム,E, 1976, 佐々木交賢訳『教育と社会学』誠信書房(=Durkheim,E., 1922, *Education et sociologie / par Emile Durkheim...Introduction de Paul Fauconnet...*, Paris : F. Alcan.).
- 轟亮, 1998, 「『まじめ』は崩壊したか? ~2時点観の比較分析を中心に~」尾嶋史章(研究代表者)『平成 8-9 年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書 現代高校生の進路と生活~その構造と変容~』, 31-53.
- 鑪幹八郎, 1989, 「登校拒否と不登校」『児童青年精神医学とその近接領域』, **30**, 260-64.
- 永田夏来, 2003, 「結婚の原理とその論理構成」早稲田大学大学院博士論文(未刊行).
- 永島聡・山田政男, 2000, 「高等学校における不登校から中途退学に至った事例への教育相談—ロゴセラピー的観点からのアプローチ」『人間学論集 (大阪府立大学人間科学研究会)』, **31**, 71-95.
- 長尾博, 1991, 『ケース 青年心理学』有斐閣ブックス.
- 中島健一, 1996, 「高齢者の生きがい支援としての『こころのケア』」『リハビリテーション心理学研究』, **24**, 81-111.
- 中野収・平野秀秋, 1975, 『コピー体験の文化』時事通信社.
- 中野収, 1991, 『若者文化人類学—異人としての若者論』東京書籍.
- 西平直喜, 1985, 『青年心理学方法論』有斐閣.
- 西平直喜・久世敏雄 (編), 1988, 『青年心理ハンドブック』福村出版.
- 西平直喜・吉川成司編著, 2000, 『自分さがしの青年心理学』北大路書房.
- ニーチェ,F., 1993, 吉澤伝三郎訳『このようにツァラトゥストラは語った—万人のための,そして何びとのためのものでもない—冊の著書』ちくま学芸文庫版ニーチェ全集 9, 10 (= Nietzsche,F., 1833-35, *Also sprach Zarathustra.Ein Buch für Alle und Keinen.*).
- ハーバーマス,J., 1994, 細谷貞雄・山田正行訳『公共性の構造転換: 市民社会の一カテゴリーについての探究』未来社(=Habermas,J., 1990, *Strukturwandel der Öffentlichkeit : Untersuchungen zu einer Kategorie der burgerlichen Gesellschaft : mit einem Vorwort zur Neuauflage 1990.*, Frankfurt am Main : Suhrkamp.).
- 芳賀学, 1999, 「自分らしさのパラドクス」富田英典・藤村正之編『みんなぼっちの世界』恒星社厚生閣.
- 博報堂生活総合研究所, 1985, 『「分衆」の誕生: ニューピープルをつかむ市場の戦略とは』日本経済新聞社.
- 濱口晴彦, 1994, 『生きがいさがし—大衆長寿時代のジレンマ—』ミネルヴァ書房.
- 濱口晴彦, 2003, 「老若共同参画社会基本法を提案する」『生きがい研究』, **9**, 4-15.
- 萩原健次郎, 2001, 「子供・若者の居場所の条件」田中治彦編著『子ども・若者の居場所の構想「教育」から「関わり」の場へ』学陽書房.



- 服部智・吉田昭久・小熊均, 1990, 「「自己受容」の基底因—実存不安との関連の分析的検討—」『茨城大学教育学部紀要(教育科学)』, **39**, 199—216.
- ハイデガー, M., 1971, 原祐・渡辺二郎訳『時間と存在』(『世界の名著 ハイデガー』)中央公論社 (=Heidegger, M., 1927, *Sein und Zeit*, Halle : Max Niemeyer.).
- 長谷川仁, 1994, 「戦後日本の家族はどう歩んできたか」ニッセイ基礎研究所編著『日本に家族はどう変わったか』日本放送出版協会.
- 林雄二郎, 1982, 『成熟社会日本の選択』中央経済社.
- 平川和子, 1992, 「成人期の発見と女性—親密性をめぐる男／女—」『精神療法』, **18**(6), 522-528.
- 平井洋子, 2000, 「量的研究法」下山晴彦編『臨床心理学研究の技法』福村出版.
- 廣松渉, 1969, 『マルクス主義の地平』勁草書房.
- ピアジェ, J., 1967, 波多野完治・滝沢武久訳『知能の心理学』みすず書房 (=Piaget, J., 1967, *La psychologie de l'intelligence*, Paris : A. Colin.).
- 藤岡秀樹, 1986, 「青年の「生き方」の類型と時間的展望」『教育心理』, **34**, 138-143.
- 藤野文代・林かおり・前野三枝子, 1999, 「大学生のバーンアウトに関する研究—PIL, Self-Esteem, タイプ A 尺度による分析」, 『群馬保健学紀要』, **20**, 97-102.
- 藤原喜悦, 1982, 「生きがいの探求」『現代青年の生きがい』金子書房, 57-106.
- フランクフル, V.E., 1961, 霜山徳爾訳『夜と霧 フランクフル著作集 1』みすず書房 (=Frankle, V.E., 1946, *Ein Psycholog Erlebt das Konzentrationslager : Osterreichische Dokument zur Zeitgeschichte 1*, Wien : Jugend und Volk.).
- フランクフル, V.E., 1986, 霜山徳爾訳『死と愛 フランクフル著作集 2』みすず書房 (=Frankle, V.E., 1946, *Arztliche Seelsorge*, Wien : Franz Deuticke.).
- フランクフル, V.E., 1994, 「全人的医療の核としての実存分析 (ロゴセラピー) (特別講演)」永田勝太郎訳 池見酉次郎追加発言『心身医学』, **34** (1), 27-31.
- フランクフル, V.E., 2002, 宮本忠雄訳『時代精神の病理学 心理療法の 26 章』みすず書房 (=Frankle, V.E., 1955, *Pathologie Des Zeitgeistes : RundfunkVortrage uber Seelenheilkunde*, Wien : Franz Deuticke.).
- フロム, E., 1977, 佐野哲郎訳『生きるということ』紀伊国屋書店 (=Fromm, E., 1976, *To have or to be?*, New York : Harper & Row.).
- フロム, E., 1965, 日高六郎訳『自由からの逃走』東京創元新社 (=Fromm, E., 1941, *Escape from freedom*, New York : Holt, Rinehart and Winston.).
- 保坂亨, 2000, 『学校を欠席する子どもたち 長期欠席・不登校から学校教育を考える』東京大学出版会.
- ボードリアール, J., 1979, 今村仁司・塚原史訳『消費社会の神話と構造』紀伊国屋書店 (=Baudrillard, J., 1970, *La societe de consommation : ses mythes, ses structures*, Paris : Gallimard.).
- 増井武士, 2002, 『不登校児から見た世界—ともに歩む人々のために』有斐閣選書.

- 松田美佐, 2000, 「若者の友人関係と携帯電話利用—関係希薄化論から選択的關係論へ」『社会情報学研究』, **4**, 111-112.
- 松沢員子, 1993, 「下位文化」森岡清美・塩原勉・本間康平編『新社会学辞典』有斐閣.
- 松浪信三郎, 1987, 『実存主義』岩波新書.
- 松原隆一郎, 2000, 『消費資本主義のゆくえ—コンビニから見た日本経済—』ちくま新書.
- マートン,R.K., 1961, 森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎訳『社会理論と社会構造』みすず書房(=Merton,R.K., 1949, *Social theory and social structure* ., Chicago: Free Press of Glencoe.).
- 三木清, 1950, 『人生論ノート 三木清著作集 16』岩波書店.
- ミード,M., 1976, 畑中幸子・山本真鳥訳『サモアの思春期』蒼樹書房(=Mead,M., 1928, *Coming of age in Samoa : a study of adolescence and sex in primitive societies*., Harmondsworth, Middlesex : Penguin Books.).
- 三浦展, 2001, 『マイホームレス・チャイルド—今どきの若者達を理解するための23の視点』クラブハウス.
- ミルズ,C.W., 1978, 杉政孝訳『ホワイト・カラー:中流階級の生活探究』東京創元社(=Mills,C.W., 1951, *White collar : the American middle classes*., New York : Oxford University Press.).
- 宮川知彰, 1992, 「青年期とは—「青年」の誕生」久世敏雄(編)『青年の心理と教育』放送大学振興会.
- 宮島洋, 1992, 『高齢化時代の社会経済学』岩波書店.
- 溝上慎一, 1995, 「WHY 答法による将来の生き方基底因」『心理学研究』, **66**, 367-372.
- 溝上慎一, 1999, 『自己の基礎理論—実証的心理学のパラダイム—』金子書房.
- 溝上慎一編, 2001, 『大学生の自己と生き方—大学生固有の意味世界に迫る大学生心理学—』ナカニシヤ出版.
- 溝上慎一編, 2002, 『大学生論—戦後大学生の系譜を踏まえて—』ナカニシヤ出版.
- 溝上慎一・水間玲子, 1997, 「『自我—自己』からみた青年心理学研究—意義と問題点, 今後の課題」『京都大学高等教育研究』, **3**, 23-45.
- 宮本みち子・岩上真珠・山田昌弘, 1997, 『未婚化社会の親子関係』有斐閣選書.
- 宮本みち子, 2000, 「少子・未婚化社会の親子」藤崎宏子編『親と子 交錯するライフコース』ミネルヴァ書房.
- 宮本みち子, 2002, 『若者が社会的弱者に転落する』洋泉社.
- 宮台真司・石原英樹・大塚明子, 1993, 『サブカルチャー神話解体』パルコ出版.
- 宮台真司, 1994, 『制服少女たちの選択』講談社.
- 宮台真司・藤井誠二, 1998, 『学校の日常を生き抜け』教育史料出版会.
- 宮台真司・速水由紀子, 2000, 『サイファ覚醒せよ!』筑摩書房.
- 村田光二・山田一成編, 2000, 『社会心理学研究の技法』福村出版.
- 村瀬嘉代子・重松正典・平田昌子他, 2000, 「居場所を見失った思春期・青年期の人々への統合的アプローチ—通所型中間施設の持つ治療・成長促進的要因」『心理臨床学研究』, **18**,

221-232.

- メイ,R., 1963, 小野泰博訳『不安の人間学』誠信書房 (=R.May 1950 *The meaning of anxiety*, New York : Ronald Press Co.).
- 森岡正芳, 1999, 「精神分析と物語 (ナラティブ)」小森康永・野口祐二・野村直樹編著『ナラティブ・セラピーの世界』日本評論社.
- 森田洋司, 1991, 『「不登校」現象の社会学』学文社.
- 諸富祥彦, 1997, 『フランクフル心理学入門』コスモライブラリー.
- ヤスパース,K., 1992, 「実存解明」山本信編『世界の名著 75』中央公論社, 49-380 (=Jaspers,K. , 1932 , *Pilosophie 2Bande— Existenzerhellung*, Berlin : Verlag von Julius Springer.).
- 山田昌弘, 1999a, 『家族のリストラクチュアリング-21世紀の夫婦・親子はどう生き残るか』新曜社.
- 山田昌弘, 1999b, 『パラサイト・シングルの時代』ちくま新書.
- やまだようこ, 2000, 『人生を物語る』ミネルヴァ書房.
- 山崎正一・田島貞男編, 1988, 『現代哲学入門』有斐閣.
- 山崎正和, 1984, 『やわらかい個人主義の誕生—消費社会の美学』中公文庫.
- 米川茂信, 1991, 『現代社会病理学—社会問題への社会的アプローチ』学文社.
- 芳野晴男, 1984, 「適応感と生きがい感・自己像との関係」『日本心理学会第 48 回総会発表論文集』, 626.
- 芳野源三郎, 1937, 『君たちはどう生きるか』岩波文庫.
- 吉本隆明, 1994, 『ハイ・イメージ論』福武書店.
- ルソー,J.J., 1962-64, 今野一雄訳『エミール 上・中・下』岩波文庫 (=Rousseau,J.J., 1762, *Emile ou de l'education*, Paris : Garnier Freres.).
- レヴィン,K., 1979, 猪俣佐登留訳『社会科学における場の理論 (増補版)』誠信書房 (=Lewin,K., 1951, *Field theory in social science : Selected papers on group dynamics*, New York : Harper and Brothers.).
- 渡辺直樹, 2000, 「青年期の自殺の病理」『医学のあゆみ』, **194**, 501-504.
- 鷺見たえ子・玉井収介・小林育子, 1960, 「学校恐怖症の研究」『精神衛生研究』, **8**, 27-56.
- 和田秀樹, 1996, 『受験勉強は子どもを救う～最新の医学が解き明かす「勉強」の効用』河出書房新社.

## 英文文献

- Atwater,E., 1992, *Adolescence (3rd ed.)*, Prentice Hall. : New Jersey.
- Baltes,P.B., Reese,H.W., Lipsitt,L.P., 1980, Life-span developmental psychology., *Annual Review of Psychology*, **31**, 65-110.
- Broadwin,I.T., 1932, *A contribution to the study of truancy.*, *American Journal of Orthopsychiatry*, **2**, 253-259.
- Crumbaugh,J.C.&Maholick,L.T., 1964, An experimental study in existentialism : The psychometric approach to Frankle's concept of noogenic neurosis., *Journal of Clinical Psychology*, **20**, 200-207.
- Erikson,E.H., 1959, *Identity and the life cycle.*, New York : W.W.Norton.
- Erikson,E.H., 1968, *Identity : Youth and crisis.*, New York : W.W.Norton.
- Frankle,V.E., 1958, The will to meaning., *Journal of Pastoral Care*, **12**, 82-88.
- Frankle,V.E., 1969, *The will to meaning : Foundations and applications of logotherapy.*, New American Library.
- Giddens, A., 1990, *The Consequences of Modernity.* : Stanford University Press.
- Hermas,H.J.M., 1989, *The meaning of life as an organized process.*, *Psychotherapy*, **26**, 11-22.
- Hollingworth,L.S., 1928, *The psychology of the adolescent.*, New York : D.Appleton.
- Johnson,A.M., Falstein,E.L., Zurek,S.A.&Svendosen,M., 1941, *School Phobia.*, *American Journal of Orthopsychiatry*, **11**, 702-708.
- Klein,E., 1945, *The Reluctance to Go to School.*, *Psychanalytic Study of the Child*, **1**, 263-279.
- Kobasa, S.C., 1982, *The hardy personality : Toward a social psychology of stress and health.*  
In G.S.Sanders&J.Suls(Eds.), *Social Psychology of Health and Illness*, 3-32.
- Morris,C., 1965, *Varieties of human value.*,Chicago:University of Chicago Press.
- Maddi,S.R., 1988, *On the problem of accepting facticity and pursuing possibility.* In S.B. Messer, L.A. Sass, & R.L.Woolok(Eds.), *Hermeneutics and psychological theory : Interpretive perspectives on personality, psychotherapy and psychopathology.* New Brunswick, NJ : Rutgers University Press.
- Maddi,S.R., 1989, *Personality theories : A comparative analysis (5th ed.)*. California : Brooks/Cole.
- Partridge,J.M., 1939, *Trauncy.*, *Journal of Mental Science*, **85**, 45-81.
- Rogers, C.R., 1951, *Client-Centered therapy : Its current practice, implications and theory.* Boston : Houghton Mifflin.
- Schwarz, O., 1949, *The psychology of sex.*, A Pelican Book.
- Tanaka,H.&Kosukegawa,T., 1968, *A comparative research on the "Way-to-live" by Morris' value scale of the college students with different affiliation of religion.*, *Tohoku Psychologica Folia*, **26**, 77-86.
- Warren,W., 1948, *Acute neurotic breakdown in children with refusal to go to school.*, *Archives of Disease in Children*, **18**, 266-272.

## 資料

- 厚生省, 1978, 『厚生白書 (昭和 53 年度版)』大蔵省印刷局.
- 厚生省, 1947-2000 『人口動態統計』厚生統計協会.
- 厚生労働省, 2001-2003, 『人口動態統計』厚生統計協会.
- 厚生労働省, 2004.10.20., 『平成 15 年 人口動態統計』厚生統計協会(<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei03/index.html>), (2004 年 10 月現在).
- 厚生労働省, 2003, 「国民生活基礎調査 (平成 14 年度版)」財務省印刷局.
- 厚生省, 2004.10.20., 『簡易生命表』厚生労働省統計協会 (<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/life03/index.html>), (2004 年 10 月現在).
- 国立社会保障・人口問題研究所, 2002, 『日本の将来推計人口 (平成 14 年 1 月推計)』国立社会保障・人口問題研究所.
- 国立社会保障・人口問題研究所, 2000, 『世帯内単身者に関する実態調査』国立社会保障・人口問題研究所.
- 国立社会保障・人口問題研究所, 2003, 『第 12 回出生動向基本調査—結婚と出産に関する全国調査 独身調査』国立社会保障・人口問題研究所.
- 総務省統計局, 2000, 『国勢調査報告 (平成 12 年度版)』財務省印刷局.
- 総務庁長官官房高齢社会対策室, 1992, 『高齢者の生活と意識 第 3 回国際比較調査結果報告書』中央法規.
- 総務庁長官官房高齢社会対策室, 2002, 『高齢者の生活と意識 第 5 回国際比較調査結果報告書』ぎょうせい.
- 総務庁青少年対策本部, 1966, 『総務庁青少年対策本部事務処理要綱』大蔵省印刷局.
- 総務庁青少年対策本部, 1970-1992 『現代の青少年—青少年の連帯感などに関する調査報告書』大蔵省印刷局.
- 総務庁青少年対策本部, 1995, 『青少年の意識の変化に関する基礎的研究』大蔵省印刷局.
- 総務庁青少年対策本部, 1998, 『青少年白書』大蔵省印刷局.
- 総務庁青少年対策本部, 1995, 『日本の青少年の生活と意識に関する基本調査』大蔵省印刷局.
- 総務庁青少年対策本部, 2000, 『第 2 回日本の青少年の生活と意識に関する基本調査』財務省印刷局.
- 内閣府, 2002, 『平成 13 年版 国民生活白書』ぎょうせい.
- 内閣府, 2003, 『平成 15 年版 国民生活白書』ぎょうせい.
- 内閣府, 2003, 『高齢社会白書 (平成 16 年版)』ぎょうせい.
- 内閣府, 2003.1, 「高齢者介護に関する世論調査」『月刊世論調査』国立印刷局.
- 法務省, 1999, 『犯罪白書』大蔵省印刷局.
- 文部省, 1999, 『教育白書』大蔵省印刷局.
- 文部省, 1992, 『登校拒否(不登校)問題について一児童生徒の「心の居場所」づくりを目指して

一』文部省初等中等教育局.

文部科学省, 2003, 『今後の不登校への対応の在り方について』不登校問題に関する調査研究協力者会議.

文部省, 1925-2000, 『学校基本調査』大蔵省印刷局.

文部科学省, 2001-2003, 『学校基本調査』財務省印刷局.

文部科学省, 2004., 『学校基本調査(速報)』([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/001/04073001/index.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/04073001/index.htm)), (2004年10月現在).

## —付録—

<b>1. 大学生インタビュー結果</b> .....	<b>140</b>
• 大学生 A.....	140
• 大学生 B.....	156
• 大学生 C.....	162
• 大学生 D.....	169
• 大学生 E.....	175
• 大学生 F.....	184
• 大学生 G.....	190
<b>2. グループインタビュー結果</b> .....	<b>199</b>
<b>3. 質問紙</b> .....	<b>224</b>

## 1. 大学生インタビュー結果

### ・ 大学生 A

属性：22才，女性，私立大学4年生

PIL 尺度 Part-A 得点：79点

実施日：2001年10月某日

実施場所：首都圏近郊私立大学施設

インタビュー実施責任者：博士課程3年 加藤 陽子

インタビュアー：博士課程3年 加藤 陽子

質： アンケートはどうでした？ わからないところとかなかったですか。何か難しいとか、そういうのは。

A： 一応、「どちらでもない」とかもあったので、大丈夫です。ちょっと詰まるのは、うーんどうかなというの。

質： 何か覚えてます？ どんなのか。

A： 私の生き方に対して、世の中は……何かいろいろ……。じっくりくる……。よくわからなかった。

質： ちょっと抽象的な度合いが、ほかの方がやっているやつよりも高いじゃないですか、この質問って。だから、人によってはすごくわかりにくいという。

A： 解釈が難しい。自分で解釈しちゃうようにしているんですけども、そういうときは。

質： 全然それでいいんですけどね。詰まっちゃって、すごく困ったという人もいたので。

A： 何問かは確かに詰まった。あと、状況によって違ったりするので、今の自分と3年前と5年前でまた違ったり。

質： 確かにそうですね。

A： 大学4年なので、結構微妙です。大学院進学なんですけど。

質： そうなんですか。Q研には来られないんですか？

A： 一応、X研に上がる予定なんですけど、心理系で。でも今、海外の院に行きたくて、海外も受験しようと思っているんですけど。

質： 海岸の院受験だと、1個下の代に入ることになりますかね。9月からということになると。

A： そうですね。日本でいうとそうなっちゃうんですけど、向こういうとストレートになるんですけど。でも、終わるのは、ちょっと遅れますね。こっちで3月に終わるのに、向こうで6月。でも4月ぐらいに終わるんですけどね、向こうも。夏休みが長いので。



で。ちょっとずれがある、そこのところ。その後どうするのって、よく聞かれるんですけど。

質： X先生だと、K君とかいますか。

A： います。

質： あと、I君とかいますよね。

A： I君もいますし、あと、Yさんもいるし。

質： 院で一緒に心理学の授業を受けた記憶があります。

A： 今はP研なんですけどね。

質： 今、P先生なんだ。ストレス……だっけ？

A： ……系をやりたかったんですけども。微妙に移り変わって、今、卒論が大変なんですよ。

質： 一緒。

A： テーマの段階に戻っちゃったんですよ。

質： でも、そうですね。

A： テーマを決めていて、ある程度やっていたんですよ。それでいいと信じ込んでたんですけど、すごいずさんな理論の立て方をしていたみたいで、全然、研究自体のやり方がなっていないって怒られて。確かにとは思いますが。

質： 「今さら言われても」みたいな時期ですね。

A： 勉強してこなかったのかもしれないですよ。3年生の段階で、どういうふうに研究をデザインしていくかなんてことは……けど、自分で、頭でそんなふうに考えてなかったの、まず、何をやりたいって、卒論を決めるときに言われたんですね。自分のやりたいことをやるのがいいよって。それをベースに考えちゃったら、後から研究としての意義をつけなきゃいけなくなっちゃって、おかしいだろうと。これで何なのと。

質： かちっとした先生だもんね。

A： 「何が言いたいのか」って。「これでどうなんや」って。結構やっぱり、私が卒論でやりたいのは、単に知りたい。みんな結構、それは単に解明したかったり、知りたかったり。

質： でも、そこから始まるよね、研究って。

A： ただ、やっぱり院生の人に言われたのは、研究というのはそうじゃなくて、本当は興味あるところを追って行って、こういう研究がいっぱいやられているけど、ここが足りないから、じゃあ自分で、ある程度、ここが足りないと思うところの根拠を明確にして、それをやってみるから価値があるんだと言われて。

質： 立派だ、P研（笑）

A： それはすごく立派なんですよ。……ですね、学部生の4年の段階で、……先行研究……して。そこまでできれば、後は学者としてやっていくには、確かにそういう能力が必要

だと思うんですけど、院に上がるといってから P 先生もちゃんとやれよというんですけど。

質： すごい。私は Z 研でぬくぬく育ってきたから、そんな話を聞くと、頑張るとしか言いようがない。私、本当にふわっとして、「卒論、はい」って出した感じだから。

A： 前の、P 先生のかわりにいらした先生がそういう方で、何も言われなかったんですよ。でも、言われてみればすごいずさんで、多分、書いている段階で、きっと詰まっただと思うんですよ。先生のオーケーももらえなかったと思うし。これは試練なのかなと思いつつ、だんだん何をやりたいかわからなくなってきた。

質： でも、わかる、それは。私もそうだった。やっていけばやっていくほど、「あれ、私、これをやりたかったのかな」というジレンマに陥っていくという。

A： これをこうやれば研究デザインとして、こことここをこうしなと言われて、それで、「あれ、私のやりたいこと、これだっけな」という。

質： そうだね。本当にわかるのかということと、それを調べて、調べる方法論というのが一致しないと研究にはならないということだもんね。

A： 多分、自分がやりたいことがあっても、本当はすごい何年もかけて研究しないとわからないことを、卒論で一気にやろうとしているからいけないんだと思うんですよ。みんな結構、学部生は、これをやりたい、これが見たいと言うけど、全部一遍にやろうとしていて、先生に、「どれをやりたいの。結局どこ」って言われちゃって。みんな同じような感じ。

質： そうか。大変だね、じゃあ今。

A： 結局、院に上がるという時点で、やっぱり言いわけも無用なところがある。みんな卒業して働く人は、最後、精いっぱいやれよということで、先生もそういうふうに見てくれると思うんですけど、こんな統計を……じゃなくて…。

質： 大丈夫、私言いわけだらけで生きているから。社会学系とはいえ、言いわけだらけで生きてるから（笑）。

A： どうしようかなと思って。

質： 大丈夫。I 君とかにも言っておくから。私のインタビューをしてくれた子にいじわるしないでって。

A： でも、X 研は割とのんびりな。

質： のんびりだよ、あそこ。

A： P 研がきっちりしているんです、すごく。

質： 認知系は怖いな。

A： でも、厳しいゼミにいたほうが…。

質： 偉い。ポジティブシンキング。

A： と思ってやっているけど、でも追いつかないです、自分の中で。幾らやっても、私

は研究の才能ないなとしか思えないんですけど。私は研究者として向かないんだとしか思えない。院に行っていていいのかなみたいな。だから、環境を変えるのはいいと思うので、海外の院に、……の人に会ってきたんですけども、行きたいところの。

質： アメリカ？ イギリス？

A： カナダなんです。……関係なんです。

質： おもしろそう。

A： 心理がベースになっちゃうんですけど、ストレスと健康というのがテーマなんで。でも向こうって、結構、そういうのに対してオープンな社会なので、調査がやりやすそうなのと、女の先生がすごく多くいたんです。公衆……に入るんですけど、女の先生が8割ぐらいで。

質： ああ、そんなに。

A： いいなという感じがして。環境がすごい。そういうところで、もちろん勉強しないとあれなんですけど、やってみたいなと思うので。

質： おもしろそう。

A： でも、大学院の志望願書を書かなきゃいけないんですよ。先生にも推薦状を書いてもらわなきゃいけないので、何をやりたいかというのが決まっていなくて、そこら辺が書けないんですけど。先生には、やりたいこともないのに大学院に行くのかって怒られそうですね。本当に怒られると思います。

質： そうかな、漠然としてちゃダメなのかな。

A： 先生はそういう人じゃないので。でも、そっちの院の先生には、これと決まっていなくてもいいんですかと聞いたら、こういうものに興味があって、こういうことがやりたいかなというのがあれば、あとは研究方法とか、研究のやり方は全部与えるから、そういう志は持ってきてと言われましたね。ちょっと気が楽に。

質： スピリットが大事なのね。

A： やる気が大事ということで、その後は私たちが教えると言ってくれました。

質： すてきじゃない、すごく。

A： いいかも。何かこっちは逆なんです。自分でやれという感じなので、自分で面倒見ろという感じで。

質： どっちもいいような気もするけど、どっちもどっちな気もするよね。

A： でも1人、S君というのはすごい優秀な子で、彼は自分で本当にきっちりやっているので、先生をしのぎそうな勢いで。どこからどう見てもきちんとしたデザインなんです。

質： よかった、顔を合わせなくて、むしろ。先に卒業するからよかったのかも。「●○さん、穴だらけですよ」とかって言われそう（笑）。

A： でも、彼は社会学系といっても、あまり心理系には行ってないんですよ。心理は、

どう考えてもあいまいなものじゃないですか。どこまでいってもあいまいですよ。ストレスもそうなんです、見えないので。ストレス反応なら見えると思うんですけど、見えないものなので、心とかは。結局どうなのって言われたら、しようがないですよ。

**質：** それででるのとか思っちゃうよね。

**A：** ……に……みたい。すみません、前置きが。そういう状態なんですよ。

**質：** 大事。そういう状態。そんなA：さんに聞くのも申しわけないのかもしれないんですけど、私はふだん、自分は何のために生きているんだろうとか、私、居場所がないなというふうなことを思ったことというのは、今でも、これまででもいいんですけども、ありますか？

**A：** 今までだったらありますね。今はあんまりないですけどね。

**質：** じゃあ、将来に希望を持ってないなと思ったり、将来どうしようと思ったりしたことはありますか？

**A：** ええ。受験のときに思って、ある程度決めて、それで来たんですけど、就職活動期  
のときに、就職活動をするのかしないのか、漠然とした目標はあったんですけど、その  
目標と現実の自分の希望が合っていないような気がしちゃったので。ずっとそれが夢だ  
と  
思っていたのが、自分が生きたい人生とその夢が、何かギャップが大きくなっちゃっ  
て、現実の仕事としてそれをやって、そういう人生でいいのかと考えたら、あれ、そう  
かなと。

前は、仕事というのが、まだ夢という段階だったので、こういうのがやりたいと思ってい  
た  
んですけど、もう大学4年になったら、現実、来年から働くのかと。それで、困っちゃ  
った  
んです、ギャップに。でも、海外の院に行くというのは、最初に描いていた夢の  
第1  
ステップでもあるし、チャンスもあるし、やりたいと思うんなら、やってからのが、  
まだ  
そんな年もとっていないし、やってみてもいいかなというぐらいなんです、実は。

**質：** それは結構、就職活動期はしょっちゅう思っていた？

**A：** はい。就職活動期は、一応、院に行くという前提で、どんな感じかなと思って、一  
般  
企業を見てみたんですけど。やっぱりそこで、10年、20年、30年働くという気  
が  
起きなかったんですよ。

**質：** じゃあ、そんなにしょっちゅう思っていたわけじゃなくて？

**A：** ええ。大学院に行こうとは思ったんですけど、その先は決めてない状態がずっと続  
い  
ているんです。

**質：** じゃあ、自分は何のために生きているんだろうとか、居場所がないなというのは、  
昔  
は思ったことがあると言ってたけど、その昔というのは、例えば、どれぐらい昔だろ  
う？

**A：** 大学受験が終わったときで、第一志望は滑っちゃったんですよ。滑って、一応、  
自  
分の中でやりたいことというのが、そのときに決めてあったので、ここは第二志望に

入っていたんですけど、ここに来るためだったら、そんなに勉強しなくてもよかったです、実際。国立を目指していたので、それはもうきつい勉強で。最初からここに来るんだったら、もっとほかのことをやる時間もあつたし、もうちょっと広い視野を持っていくために、違うところを目指していた部分があつたので、すごく苦しい思いをして結果が出なかつたんで、こだわっていたことがわからなくなっちゃつたんです。結構、その勉強のために犠牲にしたものがすごく多くて、それで、結果が出なかつたので。とはいえ、浪人もせず、一応、第二希望に受かつていたので、ちょっと妥協して、浪人しなくなかつたんで、来ちゃつたんですけど。何を自分の中でプライオリティを置いていたのかがわからなかつたんです。

質：なるほどね。そうか。

A：多分、勉強を高校時代は一番プライオリティに置いていたんですけど、そこでこけちゃつて、そこで妥協しちゃつたので。次、何が一番大事なのかがわからなくなっちゃつて。

質：じゃあ、例えば、そういうことを思つてすごく悩んだりしたときに、だれかに話そうというふうには思いましたか？もしくは、話しましたか？

A：いいえ。私、両親と一緒に住んでなかつたんですね。高校時代は寮で。進路を決めるときも、ほとんど話をしていなくて、勝手に決めちゃつたので。だれにも言わなかつたですね。

質：話したいとは思つた？だれかに。

A：いいえ。私、そのときに、春休みがあるじゃないですか、結果が出ての。一応、早稲田の手続きに来たんですけど、学校が始まるのが4月1日なんですけど、春休みはほとんど寮から一歩も出なかつたので、だれにも会いたくなかつたんで。回復する時間が欲しかつたので。自分の中で納得させる。納得してなかつたんですよね。

質：そんなに簡単にね。1カ月や2カ月で。

A：だから、結構、友達で、同じように第一志望を滑つて、早稲田に来た子で、仮面浪人をした子が何人もいましたね。結局、あきらめ切れずに、やっぱり私は早稲田は合わない、国立がいいとって、入つたけど、やめちゃつた子もいて。私は留学したいという目標があつたので、留学が決まつたので、その時点で、入る前に。なので浪人も嫌だつたので。状況を優先してみたんですけど。結局だから、相談をせずに、自分の中で解決しようと思つてたんです。相談してもどうしようもなかつたですね。

質：今回のやつはどう？院のときとか、就活のときとか、だれかに話すとか。

A：院のやつは、友達に言いまくっていましたね。親には、院に行きたいんだけど、どうかなみたいなことですけど。何か同じような、友達もやっぱり就職活動期で、考えているんで、X先生だったりとか教授だったら、「こんなことしたいんですけど、これってどうなんですかね」という話とかは。何かに挫折したわけではないので、まだ。これか

らの問題なので、だからそれは、ありとあらゆる有志に相談しましたね。やっぱり自分が目指しているものの一部であるところで働いている人とかの話の聞いたり、目指している友達と一緒に話してみたり。どういことをやりたいかって。結構、同い年から上から。

質： 下から？

A： 下はあまり話していない。

質： そうだね。

A： 何でそんなに真剣に考えているのかわからないって。

質： 「何言ってるの、先輩」みたいになっちゃうかな？

A： 同年代と一緒に悩んでいる人か、先輩たち。教授だったりとか、人生の先輩に。そうすると、大体、夢を大きく描きなさいって（笑）。やっぱり先輩たちは、まだ若いんだし、そんなに今決めなくても、思うとおりにとか、夢を描いてって言うんですけど、考える方は大変なんですよ。そんなに描いちゃってと。だけど、同い年だと、もっとみんな現実的ですね。

質： それは大学の友達とか、地元の友達とか、そういう…。

A： 大学の友達が多いです。地元も同じ東京なので、高校の友達なんかに。

質： じゃあ、あらゆる友達に話して、夢を大きく持てと言われて。

A： 昔、高校時代はあまり人に話さなかったんです、そういうことを。みんな結構、自分が描いていたものを案外語らなかったんです、周りの人に。実は医者になりたくても黙っていたりとか。けど、言いますね、大学に入ってから。人にも聞くし、「どうするの」って。人の進路には興味がありますね。「みんなどうするの」って。まず聞きますね、最近は。やっぱり4年で、久しぶりに会うと、「どうなの？ 就職なの？ 院なの？」みたいな。気になる年ごろですよ。みんなどうするんだろうって。

質： でも、何で高校のときは聞かないで、大学になったら聞くようになったんだろう？

A： 何か秘密主義だったんですね、高校の周りの……。結構、他人の進路は聞いちゃいけないと思っていて。同じ部活の子でも知らなかったですね。文系か理系かぐらいで、人の進路は全然。興味がなかったからかもしれないけど、私が。全然聞いたことなかったです。志望校とかは知っていたけど。

質： ふうん、なるほど。何人か話を聞いて、聞かないという人がいたりしたから、高校のときは聞かないとか。高校生にもアンケートをとったりしているから、そうかも。

A： プライバシーは聞けないのかも。人に聞くということは、自分の進路は自分で決める……と思っていた。

質： そうかもしれないね。

A： でも、今思うと、人に聞いておけばよかったと。実際に、例えばここの学部に来ている人の話を聞くとか、思っていることがあるんだったら、聞いておけばよかった。

でも、高校生は結構情報が少ないから、思い込みが多いですよ。今でこそインターネットが……大学のことまでわかるんですけど、もう自分の学力的にランクはこの辺の大学、自分の学力を満足させるような、自尊心を満足させるような大学で、学部はどこみたいな感じで。結構友達にも、自分の学力に見合ったところという子が多いですね。やっぱり大学は大事なので。早稲田だったら一番いい政経に行きたいとか、まだ何をやりたかわからないけど、一番いいところに入っておきたいとか。文系なら政経か法かみたいな。周りもそうだったので。でも、何かスペシャリストになりたかったんで、それでスポーツトレーナーになりたかったんですね。それでここに来たんですけどね。

**質：** じゃあ、将来とか、就職活動のこととか、先生とか、親、友達、先輩とかに話をして、何か自分の中での気持ちの変化みたいなものはあった？

**A：** ええ。同年代の友達と、「ああ、そうか、みんな悩んでいるんだ」という感じがして、……私から見て、もう就職を決めていて、人生決まっていますすごいと思う人も、実はその人も迷っていたり、決めただけ、まだ半信半疑だったり、結局、みんな不安なのは一緒で。

**質：** 何かアドバイスをもらって楽になったとか、むしろ、そういうことよりも話をしているだけでよかったなという感じがあるとか、印象的にはどんな感じかな？

**A：** 目上の人だったら、やっぱり適切な、どうすればいいのかとか、どういうふうに考えたらいいのかいいのかアドバイスをもらえると、すごく前に進むためにはよかったんですけど、ただ話をすることとか、あとはみんな同じように悩んでいるんだなと思うと楽になりますね。自分だけ、こんなに苦しいと思うよりは、みんな同じなのかと思って。前途洋々に見える……一流企業に就職している人も、やっぱりそれでも不安があるし。「10年後に、どっちが笑っているかわからない」と言われて。だからって、焦って決めなくてもいいんじゃないと。

**質：** じゃあ、例えば、自分の生き方とか、今の自分の状態が満足できるものですか、そう思いますかと聞かれたときに、イエスかノーだったらどっちを答えますか？

**A：** それはイエスですね。

**質：** 「理由は」って聞かれたときは？

**A：** 理由は、今すぐ就職するか大学院を選ぶかというところでもあれだったんですけど、生き方に満足しているかというのと、やりたいと思ったことはやっている。特に人に言えるほど明確な根拠がなくても、海外の大学院という環境が違うところで、今と違う人たちもいっぱいいるし、少なくとも、研究者として大成しなくても、得るものはたくさんあると思うので、それができる環境にあって、それが実現できれば一番いいので。今の時点で就職したとすれば、それは妥協であって、あきらめがあるので、あきらめないでやりたいと思うことをやって、今、向かっている時点なんですけれども、そういう意味では。

質： じゃあ、そんなにこれというものじゃないけど、漠然とした将来のビジョンがちゃんとあって…。

A： すごく漠然としたビジョンがあって。

質： 漠然としてもあって、それに向かって、ちょっとずつだけ進んでいる？

A： ちょっと進んでいるような気がするの。少なくとも、まだ道は開けていると思うんです。閉ざしてないから。

質： 妥協して、ほかの道に曲がったりするんじゃないくて、とりあえず短くても一步一步行っているからと？

A： 行っているとは思いますが。それも一歩なので。海外の大学院にこけた後は知りません。こけたらちょっと…。

質： そうだね。それはまた違う道がぱっと出てくるかもしれないしね。

A： そうですね。とりあえずそこが今、第一志望なので、そこをかなえないと、また2つ目の挫折につながってしまうので。

質： そんな2つぐらいじゃない。私なんて、数知れずの挫折を。

A： でも、進路ですから、大きな問題になってきますよね。

質： そうだね。結構、将来的にも大事なことになるかもしれないもんね。

A： 自分の希望がかなうというのは、すごく大事なことだと思うんですよね。しかも、それは自分の努力によって決まってしまうのが…。努力が足りなかったんだというのは、ちょっとすごく後に残っちゃうんですよ、後遺症として。自分の努力が足りないで希望がかなわなかったというのは。運が悪かったとか、そっちの外的要因に持っていけば、何とか、たまたま私は天災にあったとか、……があったからとか。

質： しょうがないよねとか言えるよね。

A： 人的にしょうがないというような要因ならいいんですけど、自分の要因で、それが達成されないとすると相当きますね。後々、何をやっても、やっぱり自分はだめなんじゃないと思っちゃうので。それはやっぱり受験で失った分は、一步一步でも回復していくしかないですね。1回あきらめちゃったので。

質： じゃあ、例えば、今までの人生に、これからの人生でもいいんだけど、自分はこのために生きているといったような存在価値みたいなものとか、目標とか、さっき言っていたような、漠然としていても例えばビジョンがあるとか、そういうものが見出せていますかと聞かれたら、見出せている？

A： ごく最近なんですけれども、見出せてきたような気がする。前は、職業として漠然とした夢は持っていたんですけど、そこで自分が何でやりたいかという、何でがわからなかったの、その夢が変わってきちゃって。単にあこがれだったのかなとか。単に職業に対するイメージだけだったので、何でがついてこないと思って。でも、心理学をやり始めたころから、人の役に立つことがしたいというのがすごくあって。もしもそれが



職業で達成されなかったとしたら、家庭で達成してもいいのかなというのと思うんですね。だから、職業はちょっと未定なんですけれども。子供を育てたいですね。いい母親になりたいんですけれど。

質： 立派。

A： でも、もうちょっと自分が成長してからなんですけれど、子供を育てたいですよ。いい子を。偏差値の高い子を育ててみたいです。いい子を育てたい。そう思いたいんですけれど。

質： おもしろい (笑)。

A： それは多分、一番いいなと思って。でも、家庭をつくるのと大学院に進学するのと全然違う問題なんですけれど。

質： ちょっとね。両立は大変そうだよ。できないことはないけど、両立は大変そうだよ。

A： 花嫁修行して、いい奥さんになるから、いい母親になるわけでもないと思うので。だから、仕事を持っている母親にも、仕事をしている母親の方がいいので、あと、もうちょっと私が人間的に成長してから、育てるぞと。

質： よし、やるぞと。子供はかわいいもんね。

A： かわいくないときもあると思うんですけれど。

質： あると思う、自分の子だったら。

A： 自分の育て方で変わっちゃうじゃないですか。結局、今、……もやっているんですけども、結局、親の愛情なんです。最初の親の育て方とか愛情の与え方によって大半が決まっちゃうので。それに人が介入しようと思っても無理なので。

質： それは正直難しい話だよ。それをやって、人が言ったり、学者が言えば言うほど、母親とあって、すごく責任が重いのかなって気になったりするなと思う。今、おばあちゃんが近くにいたりとか、そういう人が少ないでしょう。私、先輩とかのお手伝いとかで幼稚園とかに行くんだけど、やっぱりちゃんとしなきゃって思ってるお母さんがとても多いなという気になる。初めての経験なんだから、そんな完璧にできることは絶対ないよって思うんだけど、でもちゃんとやらなきゃって、若干育児ノイローゼが入って、ばんつとやっちゃうとか、そういうのはやっぱり、もちろん周りの協力がいないというのもあるんだけど、お母さんはちゃんとして、いっぱい愛情を注いでという原説みたいなものがすごくあるんだろうなと。

A： 子供がちょっと異常を示したら、親が悪いんだって言われちゃったりとか。

質： そうそう。難しいなと思った。

A： いい親というのは、1つの型にははまらないと思うんですよ。

質： そうそう、そうなのよね。

A： 多分、自分がこんな親だったら、子供ですごくいいかもと思うような親になりたい

のかもしれないんですけど。

質： でも、それはすごいいいことだと思う。

A： だから、そのまま親の生き方を見て、子供が「うん」と言うのがいいので、そうすると…。

質： おれの背中を見てついてこいと？

A： ちょっと親の生き方が問題になるんですけどね。

質： でも、結構いいビジョンだと思うな。だって子供を育てるって、産んで育てるというのは女性しかできないわけだし。

A： それまでに、もうちょっといろいろ磨いておかないと、きっと詰まりますよね。やっぱりしっかりしなきゃとか、子供が問題を起こしたときに対応できなさそう。

質： でも、それは心理学をやっている、私も無理かもって、たまに思う。

A： 「何であの子、非行に走るのかしら。私、こんなにちゃんと頑張ってきたのに」、そういうお母さんもいるので、そうなっちゃいそう。私は正しいはずって。わかるんですね、子供の気持ちは。「そういうお母さんが嫌」って言われたら、どうしようって思うので。

質： つらいね、それはね。

A： やっぱり家庭以外にも仕事というか、ちゃんと大事にしているものがあって、だから、おれの背中を見てついてこいのほうがいいのか。「あなたがすべてよ」とか言われると、ちょっと私も…。

質： 「えーっ」みたいになるかもね、子供は。

A： 必要なときに受け入れてくれる親であれば。

質： それはすごく大事だと思う。

A： 親と離れている時間がすごい長かったの、私は。

質： そうか。高校からって言ってたもんね。

A： 高校から離れていたの、別にいても話さない。真剣に会議とかするわけじゃないんですけど、でも、一緒に御飯を食べているとき、ぽろっと言ったりとか、親を見ているだけで、随分自分は変わるんですよ。親と一緒に住んでいると、さりげなく父親の仕事が見えたり、母親の素行というのが見えたりして、自分というのは、こういう環境にいるんだ、こういう人間なんだと、何かそういうのができてくる。離れると、随分それがあいまいになってくる。親の影響は大きいんですね。

質： じゃあ、例えば、もしも自分は何のために生きているんだろうとか、居場所がないなって思ったり、もしくは、将来どうしようとか思って不安になることがあったとして、それによって、毎日の生活が意外とうまく進まないという場合があったとして、A：さんはどうやって対処すると思いますか？具体的に。

A： わかんなくなっちゃったらですか。何が大事かもわからなくなっちゃうんですよ。

質： ええ。どうするって言われたら、具体的にどうしよう、こうするという方法はある  
ますか？

A： その時点では、自分が生きている意味とかもわからなくなっちゃっているんですよ  
ね。

質： なったりしたら。

A： 生きている意味もわかんなくなっちゃったら、人に聞くかもしれない。「私のいいと  
ころって何？」って。何もなくなっちゃったんだけど、私にできることとか、私には価  
値があるのって、友人なり、恋人なり、家族なり、だれかに求めるかもしれない。自分  
でわかんなくなったら。

質： なるほどね。

A： 何もわからなくなったら聞いて、「あなたにはこういうのはないけど、これがあるじ  
ゃない」って言われたら、ああ、それがあってもいいって思うかなと思って。

質： 1人で部屋に入って音楽を聞いたり、ぐっすり寝るとか、そういう具体的なことは  
ありますか？

A： 好きな歌手の歌とか聞きますね。

質： それは1人で部屋に入って聞いたりする？

A： 1人が多いですね。ウォークマンだったり、部屋だったりすんですけど。たそがれ  
てみたり。…たそがれたり、歌に励まされたり。やっぱり歌詞を書いている人にも、生  
きる意味がわからないというふうに歌っている人が結構いると思うんですよ。そうい  
うので、ああ、やっぱりそういう人もいるんだと思えるし、ほかにもこういう人がいて。  
でも、その人が、それでも生きるんだって言っているというふうに共感したり、励まさ  
れたり、一緒に悲しんでみたり、人生なんて意味がないやって。

質： くそーっとか思いながら。

A： 思い通りにいかないよって、一緒になって…。そういうので、音楽は確かにそういう  
面はありますね。音楽を聞くというのは、いつからか結構、そういう役割が多いですね。

質： 浜崎あゆみとかドラゴンアッシュとかって、結構、自分の居場所とか、そういうこ  
とを言っていると思うんだけど。

A： 浜崎あゆみはそうですね。

質： 聞く？

A： 浜崎あゆみは聞きますね。一番好きなわけじゃないんですけど、私の好きなアーテ  
ィストに歌詞がかぶるところとかもあるので。歌詞はいいんですけど、楽曲的にそんな  
クオリティが高いと思わないから、あまり聞かないんですけど。

質： じゃあ、あと何か言っている人っていうのは。

A： あまり有名じゃないんですけど、すごい好きなアーティストがいて。

質： 私、聞いたらわかるかしら。

- A:** 名前は知ってると……。バンドなんですけど、ソフィアというバンドがあって、すごく好きなんですよ。
- 質:** 知ってる。松岡君がボーカル。
- A:** 松岡君は好きなんです。松岡君は、私にとって目の保養になるんです。
- 質:** わかる気がする。きれいだもんね。
- A:** それも1つの。
- 質:** ソフィアは、そういう歌を書いているんだ。知らなかった。
- A:** あまり世間で認知されてなくて。
- 質:** してなかった。
- A:** だれもしてないですよ、認知は。だから、何で好きなのってよく言われるんですけど。結構、自分がへこんでるというか、何で生きているのかなと思った時期に、ちょうどそういう時期にそういうリリースがあって。松岡さんにみたいに、何か順風満帆そうに見えたんですね。格好いいし、バンドもうまくいっていると見える人が、こんな悩んでいると思って。生きる意味について考えちゃったりしていると思って、意外だったんですけど。何かぶつくと悩んでいるんです。それが歌詞になっているんで。私のかわりになってくれているみたいな。結構、若い10代の女の子で、本当に歌詞の意味がわかっているかわからないですけども、共感している子が多いですよ。
- 質:** いる。ソフィアが好きっていう子は、若い高校生とか中学生とかが、触れ合う機会があって言うと言うんだけど、私はビジュアルで好きなんだと思ってたの。
- A:** ビジュアルもまだいると思うんですよ、絶対に。松岡さん格好いいといって好きもいるんですけども、そこから入って行って、本当に中身が好きな人を……。
- 質:** そうだね。続くということはそういうことだもんね。
- A:** 続いている人と、あと多分、二十歳以上の人は、ビジュアルだけということはもうないかな。中高生はわからないですよ、私も実際に。
- 質:** でも、すごくいい歌だから聞いてとか言われたこととかもあって、ああ、そうなのって。私はもグレイとかラルクそういう系列とかっていうカテゴリーしか自分の中にないから、音楽はあんまり詳しくないから。
- A:** バンドって、ラルクとかと一緒にされるんですけど、だから自分の中で、何がそんなに違うかというと、内容。つまり楽曲のクオリティとかは絶対ラルクの方が高いし、バンドのビジュアル的に言うと、グレイの方が上だったりとか、ビジュアル系ってよく言われるんですけど、あまり関係ないんですよ。テレビがないところに、CDだけ持っていったり、海外で聞いていたんですよ。単にアルバムを買って行って。アルバムだけ聞いていて、ほとんど松岡さん以外の顔も知らなくてという段階で歌詞を見て聞いていて。今どきこんな歌を、曲をつくる人がいるんだと。
- 質:** いいこと聞いた。ソフィア聞きたいわ、絶対。

**A:** でも、世間でそう認知されているジレンマがあるけど、そういうわけでソフィアが好きですけど。だから、いやされたり、励まされたり。

**質:** いいこと聞いちゃった。

**A:** 結構、自分で、こういうふう生きていいのかなと自信が持てなかったりする人に結構響いたり。

**質:** そうか、なるほど。本当にいいこと聞いちゃった。

じゃあ、あなたの心の支えは何ですかというふうに質問されたときに、イメージするものは何でしょう。

**A:** 私は家族なんです。家族が一番なんですよ。肉親が全くそばにいなかった時期があったんですね、子供のころ。自分で全然寂しいとか感じてなかったんですよ。そのときは全然、そういうふうに自覚してなかったんですけど、それが結構、どんどんきつい状態になっていっちゃって、今、心理学とか勉強するようになって振り返ると、すごい肉親がそばにいないことが、自分にとってものすごくストレスをためる要因になっていた。やっぱり同じ寮の子も見ていて、中学生で寮に入る子というのは、間違いなくうまくいかないんですね、もう全然。どんなにしっかりした子でも、どこか無理がきたり、たいていの子は全然生活のペースが崩れちゃって、退寮しちゃって。高校生はやっていけるけど、みんな結構、本当は内心、すごく大人っぽい子は別ですけど、みんな寂しいという。はめが外せるといふ子もいたんですけどね、親いないから。でも、私は海外で育ったんですよ、半分ぐらい。なので家族が……。兄弟が一番近いんですけど、自分に。妹がいるんですけども、8歳離れて。

**質:** 結構、離れているね。

**A:** 中2なんですけど、でも姉もいて、姉も仲がいいんですけど、妹がすごくよき理解者で。私も多分、妹のよき理解者だと思っているんですけど（笑）。相思相愛なんですけど。

**質:** すてき。私、きょうだいがいないから、そういうのはすごくうらやましい。

**A:** よく言われますね。離れていることが多いんで、すごく妹と価値観とかセンスが合うので。妹が好きというものも、私もわかる努力をしてあげるし。でも、結構わかるんです。ああ、いいと思うって。妹の中でも、わかってくれる人がそばにいるというのが結構大きかったみたいで。でも私も、ソフィアのよさでも、結構妹がわかってくれるんですね。

**質:** おもしろいね。

**A:** 多分、いどこでもそうなんですけど、血がつながっているだけで、何か言わなくてもわかるというのがすごく多いんですよ。姉でもそうです。会社に入っているんですけど、愚痴を聞いていても、「ああ、そうだよね」って。生い立ちが似ているので、考え方とかも結構似ていて。

質： そうかもしれないね。

A： 家族が一番です。

質： 血より濃い水はないな。

A： ないんですよ。友達になった……超えられないんですよ。家族は超えられないと思うんです。超える友達を見つけなきゃいけないと思うんですけど、友達は別ですね。

質： うん、別だと思う。

A： でも友達も必要なんですよ。家族の中だけに……ですけど、帰る港がないと。

質： 母港がないとね。旅立てないんだよね。

A： ないとふらふらさまよっちゃうね。よりどころとしては、家族がいないとちょっときつくなりますよね。今、1人というか、姉と2人暮らしなので。港がちょっと遠いので大変ですね。

質： わかる。私も、何か、あぁっと思ったりしたら、実家に帰りたいと思うから。やっぱりそうか。

A： 孤独に弱いしね。1人暮らしをしている人を尊敬しますよ。

質： 今、A：さんにしてもらったアンケートを高校生と大学生にしてもらってるんですよ。今、統計が全部上がってこないんだけど、私が受けた印象では、すごく使命感があるとか、そういう質問があったでしょう？そういう意味とか、生きる意味とか、そういうものをすごく感じていると思っている人がいたんですけど。私はこのアンケートをしていないから、自分で。つくったのはつくったけれども、自分で実際に大学生の気分で受けていないから、もう院に入っている年齢だし。やった感じはどうですか？

A： ちょっとあるかもしれないですね。ちょっとあります。例えば、私なんかは明確じゃないので、生きる意味を見出しているかどうか、使命感がどうかとか、すごくあったんですね、子供のころから。あったというよりか欲しいんですね。希望なんですね、これは。ないとしちゃうと、欲しがることあきらめちゃってるような気がするんです。欲しいんですよ、みんなやっぱり使命感を。私はこれをやって、これをやるために生きているんだというのを実感したくて生きているから、それにないをつけちゃうと、生きることに對してあきらめていることになってしまう。そういう人が、少なからずいても、そうなりたくないというのは、みんなどこかで思っている。

質： じゃあ、そういう感じということに関しては、それは、別に「えっ」というふうな感じではなくて、まあそうかなという感じの印象を受けますか。

A： 希望的観測も含めてですよ。 「ありますか」というのは、あるしと思ってほしいなという……。だから、理想の自分も、ある意味ちょっと入っちゃうんですね。

質： そうかもしれない。

A： ちょっと距離じゃないですけどありますよね、心理の……。自分で自己回答式だと、どうしても悪くいいにくいですね。

質： わかります、それは。いろいろありがとうございました。以上です。おもしろかった。

A： 関係ない話もあったと思うんですけど。

質： ううん、全然。参考になった。私はきょう、ツタヤに行くわ。

— 了 —

・ **大学生 B**

属性：20才，女性，私立大学2年生

PIL 尺度 Part-A 得点：88点

実施日：2001年10月某日

実施場所：首都圏近郊私立大学施設

インタビュー実施責任者：博士課程3年 加藤 陽子

インタビュアー：博士課程3年 加藤 陽子

質： 例えば、ふだん私はだれかのために生きていられるだろうかとか、あと自分の居場所はどこだろうとかを考えたことはありますか？

B： はい。

質： 例えば、じゃ将来に希望が持てなかったり毎日がつまらないなど、未来志向というか、そういう気持ちで、そういうどうしようかなということを思ったことがありますか？

B： あります。

質： 例えば、それはどれぐらいの頻度で思いますか。すごくよく思うとか、ふとしたときにしか思わないとか？

B： 今は結構忙しさにかまけてそういうことはほとんど考えないんですけども、高校にいたあたりのときは、このままやって何になるのかなとか？

質： 勉強も？

B： 勉強もやってたんですけど、自分が存在しているということ自体が、だからどうしたんだろうという気持ちになって、そのときは何か。今でも時々はふっと思んですけども、考えてもどうせ続けていくしかないしなとか思って、ある程度流しちゃうんで。

質： じゃ、その内容というのは、将来のことも含めて、自分の存在も含めて、お勉強も含めてという感じになりますか？

B： そうですね。勉強はそんなにこだわってなかったんで、とりあえず何とか勉強して、頑張っって大学に入って、どこかで結婚するなりしないなりして、そのままずっと生きてって。それは別にやってもいいしやんなくてもいいしという気がして。多分、自分はいてもいいしなくてもいいしみたいな気持ちだったんで、一時期は本当に毎日のように考えてました。

質： じゃ、高校のころは結構そういうことについて考えた？

B： ええ、考えてましたね。

質： 例えば、そういうことを思ったときに、相談するではちょっとないのかもしれないですけども、だれかにそういう内容を話してみたりされたことってあります



か？

B： 何か手当たり次第、人をつかまえては（笑）。

質： 手当たり次第（笑）。

B： 結構、何か前には母親に特に言っていたんですけど、そういう話はしてたし、あとは日本に友達がいる、文通しているんで、その文通、手紙のほうにガーッといっぱい書いて。相手はもしかしたら辟易していたのかもしれないけれども、多分そうやって書くのがストレス発散になるだろうと思って書いてて、日記とかにも書いたりなんかして。

質： それはそこら辺にいる友達じゃだめで、やっぱりお母さんとかそのペンフレンドとか？

B： そうですね。そのときにすごく自分が周りが見えていない感じがしたんで、何か客観的に、だけど割と冷静に評価してくれる人がほしい、ほしいなと思ってて。……が大阪に行ったこともあるんですけども、日本に一時帰国したときに、そこは東京だったんですよ。東京じゃなくて神奈川だったんですけど、1回大阪に遊びに行つて、そのときに先生に話を聞いてもらったりとか、すごく尊敬している先生が1人いて。目上の上いっぱい意見を……。

質： 客観的に見れますものね、経験上ね、先生だから？

B： やっぱり、友達だと、友達は友達でいっぱいだから、ちょっと聞けないなど。

質： じゃ、その話すことによって、自分の中で何か変化はありましたか？

B： そうですね。何かやっぱり何回も同じことを、また同じことを言っているよというふうに、実は確認みたいな感じが多かったですけど。それを確認しているうちに、そのうちに同じ堂々めぐりからふっと出れる瞬間があつて、何だ、そんなことかと思うことがたまにあつて。

質： じゃ、結構話して、何度も話して確認しているうちに、そんなに考えなくてもいいんだなとか、そんなに重いことでもないんだなと思うという感じでしょうか？

B： そうですね。そういうときもあるし、何かずっと親には見えないもので縛られているんじゃないかとか、自分自身を自分自身で決めて苦しめているんじゃないのと言われて、何か意味がわからなかったんですけど、考えているうちに、あっそう言われてみればそうかなというふうな感じで、こだわりが少しずつとれていったような部分はあつた気はします。

質： じゃ、自分の生き方とか今の自分の状況という、生活、友人関係、全部含めてなんですけど、満足できるものですかというふうに聞かれたら、どうでしょうか？

B： 多分、とても満足ですというように思います。

質： それは、具体的に、しゃべれる範囲でいいんだけど、どういうことで満足だなと思いますか？

B： まず、やっぱり、結局満足できるかできないかというのは、ストレスが多いか少ないかで私は判断しているんですけど、高校時代に比べると、何か今の生活というのは極楽みたいな感じなんです。勉強もそんなにしんどくなくて、日本語も普通に通じるから無力感とも減るし、あとは友達がちょっとできなかったんで、友達がいるのはすごくうれしい。あと、今母親と2人暮らしなんですけれども、そうすると父親と弟はよく昔衝突してて、家の中が荒れることとかあったんですけど、母親と2人だけだとお互いツーカーでわかるんで、そういう煩わしいことがなくて、すごく。あとは、サークルとかもおもしろくて、新しく、あっそうなんだと発見することがあって。

高校のときはずっとインターナショナルスクールに行ってたんですけど、やっぱりそういうところに行くと学校と家の生活しかなくてすごい息が詰まるというか、閉塞感みたいなのがあって、それが大学に入ってからドーッと流れ始めたみたいな感じで、今はすごい楽しいんです。

質： じゃ、学校に来るのがすごい楽しいという感じですか？

B： そこまででもないですけど（笑）。

質： それはちょっと気持ち悪いですかね（笑）。

B： そうですね。でも、こういう生活はきっと長く続かないだろうなと思いつつも、多分今人生のいいところにいるだろうなというような感じで。

B： 波がすごいあって、幸せだなとしばらく思っていると、必ずすごい落ちるんですよ。落ちたなと思うと、やっぱりすごいこなついていいのと思うぐらい人生が楽しかったりという波があって。

質： 繰り返しがこう…？

B： 多分、この先もあるんじゃないかなと思って、そのところをあんまり無防備に喜んでいても、次来るときに……失うことがあると思っちゃうと。

質： 偉いな。

B： いや、臆病者だからというので。

質： 私なんかはいつも有頂天ばかりで、後でドーンとなっちゃうんで（笑）。

B： 絶対そのほうがいいですよ。下手に取り越し苦労が多いよりは。

質： そうかな。

B： 私も……ですね（笑）。

質： じゃ、今までの人生にとか、あるいはこれからの人生において、自分はこのために生きていると思う存在価値であるとか目標ということは、今見つけていますか。それとも、もしないならば、これから見つけ出せそうかな、何かそういう兆し

というか、そういうものを感じますか？

**B:** 何か一時期はそういう目標とかを見つけようと思って焦ったんですけども、見つからない人生でもいいかなというふうに思うようになったんで。今、漠然とやりたいなと思うことが、一応生きてるうちに自分が存在してたということを周りの人に知ってほしいなと思うんですけども。だれともかかわらない人生は嫌だけど、別に死んで何も残らなくてもいいかなという感じなんで。どうなんでしょう。目標を別に探すこともしてないような感じにいるんですけど。

**質:** 何かかちっとしたものに決めて、それに向けてとらわれるよりは、漠然としてたほうがいいのか？

**B:** ただ、決まんなかったんですよ、結局かちっとしたものが。しかも、計画を立てても、何か、例えば事故に遭っちゃうとかいえば、どうせ、はなから振り出しに戻るしとか思って。でも、本当は生きる意味とかを見出したいんですけど、見つからなかったら、それはそれでみたいな感じなんですけども。

**質:** 例えば、もしも何かのために生きてるのだろうか、私は何のために生きてるんだろうとか場所がないとか、あるいは将来に希望が持てなかったりして、毎日がすごくつまらないものだったとしたら、**B:** さんならどういうふうに対処しますか？

**B:** とりあえず時間がたつのを待っているようでね、ずっと。高校のときは、本当にそんな感じだったんですよ。バーッと放り出したいなと思ってたんですけど、逆にそういうときじゃないと見えないものとかもあるから、とりあえずそのときに見えるものを見ておいて、味わえるものは味わっておいて、また違う状況になったら、それでいいかなという。でも、もしその悩みの原因とかがはっきりわかれば、それを何とかしようと、多分行動に移すと思うんですけど、漠然ともし虚無感とかがずっとあったら、多分それを抱えて生きていくようになるんじゃないかなと思います。

**質:** 例えば、それをだれかに話すとか日記に書くとか音楽を1人で聞いてみるとか、そういう具体的な対処法はどうなんですかね？

**B:** 多分、そういうのは全部やると思うんですけど。

**質:** とりあえず一通り？

**B:** 本を読んでみたりとか親に聞いてみたりとか、あとは日記つけてみたりとか、とりあえず何でもそんなふうに思うのかなというのを探るためにいろんな手を使うんじゃないかなと思います。

**質:** あとは、ほかに何か思いつきますか？もし、自分だったらこれをするだろうなとかいうのは、日記とかお母さんとかお友達とかに話すとか書くとか、そういうこと以外に。

**B:** あと、とりあえず分析してみて、わからなかったら、もう恐らく置いておこうという感じなんで、最初にやれるだけやって、だめだったらあとはほうっておくみた

いな。

質： じゃ、あなたの心の支えは何ですかという質問をされたときに、B：さんなら何と答えますか？

B： それは生きがいみたいな感じですか、それとも。

質： 本当に心の支えは何ですかという単語を聞いたときにイメージするものでいいんですけど？

B： それは、多分母親だと思います。

質： じゃ、お母さんとはとっても仲がいいんですね。

B： そうですね。結構。逆に、それが心配になるときもあるんですけども、このままじゃまずいんじゃないかなというふうに思うときがある。親のコピーじゃないから、いつかは抜け出さなきゃいけないと思うんですけども、あまり母子密着というのもまああって思うから、一生懸命客観的に見ようとは思うんですけど、やっぱり話しておもしろいとか一緒にお菓子をつくったり食べたりしているとかで。多分、今だけできるんならいいかなと思ってやってるんですけども。

質： 本当、でもそうだと思う。

B： ですよね。

質： 私は、ずっと実家にいないから、1人でこっちに出てきているから、そういうのを聞くととてもうらやましいですよ。私もお母さんがとっても好きだった人なんです。

B： じゃ、偉いというか、すごいですね。1人暮らし。

質： でも、やっぱり何かがあると電話したりして、助けはすぐ求めちゃいますけども。

B： 私も、いつも帰るたびに、きょうあったこととか、とりとめのない話を何か。

質： そうです。そういう人がいるっていうのは、やっぱり大事ですよ。

B： そうですね。

質： 例えば、ちまたに浜崎あゆみとかドラゴンアッシュとか、ああいうはやりの音楽というのが、自分の居場所はここだったとか存在意義がここにあったとか、そういう歌詞で歌っているんですよ。そういうのに関してはどう思われますか？

B： どうぞという感じ。

質： 好んで聞くとかではなくて、どうぞという感じですか？

B： ドラゴンアッシュは、何……もないんですけど、浜崎とかは普通に聞いてふーんという感じで、歌詞で選ぶというよりも。

質： イメージとか、そういうことですか？

B： 気分とかで結構選んじゃうんで。

質： 音楽ですものね。

B： でも、人生観は結構好きなんです。まだ演歌までは行かないんですけど、でも中島みゆきはすごい好きで。

質： 渋いところを突いていますね（笑）。

B： そうですかね。迫力のある女の人っていいかなと思って。

質： わかるような気がする。

B： そういうのを聞きながら、これだよ、これみたいに思うときがありますね。

質： そうか、今テールランプがはやっていたりするんですよね。

B： そうなんですよね。聞きたいんですけど、まだ聞いてなくて。

質： Bさんにやっていただいたものと同じものを高校生と大学生にずっと配って、アンケートをとっているんです。私が見た感じでは、自分の生きる意味とかをすごく感じているとか使命感がとってもあるという回答があった感じなんですけども、そのことについてはどういうふうに思いますか？当然だなとか、例えば質問用紙がこうだからこういう気分になるんだよとか。

B： 高校生も大学生もそういうご回答ですか。

質： 全部じゃないんですけど…。まだわからないんですよ。

B： すごいですね。私はみんな見つけているのかなとか思いながら、丸つけてたから、ちょっと意外なんですけれども、今。

質： そうですね。意外ですよ。質問用紙をやった感じではどうでした？

B： 私は別に、読んだけど、確かに見出してないというふうに認めちゃうと自分が傷つくから、そういう回答を避けちゃったという人も多いかもしれないとは思いますが、でも私は別にそんなに。

質： 思いませんでしたか？

B： 別にどう思われてもいいかなと思ったから、丸しちゃったんで。

質： わかりました。以上です。ありがとうございました。長々といろいろ……。

— 了 —

・ **大学生 C**

属性：20 才，男性，私立大学 2 年生

PIL 尺度 Part-A 得点：88 点

実施日：2001 年 10 月某日

実施場所：首都圏近郊私立大学施設

インタビュー実施責任者：博士課程 3 年 加藤 陽子

インタビュアー：博士課程 3 年 加藤 陽子

質： どうでした、アンケート難しかったですか？これ、何かわからないところとか。

C： 難しいとは別に思わなかったですけど。

質： じゃ、そんなにわからないところもなく？

C： そうですね。でも、ちょっと考えながらはやってきていますよ。

質： すごく考え込むような場所とか、ありましたか。

C： 1カ所あったような気がしますね。

質： じゃ、そんなに引っかかることはなく、割とスムーズにとけたと考えることができると？

C： そうですね。

質： ふだん、自分が、例えば C：君が何かのためにとかだれかのために生きているのかなとか、あと自分の居場所、おれの居場所ってどこだろうみたいなことって考えたことはありますか？

C： そうですね。それはありますね。

質： それは結構頻繁なものですか？

C： いや、そんなことはないです。

質： たまに、ふと思うぐらいですか。

C： はい。

質： 将来に、その将来、例えば就職でもいいし、将来のビジョンでもいいし、そういうものに対してああ、どうしようとか、そういうふうに悩んだことはありますか？

C： 悩むというか、考えたことはありますね。

質： それはしょっちゅう考えますか？

C： そんな毎日とか、そういうものじゃないけど、何かきっかけがあったら考えますね。

質： 今、2年生ですよ。

C： はい。

質： それは就職とか、そういう具体的なものですか？

C： というか、とりあえずゼミとか。

質： V科？

- C: はい。
- 質: だったら、ゼミ決めが大変なものね。
- C: そうですね。
- 質: 例えば、居場所はどこだろうとか、そういうふうに思ったときって、具体的に言うならどういう、例えば人間関係とか親子関係とか恋人関係とか、いろいろあると思うんだけど、具体的にどれだろうと考えると？
- C: 友達関係ですかね。
- 質: 例えば、そういうことを考えたときに、だれかに話すとか、不安なんだ、そういうことでということをはしたりはしますか？
- C: そうですね。しますね。
- 質: それは、話すなら、例えばだれに話しますか？
- C: つき合っている人がいるんですけど、その人とか、あと大学で一番仲いい人、親友だと思うんですけど、その人に話したりとか。
- 質: それはサークルとかですか？
- C: そうですね。サークルで知り合って。
- 質: それは同姓のお友達？
- C: そうですね。
- 質: 彼女と男とお友達だったら、どっちがワーツと話しやすいですか？
- C: それはどっちもですね。
- 質: 2人ともダーッとしゃべりやすい。
- C: はい。
- 質: じゃ、話すことによって何か自分の気持ちの中での変化とか、そういうものというのは生まれるかな？
- C: 落ちつくんですよね。そういうのはあるかもしれないですね。
- 質: 何かアドバイスをもらったりするとか、そういうこともありますか。それよりは、むしろダーッと聞いてほしいと？
- C: そうですね。どっちかという、特にアドバイスを求めているわけではないというのが、こういうふうな気持ちもあるんだよみたいな（笑）。
- 質: なぜ彼女とか男の友達なんだろう。親とかじゃなくて。やっぱり、身近というか、そういう友達のほうがいいんですか？
- C: というか、例えば大学の友達の話とかだったら、親に言うんだったら、一々この友達がこんなやつでとか、そこから始まるじゃないですか。それが面倒くさいというのもあるかもしれないですね。
- 質: 地元の友達とか、そういうのには話をしない？
- C: 地元の友達には、別にそんな話はしないですね。

質： じゃ、例えば自分の生き方とか、今の状況が満足できるものですかというふうに聞かれたら、イエスかノーかといったら？

C： イエスですね。

質： それは、例えば具体的にはどういう理由でイエスというふうに答えるの？

C： 例えば、大学に来て、大学に入ったのが、心理系の何か仕事につきたかったんですよ。

それに対して、やっぱりどんどん近づいていってるというのがあるんで。

質： それは高校のときから、もう心理系に行こうと思って、ここを受験した？

C： そうですね。高校3年ぐらいのとき。

質： すごい。そうか。じゃ、もうゼミ決めは臨床系でということ？

C： そうですね。

質： 具体的にこういう仕事がしたいとか、そういうのはあるんですか？

C： まだそんなに詳しくもないんで、臨床に入ったらまた見えてくるんだろうしというのがあるんで。

質： V科だと、臨床の先生が、L先生かJ先生か……か、その4人。

C： はい。

質： じゃ、今までの人生とか、もしくはこれからの将来の人生において、自分はこうして生きていこうとか、目標とか、これを基盤にというか、存在価値をここで見つけていこうみたいな、そういうものはありますか？

C： 仕事とか、そういうのがあるのはベストで。

さっき聞いてちょっと頭に浮かんだのは、やっぱり大学の友達も大事にしたいし、地元の友達というのも。

例えば、東京で就職したら、やっぱり地元は遠くなるじゃないですか。だから、その辺をちょっと考えてですね。

質： 地元の友達とかも、結構帰ったら仲よくしたりしている？

C： そうですね。ずっと小学校のとき、1クラスだったんですよ。だいぶ仲がいいんで。

質： じゃ、小学校から仲間がいいということ、お友達が？

C： もっと、保育園からですね。

質： すごい。じゃ、かれこれ20年近く？

C： そうですね。

質： でも、心理学の仕事だったら、多分どこに行ってもひよっとするとできるかもしれないしね。

C： そうですね。

質： じゃ、そういう人間関係とか、そういうことに重きを置きつつ、仕事も、ある自分のビジョンを変えないでやっていきたいという、両方やっていきたいという感じ？



C: そうです。

質: すごいしっかりしてる2年生なのね。偉い。

C: そんなことはないんですけども。

質: 私は2年生のときも、何かゼミ決めとか、適当だった。臨床系に行きたいなと思ってたんだけど、でもどの先生がいいかわからないとかとって。ゼミ訪問というのがあるじゃないですか。聞いてもわからなくて、えっと思って、お菓子が食べられると聞いたから、L先生にしたの(笑)。

やっぱり、でも学校系に進みたいんだったらとか、病院系だたらとかという、一応の 카테고리はあるみたいだけど、授業とかを受けてて、何かそういうのを感じない?

C: 授業を受けてると迷うんですよ、それが。

質: 確かに、……先生とか、授業の仕方が抜群にうまいものね、授業とかね。確かに、L先生はL先生でわけがわからないみたいだけど(笑)。そういう進路のこととかはだれと相談するの?

C: それは、さっき言ったような人もそうなんですけど、ただあんまり、多分人よりは悩んではないと思うんですよ。

今までそうだったんですけど、何となく自分が選んできたものが、後々考えたらよかったというのがあるんで、何か変に信じてるみたいなところがあって。

質: でも、わかる気がする。そういうのは。

C: 多分、自分が選んだのが合っているだろうみたいな感じでいたから。

質: いいね、そういうのは。

何かそういうのはあるよね、確かに。私もそうやって来ているような気がする、ちょっと。

じゃ、例えばもしも何のために自分は生きているんだろうとか、私の自分の居場所はどこだろうとか?

C: 君が思ったりしたときに、あるいは将来とか、どうしようというふうに悩んだりして、今の日常があまりつまらないなと思ったとしたら、そのときは自分でどういうふうに対処すると思いますか。

C: 多分、環境というのが、何がつまらないと感じるかというのはわからないんですけど、例えば学校だったら、自分でどうにか変えていこうとするじゃないかと思うんですけど。

質: 例えば、それは具体的に思いつく方法とかがあるかな。お友達に話すとか音楽を聞くとか旅行へ行くとか?

C: それは何が自分にとっておもしろくないかというのはわからないと、ちょっと出てこないんです。

質: 例えば、将来というのに対して、そういうことを考えたら、自分だったらどうする

と思いますか？将来おもしろくなかったというか、将来、目標をやろうと思ってたんだけど、心理学はこういうものだと思ってやってたんだけど、結構つかまらないな、心理学って思っちゃったとしたら、例えばそういうときはどうするかな？

C： 多分、ほかにおもしろいことを探すんじゃないですかね。

質： ポジティブシンキングだね。偉い。

C： そうですね。楽天的と言われてます。

質： そうなの？でも、悲観的になるよりはいいよね。

C： はい。

質： じゃ、あなたの心の支えは何ですかというふうに聞かれたときに、心の支えという言葉からイメージするものは何ですか？

C： やっぱり人ですかね。

質： それは人全般。

C： それは自分の知ってる人ですけど。それは、ふだんあまり考えたりしないですけど、そんなことは。

例えば、家族にしてもそうじゃないですかね。今つき合っている人もそうだし、友達もそうだと思うし。

質： 彼女というのは大事な存在かな？

C： そうですね。

質： 結構自分の中でウエートが大きい存在になるかな？

C： そうなるんじゃないですかね。

質： 男の子ってそう言うよね。おもしろい。

C： そうですか？

質： 女の子に聞くと、意外とあっさり「うーん」と言ったりして、ちょっと衝撃を覚えてたんだけど、私なんかは「えっ」とか言って。

じゃ、浜崎あゆみとかドラゴンアッシュとかの曲はあんまり聞かない？

C： ドラゴンアッシュは聞きますね。浜崎あゆみは嫌いですね。

質： それは何で嫌い？最近、目の衰えが隠せないから、そういうんじゃないかと（笑）。

C： じゃなくて、何かまた出たかみたいなの、すぐ出てくるじゃないですか。そこで、まず何でだろうというのがあるんですよ。そんなに結構早いペースで出ていくものなのかというのがあるんです。多分、そうなんだと思うんですけど、何か嫌いというか、聞く気にならないというか。

質： じゃ、ドラゴンアッシュは何で好きなの？

C： 特に、何か格好いいから。

質： 格好いいから、大事だね。

C： そうです。聞いてたら、また聞きたくなるという感じ。

質： 歌詞とか、すごい集中して共感したりするの？

C： いや、全然ないですね。歌詞はもう全く聞かない。

質： とりあえず、あのリズムが好きという、そういう感じ？

C： そうですね。女の人でよくいると思うんですけど、歌詞がどうのこうのと言う人がいるじゃないですか。全く理解できないですね（笑）。

質： そんなことじゃないんだよ、音楽はというぐらい…。

C： だから、音楽を聞いていて、その歌詞が聞き取れるのが、まず理解できないんですよ。

こうやって普通聞いてたら、多分歌詞が残るんですかね。それがわからないんですよ。言葉のフレーズとか、端々しかわからない。

質： でも、言葉とメロディだものね。だって、音楽って、歌詞だけガーッと入ってきてもね。

C： だから、その歌詞に関しては、例えばカラオケとか行ったら出るじゃないですか。あれを見て、初めてああと、そういうことしか言えません。

質： こんな歌詞だったんだという。

じゃ、みんなにこういうアンケートを、C：さんにやってもらったものを大学生と高校生に、今とっているんですよ。統計して上がってきたものを見たときに、何人か生きている意味というものに、結構僕は毎日がすごく楽しくて、生きている意味もすごくあると思ってて、使命感もすごくあるというふうに答えている人がいたように感じたんですね。それについてはどう思いますか。やっぱりそうだよねとか思う？実際やった人たちから見ればそれは当たり前の結果だなと思うのか、もしくは僕はそんなことはなかったけど、みんなはそうなのかなぐらいなのか…？

C： どうなんですかね。それは。

質： 例えば、使命感がないと言い切るのにはすごく抵抗がある？

C： そういうことはないんじゃないんですかね。それは、多分ないと思うんですよ。そのアンケートで、例えばあれですよ。いつもやってる、みんなに配ってやっているような、そんなことはないと思うんですよ。

多分、自分が実際に使命感がないと感じたら、多分ないというところを書くのは、特に抵抗はないと思うんですけど。というのも、やっぱり匿名性というんですか、今こうやってここに来てやってますけど、普通はそんなのないじゃないですか。

だから、そんなのはわかっていると思うし、特にこの人はやらないと思うんで、だから思ったように書くと思うんですけど。

質： じゃ、C：君は、別にこれはやって、何か頑張ろうとか、そういう気持ちになってパーッとつけたわけでもなくて、平静に。

C： どっちか、例えば5段階でいって3か4かというときに、ちょっといいふうにやる

というのはあるかもしれないですけど、2か4かで迷ったりとかはないですね。そういうことは。

**質：** ありがとうございます。以上です。

— 了 —

・ **大学生 D**

属性：20 才，女性，私立大学 2 年生

PIL 尺度 Part-A 得点：82 点

実施日：2001 年 10 月某日

実施場所：首都圏近郊私立大学施設

インタビュー実施責任者：博士課程 3 年 加藤 陽子

インタビュアー：博士課程 3 年 加藤 陽子

質： じゃ、アンケートしてみて、どこかわからないところとか、何か「うん？」と思うところがありましたか。

D： いや、別になかったです。

質： そんな答えにくくもなく。

D： はい。

質： それでは、ふだん [大学生 M] 君が、自分が何かのためにとか、だれかのために生きているのかなとか、自分の居場所はどこだろうみたいなことは考えたことはありますか？

D： ありますね。

質： それはしょっちゅうですか？

D： いや、しょっちゅうじゃないんですけど。

質： どんなときに考えるかな？

D： 自分が寂しく感じたときとか、そういうときに考えます。

質： じゃあ、人間関係とか、そういうもので？

D： そうですね。友達とみんないるのに、輪にうまく入っていけなかったときとか、そんなときとか、自分の居場所じゃないのかなとか。

質： なるほどね。じゃあ、例えば、将来に対して、ああどうしようって思って、毎日がうまくいかなかったりすることとかはある？

D： 将来のことというのは、あまり考えたことがないんですよ。なるようになれというか、そんな感じなので。

質： そんなに思わないかな？

D： そうですね。

質： まだ 2 年生だっけ？

D： はい。

質： まだ 2 年生だもんね。じゃあ、別にこれといったのがあるわけでもなくて、それについて思い悩んだりするわけでもなく？

D： そうですね。

- 質： じゃあ、D：君の場合だと、居場所じゃないのかなとか思ったときは、だれかにそのことを話したりしたことはありますか？そういう気持ちを。
- D： ないですね。
- 質： 話したいなとか、何か居場所がないかとか、つらいんだよねということを話したいなとか、そういうふうには思いませんか？
- D： そういうのを話すのは、自分の弱いところを見せるような感じで嫌だなんていうのが多分あると思うんです。
- 質： じゃあ、別に家族に話すわけでもなく、友達とかに話すわけでもなく？
- D： そうです。だから、別にそんなに深く悩んでいるわけじゃなくて、最初から、こいつだと、あんなもん合わないんだよとかって、ほかに合うやつらはいらるから、そいつらといるときは楽しいからいいやという感じですね？
- 質： じゃあ、将来のことをあまり考えないと言ったけど、その将来のことも、何か思ったことがあっても他人には話さないという…？
- D： いや、将来のこととかだったら話はすると思います。
- 質： それはやはり家族とか、かなり親しい、自分と考えると合う友達とか？
- D： そうですね。
- 質： 例えば、話をしたりすることによって、何か変化はあると思うかな？自分の中で、気持ち的に。
- D： そうですね。やっぱり話せば楽になる部分があると思うし、共感してくれたりすれば、楽になる。
- 質： じゃあ、例えば、自分の生き方とか、今の状態に満足できますかという質問だったときに、イエスとノーだったら、どちらで答えるかな？
- D： まあ、イエス。
- 質： それは何でですかとか聞かれたら？
- D： やっぱり、ノーと言ったら自分を認めてないみたいで嫌だから。ある程度、自分のことは認めてやらないとおもしろくないじゃないですか。おもしろくないというか、何というか。
- 質： 例えば、自分のことを満足できると思わないと、……すごくよくわかるんだけど、例えば、それは人間関係とか、いろんな環境があるわけじゃない。それをひっくるめてオーケーとする？
- D： 難しいですね。
- 質： ごめんね。ちょっと難しいんだけど。ううんと…。例えば、人間関係だったら、今の自分は満足してるよというので、イエス、ノーだったらどう思う？
- D： まあ、満足は、それなりには。
- 質： それは大学生活で、いろいろなお友達がいるからとか？

- D: そうですね。気の合う友達が見つかって。
- 質: さっき、居場所の話とかをしたときに、あまりお友達には話さないようにするけど、地元は…?
- D: N県なんです。
- 質: じゃあ、地元から出てきているわけだよね。地元の友達とかに、大学でのこととかを話したり、相談したりとかするかな?
- D: まあ、そうですね。しますね、少しは。
- 質: じゃあ、例えば就職とか、全然考えられないだろうけど、まだ。そういう将来のことに関して何かやっていたりして、満足してますかと言われたらどうかな? お勉強でもいいし。
- D: 満足はしてないですね。
- 質: それは何でだろう?
- D: になりたいものという、はっきりしたものがなくて、だから、何をどうやっていいのかわからないし、適当に自分でも手を抜いているんだろうなど。もっと勉強もやれば、もっとたくさんできるようになるだろうしというのはあるので。
- 質: でも、まだ2年生だもんね。そんなこと言ってもね。
- D: そうですね。
- 質: ちなみに何科?
- D: W科です。
- 質: W科なんだ。ゼミ決めがない?
- D: そうですね。もう少しで多分あるんです。
- 質: そうだね。何人かインタビューしていて、ゼミ決めがあると言っていた子がいて。今のところ決めてないの? 何研とかいう。
- D: 最初は臨床研に行くつもりだったんです。それで、いろいろ授業を取っているんですけど、何かあまりおもしろくないなというのを最近感じて、どうしようかなと。
- 質: 偏っているからね、うちの臨床はね。
- D: そうですね。
- 質: 例えば、今までの人生とか、あるいはこれからの人生において、自分がこのために生きているなという存在価値みたいなものとか、あるいはビジョンみたいな、目標みたいなものは見つけているかな?
- D: いや、見つけてないですね。見つけてないというか、多分、逆に、やっていたことが、それがやるべきことだったのかなと。
- 質: 深い。じゃあ、別にあえて見つけなくても、後からついてくると?
- D: 結果的に、これをして、それが目的だったのかなと。

- 質： なるほどね。格好いい。字面にすると、これは格好いいよ（笑）。じゃあ、あえて無理やり自分で見つけようとして、がつがつやっていくというわけでもない。
- D： あまりないですね。何でも結構、なるようになっていけというか、流れに任せていくというか。
- 質： じゃあ、例えば、もしも D：君が、何かのために、みんなのために生きているんだらうとか、居場所ないなと思ったり、あとは将来とか、どうしようと思ったときに、思ったとして、それらを毎日、日常生活で思いが重なってきて、つまらないな、毎日どうしようと思っちゃうなというときに、自分だったら、どう対処する？
- D： それは考えないのが一番いいと思うんで、それを考えなくても済むような楽しいことをするかなと。逃げるんですね。
- 質： でも、ほかのことをするんですね？
- D： そうですね。何もしてないと、そんなことばかり考えたりして。
- 質： じゃあ、お友達に話したりということをしたりとか、1人で音楽をお部屋で聞いてみたりとか、ひたすら寝てみたりとか、そういう対処法には出ない？
- D： 1人でいるとだめですね。
- 質： 悶々としちゃって？
- D： ええ。
- 質： じゃあ、遊びに行ったり？
- D： そうですね。大学の気の合う友達と会ったりとか。
- 質： その気の合う友達というのは、やっぱり大学関係？
- D： そうですね。大学もそうですけれども、やっぱり、今、生活しているところが大学じゃないですか。だから、そういう悩みも、きっと大学でのことが多いと思うので、関係ない地元の友達とかに会ったりするのかなと。ちょっとわかんないですけど。
- 質： じゃあ、全く今持っている悩みとは別なところに行こうとするということだよな？
- D： そうですね。
- 質： じゃあ、あなたの心の支えは何ですかと言われたときに、イメージするものは何ですか。本当に心の支えという言葉からイメージするものでいいんだけど。
- D： 自分に力を与えてくれるものですかね？
- 質： 何だろう？例えばどういうものだろう？
- D： 好きな人とか、そういうようなのが大きいですね。好きなものとか、そうですね。やっていて一番楽しいことが支えになっているのかなと。違うかな？ ちょっとわからないです。



質： じゃあ、自分が好きな人とか、自分を盛り立ててくれるような？  
D： そうですね。熱中できるものですね。  
質： その、ものというのは、具体的に思いつく？  
D： サークルでバトミントンをやっているんですけど、それが今、すごく楽しくて。  
質： バトミントンはものすごく体力使うでしょう？  
D： そうなんですよね。  
質： そうだよね。友達とというか、たまたまやる機会があって。バトミントンをするときがあって、5分やるだけで、すごく息切れるんだよね、ふだん運動してないから。恐るべしバトミントンとか思ってね（笑）。  
じゃあ、浜崎あゆみとかドラゴンアッシュとか聞きます？  
D： 聞かないです。  
質： 聞かないか。ソフィアとかは？  
D： 聞かないです。  
質： あの人たちは、いわゆる世間で、自分の夢とか、自分の存在価値とか、自分の居場所というものを歌詞にして、歌にされていて、それに共感している若い人間が多いというふうに、今、ちまたで、一部のメディアには言われているじゃない？ そのことに関してはどう思う？  
D： いや、何も考えたことないですね。そう聞いたのが初めてかもしれない。興味ないです。  
質： 別にじゃあ、そういう人もいても、ふーんという感じ？  
D： そうですね。  
質： じゃあ、歌詞に聞き入って音楽を聞くタイプじゃない？  
D： うん、違いますね。歌詞に共感するとかよく聞くんですけど、あまりそれがわからない。うーん、そうなのかなという感じなんですよ。歌詞というか、やっぱりメロディとかが……。  
質： メロディから入るタイプ？  
D： うん。ちょっと音楽をやっていたことがあるので、子供のころに。だから、音の使い方とか、そういうのが気になるんですよ。  
質： 楽器を習ってたの？  
D： はい、キーボード。  
質： キーボードが弾けるの？  
D： まあ、少しですけど。  
質： すごくすごい、そうなんだ。じゃあ、メロディが気になるかもしれないね。  
D： そうですね。  
質： 今、D君にやってもらっているようなこのアンケートを、高校生と大学生に採

っているのね。今、統計を上げてきているんだけど、使命感はありますかとか、そういう項目があったのは覚えているかな。

D： はい。

質： あと、生きている意味がうんたらかんたらというのがあったでしょう？ああいうのに関して、全部上げてきていないからわからないんだけど、私の今の印象では、自分が生きている意味があるぞとか、使命感あるぞって人もいたのね。D：君はそういうのに関して何か思う？

D： それなりにみんな何か感じているんじゃないですかとは思いますがね。

質： 私はもう大学生を過ぎちゃってるから、だいぶ。これを大学生の気持ちでやるということができないんで、あまりわからないんだけど、もしかすると、この質問用紙だからかなと思って。それはやってみたイメージでどうかな？

D： それもありますね。

質： やっていて、「うん？」と思っちゃうところとかはあった？

D： 「ない」としたら、何か嫌だなって。

質： そうだよね。以上です。ありがとうございました。

— 了 —

・ **大学生 E**

属性：20 才，男性，私立大学 2 年生

PIL 尺度 Part-A 得点：87 点

実施日：2001 年 10 月某日

実施場所：首都圏近郊私立大学施設

インタビュー実施責任者：博士課程 3 年 加藤 陽子

インタビュアー：博士課程 3 年 加藤 陽子

質： アンケートをしてみてどうでしたか？何かわからないところとか難しいところとか。大丈夫でしたか？

E： はい。

質： 意味とか、そういうのもあったけど、そんなに考え込まずに。

E： いや、特には。

質： ふだん、例えば E：さんが自分のためにとか、何のために生きているんだろうとか、そういう自分の居場所を、おれの居場所はどこだろうみたいなことというのを考えたことはありますか？

E： 居場所とか、そこまで考えるまで特に。基本的に、考えるときって、何か寂しいときじゃないですかね。だけど、居心地がいいとき、自分の居場所なのかなと思うときがたまにあるんですけど、特に深刻に考えることは全くないですね。

質： それは、例えば居心地がいいときに、居場所があるなと思うということはしょっちゅうありますか？

E： しょっちゅうってどれぐらいかはわからないですけど。

質： 自分でしょっちゅうとを感じるぐらいありますか？

E： そうですね。回数的にはそうなのかもしれないんですけど、感覚的には。

質： その居心地がいいと思うときというのは、周りに人がいる状況とか、もしくは自分の充実しているときとか？

E： 居心地がいいと思うのは、やっぱり自分と似たような価値観を持った人と一緒にいるときとか、友達にしろ、お互いの存在を認め合えることができる、そういうときですね。

質： 例えば、将来とか、そういうものに対してどうしようとか、そういうふうに住心地が悪いなとか、居場所がないなと、僕はどうしたらいいんだろうみたいなことは考えたことは？

E： 例えば、何か職種によっては人柄の傾向があるとして、何か自分と全く合わない仕事についちゃって、そういう人ばかりいたら嫌だなとかは思いますけど、どうなんですかね。でも、一般企業とか、そういうところに入っちゃったときに、

そういうことはあるかもしれないですけど、夢のある仕事について場合なんかは、みんな夢を持って仕事をやっているわけなんで、自分の夢を達成する仕事に行ければ問題ないと思っているんで。だから、実際、そういう場面に直面したらそう思うかもしれないですけど、あんまりそっちのほうは考えないんで。

質： じゃ、今はまだそんなに直面していないし？

E： 将来も直面しないだろうという、そんなのもあるんで。

質： じゃ、それは就職とか、そういう将来に関してはあまり思わないと？

E： そうですね。そういう仕事につく気はないので、多分自分のつく仕事先にも自分と似たようなのがいるんじゃないかという感じですね。

質： じゃ、例えば居心地がいいなと思ったり、そう思ったりしたり、もしくは居心地が悪いなと思ったり不安になったときに、だれかにそういう気持ちというものを話したことはありますか？

E： 僕の場合は、話す頻度はもしかしたら多いかもしれないんですけど、一切ためないんで、冗談で言って終わりみたいなので。だから、多分周りには、頭の中に残っていないと思うですよ。

質： じゃ、話すだけけれども、別に深刻そうに話すのではなくて、軽い感じで？

E： もうちょっと嫌だと思ったら、多分言ってると思うんで。それを適当に流してという感じで、一切ためないんで。

質： それは努めてそうしているんですか？

E： どうなのかな。努めてというとなんなんですけど、自分としては結構自然でいたいなというのがあるんで、やっぱり我慢するとどこかでぎくしゃくしちゃって。ため込んでいると、やっぱりため込んだものをだれかに言ったときに、絶対相手に重たいわけじゃないですか。そうすると、悪循環にはまるんで、要するに冗談で言っておけば、相手も冗談で返してと、それがネタになったりとかして盛り上がっちゃったりとかして、大体脱線していくんですけど。

質： そうですね。そういうときはそういうのが多いですよ。

E： だから、生活の知恵みたいな感じで（笑）、考えていないですよ。

質： じゃ、軽くそういうことを流せる仲間というのはお友達が多いですか？

E： いや、何か僕の場合、友達というのもいるんですけど、広く浅くつき合ったりしているんで、そういうときはお互いにもう、何か相談じゃないんですね。もうネタみたいな（笑）。

質： ネタみたいな感じで話していくと。それは、やっぱり大学の中の友達とか、サークルとか、そういう単位ですか？

E： いや、僕の場合、それは特に関係ないですね。

質： じゃ、別にバイト仲間でも？

E: 何でも。

質: じゃ、家族とはどうですか？

E: 家族は、一人暮らししているんで、必要なときしか電話しないんで、そんなことは話さない。基本的に家族とそういう下らないところを話すと電話料金がもったいないし、高いんで話さないですけど。

質: ちなみに、ご実家はどこなんですか？

E: I 県なんですけど。

質: 近いじゃないですか。まだ沖縄とかに比べたら (笑)。

E: そうですね (笑)。

質: じゃ、大学からこっちに出られてきたんですか？

E: そうですね。

質: 一人暮らしは大変じゃないですか？

E: いや、別に何も。

質: 偉い。私も出てきたんですけど、最初の頃、一人暮らしがなれなくて、すごい大変だった記憶があるんです。

じゃ、そういうことを、例えば適当に軽く話したときに、何か自分の中で変化があるなというふうに感じますか？

E: それは、もうすっきりしたなという、それだけで、もう何も思わないし、だれかの悪口にしても、冗談で言ったら、もう言った時点で、例えばその悪口を言った人に対してももう何のわだかまりもないというような、普通につき合えるよなという。

自分と全く合わない仕事についちゃって、そういう人ばかりいたら嫌だなとかは思います。

質: すごい男っぽい感じがしますね。今の話を聞いてると。

じゃ、今の自分の生き方とか状態とか、そういうものに対して満足できると思いますかというふうに質問されたとしたら、イエス、ノーだと？

E: イエス。

質: それはなぜでしょう？

E: 自分が納得しているからじゃないですか。特に、あまり他人の評価とか気にしないんで。

質: それは人間関係も勉強も、いわゆる全体を含めてこんなもんだろうと。こんなもんと言うと変ですけど、何かいいでしょうという感じ？

E: そうですね。

質: じゃ、例えば今までの人生とか、あるいはこれからの人生において、自分はこのために生きてるなと思えることとか人とか、あるいはこうしようと思って生き

てるという目標とか、そういうものというのがありますか？

E： どうなんですかね。このためというのは、そういうのは特になんですけど、仮に自分があした死ぬことを仮定したときに、もしお金のために生きてて、すごいいっぱい財産を残したとして、死んじゃったら、逆に財産がもったいないなと思ったりするかもしれないし、何か虚しさもあるだろうし。そういうふうに考えると、例えば金持ちになっていい服を着たりとかいい車に乗ったりとか、そういうことよりも、例えばあした死んでも何か残せるというのか。例えば、僕は先生になるわけじゃないんですけど、先生だったら、その生徒にとってすごい影響力があった場合、その生徒の中でその先生の存在というのは生き続けるわけで、そういう感じですかね。

質： 何かそういう印象とか、物質的ではないんだけど、何かという？

E： 仮に先生が本を出したとして、そのすごい。

質： 記憶に残る感じですかね？

E： そうですね。そういうことかなと僕は思っているんです。

質： それは、今、どうでしょう、自分の中で見つけられそうですか？

E： 今はまだ実力が足りないんですけど、将来的には何か影響を残せるものを残したいとは思ってますし、そういう仕事にもつきたいなと思っているんですけど。

質： じゃ、漠然とはしているけれども、そういうちょっとしたビジョンみたいなのが自分の頭の中で？

E： 逆に、そういうことを考えると漠然としちゃうというのか、いろいろ仕事についてのイメージとかあるんですけど、やりたい仕事は幾つかあるんですけど、じゃどれがやりたいのと言われると、全部やりたいというような話になっちゃうんで、そういう感じです。だから、この仕事をやりたいとかこのために生きるとかよりは、それに近いものを選んでいくというような感じになると思うんですけども。

質： すごい、立派。

じゃ、例えばもしも自分で、Eさんが自分は何のために生きているんだろうとか居心地が悪いとか、そういうことを思ったり、将来どうしようかなということでも悩んだりして、仮にでもいいんですけど、毎日があまりうまく事が運ばないときとかがあったとして、そうしたときに一体自分はどういうふうに対処すると思えますか？ どういった方法で。

E： そうですね。僕の場合、中高とかはそういうことも思ってたんで、結構……。

質： 中高でそういうことを思いましたか、やっぱり。

E： そうですね。中学とかも思いましたし、高校が一番思いましたね。だから、どうやって対処してきたのかと言われると、どうしようもなかったような気がするんですけど、結構そういうのもすべて過程だと思ってるんですけど。

質： これから先への過程という過程ですよ。

E： そうですね。何でもそうですけど、やっぱりそういう段階を踏まない限りは前に進めないんじゃないかなと思ってるんで。だから、結構プラス志向に考えているんですけど、例えば最近いろいろ犯罪とか先進国で行っていると、社会が病んでいるという表現をするんですけど、病んでいるというと、何か病気になったという意味で、ウイルスが入ってきたとか、そういうマイナスイメージじゃないですか。僕の場合、そうじゃなくて、社会が進化していると思えば、進化の過程なんだなと思えば、その社会がいろいろ複雑になっていく上で避けて通れないものだから、なるんじゃないかなという思いと。

質： おもしろいかもしれない。

E： 自分にとっても、何かそういう成長していく過程で、今まで見えなかったものが見えるようになって、その社会の矛盾とか見えるようになって悩むというのは1つの過程で、そこからその答えを出していく。出ないんですけどね（笑）。

質： そうは簡単にはね。でも。

E： でも、それなりの中である価値観変わっていくんで。あと、やっぱり、いろんな人に会いますね。いろんな人に話してみたりとか、それでその前線にいる人の意見とかを、たとえ間接的にでも話すというのか。

例えば、どのぐらいですかね、僕が中学のときですかね、……なんですけど、I 県の生徒がハロウインのときに間違えて入っちゃって銃殺されちゃったのとかでも、1つの銃問題について考えた場合、結局いろいろ複雑なわけじゃないですか。じゃ、銃を持たなきゃいいじゃないと中学生が思ったとしても、持たなきゃいけない理由があるわけだし、考えていくと虚しいとか思ったりなんかするんですけど、中学生だと。でも、その人はH という人なんですけれども、そのお母さんがいろいろ運動してて、その運動にかかわっている。僕は全然関係ないんですけど、友達とかは、そういうのにいろいろ積極的にかかわっている友達もいて、そういう活動とかの内容を友達が話してくれたりすると、ゼロにはならないんですけど、例えば1回犯罪歴がある人に銃を持たせないとか、そういうふう処置した場合、件数は減るんですよ。減れば、その減った分だけ命が助かっていくわけなんで。だから、中学生とかだと完璧を目指してというか、だれも死んじゃいけないとか、平和のためにはだれも死んじゃいけないとか思うと憂鬱になるんですけど、人は死ぬものだなとか、いい意味でそういう妥協をしていく。その中でどう改善できるのかなと思っていくと、意外と気が楽になるし、やるべきことが見つかるということになる。ただ、完璧を目指すと、やっぱりへこむんで。

質： そうですよ。うん、そのとおりだと思う。なるほどな。じゃ、その中高のときに悩むことは過程だということに気づくまでというのか？

E: これは、これで乗り越えていかないと、自分で。

質: そうですね。例えば、その過程で1人で部屋で音楽を聞いたとか本を読みふけたとか友達とばか騒ぎをしたとか、そういう具体的な方法とかはしましたか? 思い出せる限りでいいんですけど。

E: せいぜいボーッとしているというか。でも、実際にそういう状況でもなかったから、やっぱり、例えば中3のときにいろいろ思って。でも、受験があるわけじゃないですか。勉強しないといけないんで、結局は勉強しないといけなかったりとか、高校も進学校だったんで、結局は勉強しないといけないとか、そういう何かがあるんで、なかなか難しかったですね。だから、どうして乗り越えたんだろうという、やっぱりただ何もしなかったなという気もして、それでただ年をとっていく過程で、たまたまそういう成長をしていって。

質: そういう日々のことはやっていって、悩んでいるんだけど、でもやっていってということが繰り返されて、そういうことになったと?

E: だから、何かやったから解消されたというよりは、何もしてない。

質: 時間が解決したというか、何と言おうか?

E: 時間が解決したと言うと何かあれなんですけど、やっぱり普通に生活しているけども、普通に成長しているわけなんで、そういうことですかね。

どうなんですかね、結構僕の場合は運がよかったというのかもしれないですね。結局、何だかんだ言っても、例えば中学のときにすごい悩んで、中3のときも、それで受験したわけじゃないですか。その受験が落ちてたら、もしかしたら立ち直れなかったかもしれないし、弱いときに。でも、それで受かっちゃったら、まあいいやとなって、よかった、よかったと、結構気が楽になったりするし。あと、高校は、野球やってたんですけど、高2のときにけがをして、もうプレーできなくなって。高校は推薦で入ったんですけど、僕は練習量は多くて、実力もあったんです。だけど、実際にけがすると、自分より下の人が出るわけじゃないですか。その辺に、やっぱり矛盾を感じるというのか、才能も努力も勝ってるのに、何で結果が出ないんだろうと。そうすると、何かへこんでくる気がして、結構頑張ることがあほらしくなったりとかするんですけど。

成績とかはビリぐらいだったんですけど、野球ができなかったら勉強するしかないかなと思って、とりあえず3カ月ぐらいやったんですけど、全然伸びなくて。3カ月で急に伸びたんですよ。それで、何か成績が一気に上がって、やればできるじゃないかと思って、結局それからまた部にお手伝いみたいな形で戻って。そのまま勉強したほうが成績が伸びたと思うんですけど、最後まで続けたいというのがあったんで、時間はもうほとんど拘束されちゃうんですけど。

それで戻ったら、自分以上に周りがそのことを気遣ってくれたというのか。だか



ら、例えば自分のかわりに試合に出ている人とかも、そのことをわかってくれるみたいところが僕以上にあって。だから、気を使っていろいろ言葉がけとかしてくれるわけ。そういう過程で、やっぱりより強い人間関係が持てたりとか。そのまま、初めは何となくお手伝いだったんですけど、やるからにはいろいろやろうと思って、いろいろやったんですよ。いろんな試合を、他校の試合を見てビデオを撮ったりとか、いろいろ偵察とか何か。配球とか、もともとキャッチャーというのはすべて配球とか、全部……やるわけですが、いろいろやって。ビデオとかを使ってフォームチェックとか、とにかくやっていたら、何かそのことがすごい評価されて、最後の夏とかでもいろんな新聞社とか、いろんなところから取材されたりとか、そういうふうになったりとか。

結局、すごい悩む時期があって。あっても、たまたま運よく評価された。例えば、その悩んだことすらも社会的に美化されたりとか、運がよかったというのもありますけど。

質： やはり、実力があつたと思うな。

E： 結構、やっぱりずっと評価されなかつたりとか、それは社会的に評価されなくても、もちろん……から異論が出るわけなんで、……の。それがずっと評価されなかつたら結構立ち直つてなかつたかもしれないんで、一概には言えないですけど。だから、運がよかつたといえば運がよかつたかもしれないけど、タイミング的にですね。結果が出るというのは、結構ばらばらじゃないですか。やれば結果は出ると思うんですけど、その出る時期というのはばらばらじゃないですか。だから、いい結果が出てくれたと思うんで、結構……。

質： 大事ですよ。だめだなと思ったときに、ちゃんと出てくるという結果は。

E： そうすると、またもうちょっと頑張ろうと思うんで。

質： じゃ、話は全然変わっちゃうんですけど、あなたの心の支えは何ですかと質問されたとして、E： さんなら何と答えますか？イメージで構わないんですけど。

E： 自分自身じゃないかと思えますね。特に、自分の過去とか自分自身、これまでやってきたことですね。特に、ものとか人とか主義とか宗教とか、そういうのにはないしね。

質： ここで宗教をガーンと語られても困るけれど、なるほどね？

E： 結局は何だかんだで。

質： 積み重ねてきたものがちゃんとあるということだろうね。

E： 自負があるから大丈夫だろうということですが。

質： ちゃんとそれだけのこともやってきている感じがするものね。これだけ短い間でお話を聞いていても。じゃ、例えば、今浜崎あゆみとかドラゴンアッシュとか、歌を聞きますか？

**E:** 聞かないです。

**質:** 例えば、彼女たちや彼らの歌に自分の存在価値とか自分の居場所はここだったみたいな、そういう歌詞が出てくるんですね。そういうものに対してはどう感じますか。歌の中にそういうフレーズが出てくるんですよ。私の居場所はここだったとか、あと存在価値はこうこうこうだという歌があったりするんですけど、そういう歌詞にひかれて浜崎あゆみが好きだとかドラゴンアッシュが好きだという人もいれば、そうじゃない人もいますじゃないですか。E:さんはそれについてどう思われるかなと思って。その芸能人の歌詞がここにあると言ったのを聞いて、それに共感した人もいるししない人もいますが、E:さんはどうでしょうか？

**E:** 人それぞれだからいいとは思いますが、例えばよりどころとするものというのが変わりやすいものであったら、やっぱりその結果は不安定なんですよ。例えば、彼女のためにとかいっても、彼女は別れちゃったらいなくなっちゃうわけじゃないですか。そうすると、なくなっちゃうわけじゃないですか。どうなんですかね。例えば、僕は高校までというのは野球のために生きていたと思ったんですけど、野球ができなくなったらなくなっちゃうじゃないですか。そうすると、途方に暮れちゃうわけで、結構それがあるから、それで痛い目を見たからというか、わからないんですけど、結構変わらないものというのか、変わらない自信があるものというのと、やっぱり自分だったらコントロールできるじゃないですか。人の心とかは何考えているかわからない。裏切られるかもしれないし、わからないので。だから、そうなんで、自分自身が心の支えになる。でも、人によっては、やっぱり友達とか、人間関係に価値観を持つ人もいれば、それはいいと思うんですけど。

**質:** 今、E:さんにやってもらったようなこのアンケートとかを高校生と大学生にとっているんですね。ざーっと今、統計を上げてきているんですけど、その中で自分の存在価値であるとか生きる意味であるというのを見つけていると答える人がいたり、例えば使命感という言葉が出てくる項目とかがあったのはわかりますか。そういう項目があったら、何か使命感があると答える人がいたんですね。

**E:** 確かに、僕もNHKでやっている「しゃべり場」とか、高校生だとか、あんまり好きじゃないんですけど、見ると、何かすごい優秀な生徒がそろっているのに自殺したいとか言ったりとか何かやりたいこともないとか言っているのが多いんで、そういうのを見てると、僕は2年前まで高校生だったんですけど、高校生としてそうなのかなとか思っちゃうんですよ。でも、実際はどうなのかはわからないですけどね。

**質:** 質問要旨の性質上、そうなったのか、もしくはやっぱりみんながそういうふうになっているのかということがよくわからなくて。だから、私は受けていない

ので、受けたE：さんとしてはどう思うかなと思ったんですけど。

**E：** やっぱり、そういう質問式の検査とか統計というのは願望で書いちゃいますよね。例えば、私には友達がいなかったかあんまり書かない。そういうのはよっぽどいない人じゃないと、3人ぐらいいても、多分いるとやっちゃう。

**質：** 結構いるよぐらいになっちゃうね。

**E：** やっぱり願望とか。たとえ、それが友達に見られないとしても、やっぱり自分で認めたくないわけなんで、だから自分の名前がわからないとしても、結局はいいように書いちゃうと思うんですけどね。

**質：** ありがとうございます。以上で終わります。

— 了 —

## ・ 大学生 F

属性：19才，女性，私立大学1年生

PIL 尺度 Part-A 得点：85点

実施日：2001年10月某日

実施場所：首都圏近郊私立大学施設

インタビュー実施責任者：博士課程3年 加藤 陽子

インタビュアー：博士課程3年 加藤 陽子

質： アンケートしてみてどうでしたか?難しいとかありましたか?

F： そうですね。多分、前に書いたのと結構変わっているんじゃないかなと思うような気はするんですけども。

質： それは、前に、7月ぐらいにとったものですけど、だいぶ大学になれてきたしという感じもしますね。

F： それもあるし、そうですね。

質： じゃ、わからないところとか、そういうのはなかったですか?

F： 多分、大丈夫だと思います(笑)。

質： じゃ、ふだん、例えば私はだれかのためにとか何かのために生きているのかなとか、自分の居場所がないとか自分の居場所はどこだろうとか、もしくは将来どうしようとかどうして生きてきたらいいのかなと思うことってありますか?

F： 居場所というふうに考えると、友達、この友達が、今私が一番仲のいい友達だなとかというふうに確認するみたいに考えるときとかは、あと将来のこととかは結構頻繁に考えていますので。

質： それは勉強とかではなくて、就職とか、その先を見据えたことですか?

F： 就職というか、仕事も結構、やっぱり軸に将来考えているところがあるので、どんな仕事をしたいのかなとって、じゃどうしようかなみたいな感じで。

質： じゃ、将来のことを考えるときは、やっぱり仕事と勉強とのスタンスみたいなものをすごく考えるということですか?

F： というか、何か将来のことを考えるときに、やっぱり一番最初に浮かんでくるのはどういう仕事をしているかということなんで、それが決まらないから、じゃ今は何を勉強しようかなという感じですね。

質： でも、まだ1年生だから、一般教養とか、たくさんとらなきゃいけないんじゃないですか。

F： そうですね。だから、割と意識しているいろんな種類の科目とかはちょっととって見たんですけど、1年生は。

質： 仲のいいお友達はこの子かなというふうに確認するとおっしゃっていたんです

けども、それは例えばどういうふうに確認するんですか？

F： 確認するというか、自分で考えて、最近はこの子と仲いいなとか、結構いろんなことを話すようになってきたかな。やっぱり、中高が一貫だったので、大学に入って新しい友達をつくるっていう経験がすごい久しぶりだったというのがあって、やっぱりいろいろと（笑）。すごい親しい友達に囲まれてきたから、まだ親しくはなりきれてないけど、でも友達という感じが新鮮というか、新鮮な分、すごい心配なときとかもあったりもしているんです。

質： そのお友達というのは、やはりサークルとか、そういう関係ですか？

F： そうですね。今は語学で一緒の女の子と、あとやってるサークルのお友達。

質： そうだね。語学って大事だね。私もそうだった気がする。

F： 結構、語学を。

質： じゃ、次なんですけど、例えば将来の話であるとか友達、ちょっと不安だなと思ったりしたときに、そういうことをだれかに話したりすることってありますか？

F： それは、結構友達に話して、話してる中で自分で整理していくような分が私はあるみたいで、まとまってないことでも人に結構話しながら考えたりとかは結構多いですね。

質： それは、中高からの友達ですか、それとも大学から入ってできたお友達とか？

F： 中高の友達はもうずっとそういう感じで、受験勉強してる時とかの合間の話とかで、やっぱりそういうのになって。でも、最近は大学の友達とも少しそういう話をしたかな、この間。

質： そうか。じゃ、そういうのはある程度仲よくなないと、やっぱり話しにくいし、話しかけられにくいしという感じですかね？

F： やっぱり、そういうのを話すのって、結構自分の性格みたいなものが出るじゃないですか。だから、結構私は、すごい成功したいじゃないですけど、生きたいというのが、我が強いじゃないですけど、そういうような仕事に。

質： でも、何となくわかる。

F： そういう感じがあるんで、やっぱりちょっとあんまり親しくない人にそんないきなり。

質： 意気込みを伝えると（笑）。

F： ちょっと恥ずかしいんで、あんまり言えないですね（笑）。

質： その話した、例えばこうなんだよねと話したことによって、何か気持ちとか、そういうものに変化はありますか？話したことによって気持ちが楽になるでもいいし、もしくは別にそういうことはなくて、自分の中で整理されるだけだということでもいいし。

F： でも、やっぱりちょっと前向きに考えられるようにはなる。考えるばかりで、

あんまり具体的に何をしようと、1人だと多分あんまり出てこなくて、人に話して、何かその話になったりしたら、結構アドバイスというか、こういうのとかもあるよねというのを聞いて、じゃまずはこれをしようかなという、何か具体的に考えられるようにはなる気はしますね。

質： じゃ、次なんですけども、自分の生き方とか、今の自分の状態というものが満足できるものですかというふうに聞かれたときに、イエスかノーだったら、どっちで答えますか？

F： ノーかな。

質： そうか。それはなぜでしょうか？

F： 医学部に行きたくて浪人をしていて。

質： すごい。

F： 行けなかったんで、一緒なんですけど。

質： いやいや、目指すという心がけですらすごい。

F： 全然本当、理系の科目が苦手で、本当にいっぱいいっばいで、1浪は親もさせてくれたんで、1浪して勉強したんですけど、ちょっと難しくて、受験もしなかったんですよ。結局はセンターでもう全然だめで。でも、医学部に行きたいというのも、結構精神科とか、そういうほうに興味があって思い出したことだったんで、心理学とか、そういう感じがすごい興味のメインみたいなことだったんで、いろいろできそうだしと思って、併願で出しておいてここに来たんで、それで自分の選択の中で、ここに来れなかった場合を考えたら全然よかったですけど、最初に考えてたものとは違っちゃってて、その修正がなかなかききにくいという感じですね。

質： そうかもしれないですね。不満じゃないんですけど、でもやっぱり最善だったかもしれないことを考えると。

F： もしかしたら医学部に行くよりもこっちに来たほうが自分のやりたい勉強としては合っていたのかもしれないけど、それを全然できなくなっちゃったというので。

質： わからないからね。

F： 不満というか、やっぱりそっちに考えが向いちゃうときとかがあるから。

質： じゃ、例えば今までの人生とか、もしくはこれからの人生で、自分はこのために生きていると思える存在価値とか目標というものを見出せてますか、あるいは見出せてないなら、将来見出せそうですかという、ちょっとしたビジョンみたいながありますかというふうに聞かれた場合は、どうでしょうか？

F： やっぱり、今はちょっと見出せてないですね。将来。

質： まだ1年生だしね。

F： そうですね。でも、やっぱり何か目標を持っていくというのがすごいあこがれるというのがあるんで、そのビジョンを探したいというふうに思っていますね。今は。

- 質： でも、ものすごく大枠のビジョンはあるよね。医学とか心理学とか、その分野という。確かに、大きいけれども、そのビジョンというんではあるよね。
- F： そうですね。
- 質： 着実に近寄ってはいるよね。形は何にせよ、その中でどこを選ぶか、これからの難しいのかもしれないけど。じゃ、Q科？
- F： そうです。
- 質： Q科なんだ。
- F： HとQを選ぶのでも、わからないんですよ。受験のときってどう違うのかなとすごい思って。
- 質： だって、Hにも、一応臨床ぽい人がいるものね。P先生は基礎かな？あれはL科学かしら。
- F： ちょっと聞いたことないんでわからないんですけども。
- 質： うちへ臨床心理士の先生の資格を持っている先生が何人かいらっしゃるし、迷うよね。
- F： そうなんですよ。とりあえず、何か名前がQだしと思って、こっちかなみたいな（笑）、そんな感じで選んじゃったんです。
- 質： でも、今は全然いろんなものがとれるんだよね。Q科だから、これじゃなきゃだめというのはなくなったんだよね。
- F： そうですね。割といろいろとれて、L科の先生に。
- 質： どうですか？授業はおもしろい？
- F： そうですね。おもしろいものもある（笑）。
- 質： あるし、うんと思うものもある？
- F： ある（笑）。
- 質： それは構わないじゃない。何と言ったって、まだ1年生なんだし。  
じゃあ、もしも、何かのために生きているのだろうかとか私の居場所はどこだろうとか、例えば将来どうしようかなと思ってすごく不安になったりして、毎日がすごくつまらないなと感じられるようになってしまったときとかは、自分ならどういう対処法で対処すると思いますか？自分の場所がないかもしれないと不安になったり、お友達の不安でもいいし。
- F： 多分、まず前の友達というか、高校のときとかの友達に連絡をとったりとかするのかな。新しい友達のことでも不安になったら、多分そういう感じ。将来のことは割と親と話すんで、そういうのは親とかには話すかもしれない。
- 質： じゃ、将来のこととか、そういうことは親のほうだとか、区分というか、そういうものは別に何か持っていらっしゃいますか？
- F： 友達の話は親には話さないです。親に話すことがあるとしたら、将来どうしよ

うかなという話のうちには、割といろんな話をする感じですね。

質： 自分で日記をつけたり、例えば音楽を1人で部屋で聞いてみたり、そういうことというのはしたりするかな？

F： 日記も最近、もう全然しばらく書いてないですけど、でも日記じゃなくて、文にしてみたりしたことはあります。最近やっていないんですけど。

質： それはどうでしたか？

F： 結構深みにはまりやすい（笑）、何か暗い方向に行くことが多いです（笑）。

質： 何となくわからないでもない。

F： 夜とかなんで、きっとそういうことをやり出すのが。

質： オレンジ色の灯りのもととかで書いちゃったり（笑）。

じゃ、例えばあなたの心の支えは何ですかというふうに聞かれたときに、これですと言うとしたら、何になるんでしょうか？心の支えという言葉でイメージするもの。

F： じゃ、やっぱり両親になるかな。

質： 今、実家に住んでいらっしゃるんですか。

F： 一人暮らしです。

質： 昔から両親とは仲よくやってたし、大事とっていましたか？

F： 多分、どっちかというとあまり仲はよくないというか、すごく言い合いをするし、割と私は、多分親から見たら親を親とは思っていないような言い方とかをしちゃうときもあるんで、そういう仲がいい関係というのではないんですけど、やっぱり肝心なときにすごく助けてもらったという印象は強いんだと思います。

質： そうか、すてきなご両親ですね、それは。

F： 結構ひどいんですけどね（笑）。

質： 私も結構けんかとかしたりする割には頼っているから、あんまり人のことは言えないんだけどね。

F： そうなんですよ。

質： 今、ちまたで、例えば浜崎あゆみが自分の居場所という言葉を使って歌をつくったり、ドラゴンアッシュが僕の存在意義という言葉を使って歌をつくったりするんだけど、そういうのを、例えば町中とか人が歌っているのとかを聞いたりして、何か印象は受けますか？

F： そうですね。歌を聞いて。

質： 好んで聞いたりとは別にしないの？

F： しないですね。あんまり歌だからというのはないですね。何か流して聞いちゃう感じなんで。

質： 別に自分の今のテンションで歌を選んで聞き流してという感じですか？

F： そんな感じですね。歌詞の意味まで引きずられるということはないかな。



質： 今、F：さんにしてもらったみたいに、このアンケートを高校生と大学生に配っているんですよ。私の印象としては、統計で上げているときに、自分の意味を感じていると答える人とか使命感が私はあるわと思っているっていう人がいたんですね。それについてはどう思いますか？

F： 単純にうらやましいですね。

質： いいなと思いますか？

F： 思います。持っていると云えるというのはすごくいいなって。

質： 私は質問紙がそうさせるのかな？どうなのかな？とかって思ったんですけど。これをやってみてどうでした？

F： やっぱり、思っていることを文章になって出てくると、私は多分、使命感とかで、中途半端にないほうあたりにつけたと思うんですけど、どちらかというとないみたいな感じなんですけど、そういうのとかをつけるときに、やっぱり探したいよなとかと思いつつながら丸をつける感じ。

質： そうか、そうかもしれないですね。なるほど。ありがとうございました。以上です。助かりました。

— 了 —

## ・ 大学生 G

属性：21 才，女性，私立大学 2 年生

PIL 尺度 Part-A 得点：78 点

実施日：2001 年 10 月某日

実施場所：首都圏近郊私立大学施設

インタビュー実施責任者：博士課程 3 年 加藤 陽子

インタビュアー：博士課程 3 年 加藤 陽子

質： アンケートしてみてどうですか？わからないところとか……。

G： 僕はいつも思うことなんですけど、ある程度どうしても 5 段階評価とか 4 段階評価じゃないですか。すごい思っていたとしても、どうしても 1 番、非常にとか、そういうほうはつけづらいというのがありますよね。それはいつも思うんですけど、だから一応大きいのには、なるべくそっちをつけるようにするんですけども、2 番とは思ってても、やっぱりどうしても 1 つ内側につけることが多いですね。

質： そうかもしれないね。私も自分で受けるときはそうかも、意外とね、うんとか思いながらつけちゃうかもしれない？

G： ここまで言っているのかなというのがありますよね。

質： そうだね。言い切るのに何かちょっとね。じゃ、意味がわからないとか、そういうのはなかったですか？

G： それは大丈夫です。1 つ、何か環境と遺伝とか何とかというのはあれっと思ったんですけど、あれは環境とか遺伝に。

質： 人生が左右されるかされないかみたいな質問だったね。あれは、環境とか遺伝というのがわからない？

G： じゃ、つけ間違えたかも。自分の考えでどんな生き方を選ぶかということですよ。選ぶかですよ。縛られてると思ってても、選ぶんだったらという考え方でいいんですよ。

質： ううん。たまにわからないという人もいるから、何か難しいし。

G： どうしても、やっぱりどちらでもないがあると、どちらも考えたことがあるからというのがありますよね。どっち側っていうのはあるんですけど、どうしてもそういうふうに 1 つを選ばなきゃいけないって難しいなといつも感じます。

質： 確かに、それが質問用紙のよくないところだね。

じゃ、例えば G 君がふだん、僕はだれのためにとか自分のために生きてるかなと思ったり、何のために生きてるんだろうみたいなこととか自分の居場所というのがあるかなみたいなことを考えたことはありますか？

G： ありますね。

質： それは頻繁にありますか？

G： 昔は頻繁に考えてたんですけど、ある程度まで考えちゃって、とりあえず何周もしたらもうやめるようにしているんですけど。一応そればっか考えてもしようがないんで、2〜3回転ぐらいしたら、もうそこで一応やめて、期間がたって、またそういうことを考えなきゃいけないようになったら考えるようにはしてますけど。

質： 昔、よく考えてたというのは、昔というのは遠い昔？

G： 高校時代ですかね。1人でいることがすごく多かったんで、それで何かずっと考えたりとかしてて。でも、いつも行き着く場所が一緒だったんで。

質： そういうときはもう何周かしたら、あっもうという、というか？

G： もうやめる……。

質： じゃ、そういう何周かする内容というのは、例えば人間関係だとか将来とか、いろいろあると思うんだけど、主にどんなことですか？

G： 人間関係が多いですね。やっぱり、何かいざこざがあったりしたりとか、あと人間関係で、友情というか、そういう友達関係でも恋愛関係でも、例えば2〜3周をして、マイナス志向になっているときもプラス志向になっているときも、最近とはめますね。どっちでもとめちゃう。

質： じゃ、今は3年だと思うんだけど、長いビジョンでも短いビジョンでも、将来に対してどうしようと思ったりすることはある？

G： ありますけど、ある程度やりたいことというのは一応決まっているんで、そっちに向けて頑張んなきゃいけないんですけど、まだそういう努力はしてないからというので。

質： それはそんなにしょっちゅう考えるわけじゃなくて？

G： そうですね。何かそれなりに毎日いろいろやることがあったりすると、あとは寝るのが好きなんで、しょっちゅう寝ているんですよ。なんで、別に考える時間もなくて。

質： それはいいこと。じゃ、例えば人間関係とかで行き詰まっている感じがするなとか思ったりしたときとか、もしくは将来とかについて考えて悩んだりしたときに、だれかに話したことはありますか？

G： 昔は話していたのかな。でも、今は全然自分の中でそれはやってて、人に相談しても、価値観が違うから話しても。もちろん、納得した答えが、だから自分の思ってた、言葉にならない部分とかが、そういう言葉で返してくれる人もいますけど、本当に少ないんで。特に、おれ、何か変と言われるんですよ。

質： 大丈夫、私も変ってよく言われるから（笑）。

G： だから、一般的な考えもわかるんですけど、それとは違ってと思うことが多いらしくて、何かあまり意識しないんですけど。

質： それだけ自分があるということはいいことなのよ。

G： だから、自分は自分でれで納得してるんですけど、周りに話したとしても、例えば何でそんなことで悩むのとか、そういうので返ってきたこともあるんで。別に、特に、今自分で抱え込んでいる状況で、もう全然消化できているんで、何も問題は無いんですけど。

質： すごい、素晴らしいことだわ、それは。

じゃ、例えば話すことによって何かの変化があるというよりは、自分の中で整理をしたりしてうまくしていくほうがいいんですね？

G： それを話すと何か影響しちゃうみたいで、それも最近うれしくなくて。例えば、みんながそれなりに、みんなそれぞれ考えてきてることってあるじゃないですか。それで、例えば自分が話したりして、考えてないことを、考えなくてよかったこととかを考え始めちゃうときとかってあるじゃないですか。

質： うん、あると思う。

G： それはそれでいいのかもしれないんですけど、それじゃ悩んじゃって落ちちゃう人がいるんで。だから、この人にはここまで話せるけどというのが、すごく見きわめるようにしている。けど、それでもよく外すんですよ。

質： ああ、しまったという。例えば、区切るのに、そこに何か距離感みたいなものをどうやって感じるの？

G： 話してて、何となく似たような考えの人と違うような考えの人というのは、やっぱり話している感じで……ですからね。だから、それですね。

質： だから、それで、じゃこの人はちょっと影響されやすいかもしれないからやめておこうとか？

G： そう、そこのところを……しますね。

質： じゃ、そういう話を話したいという欲求に駆られることはないの？

G： よく欲求にも駆られますよ。よく自分の考えとかを話したいんですけど、でも話している、ほとんどがえっ、わからないとか言われることが。わからないというか、それもわかるんだけど、すごい敬遠されるとか。別に自分では普通のことだから、何言ってるのと……、話してみないとわからないんですけど。多分、極論が多いんですよ。

質： おれはオサマ・ビン・ラディンの……とか、そういう極論じゃなくて（笑）。

G： そういう極論じゃなくて（笑）、一般的なことを否定することがすごい多いのかもしれない。一般的にいい、例えば学校は行かなきゃいけないものとか、そういうのがあったりする人って結構多いじゃないですか。

質： そうだね。世の中にはまだ多いだろうね。

G： それとか、恋愛関係もそうだし、当たり前と言われているようなことがあるじゃ

ないですか。別に、例えば二またかけれる人はかけてもいいと思うんですよ。でも、やっぱりそれってみんなはすごい嫌な感情を受ける人も多いから。おれは別にそれができるんだったら、人それぞれだし、してもいいと思うし。

質： そうだね。別に相手もそれで何でもというんだったらね。

G： だけど、ほとんどが、やっぱりえっという感じですね。

質： 何でという？

G： これも、別に……ですね。……そうでしょうね。

質： 自分で、やっぱりとめちゃうんだね、そういう部分ね。

じゃ、例えば自分の生き方とか今の状態は満足できるものですかと聞かれたら、イエス、ノーだったら、どちらになりますか？

G： イエス。

質： それはなぜでしょう？

G： こういう考え方になれてよかったことも悪かったこともあるんですけど、よかったことはよかったことで、いろんなことをそういうふうに、本当に客観的にじゃなくて見つめられるようになってきたかなというところがあるんですよ。だから、そういう面ではそういうことですね。昔、高校時代のときからこの考え方は変わらないんですけど、でも昔、すごい人を、何でおまえはそんな考え方しかできないんだという見方をしてたんですけど、最近は本当にそれもなくなってきたんで、特に今はそうですね。

でも、逆に、今はこういうふうに、そういうふうに下に見なくなってきたからこそ、そういう考え方でいられたほうがよかったのかなと、中学ぐらいまでは多分そういう考え方だったんで、自分の感情は抑えないで。それはそれで、だからある意味で感情の起伏はすごい昔よりは少なくなっているんで、そういう面では昔だったらすぐ好きとか言えてたのが、全然言わなくなっちゃったとか、つき合うことに対してすごい警戒心を抱いたりとか、そういう面では昔だったらちょっと思っ、とりあえずつき合っ、そういうこともできたから、そのほうが楽しかったかなとも思うときはあるわけです。

質： じゃ、例えば今の勉強とか、具体的なそういう環境というものがあるじゃないですか。そういうものに対しても満足してますかと聞かれたら、イエス、ノーだったら？

G： 上を見ちゃうときりがないんですけど、自分はもともと理系で。

質： すごい。思いっきり文系だから、もう理系という言葉聞くだけですごいと思っちゃうの、反射的に。

G： 理系で、それで心理学をちょっとやりたくて、全然調べもせずここまで来ちゃったわけなんですけど。

質：　すごいね、ナイスな選択。

G：　だから、Z科のほうに行きたかったんですけど、入ってみたら、興味ある授業はそっちが多いんで。でも、とりあえずそういう面では、ここ以外は全部理系だったんで、そういう意味ではよかったかなというのはあるんですけど、いろいろ環境には納得しちゃいますね。これでよかったのかも、何かそれなりにすごい悔しいとかもあるんですけど。でも、何か行きたいところに行けなかったとか、やっぱりそういうのがあるんですけど、その環境に入っちゃうと、あっちの環境じゃなくてこっちの環境にいたからできたことっていうのも、また自分にとって大きいから、いつもそれで何だかんだと……。

質：　うまく、これでよかったんだなとって？

G：　自分で思うようにしたんです。

質：　大事なこともかもしれないよ。

じゃ、例えば今までの人生とか、もしくはこれからの人生において、自分がこのために生きているなどと思う、そういう存在価値みたいなものであるとか、もしくはこういうビジョンで将来生きていこうと思っているようなビジョンとか目標みたいなものはありますか？

G：　あるんですけど、それには縛られてない感じで。だから、例えばこういう話をするとまたあれなんですけど、ただ就職するということに関しては、自分は全く興味がありませんよ。とりあえず、今見てる感じの周りの就職の仕方は、別に周りが就職してるから就職するだとか、本当にやりたい仕事とかも決まってないけど、とりあえず就職していい会社に入って、将来お金を稼いで、将来子供とか奥さんを養っていくという意味での就職にしか見えないんですよ。

自分はそういう就職はしたくないんで。とりあえず、今は臨床系のカウンセラーになるか、ほかの学部を受験してというのも今、考えているんですよ。考えるだけなんですけどね。親にはそれはしょっちゅう言われるんですけど、就職というのは、別にずっとフリーターでもいいじゃんという考え方なんで、いろんなことをして楽しんで、別に最低限食べていける。もし結婚したらというのもあれですけど、結婚もまだ考えてないですし、いいかなと思ってるんで、なんで一応そんなふうになりたい職業というものもありますけど、それにあんまり縛られてはいない。いろんなところへ行きたいという感じですね。

質：　そういう大まかなものはあるけど、そういうビジョンでずっと突き進んでいくんでなくて、もっと余裕を持ってという感じ？

G：　ええ。

質：　私も就職は考えなかった。100%考えられなくて、……に行きたいなと漠然と思って……に入って。今、私、友達、ルームメイトがいるんですけど、その子もず

っとフリーターしているんです。そういうことについてはとやかく言う人は、実際お友達でもいるけど、べうに本人がいいんだだったらいいじゃないと思っちゃうよね。

G： そう。言われたんですよ。社会保障とかはどうするのかと言われて。

質： そんなものは、会社に入ろうが、将来どうなるかわからないよね。今の世の中じゃ。

G： 倒産しちゃったらきついし、周りで倒産してへこんでるやつがいるし。

質： それはしょうがないのよね。国がそんなに何もかもしてくれるわけじゃないのにな。

じゃ、例えば何のために生きてるのかなとか自分の居場所がないなとか、もしくは将来に希望が持てないなとか思うことがあって、例えば毎日が事がうまく運ばないとか、日常生活が何かつまらないなみたいな状況になったときだったら、

G： 君だったらどういうふうに対処すると思いますか？何もかもうまくいかないとか、居場所がないなと思って、日常生活にまでちょっと支障が出る感じな気分になったとき、どういう対処法をとるかなと思って。

G： しょうがないなと思う。居場所がないなって思うことが、居場所自体があるのかどうかかわからないで。だから、いつも自分で居場所はみつけるかしてきたんで。居場所があるかどうかは別として、居場所を見つけてきたんで。だから、どうにもならないときはほかのこともしますけどね。例えば、いろいろ別のことをやってみたりとか。例えば、仕事で居場所がないとか、今はバイトですけど、うまくいってないというんだったら、それはそれで置いておいて、友達と飲みに行ったりとか遊びに行ったりとかして気分を紛らわしたりとか、寝ちゃえば、おれは大体忘れるんで、寝るのが一番ですかね。眠れないということがないんですよ、あんまり。

質： 旅行へ行っても、どこへ行っても大丈夫ですか？

G： そうですね。

質： すごい。それはいい特質だよな。

G： 本当に、疲れてれば寝ると。

質： じゃ、別に人に話を聞いてもらったりアドバイスを受けるとか1人で部屋に入って音楽を聞くとか、そういう具体的な対処法は別にとらないと？

G： それだったら寝る。

質： 何時間ぐらい寝るの？

G： 日によりますけど、寝てろと言われてたらずっと寝てますね。本当にそれは寝られますね。

質： 十何時間とかぶっ続けで？

G: 全然問題ない。

質: それはすごいわ。

じゃ、あなたの心の支えは何ですかというふうに質問されたときに、何と答えますか？イメージとかでいいから、心の支えという言葉からイメージされるもので。

G: 自分かな。

質: 自分自身？

G: 自分自身が何だろう、自分自身に陶醉しちゃうんじゃないくて、自分自身をいつも客観的に見ていることとか、物事でも友達だからとか、そういうのじゃなくて、いつも客観視しようとしている自分かもしれない。

質: すごい。

G: そうですか。

質: インタビューを今、何人かしているんだけど、何人か自分だと答えてくれる子がいて、選択肢というのは答えを想定してアンケートをつくらないと、何を聞いていいかわからなくなるんで想定するんだけど、自分自身というのは全くなかったのね。だから、自分と言えることにすごい感動を覚えて、聞くたびにすごいと思うの。

G: 多分、ほかのものがいいからじゃないですかね。というか、多分、ほかのことでもあれば、多分自分自身というのじゃなくて、例えば大切な人がいたらとか大切なものがあつたらとか、そういうのがあつたら、多分そっちって言えるのかもしれないけど。わからないけど、自分の場合はそういうのがないんで、たしかなのは自分だけだから自分と答えてるだけで、多分ほかにあつたらあつたで、多分別の答えになっているんじゃないですかね。

質: そうか、そういうふうにも考えられるね。それじゃ、浜崎あゆみとかドラゴンアッシュとかは聞く？

G: ある程度。

質: あの人たちは、別に歌の歌詞を思い出せとか言わないから、あの歌は何か聞かないけど、あの人たちがよく自分の場所はここだったとかおれの存在意義はこうでしたという歌詞をつくっているじゃない？私はあゆのああいう歌詞に引かれて私はあゆが好きですって言う人が多いとちまたでは言われてるけど、それについてはどう思う？

G: そうなんだって思う。じゃ、その人がそうなんだと思うぐらいで、自分の存在価値とか、本当にあんまりわからなくて、ただずっと言い続けそうですけど、おれ。多分、自分の場合はどうしても思い込みという見方をしちゃうことが多いんで、例えば自分が勉強に関しても、今こうやって思い込んでいて、先に何をやりたいかわからないとか、恋愛に関しても仕事に関しても、何に関しても思



い込んでいただけという見方が強いから、存在意義とか存在場所がこうだったあ  
あだったというのは、本当にその場の感情としか思っていないから。それはそれで  
いいと思うんですけど、自分がそう言える環境じゃまだないなという、そういう  
ふうに。

質： じゃ、そういう曲を聞いて、ああ心がとても揺り動かされますみたいなことは  
ない？

G： 多分、中学、高校の初めぐらいだったらあったんですけど、まだ思い込めていた  
時期が。でも、思い込みというふうに見始めてから、多分存在価値がこうだった  
んだろうなと思っても、ああそうじゃないと思っちゃうんで。多分、思い込みだ  
と思っちゃうんで、多分思うんですけどね。

質： 今、G：君にやってもらったんだけど、こういうアンケートを大学生の1年生か  
ら4年生と高校生の1年生から3年生にとっているのね。今、統計をちょっと上  
げてる途中なんですけど、使命感についての質問とかがあったでしょう？そうい  
うものとかに関してとか、生きてる意味みたいなものは確かに日常で感じてるし、  
使命感みたいなものはあるよってという人がいた印象を、まだ全部出してないから  
わからないけれど、今私は受けてるのね。それについてはどう思う？当たり前だ  
な、そうなのねと思うか、もしくはええ、そうなんだというふうに思うのか。

G： やっぱり、その人たちがそうなんだろうなという。でも、自分自身、そういう時  
期もあったと思うんで、今思い込みというふうになっちゃってるんで、思い込み  
なんじゃないのかなと思うこともありますけど。それなんですけど、全部思い込  
みというので片づけちゃうと、全部思い込みで整理できちゃって、多分成就しな  
くて済むんですよ。

だから、そういう思い込みを、自分も体験はしてるから、それでこうなってきて。  
こうなった自分がよかったんですけど、さっきの話なんですけど、でも今は思い  
込みというほうが多分いい気がするから、そっちのほうが生きてる存在価値とか  
使命感とかあって。それがなくなっちゃったときに多分きついかもしれないけど、  
そうじゃない限りはすぐしたいこととかに突き進めるという面もあると思うか  
ら、そういう面ではすごくいいとは思うんですけど。

質： でも、思い込みじゃないかなという気がする？

G： だから、思い込みは思い込みで、多分それでいいのかもしれない。

質： 私は、自分でやってないし、もう青年期から抜けつつある人間だからちょっと  
あれだけど、やった人間としてどうかなと思って、そういうやらなきやという気  
分になった？このアンケートをしていて、おれはやる気という感じに。別に？

G： ただ、例えばおれの場合はちょっとあれなんですけど、今のことを考えれば、例  
えばどうしてもどちらでもないに近くなる。あと、初めのアンケートは自分の考

えでというのが多かったから、それはそっちにつけやすいんですけど、最後のほうの5段階は、どうしても真ん中につけやすくなるんですけど。でも、今までに、例えば自殺を考えたことがあるとなると、昔は昔で違う性格の、本当に思い込みだった時期はあるから、そういう意味ではそっちに丸がつけられるんですけど。だから、つけている時期の差があるので。

質：なるほどね、時間差があるんだね。そうか。そうかもしれない。

G：あるけど、今はないというのがあったから、今は全く自殺なんて考えないし、そんなことしたってしようがないから、おれが……。

質：以上です。ありがとうございました。

G：こちらこそ。

— 了 —

## 2. グループインタビュー結果

実施日：2003年6月某日

実施場所：都内私立大学施設

グループインタビュー実施責任者：博士課程3年 加藤 陽子・大学院修士課程2年女子

インタビュアー：博士課程3年 加藤 陽子

記録担当：大学院修士課程2年女子

インタビューイ：

- A 男性 23歳 サラリーマン（建設業、電気通信技術者、勤続2ヶ月）、4大卒
- B 女性 25歳 フリーター 4大卒
- C 男性 25歳 会社員（メーカー、採用担当、勤続2年3ヶ月、転職経験有）、4大卒
- D 女性 23歳 浪人生（フリーター）、4大卒
- D 女性 25歳 事務職（内装仕上げ業、事務全般経理・総務、勤続1年3ヶ月）4大卒
- F 女性 19歳 学生、私立4大2年生
- G 男性 22歳 学生（科目等履修生） 4大卒
- H 女性 22歳 大学生 私立4大4年生
- I 女性 21歳 学生 私立4大4年生

司：まずは皆さん一人一人に質問していく形のアンケートをとりたいと思います。では、お答えいただきたいのですが、あなたは自分自身を大人だと思いますか。

A：はいかいいえで言えば、いいえかもしれない。

司：それはどうして？

A：それはやっぱりまだ、今研修中なので、責任ある仕事もやっていませんし、まだ気分的に学生気分が抜けてない部分があって、お金もらえてる学生っていうかんじでやってるんですね。なんで、本当に厳しさとか、体験、ぜんぜん体験してないってのもあるし、だからそこら辺がまだ子どもかな。

司：社会の厳しさみたいなものを経験してこそみたいな感じ。なるほど。ではBさん、同じ質問なんですけど、あなたは自分を大人だと思いますか？

B：子どもです。

司：子どもですか？それはなぜ子どもだと？

B：経済面で言えば、ただフリーターっていても、自分の稼いだお金全般で生活しているわけではないし、親のところにて生活して、まあお小遣いっていうわけではないんですけど、多少は家に払いますけど、一人で生活するほどの負担ではない。結局親に養ってもらってるから、その点でいえばやっぱり子ども、とは思います。でまあ、他の

面で言えば、その時々でいろんな友だちとかと、騒いでいるときは、やっぱり自分って子どもだなとか思いますけど、高校とかに行って、後輩とかとしゃべっていると、この子達よりは子どもじゃないのかなっていう、まああの、一緒に話してても、話してる相手によって、自分が子どもになるときもあれば、大人として話す時間、過ごす時間もあるのかなって思ってます。

司：じゃあ、経済的な面ではやっぱり親、分離、独立しているわけではないので子どもだけでも、場面場面によっては大人だなと思うこともある。じゃあCさん、同じ質問なんですけども。

C：えっと、僕は大人だなんて。まあBさんと一緒ですけど、経済的な部分で親から独立したってということと、あとは体の面であんまり、最近階段よりもエスカレーターっていうのがあって、だんだんなんかこの辺がジーパンとか、筋肉が脂肪分になったりして、はい急にやばいと思ってるんで。そういう面では少し大人になってきたなっていうのはあるんですけど、心は子どもでいたいな。

司：根本的には心は子どもでいたいんだけど、経済的とか脂肪のつき具合は大人かなっていう（笑）。じゃあDさん。

D：子どもです。

司：それはどうしてでしょう？

D：生活費は今自分でなんとかかなってるんですけど、国民年金は一回も払ったことないし、あとは、仕事、ちゃんとした仕事にもついていないので、子どもだと思います。

司：仕事の面みたいな感じで、大人じゃないなっていう。Dさん

D：えっと、大人ではありません。えっと経済的自立は一応達成してるんですが、精神的な面で、しがらみとか責任感とか背負うっていうことがまだ無いので、資格としてまだ子どもなのかなって。

司：人間関係においてもしがらみとか。

D：基本的に冷静じゃなくて感情的な人間なので、すぐ人とやりあうんで、そういう面でも子どもだなんて。

司：人とぶつかってしまうってことですか？　じゃあFさん。

F：子どもだと思います。

司：それはたとえばどういうところから？

F：まず未成年だし、社会のこととか何も知らないし、経済的にも全部親だし。

司：総合的ないろんな側面から見ても。

F：はい

司：じゃあGさん。同じ質問なんですけれど。

G：子どもだと思いますね。経済面とかっていうもの全般考えてみても、圧倒的に子どもだと思うし、親に依存しているところとか。あと社会的な責任を背負っているかって

言われてもそうではないし。だから国民年金とかっていうのもぜんぜん払っているわけではないですし、そういうところを考えてみても、子どもだなんていうのと。あとは、なんていえばいいんでしょう。まだ現実を見ていないところが多分あって、決して大人の人が現実を見ず夢ばかり追いかけてるとか言うわけじゃないんですけど、まだ夢を追い続けている段階ってことを考えると、まだそれに走れる状態にいる自分って言うのは子どもなんじゃないかな。それから、どっかに足をつけていないと不安で仕方ないってことはまだないですし、そういうところが。だからどう考えても子どもなんじゃないかって。

司：精神的にも職業的にもっていう意味を含めて。今社会的責任っておっしゃいましたけど、具体的には、思いつくことって何かありますか？

G：国民年金もそうですし、あと、税金とかっていうのも、消費税とか普通に生活にかかってくるのは払ってますけど、社会人で固定資産税とか、エトセトラエトセトラの税金とか払ってるわけではないので、

司：なるほど、そういう社会に貢献する義務みたいなものに関して今やってないからってということですかね。じゃあHさん。

H：まだ子どもだと思えるんですよ。経済面でももちろん親に依存してるんですけど、精神面でさすがにもう依存することはなくなったんですけど、普段接する人たちが、年上の方とか、目上の方ばかりなので、その中で自分は一番下で甘やかされてる部分もあって、役割的にも子どものほうになってしまう。

司：じゃあIさん

I：はい子どもだと思います。皆さんおっしゃったように経済的な面でもそうだし、今の私にとって両親は保護者なので、まだ親に保護されている立場だなと思うので、大人とは言えない。

司：経済的な面でも親がいるという。なるほど。今あれなんですよ。大人だと思う方は一人だけで、あとはみなさん子どもだっておっしゃってたんですけど、たとえばじゃあ身近な人でこいつは大人だよマジでって思われる方がいらっしゃいますか？思いつきますか？

A：すぐには浮かんでこないんですけど、親は大人だと思いますね。

司：それはどういった意味で、大人だと？

A：それはやっぱり自分が今まで、自分を育ててきてくれたというか、保護してくれた。自分に投資して教育を受けさせてくれてっていうのが、大人だと思うんです。

司：Bさんとかどうですか？

B：〇〇さん（記録者註：Bさんの友人）

司：それはどういう面で。

B：一緒にみんなで話をしてても、筋が通っているのとちょっと違うんですけど、やっぱり

こう、今まで一回大学行ってまた戻ってきて、今修士課程にいてっていう。一回社会にでてから考え方がしっかりしているっていうか、そういう面で、一緒に話ししても大人だなんて思う瞬間があるんで。

司：考え方が大人だそうです。Cさんは大人って思われましたけど。

C：僕の大人とはまたちょっと違うと思うんですけど。二人いるんですけど、一人は、会社で最近結婚した人。結婚して子どもができた人。僕より年は上なんですけど、仕事に対してモチベーションとか、そういうの違ってきてるなって。

司：家族を持ったことによって？

C：そうですね。そういう責任、社会的責任というものをもって仕事してるんだっていうのが自分とは違うんだな。またこれは違う人なんですけど、これは自分の大学の時のキャプテンで、その人はやっぱ、すごくこう周りに対する配慮って言うか、特に後輩に対して、細かいとこまでちゃんと配慮ができるってところは自分ができないところがあったりして、こういう人が大人だなんて思いますね。

司：はい。Dさん。

D：わたしの場合は微妙で、だいたい学生かフリーターばかりで、なんかフリーターはなんか大人なのか子どもなのかっていう微妙な感じがするなと思って。あと、大人っぽいと思うのはこの前結婚した友だちで、出来ちゃった婚でもう子どもがいるんですけど、同じ年で子ども抱えているのか、ちょっとすごいな。

司：家族がいるっていうのがやっぱり大人かなっていうか、子ども同じ年で育ててるって言うのが。Dさんはどうですか？

D：私も最初自分の親とか、子どもがいる人が大人なのかなって思ったんですけど、子どもいても子どもみたいな人っているなって思って、なんだろうって思って。やっぱり冷静に上からすべてを見下ろせるような人じゃないかな。それだけとかって全体的な柔軟性を持っている。それは経験が多いのかもしれないんですけど。

司：そういう方周りにいらっしゃいますか？

D：あーちょっと。

司：なるほど。Fさんは？

F：えっと、人をまとめる人。

司：こう、吸引力がある人っていう意味ですかね？

F：あー（沈黙6秒）

司：というよりは、みんなをしっかりとまとめて、ゆっくりと人を束にしていくっていう？

F：ああそうですね。

司：Gさんはどうですか？

G：大人。っていうことを考えると、祖父母の世界まで行ってしまふのかなって気はするんですけど。うちの父親は絶対的に大人ではないって気がするんで。

司：それはどうしてですか？

G：あ、自営業だからだと思うんですけど、やっぱりなんか自由奔放、勝手に、自分でなんか好き勝手にやってるイメージがとても強いんで。だから母親と父親比べたら、絶対的に母親の方が大人だなというのはよく分かる。というのは、うち一番下の弟が今小学校六年生、11歳離れてるんでまだちっちゃいんですけど、同じ世代の子どもの親ってというのはまだ20代、30代前半のなかで、うちの母親は50代なんですけど。そういう世界で、近所づきあいとかいろんな話を聞いてると、やっぱり見てる視点がぜんぜん違うなって、さすがに三人も育ててるのと、初めての子どもを小学校に入れて育てている親と見方が違うのは、そうかもしれないけど、なんか受け入れる度合いがぜんぜん違うっていう感じがすごいして。なんか衝突することがいいことか分からないんですけど、なんかあの人はこちらの方がだめだと思うけど、こういうところがいいからちゃんとつきあっていけるんだよっていう話をこう聞くと、やっぱり大人だなんていう気がして。自分がどうかって言うと絶対できないから。ていう感じはあります。

司：人付き合いのうまさっていうか熟練されてる度合いみたいな？

G：そうですね。なんか一側面だけで動かずに、両面性というか、決して欠点だけじゃなくて、その中から、この人にとっていいところとか、その人にしかない良さ見出せる分すごいなって。

司：Hさんどうですか？

H：社会的な責任を果たしてるから大人といえば大人っていう人いっぱいいると思うんですけど、性格面で大人かっていったらそういう人はわたしの周りにはいない。やっぱりなんか、周りにいる人は、それなりにその分野で成功してる人も結構いるんですけど、そういう人はやっぱりどこかしらその道しか見ないんで、わがままだったりとか、よく言えばこだわりがあるというか、なので。中身がすごく子どもっていう人が多くて、あんまりいないというか。

I：同い年で、もう就職して社会に出た人は、大人だなんていうか、一つ上のステージにいったような気がして。パティシエとか、板前さんになった人は、腕で生きるぜ、みたいな人もいます。

司：今みなさんの話を聞いていて思ったんですけど、みなさんあの「大人ですか？」って質問したときに「いいえ」答えられたときの理由が経済的な理由が多かったように思うんですけど、私自身、だけど今、「大人みたいな方がいますか」っていった時には精神面が多かった気がするんですけども、大人になる要素みたいなのを一つ挙げるとしたらもちろん子どもをもっているとかいろいろあるとおもんですけど、そうですね、難しいですけど、自分が大人になるとしたらどんな感じですかね。たとえば、経済的に就職して、さっきGさんがおっしゃったように、社会的責任を果たして何をしたら自分は大人って言えるんじゃないかとか、たとえば精神面とか、親から自立をしたら

とかいろいろあると思うんですけど、一つ要素を挙げるとした大人になるっていうのはどういう感じだと思いますか？

A：自分の場合で言えば、育って、たとえば、今会社入ったばかりですけど、これからまあ何年かやってって、後輩もできる中で、その後輩に対して、後輩を育てることができる指導しながら、その人の成長を促がすことができるような人になれば、自分としてはそれが大人になることだと思います。

司：後輩というか誰かを育てるといいますか。Bさんどうですか、いろいろ要素があると思うんですけど、あえて小さくまとめれば？

B：大人か子どもかという規準がその物事で違うと思うんですよ。経済で言えば、自立しているかしてないかとか、仕事だったら後進指導ができるか、その要素で言えば、ここが一番あれだったら大人だっていうのは、精神的に自分っていうものを持っている人。で、それが自分が自分がついていう意味ではなくて、包容力が大きい上で、いろんな物事を受け入れるけれども、自分はこうだっていうものをしっかり持っている人なのかなとは思っています。

司：Cさんはどうですか？

C：僕はですね、さっきDさんがおっしゃったんですけども、感情的にならないこと。僕は精神的には子どもだと思うんですけど、なんかこうねちねち言われることにむかついたりして、そういうことに感情的になってしまうということは、やっぱりまだ、その上司の上っていうか、のところが配慮して行動したりっていうか、してほしいことをしてないからうまくコミュニケーション取れないと思うんで、そういうの考えると、感情的にならないことかなと。はい。

司：Dさんどうですか？

D：精神的な面で、ですか？

司：いえいえ、自分が一番大人になるっていう要素で注目したい要素というか、それがあれば大人って言えるんじゃないかなって思うもの。

D：子どもっぽい大人をいっぱい見てるんで、精神面でいったら子どもばかり。やっぱりなんか、ちゃんとこれが大人っていったら、やっぱり経済面で私は判断する。

司：経済面で自立しているっていう意味で、なるほど。Dさんはどうですか？

D：えと、私に一番かけてる冷静さ。会社とかでもDさん顔赤いよとか今機嫌いいって聞かれるのが無くなって、あと人の一面的なものじゃなくて、よいものをいっぱい気づくようになれば、大人になれたかなと。

司：Fさんは？

F：子どもとか会社とか家庭とかを守れる力とかができたら、大人だと思う。

司：それは、経済面も精神面も何かを守れるっていう意味で？

F：うん。



司：Gさんは。

G：精神面で言ってしまうえば、大人になることが、それがいいことかっていったら、必ずしもそうではないことが多い気がするし、それは大人なりの現実的な視点とか、ある意味社会的なずるさとかを学べば、生き易くはなるとは思うけど、それが善かっていったら、決して善ではない、まあ悪でもないのかもしれないけど。そう考えたりすると、あの、まさに母親が大人だと思うと言いましたけど、そういう意味で言えば、さっきFさんもいったように、誰かを守ること、誰かを守ることができる力を持つことなのかもしれないけど、やっぱり簡単に言っちゃえば、親から自立して自分で生活できるようにすることなのかなって気はしますけど。

司：それは、いわゆる金銭面？

G：金銭面もありますし、なんて言えばいいんだろう、やっぱりこれまでかけてもらった金額を返さなければならないという気持ちは多少なりともあるので、それぐらいの余裕ができることのような気がします。

H：やっぱりこの先社会に出る予定が未定なので、自分で自分の健康保険証を持てるようになったら、ちょっと大人になったなと思えるかも。

司：なるほどね。

I：いろいろあると思うんですけども、今自分が何を規準に、私は大人になったなと思うようになるかということ、やっぱり今住んでいる家をでること

司：それは下宿とかではなくて？

I：そうですね。自分でお金を稼いで、家賃から光熱費から何から何まで一切を自分で面倒見れるようになったら、やっぱ大人かなと。

司：そうか。総括すると大人になることは難しいの一言につきますよね。じゃあちょっと質問を変えていきたいんですけども。一般的に、よく新聞とかですね、週刊文春とかああいう雑誌で、こうつり革とか、電車の中とかに中吊り広告とかで、職業的に自立していないやつらが多いというのを見たことがないでしょうか？一回くらいは目にしたことがあるんじゃないかと思うんですが、職業的に自立していなければ大人ではないっていう風な世間の見方、考え方に対してどう思うかっていうのを聞いていきたいんですけども。じゃあこっちから。

I：私今就活をしまして、本当に思うんですけど、就職できないんですよ。

司：なるほど、厳しいですね。

I：〇〇（註：Iさんの在籍している大学名）だからできるだろうと本当に、だから、去年の今頃までは、フリーターっていうと就職探せば出来るのって思ってたんですけど、できないから。職業的にそういうふうな定職についていない人いるのはしょうがない。だから、定職についていないから大人ではないっていうのはおかしいと思います。

司：自分の現状を踏まえた上で、現実が見えたからそれは違うぞと。みんなにいいたいと。

I：声を大にしていいたい。

司：次はHさん

H：先ほども申しましたように、社会に出る予定が未定なので、やっぱりあえずわたしの目標は保険証を持ちたいっていうのが、自分が精神面で大人になればそれでも満足かなって思ってますので。大体普通に定職もって、お金を稼いでる、特にわたしの周りは医療関係が多いですけども、本当にろくでもない人が多い。ろくでもないっていうか、ちょっと子どもの方が多いので、そればかりがそうともいえないな。

司：じゃあ職業的に自立していなければ大人ではないという考えには

H：ただ一要素ではあると思う。大人になる。ただそれだけで大人だといばられても困る。

司：いろんな方が回りにいるんですね。じゃあGさんは。

G：やっぱり定職についているっていうことが、一つの信頼性の証みたい。まあどの世界においても、やっぱりあって、それがあから大人と見られるんだらうなって感じはするんですけど。まあうちの相方が転職活動をしていて、転職活動もなかなか大変で、就職活動も大変だというのは大変だと聞きますけど、転職活動も見れば見るほど大変で、はじめたころは大丈夫だよって言ったんですけど、書類審査で山ほど落ちていた姿を見ると、大丈夫って言う気もなくなってきて、ほんとに大丈夫かって思うんですけど、それでもやってかなきゃいけないから、やってけるんですけど。でも、今残ってる企業で働いている人とかをよく考えると、まあ、普通のサラリーマンがどうってわけじゃないけど、上の方の人たちとかのこととかをいろいろ考えると、裏で悪いことをしてるから残っていたり、ワンマン体制だから残っていたりとかそれぞれ特色があるから残ってけるんだと思うんですよ。で、そういう人たちって言うのはやっぱり自分に自信があるから、下のほうの人たちとか、特に就職した人たちをそういう目で見ると、やっぱり上の視点で物事を見るからそういうふうになっているんだらうな。で、そういう子どもたちってそういう視点でしかものを見ないし。そういう人たちは当然親が会社を持っていたりとかするんでそこに入ればいい、コネがあるから入ればいいしって、そういうことではないと思うんですよ。世の中、何も無い人はどうやってやっていけばいいかを考えるときに、フリーターとかっていうのは、それは一つの手段であると思うし、まあそこに社会的責任はどうっていうのを問うてはいけないような気もするんですけど、でもフリーターでも自分の生き方とか考えて、ああこの人はすごいなって思う人もいるし、そう考えると一概にそうとは言えないかなと。

司：Fさんは？

F：質問の意味が分かりません。

司：フリーターとかではなく、定職についている人が大人だと、一般にですね、絶対そう

だとは言っていないんですけど、そういう風潮があるんですけど、それについてどう思うかについての意見を伺いたいんですけど。

F：よくわかんないんですけど、正社員で雇われている人は、信頼とか、面接とかで認められたわけだから、それは大人なんじゃないかなって思いますけど。

司：ありがとうございます。ごめんなさいね、難しい用語を使ってしまって。Dさんはいかがですか。

D：私は基本的に好きなことをやって死ぬまで後悔しなければいいと思っているので、職業的自立ってというのは特にそれが大人だとかそうでないとかじゃないと思っているので、私、男性と女性では未だに考え方が違うと思うんで、ジェンダーバイアスとか、私はその逆手をとって生きていきたいので、好きなように好きなことをするっていう。

司：いいですね、力強いですね。

D：それで、大人かどうかって分ける要素にはならないと思います。

司：じゃあそういう風潮に対しては違うんじゃないのって考えてる。

D：ああいうなんか中吊り広告で、ああいうなんかきれいごとっぽいことを書いてあるのちょっとあんま好きじゃないんですけど、別にフリーターでも、きちんと税金払って、ちゃんと選挙行ってってやってる人いるから別に文句無いじゃんって思うんですよね。フリーターの人がそのうちボーナスとかなくて困り始めても、新聞書いている人には関係ない。なんかほんとにそう思います。

司：なるほど、ほっといてくれと。Cさんいかがですか？

C：僕は定職についているんですけど、選挙も一回も行ったことないですけど、その定職についているってことが自立してるってことは実はすごく違うんじゃないかと考えていて、ていうのは、今そう確かに、若者も学生っていうか大学卒業した人も、高校卒業した人も、職につけないっていつてるけど、実際失業率ってすごく高いわけで。それは若者に限るわけじゃなくて、要は、60とか50とかの中高年のおじさんたちも、職を失っている状況なので、それは若者に対してそういうこと言ってしまうのは違うんじゃないかなって。それがその、なんていうんだろう、それはその一人のマスコミの人の意見なんじゃないかなって。なんかそこが一つ矛盾があるって考えたのと。あと自立って考えたときに、たしかに経済的なものって一つの大きな要素なのかもしれないけど、やっぱり仕事をしてる身で考えると、本当に自分の好きなことを職にしてる人と、会社の中でこう、一つのコマじゃないですけど、言われたことをやって、組織の中になじむ処世術みたいなのを学んで生きている人というのでは、たぶん、たとえば、その会社が無くなった時に、何も無くなった時に、どっちがハッピーになれるかっていったらどっちなのかなっていうところで。まあそういうところで、自立って少し離れちゃうかもしれないけど、そういう意味では生きる力っていうか、その言い方に変えればやっぱり好きなものを追求して、特に定職につくつかないってところは

関係ないんじゃないかなと思います。

司：Bさんどうですか？

B：職業的に定職につくなりして、一定の収入を得るってことも、大人かどうかという一つの判断基準にはなるかもしれないけど、やっぱり自分が実際バイトをしてて、その社員とか見てて、やっぱり子どもだなんて思う人も多く、ほとんどそうじゃないかなっていうのがあるので、必ずしも、社会的、職業的に定職についているから大人だっていう、社会、職業的に自立、定職についてないから子どもだって言われるとそうじゃないじゃんって思う。人が定職に、裏を返せば、定職ついていれば大人なのっていうと、絶対、絶対じゃないですけど、そういう人も多いと思うんですけど、ちがうじゃんって思うし、今就職してなくても、定職についてなくても、やりたいことがあって、就職しない人もいるわけで、たとえばまあ劇団員さんとか、その人たちは職業として劇団員としてしてる人よりも、下積みの人が多いと思うんですよ。そしたらアルバイトで生計を立てなければいけない、職業はなんなのってなったら、定職についているとは言えないと思うんで、必ずしも職業的に自立しているからといって大人かどうかっていえば違うんじゃないかなって思います。

司：Aさんどうですか？

A：フリーターなんか、定職についているのか、それがいいのか悪いことなのかって一概には決められなくて、その人が、自分の友だちにいるんですけど、大学途中で辞めて、そいつにはやりたいことがあって、レーシングカートって分かります？ゴーカートじゃないんですけど、レーシングカート、それがやりたくて大学辞めてフリーターになったんです。んで、そいつはフリーターやりながら日本各地を転々として、レース、チームに入ったりしてレースしてて、ハワイとか行って遠征いったりしてて。今もたまには会ってるんですけど、この間優勝した、トップで30万ゲットしたとか楽しそうにやってるんで。その人が何を、そいつは目的をもって自分はこれがやりたいんだっていうのがあって、フリーターになったんですね。フリーターなのか定職についているのかっていうのは一つの方法論、方法でしかない。自分の場合も就職しましたが、ずっとその会社にいるかさがみつかったっていわれたらやっぱり、ずっといるかもしれないですけど、それは、でもなんで入ったかって言ったら、さっきも生きる力っていう言葉がでましたけど、この社会で生き抜くために、自分に何か身につけなくちゃいけないっていう部分で、会社に入って経験つんで、技術を身につけて、会社がだめになっちゃったりしたときとか、自分に他にやりたいことが出来たときに、生きていくために今会社に入って技術を身につけるっていう目的で入ったんで。こういう部分ですかね、まとまりないですけど。

司：みなさんの意見をまとめると、定職についているから自立しているっていうのは一概にはそうとも言えない。いろんな部分が、他にも生きる力だとか選択であるとか、自

分のやり方っていうのを持っていることも大事なんじゃないかって。今、いろんな話、大人になることとか聞いてきたんですけど、自立、大人、職業とかの関連を聞いてきたんですけど、いろんな意見を聞いてそうだよ、違うよねっていう部分はありました？

D：さっきの補足なんですけど、好きなことを好きなようにやるって言ったんですけど、それは人に迷惑をかけないっていうのが前提で、あるっていうこと。

司：かーっと突っ走って、周りの人を投げ飛ばしていくというのではなく？

D：ではないです。

司：上手によけながらやっていくって感じですかね。

C：僕一つみなさんに質問っていうか、聞きたいんですけど、あの、職業につく、仕事をするってことに対して、いわゆる超有名優良企業に就職するのと、大学を卒業して社会に出て行くのに、いわゆる就職活動するときに、超有名企業で、年収いずれは一千万超えとか、そういう企業目指して入るのか、それとも本当に自分のやりたいことを、会社じゃなくて、自分のやりたいことを軸に、活動するのかどっちなのか聴きたいんですけど。

司：いいですね。

D：就職活動するときに、周りのみんな、大手を受験してたので、それに流されて、自分も大手しか受けなかったんですよ。それで、なんか違うっていうかそういうのがあって、そんなことやりたくないって。それで今もう社員数 6 名とかの小さい事務所でやってるので、何がやりたいかっていう。

C：今会社でやりたいことができるんですか？

D：はい、私はインテリア関係にいきたかったんで、その事務の合間にやりたかった、図面を書かせてもらったりとか、実際の工事現場を見に行ったりとかそういうことができるので。なんか。

司：就活経験者はどうですか？

I：やりたいことっていうのはあったんですよ。編集者になりたかった。でもとんでもない倍率で、大手は募集してるけどもすごい倍率で、ちっちゃいとこ狙うと、ちっちゃいところは募集すらしてなくて。だから、やりたい、最初はやりたい編集で就職活動してたんですけど、やっぱそれだけでは、やりたいこと、やりたいけど、私は今、今まで親に育ててもらって、四大まで出してもらってっていうのがあるので、やりたいことを二の次にしても、就職したいなっていうのが正直あります。

C：就職したい？

I：大手、大手のほうがお給料がいいから、やっぱり大手にいきたいっていうのも。つぶれないじゃないですか、大手はたぶん。そういう安定性を考えていくと、やっぱ大手のほうがいいし、そういうのはあるんですけど。何をいいたいのかわからないですね。

C : それは経済的に自立をしたってこと？

I : そうです。

C : たとえば、じゃあ全く、超有名なライターっていうか編集者で、お給料ださないけど一年間面倒見るから、生活を支えてあげるから無給で働けって言われたら。自分で遊びたい分はアルバイトしなさい。それか、もしくは、本当に大企業で、大体普通に初任給とかボーナスとかあって、ていうのとどっちが？

I : たぶん、普通にボーナスもらって、ある程度自分の地盤を固めてからやりたいことをやると思います。

司 : 就職経験者ですけどどうですか、今の話は？

C : あの、いわゆる大企業っていう保証、保険がある大企業の就職を選ぶか、入れる入れないかとか別にして、それかもう、自分で最初は修行と思って、低収入で自分の生活すべてやりたいことに注ぐかどっちか。

A : 自分は大学は行って就職活動がはじまって、やっぱり流される部分ってあったかもしれないんですよ。学校が会社説明会とかやってくれて、それにいってみて参加してみようかっていう。だから、別に大きいか小さいかっていうのはあんま考えてなかったですね。自分の就職活動は、すみません、短かったんですよ。去年の、ほんと何もやってなくて、考えてなくて、4月になってみんな周り結構やってて、自分どうしよっかなって思って、たまたま説明行って、面白そうな会社で、面接とかやるから来ないって言われて、行って、したら受かっちゃった。1こしか受けてないんですよ。それでゴールデンウィーク明けに決まっちゃって。でも、なんていうか、だから、あんまり考えてないっていう、あんまり考えてなかったかな。でも、結構環境とかどうでもいいって思ってて、あの、給料は関係ありますけど、会社のでかさとか小ささっていったら、関係なかったかな、関係ないって思ってて。たとえば大学選ぶときとかも、どこの、結構どこの大学でもいいって考えてて、自分がやりたいこと考えてからやれば関係ないんじゃないのって思ってたんで。これも答えになってないかもしれないけど。

C : わかります。

司 : その他みなさんどうですか？

G : すっごい申し訳ないんですけど、サラリーマンになりたくないんですよ。根本的に質問の答えにならない気はするんですけど。

C : でも、それは一つ、サラリーマンかサラリーマンじゃないかっていうところもあると思う。

G : お給料をもらうっていうのでは、職業全般がサラリーマンになってしまうのかもしれないんですけど、一般的な概念でいうサラリーマンにはなりたくない。もともとそんなに人間関係とか得意なほうではないですし、で、媚びへつらうとかゴマすりとかう

まいわけではないし。親が自営業だからその影響を多分に受けている気はすごいするんですけど、かといって親の仕事を継ぐわけではないんですけど、ただなんとなく漠然と小さい頃からサラリーマンになりたくないなっていう気はすごいしてて。かといって何になりたいかって考えたら、ずっと小さい頃から夢が作家だったから、サラリーマンの方に目が向かなかった気はするんですけど、作家だと思って、高校入る頃に高校の先生から、「お前文学部文学科に行って作家になって何がおもしろいんだ」と言われ、が一んとしてですね、なんか、あの、当時確かにパラサイト・イブとか専門的な立場から物語を書いた本が流行った時代なんで、だから、でたまたまそのときいろいろ考えたあげく、自分に果たして一番興味がある何かを考えたら、数学はどうにもできなかつたんで医学部にはいけないけれど、心理学科ならいけるってことで、文学部心理学科に入って。心理学を勉強し始めたらすごい面白いと思って、まあそれを職業にできたらなど。まあ作家っていうのは、カウンセラーなんなりなってからでも遅くないけど。で、今カウンセラーを目指して勉強しているわけですけど。なんでサラリーマンになりたくないのかっていうことを問われて、答えるのは、僕の場合はみんなと一緒にようなそういう生き方がいやだっていう。なんか、同じ生き方をしてそれはたしかに安定しているし不安にはならないかもしれないけど、はたして自分がそれに沿ってちゃんとやっていけるかって言ったら、もともとただでさえそんなに器用な人間ではないので、絶対無理なような気がしていたんですけど。小学校とか高校とか学校生活ですらそんなうまくいっているわけではなかったから。大学は似たような人ばかりで面白かったですけど。もともと人の心に興味を持つような人はどっかズレた人が多いので（笑）、大学は楽しかったですけど。そういうことを考えると、やっぱり独自の生き方を開いていったほうが、自分の生き方にあってるんだらうなど。でカウンセラーを、受験、去年はいろいろ考えたあげく受験断念して、今年受験にしたんですけど、それはわざとなんですけど。でカウンセラーの道を選んだからには、企業とかっていうよりは病院が対象。でもなんかそう考えると、大手の病院に行けばいいのかっていうよりは、自分に力をつけていかないと、そこの就職ですらっていうことを考えると、本当に自分の好きなことだから、やっぱり自分のスキルをあげて、それこそ、本来なら飛び込めないようなところにも飛び込んでいかなければこの先はないんだっていうことをよく分かっている、そういうことかなって気はします。

司：面白い。わたしの研究のど真ん中の話をしていただいてありがとうございます。次の質問に移るんですけども。流れ的には変わらないんですけど、さっきの話の流れで生きる力とか、その自分のやりたいことっていうのが、今の話で出てきたと思うんですけども、よくですね社会学の分野であるとか、心理学の分野でもそうなんですけど、今の若い人たちは割りと自己中心的で、今のことだけを考えていて、自分の人生みたいなものに方向性をもって、自分で、主体的にっていうと難しいけど、自分で自らチ

ヨイスをしてないんじゃないか。今の言うところのなんとなくサラリーマンになろうとかなんとなく生きてるんじゃないかっていう風な話ってのが、よくきかれると思うんですね。耳にしたことがあるからこういう話がでてるんだと思うんですけど、このことに関してはどう思います？順番に振らないので、ざっくばらんに話していただきたいんですけど。

D：えっと、わたしの父親とか母親とか祖父母の時代っていうのは、戦後っていうのもありますし、これからなんかどうしていこうっていうので、それで方向が決まったみたいなところがあるような気がするんですけど。今っていうと、いっぱいありすぎるし、それで選択肢を見きわめきれない、それで、なんか、贅沢な感じとか受けとってるんですけども。

司：自分自身はどうですか？

D：私自身は就職活動の時に、何していいかわからなかったんですよ。何になりたいっていうのもなかったんで。それで、ぎりぎりになって、ああもう無理やり決めた感じで、説得力ないんですけども、何か一つ決めようと思って、切羽詰ったんで、インテリアはいこれみたいな。それだったら、もともと海外に行きたいっていう夢はあるんですけども、それだったら、インテリアちょうどいいしみたいな。なんか理由付けをして組み立てていく将来をっていう感じかもしれないですね。

司：今、理由を後付けしていきって話でしたけど、今それを？

D：実際やってみたらすごく楽しくて、ああこれでよかったんだっていう。ならいいんじゃないのかなっていう感じなんですけど。

司：他の皆さんはどうですか？

B：実際自分自身が今はまあ、みなさん学生さんですけど、実際今自分が一番そういう状況にあるような気がするんですけど。大学に入ったときは、心理で、カウンセラーなりなんなりになるだろうっていう、そのために心理を選んだわけなんですけど、実際4年間勉強してみて、カウンセラーという職業に自分が向いてるのかどうかを考えたときに、そうじゃないかもな、向いてない、向いてないっていうか職業としてやっていくほどの技量がないんじゃないのかなっていうのを感じて、まあやっぱり心理は面白いし、まあ自分が興味があることもある。研究者になろうっていう院を受けて失敗して、今実際その方向も諦めたっていうか棚上げしてる状態で、仕事しているわけでもなく、とりたてて就職活動もせず、一応まあ資格は医療事務の資格はとったんですけど、まあ。

司：なるほど。

B：実際自分がそれで生計を立てていくかってつきつめてみたらそうではない。実際今医療機関で受付のアルバイトをしてて、興味があって、面白いと思って、それで就職できたら今もやってることだし、そんなに今やっていることと変わらないからいいんじゃない



ないかなってというのがあって、でも結局それでも就職してなくて、でどうしようかなって今。一応方向的に来年専門受けて、そこで、精神保健福祉士っていう国家資格があって、それを取ろうと思ってるんですけど、それを、精神科のソーシャルワーカー、カウンセリングとは別の職業であるんで、そういう方向で行こうかなって今漠然と思ってるんですけど、それで行くっていう 100%の部分ではなくって、まだ迷ってる部分っていうのがあるんで。どうなんでしょうね。

司：かつつり就職をされてる方はどうですか？人生の方向付けっていうかチョイスっていうものを若い子はぜんぜんしないで生きているんじゃないかっていうそういう意見に対しては？

C：なんか渡り上手な人と下手くそな人が人それぞれいて。で、いろいろ話を聞くとわたり上手な人は、たとえば就職活動をちゃんとやって、ちゃんと学生生活を楽しんで、サラリーマン生活を楽しくやってっていうかうまく会社になじんでそれなりにうまくやって、やってる人もいるんだけど。逆に結構へたくそな人もいて、僕もあんま得意じゃなくて、就職活動の時も結構いろいろ迷って、なにしたいかわかんないとかいって、会社入ってから、転職とかもしたんですけど。なんていうんだろう、結局、なんでしたっけ？その自分の人生の方向性っていうのは、上手い下手っていうのも結構あると思う。だけど結局大事なのは、自分がどういう目標をもってどうなりたいかっていうものをもっていることであって、で大人の人がそれに対して、それを計画してやってるかやってないかっていうのはあまり関係ないんじゃないかな。好奇心手大事だと思っんですよ。目の前にあることを一生懸命やるっていうことはすごく大事で、だんだん年いってくとそんなことできなくなるはずだし、やっぱりそれは若いからできるっていうものがあると思うから、やっぱりそういうのは大事にしなくちゃいけないと思う。それはいつでも年をとって、人生を楽しく生きるっていうことを考えるのであれば、すごく大事なことで、ただ上手く渡っていくっていうのだったら、計画的にいろいろ考えて、なんていうんだろう、自分で計画をたててその通りにやっていくっていうことも大事なかもしれない。

司：あれですかね、今の自分が自分らしくあればっていう？

C：そうですね。だから自分をよく知ることかもしれないですね。自分が上手いのか下手なのかちゃんと分かっている、それにあった形で、自分にあったほうを選べばいいと、選ぶっていうか、それは一概に言えない。先のことを考えてるか考えてないかっていうのは。

司：他の方はどうですか？

D：えっと、昔と比べて、今が選択しなくなったっていうか、そういう話ですよ？あんまり多分変わらないと思うんですよ、私は。多分どんな時代でもその先どうしていかかっていう、なんだろう、なんか心理的に言うとアイデンティティ確立の問題との

衝突みたいなのは、多分お父さんの時代でもあったと思うし、おじいちゃんの時代でもあったと思うんだけど、昔の方が方向性が決まっていたから、選択が楽だったんじゃないかなって思うんですよ。おばあちゃんの時代とかは、結婚は契約みたいな感じでだいたいお見合いだったし、お母さんの時代とかでも、専業主婦になるのもあんましおかしくない時代だったけど、今は職業をもつ、女性が職業を持つことを求められてる時代だし、選択しなきゃいけないようになってきたから困ってるって感じもある。

司：選択しなきゃいけないから、選択肢もいっぱいあるし、選択しなきゃいけない現在の状況っていうのもあるし。

C：けど、その結構今、経済面で言うと、すごく保証とされている、今までは絶対だと思われている会社がつぶれちゃったりとか、そういう社会的に背景があるから、必ずしも計画的にいい企業に入ったからと言って、計画通りいくかどうかわからない。

司：たとえば、方向性っていうことを自分らしく生きるっていうことに言い換えたときに、自分らしく生きるってことはたとえばじゃあ若者はこだわりとかそういうものがないという批判だとしたら、それはどういう風に答えますか？

C：自分らしく生きる？

司：うん、生きてないんじゃないの？っていう、方向性っていう言葉をさっき自分らしくっていうことですか？って聞いたんですけども。

G：それは今の教育制度では無理なんじゃないですか。根本的に考えたら。だってどう考えても小学校や中学校とか、高校はちょっといろいろ商業高校とか工業高校とか選択肢があるから別にそうだとは思わないですけど、小学校とか中学校とか画一された教育の中で、画一されたカリキュラムの中で育てられるわけじゃないですか。で最近週5日制とかいって、完全週5日になってから、ゆとり教育とかわけのわからんことを言ってますけど、それではたしてそのゆとりをもった時間が何に使われているかといったら、完全塾じゃないですか、いい大学に入ればいい企業に就職ができる。その考えがどこから来るのかと言えばマスコミのマインドコントロールなんだろうなどは思うんですけど、まあそれがウソだっていうのは、現実に就活をしている友達から聞くとよくわかるんですけど。ていうか、出る杭は打つじゃないですか。だから当然少しでも目立つことがあれば、いじめの対象にあがるわけですし、日本人のもともとの文化っていうのは、そういう集団文化が多いので、だから集団で行動し、集団で何かをし、だからそれは北朝鮮とかいろいろなことを考えると、東アジアの文化なのかな、特色なのかなと思ったりしますけど。でもそういう特に小学校中学校、集団行動、体育の時間があったりする世界で、そこでなにかずれたことをすればいじめられて、自分に自信がなくなるわけじゃないですか。で、そういうことを控えようとしていけば当然同じような人間ができる、それが大人になってから自分がない人間。結局そういうことなんじゃないかなという気はするんですが。自分をだせばいじめられるという不安

を絶えず持っているという。

司：じゃああれですかね、みなさん日本で育ってらっしゃいますか？大丈夫ですか？大丈夫って変だけど。たとえば私もそうなんですけど、そういう中で育ってきたと。で今自分に自分らしさとか自分の存在意義とか、そういうものをみなさんはお感じになってますか？どうですか？そういう出る杭は打たれるというか、たしかにそういう文化ですよ。前に習えで育ってきてるわけですから。そういう中で、自分らしさとか自分の生きる意味っていうと大げさかもしれないですけど、俺これとか私これみたいなものをもっていらっしゃったりします？

I：そうですね。先ほどCさんに言われたこととか、今皆さんがおっしゃってたこととかいろいろ考えたんですけど、さっき思ったのは、たとえば私は今やりたいことを二の次にしても就職したいと思ってるんですね。それは、どうしてそこまで思うのかって言ったら、マスコミとかがつくるイメージだったりそういう強迫観念なのかもしれないけど、今やりたいことができないからといって、就職しなかったら、ほんとに流されると思うんで、そうならないためにもやりたくないことでもとりあえず就職したいという気持ちがあるので。今の自分を持っていないといわれたらそうなのかもしれないけど、まあどっか就職して、自分に生活的にも余裕がでて、そのときに自分のやりたいことを見つけていければいいんじゃないかなって思うんです。

司：そういう意味では自分をもってると逆に言えるのかもしれないですね。

I：今すごいあいまいなところ。

司：予定は未定のHさんはどうですか？

H：私、さっきGさんが出る杭は打たれるって言ったんですけど、私打たれた覚えがあまりないんですよ。

司：ああ、出る杭タイプ

全員：(笑)

H：出てるというわけじゃなく、勝手に来て、中高が一環だったんですね、それもあるんですけど、母親も学校行きたくないなら行かなくていいからお母さんと一緒に遊ぼうっていう。あの、母親が仕事持ってて、休みが取れる日は一緒に休まされたりとかして、高校も回りがみんなもうめんどくさいし、小田原に海に行こうとか電車の反対に乗って遊びに行ったりしたんで、あんまりそういう感じはないですね。うちの親が、兄がいるんですけど、7つ上なんで、普通にそこそこ有名な企業でしかも専門職で働いて、お給料も高給取り、だけど私よりも兄の方を心配するんですよ。それは、あなたは勝手に好きな道を見つけてやっていくから放っといても大丈夫だけど、兄はやりたいことをやってるわけじゃなくて、のんびり暮らしているからかわいそうでしょうって心配するんですよ。でも私から見たら、兄はあのその場、すべてをいところで満足する人なんで、それはまた流されているとは違う。あんまり出る杭とかそういう

日本の画一化したといわれてる、

司：とことは違うとこで育ってきた。他のみなさんはどうですか？

D：出る杭経験はあるんですけど。出すぎると打たれないから。

司：出る杭経験

全員：(笑)

D：出すぎれば打たれないんじゃないかと今模索中で、合コンとかにビーサン履いていたり。

司：すてきですね、なんならジャージで行っていただきたい。

D：今度やってみます。やっぱ就職活動に戻るんですけど、一つのこと、今まで学生の時はいっぱい可能性はあるって自分で信じてて、だけでも切羽詰って何か一つ決めなきゃって、すごい覚悟がいったんですよ。それで覚悟した瞬間に、ちょっとだけ大人になったかなって、恥ずかしいですけど、思ったんですよ。だからモラトリアムすごく大切なんだけども、やっぱ覚悟するっていうステップが大人になるってということでもあるのかなって今話し聞いてて思いました。

司：覚悟するっていうのは、自分で自分の方向性みたいなのを、ていうか自分の可能性みたいなものを選び取るっていう感じですかね。

D：はい。ちょっとでは揺るがないぞっていう。

司：その選択は、変な話ですけど、自分らしくあるための選択だったと思いますか？

D：はい。そうですね。

司：そういう可能性も含めて。

D：なんか一つのことを極めたら自分らしくなれるのかなって無理やり思っで。

司：なるほどね。どうですか？

D：出る杭？

司：ううん、出る杭じゃなくて

全員：笑

司：なんだろう、自分らしさとか自分の存在意義みたいなものに先ほどの話しを置き換えるとしたら、そういうものって持っているっていえると思います。

D：持ってます。結構早い時期から。なんか、大学はいる前から、私は多分研究者向きと思って、もともとおたく傾向があっで、なんていうかまんがにはまったりとか、一個につっぱしれるところがきつと研究者傾向があると勝手に思い込んで、はじめにそれは理系だったけど、今は心理だけだ、基本的に研究ベースでしか生きていけないと思う。もう多分つっぱしっていくと思う。

司：他の方々どうですか？

A：そうですね。出る杭のことで言えば、むしろ出る杭、出る、自分が出て行く。

司：出て行きたい。

A : 逆に、だから逆にもう、ばんばんみんなと違う、自分みんなと違うことどんどんやっていって、これ大丈夫なの、大丈夫なのってやってきたので、そんな打たれたこともないんですけど、出てきたのは、高校生まではすごいおとなしかったんですよ。大学生になってからですね、そういうのは。なんか自分らしさとか、そういうのをどんどん周りに表現していくってことができたのは大学生からですね。高校生までは、打たれもしませんでしたけど、出てもしませんでしたね。けど、出たからといって打たれるという風には思ってもなくて。だから、なんでしたっけ？

司 : 出る杭の話ですね。

A : だから今は、結構みんなと違うことやって、やったら楽しいんですよ。何それって驚かれたりするの結構面白くて、まあやなやつかもしれないけど、だから。でも会社入ったら、今までのようにはいなくて、大人としては常識っていうか、その言葉も曖昧ですけど、社会規範みたいなのを問われるんで、当たり前だけ。だからたとえば自分がやりたいことがあって、なんていったらいいんだろう、だけど会社の中ではそれはできなくて、だからそこら辺で自分の中で葛藤っていうのはあるのかな。自分らしさを出すことができないっていう状況っていうのはあって。

司 : たとえば車のCMとかで、ミニカーとは言わないですね、ちょっとちっちゃめの車で自分サイズとかあるじゃないですか。で、あの、本当の私になれる場所とかっていうCMとかがよくありますよね。そういうCMを見てると、そういうものを非常にアピールしようとしていくんですけど、はたしてでは、そういうものって必要ですかね。そんなに車のCMとかいろんなもので、あなたサイズとかあなたらしくとか本当のあなたを表せる場所とか、そういうものをよく言いますが、そういうのは生きていくうえで必要なものですかね。

D : 最近すごく、自分の中でもやもやがあって、どれが本当の自分がわからない。接する人によって、接し方も違うから、何キャラ？今のはみたいなのがあって、その自分らしさとかっていう言葉自体もすごいなぞで、あとすごいなぞなのが常識っていう言葉なんですけど、育った環境とか、家族同士でもぜんぜん考え方も違うのに、これ常識的に考えたらいえないとかいわれたりすると。自分らしさは、あ、わかんなくなってきた、すみません。常識的に考えてっていう、その常識がぐちゃぐちゃで、自分らしさっていうのもぐちゃぐちゃで

司 : だからすりあわないんですね。

D : すりあわない。すみません、話が。

司 : 大丈夫ですよ。

C : 社会的ないろんな仕組みの中で、自分らしさを追求する手段というか方法というかチャンスみたいなのが結構増えてきて、働くっていうことで考えると、今いろんなアルバイト、派遣とか結構、

司：ありますよね。

C：派遣の業界があるんですが、それでは、やりたいことを自分のやりたい時間を決めて、職業選択の自由をできますよってところで、そういう意味ではすごく社会的な仕組みも出来てきてるし、あとマスコミがすごく発達して、インターネットなどでいろんな情報があって、いろんな個人個人の生き方とか成功体験とか失敗体験とかを知る機会ってというのがすごく情報量が増えているから、すごく迷いやすい。最近うつ病の人が多いうていうのはそういうところにある。等身大の自分を追いかけて、やっぱりいいものを見てしまうから、なんていうんだろう、もしかしたら私だってなれるかもしれないっていうところをやってみてたものを実際は厳しくてできなくて、失敗して落ち込んだりするところが、今の現状としてあるんで、だから行き着くところその、やっぱり自分自身に戻ることが結構大事で、そこじゃないかと。

司：Cさんはどうですか、もしかしてを追いかけてます？

C：めちゃくちゃ追いかけてます。やっぱりそのビジネスとかもそうだし、人生においても成功してる人っていうのをすごいなって思うし、逆に成功してる人もこういう失敗してるんだとおもったら勇気付けられたり。そう思いながらも、まだ実際はその域までは達してなくて、ああ自分はだめだなって思うんですけど。本当に、今一応定職についてはいますけど、本当に自分が好きで、これだけに情熱を燃やせるものに実はついてないのかな。それを探しているのかな。その途中ですね。僕は。

司：みなさんはどうですか？もしかしてを追い求めている感じがしますか？自らの中で、どうですか就活をしてて。

I：そうですね、難しい。自分らしくあろうとする。たぶん、私の考えですけど、自分らしく生きてる人は自分らしく生きようなんて思っていないと思うんですよ。自分のやりたいことをやってそれが結果として自分らしくただけで、自分らしく生きようと思ってる時点で自分らしくないと思っている。

B：あんまり、自分らしく自分らしくってあんまり言い聞かせたくない。もっと、そうじゃないじゃなくて、もうちょっと第六感的なものなのかもしれないし、あまり肩に力を入れることはしたくない。自分らしさっていうか、本来、本当の自分とかって、たとえ自分っていうものがあつたら、すごい肯定の部分であつて、さっきDさんが言ったように接する人によって自分っていうのは変わって来るもの。それがいけないとかじゃあどれが本当の自分なのっていうんじゃないで、どれも本当の自分であつて、でも真の自分っていうのは一番下にあつて、普段は気づかない。それがもしかしたら自分自身で気づくかもしれないし、他、だれかに「あなたってこういう人よね」っていわれて気づく部分かもしれない。ほんとに、無理に自分らしくあろうとはしないでいいんじゃないかと思うし、こういう職業についてるから自分らしいとか、こういう夢をみるから自分らしいとか、違うんじゃないか。もっと根底の部分で、私が自分らしく

あろうとか、たとえば私が自分らしくあろうとか、たとえば何か嫌なことがあっても笑ってよう、バイト中は絶対そういうの出さないようにしようとか、そういうのが自分らしいなって思ってるから、それ以外のことにに関して、今自分らしいとか自分らしくなかったとかあんま思わない。今の状況も自分らしくないとか自分らしいとか、定職につかないことが自分らしいとかそういうふうにはぜんぜん思っていないし、定職について、つかないといけないっていうのも、親からは言われるんで、あ、つかなきゃなって思うんですけど、別に自分としてはいいかなって、自分で生計を立てなくきゃいけないとは思いますが、普通に正社員として働いてるから自分らしいとかってないで、別にいいじゃんって思いますが。

司：Fさんとかはどうですか？自分らしいとか、ありますか？そういうことを思うこととか思うときとか。これ私っぽいやとかそういうものって。むずかしいですね。質問の内容が。じゃあちょっと変えますね。自分が出せる場所って、心理的でも物理的でもいいですけど、そういう場所っていうのはありますか？それはたとえばどういう、差しさわりのない範囲でどういう場所ですか？

F：サークルとかクラスの友だち。

司：友だち関係で出している自分ていうのは私出してるなって思います？そういうのは生活の中で、たとえばそれが無い生活っていうのは考えられますか？

F：考えられない。

司：考えられない。自分が安心して出せる場所っていうのは必要ですか？

F：はい。

司：みなさんはありますか？そういう心理的・物理的場所が。

C：自分らしいってなんか違うんじゃないかな。そういう感覚ってみんな持ってなくて、自分らしいって死んでもわかんない。さっき話を聞いてたら、自分らしさっていうのは、今自分の中で考えたらハッピーかハッピーでないか。楽しいなって思って、何も考えず楽しいって思えることがやっていることが、もしかしたら今おっしゃってる自分らしさって、そのさっきのサークルとか友だちと話すときって、なんか別に気を遣うこともなく、楽しいなとかこんなことあるなとか、そういう。

司：たとえばCさん、そういう場所ってありますか？

C：僕ですか？あんまりないかも。ウソウソ。けどやっぱ、僕は人といろいろ話をするっていうのが楽しくて、あんまり会社の仕事の話は楽しくないっていうか、楽しくないわけではないんですけど、毎日やってるから、こうやってぜんぜん全く知らない人の話を聞くっていうのも、幸せっていうわけじゃないんですけど、刺激をうけますね。

G：ていうか、どんだけずれても心理学の人って受け入れるんですよね。なんかすごいへんなたとえかもしれないですけど、私はこんな人間なのよっていうアピールしたとしても、そんななのよっていうことがよくあるので、だから、まあ、僕としては、友だ

ちなんですけど、すごく尊敬している友達なんですけど、彼女が何を思ったか、夢のお告げとかわけのわかんないことって、ある日突然インドに旅立ってしまった。一年ばかりインドに行ってしまった。帰ってきたら、占星術やタロットとかよくのわかんない世界にはまり、スピリチュアルな世界にはまってしまって、いましたけど、でもそういう人を見ても、なんか普通なんですよね。普通っていうか、すごいとは思っていても、多分一般的って言う言い方がよくないかもしれないですけど、街角とかでそういう人がいたらうわって思うのかもしれないけど、心理学の人たちって、そういう生き方もあるんじゃないのぐらいの勢いで納得してしまうんですよ。そういう意味では、僕がどんな人間だとしても、たとえ自分の中のグロい部分を出したとしても、たぶん心理学専修の人たちっていうのは普通に受け入れてしまうわけで。そういう意味では、ある意味自分らしさをだせる場所っていうのは心理学なのかなっていう気はすごいする。

C : 心理学やって、楽しいなって思う瞬間ってないんですか。

G : 楽しいな思う瞬間っていうよりは、これほどまでに変わった人間がいっぱいいるのかという感じがすごいして、日々刺激なんですよね。人と話しても、やっぱり仲良くなっていけばいくほど、当然いろんな話がでるわけじゃないですか。で、あこの人こういう面があったんだっていうことも面白いですし、逆に新しい人と話して、そういう考え方もあるんだっていう、やっぱり根本的にカウンセラーになろうと思った時点で人と話すことが好きじゃなかったら絶対なろうと思わないんで。いろいろ世間一般では、カウンセラーになろうと思う時点でカウンセラーに行くべきだなんて言われてますけど、人と話すのが楽しいからカウンセラーになろうと思ったことところもあるから、そういう意味では特に心理学の人たちと話すっていうことっていうのは、やっぱり結構内面話すことが多いので、感情的に話したりもするし、ぜんぜん表面的なこともあるんですけど、でもやっぱりそういう意味では、心理学やっていたから、心理学やらなかったらそういう環境にならなかったというのはあるから、そういう意味ではすごく面白いですね。

C : それは、友だちの恋バナとかの相談を受けたりするときの話し？それと同じ感覚なの？

G : うんすごい面白い。

C : すごい心病んでる人いますよね。そういう恋バナとかじゃなくて、ほんとに生きるか死ぬかって考えてる。それと同じ感覚なの？

G : 同じ感覚っていうか、すごく悩んでる人の話を聞く場合はそんな冗談まじりで笑っていえませんが、でもなんか、自分、自分のもってるコンプレックスを考えた場合、それは自分にとってはすごく気になることじゃないですか。でも意外と他人にとってはたいしたことないっていう。だから、そういう感じなのかなって気はするんですが。ただ、それを自分の場合のコンプレックスに当てはめて考えれば、まあそういうのも



あるんじゃないかなって感じはする。

司：ちなみに今の質問私も答えさせてもらいたいですけど、私も学部時代〇〇ゼミっていうところで心理学をやって、今も東京の某市で不登校児童の適応指導教室で心の相談員やってるんですけども、私も場合は別ですね。友達の話聞くのと、子どもたちの悩みを聞くってまったく仕事という意味で別ですね。それは個人個人のやり方によって違うでしょうけど。きちんと構築しなくてはいけないし、責任のある仕事をしていると思うし、で、友だちと話しているときは責任もあるけれど、責任以上に信頼感があるので、許される場面っていうのが多いっていう意味では違いますね。

C：モチベーションの部分ではどうですか？

司：モチベーション？

C：その、聞いてあげようって思うことって、やっぱ違うの？仕事は仕事で、全く知らない信頼関係のない赤の他人であると、で友だちは友だちで、それは自分がやっているこうモチベーション的なところ、

司：次元が違いますね。その素養が違うというか。「あーそうなんだ」って友だちが聞いているのと、聞こうとおもって聞くと、こっちは仕事としてやる。同じ作業、たとえばワープロ打ってても、遊びで打ってるのと仕事で打ってるのでは、内容もありますけど違うっていうのがありますね。どちらも私は楽しいです。楽しいって言葉で表現できるかわからないですけどね。

B：友だちの話を、相談受けるって、その相談する友だちも、専門家に話してるわけじゃないんで、結構話して自分の中の整理をして、しようっていうか、だれかに話を聞いてほしいという状況だと思うんですよ。仕事としてカウンセラーとしてやっていくのに、聞いてほしいっていうのは当然あると思うんですけど、そこの二人の関係にはただ聞いてはい終わりって関係ではなく、基本的に治療っていう概念にたってくると思うんで、その点では、やっぱりただ友達からの相談を聞くっていうのと、そこに治療として直していかなきゃいけないっていうのは違う。私、そこまでの責任を果たせるのかって考えたときにやっぱ向いてないかなっていうか、感覚が、友だちからはよく相談受けたりしますけど、仕事としてやっていくほどのものなのかっていう。自分自身が思ったんで、まあ司会の方がおっしゃったように、友だちから相談受けるのと仕事として相談受けるのっていうのは別の次元の話、比べられるものじゃない。

司：コアな話しになってきましたんで。今日はですね、自立とか、大人とか、職業とか、生き方、自分らしさとかについて伺ってきましたけど、なんかどうですか感想を一言ずつみなさんに伺いたいですけど。Dさんから。

D：みんな一生懸命生きてるなど。自分だけ、自分は頑張ってるのって思いがちなんですけど、こうやって話してみると、初めて会う人なんですけど、すごく感じました。

司：楽しかったですか？

D：はい楽しかったです。

司：Fさんどうですか？

F：就職のこととかまだぜんぜん考えてなかったから、質問とか本当意味わかんなかったんですけど、そういう話聞いて自分も考えなくちゃいけない。

司：どういうところ？

F：将来の目標とか、自分が何をしたいかとか。

司：Gさんはどうですか？

G：ていうか、なんか、それぞれそれぞれ生き方があるなとすごい思うんですけど。自分にとっては、こういう生き方が妥当だけど、他人にとっては別の生き方があるんだとか。あんまりないじゃないですか。こういう機会って。

司：そうですね、日常的にあったら怖いですね。

G：友だちとか飲み会の席とかありますけど、まったく知らない人とこういうのは全くないし、そこで話すことってというのは、表面的なことかもしれないけど、それでも、予想だにしないこたえがいっぱいあってすごい面白かった。友達と話すとだいたい誰がどんな答えをいうかももうわかりきってしまっていることが多いんで。

司：Hさんはどうですか？

H：最近心理系の人としかしゃべってなかったんで、それでやっぱり社会人、就職活動をしばらくしてたんですけど、そのときにしゃべってた人たちも対外的な話で、この会社はどうか、社会人の本音の一部を聞けて。

司：はい。

I：Cさんもおっしゃってた自分らしいっていうのは結局はハッピーかハッピーでないかっていうのがすごい心に残って、就活大変なんですけど、ちっちゃいことでもいいからあー楽しいなっていうことをみつけて、強く生きていきたいなって思います、

司：あ、すてき。

C：心のカウンセラー。

司：さすがですね。じゃあAさんどうですか。

A：でもみんなの話聞いてて、なんで今自分が就職して仕事してるのか、何のためにいつてるのか考えさせられた。もう少しがんばってみようかと思いました。

司：楽しい感じで、それは前向きな感じですか？

A：はい。

司：よかったです。ありがとうございます。Bさんはどうですか？

B：私はいろんなところでバイトしてるんで、いろんな世代の人とかいろんな人とあって、いろんな話を、高校生と話しをしたりしてるんですけど、まあ限られた範囲になってしまって、まったく別の人たち、初めてあった人たちと話しをして、やっぱりいろんな考え方とかに接してきたつもりでも、また違う十人十色なんだなっていうのを改めて

思って。

司：Cさんは？

C：えっと、そうですね、やっぱりみんなそれぞれいろんな考え方を持っていて、いろんな価値観をもって、たぶん、こうなんていうだろう、年をとって行く過程で、いろいろ考えながら悩みながらいく。僕は実は採用の仕事をやっていて、

司：今明かされる真実。

C：早めに出会えばよかったかなっていう。あのまあ、いろいろ聞いたかったのは、会社の中にいると、人を採用する仕事についておきながら、学生の人の生の声を聞く機会がなかったの、すごく興味もってみんなの話をきいてたんですけど、そういう意味ですごく刺激になった。

司：では締めで、Dさん。

D：あまりいいこと思いつかないです。

司：いいです、そんなの。

D：さっきGさんが言ってたんですけど、心理やってると、あんまり人の意見に驚かなくなってしまう、すいません。だからなんだろう、そんなもんだろうなど。

司：新しいまとめかた。

D：すみません。

司：いえいけどんでもないです。

C：心理カウンセラーって、結局何が心理的治療になるんですか？

D：それはたぶんだれも知らないと思うんです。自己実現とかいってる、えらい人もいるんですけど、自己実現を定義している人はだれもいないんです。

司：それなりに適応していくってことじゃないですか？それなりにの意味がすごく深いと思うんですけど。

C：それは社会的にってこと？

司：それはその人がどう思っているかによりますよね。

B：それはCさんがおっしゃったように、ハッピーかハッピーでないか。

C：ハッピーに生きていくこと？

B：自分自身もそうだし、自分を取り巻く周りの人もハッピーかハッピーでないか。

司：そうですね。自分自身だけがハッピーでも世の中回っていかないですしね。

C：そっかー。じゃあ心理カウンセラーを求めている人はハッピーじゃない、ハッピーじゃなくどうしようもなくなってるっていうか、生きていけないとか思っちゃったりしてる？

司：生きにくいとは思ってるかもしれないですね。生きていけないとまでいかないかもしれない。今日ほんとに貴重な意見を長々と本当にありがとうございました。これでお開きにさせていただきます。

——了——

### 3. 質問紙

#### 青年期の生き方態度調査

この調査は、皆さんが日頃どのような態度で日常生活を送っているのかを調べるものです。あまり考え込まずに、最初に心に浮かんだことを書いて下さい。なお、思い浮かべる場面はどのような場面でもかまいません。ご自由にお答えください。なお、調査は統計的に処理されますので、個人的がわかるデータが使用されることは一切ありません。

また、二次調査にご協力いただける方を募集しております。ご協力いただける方は下記の連絡先欄にご記入をお願いいたします。

学部：                      学部                      学年：                      年生

年齢：                      才                                      性別：1 男性    2 女性

結婚歴：1 既婚    2 未婚    3 婚姻後離婚    4 婚姻後死別    5 その他(                      )

生活様式：1 ひとり暮らし    2 家族と同居    3 その他の同居    4 その他(                      )

出身地：(                      ) 都・道・府・県

●差し支えなければ、以下もご記入ください

<連絡先：

氏名：

住所：

電話番号：

メールアドレス：

早稲田大学大学院人間科学研究科  
生命科学専攻 社会的人間発達研究領域  
加藤 陽子

次のそれぞれの文について、  
あなたにとって最もぴったりと思う番号の数字に○印を付けてください。

**1 私はふだん**

- |                   |       |   |
|-------------------|-------|---|
| 退屈しきっている          | _____ | 1 |
|                   | _____ | 2 |
|                   | _____ | 3 |
| どちらでもない           | _____ | 4 |
|                   | _____ | 5 |
|                   | _____ | 6 |
| 非常に元気いっぱいではりきっている | _____ | 7 |

**2 私にとって生きることは**

- |               |       |   |
|---------------|-------|---|
| いつも面白くてわくわくする | _____ | 1 |
|               | _____ | 2 |
|               | _____ | 3 |
| どちらでもない       | _____ | 4 |
|               | _____ | 5 |
|               | _____ | 6 |
| 全くつまらない       | _____ | 7 |

**3 生きていくうえで私には**

- |            |       |   |
|------------|-------|---|
| 何の目標も計画もない | _____ | 1 |
|            | _____ | 2 |
|            | _____ | 3 |
| どちらでもない    | _____ | 4 |
|            | _____ | 5 |
|            | _____ | 6 |

	非常にはっきりした目標や計画がある	_____	7
<b>4</b>	<b>私と言う人間は</b>		
	目的のない	_____	1
	まったく無意味な存在だ	_____	2
		_____	3
	どちらでもない	_____	4
		_____	5
		_____	6
	目的をもった	_____	7
	非常に意味のある存在だ		
<b>5</b>	<b>毎日が</b>		
	いつも新鮮で変化に富んでいる	_____	1
		_____	2
		_____	3
	どちらでもない	_____	4
		_____	5
		_____	6
	全く変わりばえがしない	_____	7
<b>6</b>	<b>もし出来ることなら</b>		
	生まれてこない方がよかった	_____	1
		_____	2
		_____	3
	どちらでもない	_____	4
		_____	5
		_____	6
	この生き方を何度でも繰り返したい	_____	7

**7 定年退職後（老後）、私は**

- |             |       |   |
|-------------|-------|---|
| 前からやりたいと    | _____ | 1 |
| 思ってきたことをしたい | _____ | 2 |
|             | _____ | 3 |
| どちらでもない     | _____ | 4 |
|             | _____ | 5 |
|             | _____ | 6 |
| 毎日をただ何となく   | _____ | 7 |
| 過ごすだろう      |       |   |

**8 私は人生の目標の実現に向かって**

- |            |       |   |
|------------|-------|---|
| 全く何もやっていない | _____ | 1 |
|            | _____ | 2 |
|            | _____ | 3 |
| どちらでもない    | _____ | 4 |
|            | _____ | 5 |
|            | _____ | 6 |
| 着々と進んできている | _____ | 7 |

**9 私の人生には**

- |              |       |   |
|--------------|-------|---|
| 虚しさと絶望しかない   | _____ | 1 |
|              | _____ | 2 |
|              | _____ | 3 |
| どちらでもない      | _____ | 4 |
|              | _____ | 5 |
|              | _____ | 6 |
| わくわくするようなことが | _____ | 7 |
| 一杯ある         |       |   |

## 10 もし今日死ぬとしたら、私の人生は

非常に価値のある人生だった	_____	1
と思う	_____	2
	_____	3
どちらでもない	_____	4
	_____	5
	_____	6
まったく価値のないもの	_____	7
だったと思う		

## 11 私の人生について考えると

しばしば自分がなぜ	_____	1
生きているのかわからなくなる	_____	2
	_____	3
どちらでもない	_____	4
	_____	5
	_____	6
今ここにこうして生きている	_____	7
理由がいつもはっきりしている		

## 12 私の生き方から言えば、世の中は

どう生きたらいいのか	_____	1
全くわからない	_____	2
	_____	3
どちらでもない	_____	4
	_____	5
	_____	6
非常にじっくりくる	_____	7



### 13 私は

無責任な人間である	_____	1
	_____	2
	_____	3
どちらでもない	_____	4
	_____	5
	_____	6
責任感のある人間である	_____	7

### 14 どんな生き方を選ぶかということについて

遺伝や環境の影響にもかかわらず	_____	1
全く自由な選択ができる	_____	2
	_____	3
どちらでもない	_____	4
	_____	5
	_____	6
遺伝や環境に完全に縛られ	_____	7
全く選択に自由がないと思う		

### 15 死に対して私は

十分に心の準備が出来ており	_____	1
こわくはない	_____	2
	_____	3
どちらでもない	_____	4
	_____	5
	_____	6
心の準備がなく、恐ろしい	_____	7

**16 私は自殺を**

逃げ道として本気で	_____	1
考えたことがある	_____	2
	_____	3
どちらでもない	_____	4
	_____	5
	_____	6
本気で考えたことはない	_____	7

**17 私には人生の意義、目的、使命を見出す能力が**

十分にある	_____	1
	_____	2
	_____	3
どちらでもない	_____	4
	_____	5
	_____	6
ほとんどないと思う	_____	7

**18 私の人生は**

自分の力で十分やっていける	_____	1
	_____	2
	_____	3
どちらでもない	_____	4
	_____	5
	_____	6
全く私の力の及ばない	_____	7
外部の力で動かされている		

**19 毎日の生活（仕事や勉強など）に私は**

大きな喜びを見出し、	_____	1
また満足している	_____	2
	_____	3
どちらでもない	_____	4
	_____	5
	_____	6
非常に苦痛を感じ	_____	7
また退屈している		

**20 私は人生に**

何の使命も目的も見出せない	_____	1
	_____	2
	_____	3
どちらでもない	_____	4
	_____	5
	_____	6
はっきりとした使命と目的を 見出している	_____	7

以上です。  
ご協力ありがとうございました。